

---

# IS～インフィニットストラatos～ 不思議な翼

柊稜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS→インフィニットストラトス→ 不思議な翼

### 【Zコード】

Z8193V

### 【作者名】

柊 稜

### 【あらすじ】

父と母、それと、妹を持つ「ぐぐく」普通の中学生卒業生。柳瀬薫。  
そんな彼が、春休みの旅行先で、女でしか起動できない兵器、IS  
に触れることから、物語は始まる。

独自解釈というか、独自設定が時々混じるかもしれません。ご注意ください。

あと、極端に見せ場の減るヒロインがいるかもしれないのに、その辺もご注意ください

## プロローグ・始まりはいつも唐突に（前書き）

といひ訳で、懲りず（に投稿です

・・・他のは、ネタがないんだ。ネタが

放置気味になることがあるので、気長にみたってください

## プロローグ・始まりはいつも唐突に

悲しいことに、世界には博物館を作り上げてしまえるほど、数多の種類の武器・兵器がある

剣、槍、弓、大砲、戦車、銃器、毒ガス、航空戦闘機、爆弾、戦艦、核弾頭

数え上げたらきりがない

しかも、古代から今までで、武器・兵器が生みだされた時代  
なんてないのだろう  
なぜか？

人種・国・宗教・思想の相違、経済的な利潤、怨恨、腕試し、一時的な激情

考へてもみれば簡単で、古来からずっと、人類同士で争う理由に事欠かないからなのだろう

早い話が、『人類の歴史には、常に争いという影が付きまとつている』ということだ

その影を嫌い、恒久的に争いのない世界を望むのか  
その影を好み、恒久的に争いの続く世界を望むのか

そこは俺の知ったところではないが、いま、一つだけ言いたいことがある

それは・・・

「・・・家族旅行で『国立兵器歴史博物館』なんとかいうのを『ース  
にするな!』

春休み使っていくところなのか!?

もつと他に行くところがあるだろ!?

海とか山とか川とか月とか!

いや、月は無理か・・・

とにかく、何でよつともよつて兵器博物館なんて物騒なところ!・・・

・

「何を騒いでいるの薰かおる。恥ずかしいからやめなさい」

お袋。周りを見てみる。俺たち家族以外に誰もいない  
だからって叫んでいいわけではないが

「いやー、兵器と云つてもあくの種類があつてだな・・・

そうだ。ついのおやじがミリオタ（軍事物オタク）だったんだっけ  
つーか、一人で行け!

「おこちゃん、はやくこーよ

こんな小さな娘（小学5年生）を連れてくるといじやねえ!

「・・・と、やがてまな進化を遂げてだな

・・・父は、ミリオタよりは兵器オタなのかもしねない

「はいはい。誰も聞いてないから。とにかく入った入った

「うう・・・すいません」

「ほり、薰、みさと、置いてくよ」

『はーい』

親父はいつまでたつてもお袋に弱い

博物館のなかは、誰もいないのに空調がしっかりしている、とても快適だった

入口付近にはテーブルや椅子が置いてあり、歩き疲れた人の休憩場となるのだろう

つーかどれだけ広いんだこの博物館

「古今東西全ての時代・土地の兵器があるなんて話だからな。展示品の数も一日で回りきれるようなもんじゃないんだろうな」

へー・・・

「ホントは全部をじーっくり見たいんだが、今日は下見がてら、さつと見て帰ろつか」

「はいはい・・・

下見つて・・・盗みに出も入る氣か

古代の武器、中世の兵器、近代の兵器と続いていて、時代による武器の変遷・進化が見て取れた

正直何が書いてあるかは見当もつかなかつたが、次第に機械化・自動化されていつてることだけは、なんとなくわかつた

銃に関していうなら、いまでは引き金引いてズドン  
昔は弾込めて、火薬詰めて、火をつけてと、ややこしいことに上  
なかつたらしいのに

「まあ、やうやつてすぐ撃てるようになつてしまつたせいか、銃で  
命を落とす人も増えてるんだよ」

「だらうなー。銃は、引き金を引けばそれだけで人を殺してしま  
うようなシロモノだし」

誰かいつてたな『ナイフや拳と違つて、銃は人を殺したという感触  
が残らない』って  
罪の意識も軽くなつてしまつ訳だ

「もし、銃を持つ機会があつたとしても、それを忘れるんじゃない  
ぞ」

「はーい」

んだよ、まるでここから先、誰かが銃を撃つ機会があるみたいな言  
い方じやないか  
俺は、そんな機会願い下げだぞ

「よしよし。みさとはい子だな」

「えへへー」

あ、みさとはひょっとしたら持つちやう機会があるのか  
この「」時世だもんな・・・

おそらくは一番金かけているであろう、現代兵器の展示場へと移る  
拳銃、自動小銃、対戦車用ロケットといつた、銃火器系統の項目が  
続いていた中、突然妙な物が目に入ってきた

「あ、みさとしつてるよ。あれ、『インフィニット・ストラトス』  
つていうんだよね」

「あら、みさとは物知りね」

「えつへん」

偉いでしょ、とでも言いたそつに腰に手を当てて胸を反らしている  
みさと  
お袋が撫でると、気持ち良さげにほにかんでいた

今今まで銃器ばかり目に入ってきたから、妙な物だと思つたが、  
決して『現代兵器』の欄においては妙ではない  
むしろ、コレ関連のものがないことにほこまの時代、兵器博物館な  
んて名乗る資格はないんじゃないかなと思つ

### 『インフィニット・ストラトス』

名前だけ知ってるその兵器

通称、アイエスと呼ばれるこの兵器は、もとは宇宙空間での活動を  
想定した、マルチフォームスーシでした。開発当初は見向きもされ

なかつたISでしたが、『白騎士事件（）』を契機にその有り余るスペックを注目され、兵器として転用され、いつしか『世界最強の機動兵器』として扱われるようになりました。ISの中核となるコアはブラックボックスとなつており、女性にしか起動できないという不思議な特性に関してなど、未だ解明されていない部分が多いのが現状です。また、この特性は、以前の風潮であった『男尊女卑』を『女尊男卑』に変えてしまつなど、社会的な風潮の変化をもたらしました

白騎士事件の詳細については、お近くの『現代戦史』をじ覽ぐださい

と、IS説明のディスプレイは語つている

「ISが世に出回るようになつてから、既存の兵器はただの鉄屑同然となつたなんて言われてるよ」

それ、なんてチートだよ・・・

その説明ディスプレイの奥には、退役した第一世代のISや、開発が終了した第二世代の量産機の<sup>レプリカ</sup>模造品が、世代の簡単な説明とともに並べられている

といつも『このISは本物を真似た模造品です。』自由に触れて感触を楽しんでください』ってなんだ。レプリカなら壊れてもいいってか？

壊れないようになつてんのか？  
・・・いや、ISの足元に細かい部品の欠片らしきものが散らばつてる

展示物への扱いではないな

「くえ・・・やっぱり冷たいのね」

「このレプリカって、本物のISの素材をつかっているのか?」「かつこーーー」

三者三様、それぞれの反応を示している  
みさとに至っては、ばしばしさたいている  
あ、ちよつと欠けたぞ

「・・・はあ」

ふと手をあげてみると、そこで俺は隅にある妙な物を見た  
ISのレプリカであることは、この一覧にある以上間違いない  
問題は、その形だった

他のISのような、洗練された、鋭いシリエットと違い、まるい。  
とにかく丸っこい  
小学校に通っているみさとが、図工の時間に粘土で作ってきた『ひ  
と』くらい、丸くて歪だった

「これも、IS?」

どこかに、『流線形のボディラインで、正面からの実弾を全て受け  
流してダメージを減らす』とかいう、でっかくて赤い、隻腕のパイ  
ロットでも扱えるMAがなかつたつけ?

0083だつたらどつかの三号機も捨てがたいけど、俺は断然、緑  
の方だ  
だって二号機<sup>アレ</sup>つてただスペックを持て余して暴れてるだけじゃない  
のか?

好きな人には申し訳ないけど、少なくとも俺にはそう見えた  
一号機と二号機は……どちらも素敵です

えーと、他には……

形を歪にすることのメリットを考えてみたものの、人型のマルチフ  
オームスースに採用できるようなものじゃないことに気がつき、考  
えをやめる

「・・・」

なんとなく何も考えずに

いや、何も考えていなかつた訳ではない、純粹な好奇心があった

俺は、そいつにふれた

キンッ

『見つけたよ。ボクのパートナー!』

「は?」

そんな声と、金属質の機動音が頭に響く  
色々なイメージが流れ込んでくるような、来るべくしてここに来た  
ような、そんな不思議な錯覚を覚える  
ぐちやぐちやなのに、スッキリしている。本当に不思議としか言い

よつのない感覚が頭の中を駆ける

「ちよっと薰、アンタ何して・・・」

「お母さん。お兄ちゃんはビッグして光ってるの?」

「みせと、じつと見てたら田が・・・つまつまぶしつ」

田の前のHSの模造品は急に光を放ち、最後には『現代兵器』の展示場全てを飲み込むほどの光を放つ

そして、一瞬のうちに、『消えた』

「え?え?・・・え?」

田の前にあつたHSと思しきなにかは消え失せ、代わりに俺の腰に、見覚えのない鎖がついていた

## 新学期 入ったクラスは 女だけ

「全員そろつてますね。それじゃあSHRはじめますよー」

そう副担任の先生は言つ

### 桜咲く新学期

10代ならば、誰しもが新しい世界に一步踏み出す時期。俺もその例に漏れず、新しい世界に踏み出していた

どんな世界かといふとだ

右を向けば女の横顔  
左を向けば女の横顔  
前を見ても女の頭

後ろを振り返れば苦笑いの女の顔  
上を向いたら無機質な天井があるだけ  
下を向けば無機質な床があるだけ

少しくどかつたな

とにかく周りは上下を除いて女だけ、なんていう世界だ  
ちなみに片道切符。帰りの切符は三年後に発行されます

・・・こういう状況に立たされると、むさいだけだと思つていた男  
連中つて大事なんだな、つてしみじみと感じる  
失つて初めて分かる、常にそこにあるありがたみ

なんつって

俺が入学したのはＩＳ学園とよばれる、ちょっと特殊な学園だ

端的にいつのであればＩＳ操縦者の育成を目的とした教育機関  
日本にあるのに日本にあらずといった、どこの国にも属さないとい  
う、不思議な場所。もちろん生徒の出身国も様々  
全校生徒の半数がからうじて日本人といふことらしい

で、ＩＳ操縦者っていうのは女しかいない。つまりは国際的な女子高

場違い感が半端じゃありません

何でこんなところに入学した（放り込まれたという表現が正しいかもしれない）かというとだ

あの博物館での一件で、俺はあのＩＳを起動させたとこ（う）じー

しかも、『ＩＳ適正のある女性が誰一人として起動できなかつた不可以ない良品』を

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」  
どうやら博物館の人も本当に模造品だと思つていたらしい  
一般の来場者が触つても何もなかつたらしいし

政府はこのレプリカにコアの存在を確認したものの、『欠陥品』と  
判断

廃棄処分としようにも、コストや時間の問題が浮上。結局、博物館  
側にコアの存在を隠匿、レプリカとして展示させ、適合者が現れた  
らＩＳ学園に半ば強制でもいれる、という措置を取つた

『捨てる神あれば、拾う神あり』なんて言葉があるけれど、ここま  
で迷惑でスケールでのかいのは初めてだ

俺の個人的な感想はともかく、そんな『誰一人起動できない不良品  
』を『男である』俺が起動できてしまつたもんだからさあ大変  
俺はその場で警備員にしょっ引かれ、高校の入学を無理矢理取り消  
され、ＩＳ学園への入試を経て入学させられた次第だ  
ちなみに親父は『男でＩＳ乗りとは羨ましい』と、ムフフとした顔  
つきで言つたもんだからお袋にしょっぴかれてた

雉も鳴かずば、撃たれまいに・・・

俺のほかにも男でIISを起動させた奴がいるとのことだが

親父『やるからには全力でやれ』

お袋『選ばれちゃったものはしょうがないね。恥かかないよつにしつかり頭に基礎を詰め込んでおくんだよ』

なんて言つもんだから、俺は自室に軟禁され、入学前にもらつた参考書や、IIS起動についてのルールなどを刷り込む作業を行っていたでも、それらすべてを覚えられたかは正直めっちゃ不安

部屋にテレビは無いから、覚えこみの間テレビを見ることができなかつた  
聞こえてくる音声で名前は分かったものの、どんな顔かまではさすがに分からぬ

「は、はいっ！？」

そんな素つ頓狂な声を聞き、思考が現実に引きもどされる  
声の主は、先生とひとり会話をした後、後ろを振り返る  
ちなみに俺の席は最前列窓側より一列目。窓からは、綺麗な木々が見える。で、そいつは最前列中央。隣の隣という感じだ

あ、男

とこうことは、あいつが『IISを起動させた、もう一人の男子』た

しか名前が・・・

「えー・・・えつと、織斑一夏です。よろしくお願ひします」

うん。同じクラスでよかつた

女子オンラインのこの空間は一人じやきつい

今までここに至るまでの経緯に浸ることによつて無視（逃避）して  
いた、後ろからの視線

見るとかそういうのじやなくて、刺さつてくる

ひづ、ビシビシと。ひしひしなんて優しいものじやなく

「コレじやあまるで動物園にやつてきた珍獣、パンダじやないか！

誰だハーレム羨ましいなんて言つたの！  
けしからん！代わりなさい！

織斑がいるおかげでこの視線も単純計算で半分になつてゐると思つと、  
一人放り込まれた時の厳しさは測りかねる（といふか考えたくない）

「・・・以上です」

がたたつ

「おわづ」

急にしづつこける生徒がいたもんだからビックリした。比喩でなく、  
実際にしづつこけた

いくらなんでも期待しすぎだつての

俺も少しはネタ、考えておこうか・・・

・・・ダメだ、何も思い浮かばない

パン！

俺もああいう空気を作っちゃいそうだな

第一印象つていうのは人間関係を形成する上ではとても大事でだ・・・

パン！

さつきから誰だ、パン！パン！つて  
うるそ・・・

パン！

「つてえつ！」

「その反抗的な眼は何だ馬鹿者」

アンタはどここの生活指導の鬼教師か  
ん？ どつかで見たような・・・

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者  
に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聞き、よく理解しろ。出

来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五歳を十六歳までに鍛え抜くことだ。逆らつてもいいが、私の言つことは聞け。いいな」「

逆らつていいなんて言つておいて、なんですかさつき逆らつた（よひにみえるだけの）俺を叩いたのかは、この際言わないでおこう。また叩かれるだけだらうし

織斑千冬。『戦乙女ブリュンヒルデ』なんて呼ばれている、世界一に名を轟かせて

いたIS乗り

ISの国際大会である『モンド・グロッソ』の初代チャンピオン。それぐらいしか知らない

教師といつよりは教官と言つた方がしつくづくる、ピンと張りつめたオーラを持つている

『きやあああっ！千冬様、本物の千冬様よ！』

『ずっとファンでした！』

『私、お姉ちゃんに憧れてこの学園に来たんですね！北九州から…』

だのに、教室は引き締まるどころか黄色い声

というか、どこから出るんだ？この高い声。ああ喉か

とにかくその後は、織斑の姓でなんとなく想像がつくよくなり、織斑千冬と織斑一夏は姉弟であることが発覚。また教室は盛り上がった

「どうか、やけに弟に厳しいな、千冬ちゃん」

パン！

「つてえつ！」

「初対面の女の名を気安く呼ぶな。織斑先生と呼べ」

すんません・・・

「ちょうどいい。お前の名を聞いておこう・・・名前は何と言つんだ？」

早速目をつけられたオチか？・・・そういうオチだな、絶対  
「ひとつと名乗れ。それとも、最近では珍しい、名前の無い人間か  
？」

・・・ぜつてえ、この人怒つてる

当然か。見ず知らずの人間に、突然親から授かつた大切な名前を呼ばれたんだから  
俺が非常識だった

「・・・柳瀬薰です。・・・こんな名前だけど、男です」

貢、『なんとか馨』<sup>かおる</sup> っていう人、実際に居たんだぞ。男で

「では、時間が推しているのでこれにてSHRを終える。自己紹介  
は各自で済ませておけ。各々一時間目の準備も忘れるな」  
『はーい』

・・・自己紹介、それでいいのか？

**新学期 入ったクラスは 女だけ（後書き）**

ところへ」と一話田でした

## セシリア・オルゴット（前書き）

とこの訳で第二話です

9/24 セリフ回しをちょっと変更しました

## セシリア・オルゴット

「 であるからして、ISの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり枠内を逸脱したIS運用をした場合は、刑法によつて罰せられ 」

すらすらと教科書を読んでいく山田先生

あとで、「本物のISを博物館に展示する行為」は枠内を逸脱してるのがどうか聞いてみよう

あのときは冗談抜きにビックリしたわ

ふと、周りを見てみると、皆熱心にノートを取つている  
やはり、IS使えるだけあって、勉強熱心だな。特に関係ないの  
だろうけど

俺は特に何もやらないでここまで来ちました、といつか連れてこられた身だけど、他の女子はきっとかなりの倍率のなかを選ばれたエリートに違いない

そう思つてまたノート記入の作業に戻るつとすると、女子のものとは違う視線を感じる

「・・・」

そつちを見ると、織斑がこちらに視線を送つている

『お前、理解できるのか?』みたいな田でこちらを見てくる織斑  
と云ふが、あの田はそう語つてゐる。田は口ばりモノをいつんだ

とりあえず俺は、満面の笑みと一緒にサムズアップをかえしておくれ  
それをどう受け取ったのかは知らないが、織斑は若干安堵の表情を

浮かべ、視線を戻す

「そこ」一人。何をしている

「お、織斑君。今の場所で分からぬ場所がありましたか」「はい」

「どこですか？なんでも訊いてくださいね。何せ私は先生ですから」  
エヘンとでも言いたそうに胸を張る山田先生  
なにこの人かわいい。というか、動きが褒めて欲しい時のみさとに似てる

少しの間迷つてから、織斑はハッキリした口調でこいつ言った

「ほとんど全部分かりません」

山田先生の表情が、一気に変わる

あ、アレはおそらく凄く困っている時の顔だ  
どれくらい困っているかというと、バキュームカーが事故起こした  
現場を・・・

やめておこう。下ネタだし、そもそもバキュームカーを最近見ない  
し・・・  
アレって今どこにあるの？ガソリン運ぶ車にでもチエングしてるのか？

それはそれでなんかいやだな・・・

「ぜ、全部ですか・・・えっと、織斑君以外で今の段階で分からな  
いという人はどれくらいいます？」

だーれも手を上げない。それどころか、手が動く気配すらない

「や、柳瀬君は大丈夫ですか？ ついてこれでます？」

大方、『同じ男だけれど、こいつは大丈夫なのか？』みたいに思われてるのだろう。多分ここまで汚い言葉ではないのだろうけど、だいたいあつてる気がする

「えーと・・・入学前の参考書をみていればある程度ついていくとかと・・・」

「ええっ！ 柳瀬も分かつてないんじゃないのかよ！」

「失礼な。俺は見ると言われたものは一応見ておくタイプだぞ」

「・・・ちなみに織斑。入学前に渡されたI.Sの参考書は読んだか？」

「古い電話帳と間違えて捨てました」

ブツ

パパアン！

すかさず、織斑先生の出席簿が飛んでくる

間の女子を叩かずに、俺と織斑だけを叩くのは、器用といつかなんといつか

「つてえっ！」

「笑い」とではない。・・・それに、必読と書いてあつただろうが、馬鹿者共。織斑、再発行してやるから一週間で覚えろ

そういつた後、織斑教官（今は「」うちの方が先生よりもしつくつくする）は、

「IJSはその機動性、攻撃力、制圧力と過去の兵器をはるかに凌ぐ。その《兵器》を深く知らなければ、必ず事故が起ころる。そういうための基礎知識と訓練だ。理解しなくとも覚えろ」

さすがは織斑教官。言つてゐることはもつともだ

「それと自分は覚えているからいいなどと、甘い考えをするなよ。もう一度言つうがIJSは《兵器》。実力を見誤つた愚か者の余裕は、仲間を巻き込んだ事故を引き起します」

・・・もつともです

「分かつたのであれば、授業を続ける。織斑は放課後、山田先生と私で理解できるまで教えてやる。異論はないな?」

「は、はい・・・」

「・・・山田先生。授業を続けてください」

「は、はいっ」

妙に優しい声だった

なんて言つんだろう。諭すよつ・・・とでもいつのだろうか

とにかく織斑弟に対する態度とはうつて変わったものだった

今は休み時間

なんだかんだでさつきの休み時間に話ができなかつた織斑一夏との  
コンタクトをとる

だつてさつきの時間は気がつけば、篠ノ之簾に連れ去られてるんだ  
もん  
えーっと、さつきして話しかけよつか  
あ、そうだ

「傑作だったな、さつきの『冗談』」

皮肉をこめて、田の前に居る織斑にそいつてみる  
コレが第一声って、印象かなり悪いな、俺  
実際、ちゅうと考へても思いつかなかつただけなんだけどさ

「いや、『冗談言つたつもりはないんだけど・・・』  
「アレを『冗談と言わざして何を冗談というんだ?』  
「・・・すまん」

謝られてしまった

「んー」ほん。とりあえず改めて・・・柳瀬薰だ。同じ男のT-S乗  
りとしてよろしく頼む

「ああ。織斑一夏だ。よろしく頼む柳瀬」

うん、これでとつあえずは良いだら

「とにかく織斑よ。篠ノ之とせどりこいつ仲なんだ?」

「は?」

「さつきだつて、休み時間になるなり廊下に連れ去られてたじちゃん。

知り合いかい？」

「ただの幼馴染だよ。一緒に剣道やつてたんだ。六年ぐらい前に転校したつきりだつたな・・・」

「へえ・・・。そら、すごいグーゼンだな」

「そういう柳瀬は知つてゐる奴いないのか?」

「めんどっさいから薰でいいよ。そうだな・・・誰もおらん。学園関係者にも、どこもいない」

見知らぬ異国に売り込まれるパンダって、じつにう氣分なんだらつか

「ちよっと、よろしくて?」

「「え? (は?)」」

呼ばれたようなので振り返つてみると、そこに居たのは地毛の金髪が鮮やかな女子だつた

白人のようだから、歐州出身だらうか

高貴な感じもないとは言えないが、なんといつか、いかにも『今時』の女という感じだつた

「訊いてます? お返事は?」

「よかつたな織斑。早速お呼び出しだぞ」

「一夏でいいよ。薰を呼んだんじゃないの?」

「あはは。俺みたいな奴を呼ぶ女なんていないだろ? それじゃ邪魔をしては・・・」

俺は最近の女は嫌いだからな  
さつさとケツまくつて・・・

「貴方達二人を呼んだのです! そこの人、逃げようとしてない!」

「うつ……で、ビーウー用事なの？」

「まあ！なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられることだけでも光榮なのですから、それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら？」

・・・ピキピキ

ホント、こういうのは苦手だ

『ISが使えるのは女子だけ』という世界の常識ができるから、『女性＝偉い』な構図ができてしまったわけで  
ちょっと散歩のために街中歩いただけで、見ず知らずの女にパシリにされることが珍しくある

「焼きそばパン買ってきて。もちろん、あんたの自腹ね」みたいな感じで

大抵は無視して歩けば放置されるが、中には『暴力を振るわれた』なんて訳のわからない事を言い出す奴もいる  
そのわけ分からぬことに煽られて、事実確認もなしに『逮捕』なんてあるから大概だ

ぶつちやけいうと男（少なくとも俺個人）からみるとそういう、高圧的な奴は目障りでしかない訳で

「人と話すときはまず自分の名を名乗るものだうつ、それとも、そういう態度すら教わってないのか？」

「そうそう。俺たち、君の名前知らない」

あ、一夏も知らないのか

とこうか、結局SHRはいろいろあって自己紹介が終わってなかつ

たんだつけ？

「私を知らないといいますの？」「、セシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして、入試主席のこの私を！？」

入試主席・・・

筆記でもあつたのだろうか？  
筆記テストなんて受けたねえぞ

「うん。シラナイ。今知った」

「・・・貴方、わたくしをバカにしていません？」

「あのせ、質問いいか？」

「一夏。この際時間とられるだけの『代表候補生って何？』なんて質問はやめろよ」

「・・・」

一夏は氣まずそうに口を閉ざす

図星かよ

「はあ。そういうやお前、電話帳捨てたんだつけ？代表候補生っていうのは確か・・・」

「国家代表IIS操縦者の、その候補生として選出されるエリートのことですわ。・・・あなた、単語から想像したらわかるでしょう」

「そついわれればそうだ」

「・・・お前、外国人に母国語の日本語についていつこまれるのってどうなんだよ

「本来なら私のような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡なのよ。その現実を、もう少し理解していただける？」

「ソイツハスゲェヤ」

「そうか。それはラッキーだ」

「・・・貴方がた、私をバカにしていますの?」

よく分かつてゐる

一夏はどうか知らんが

「ソンナコトナイデスヨー」

「幸運だつていつたの、そつちじやないか」

「そんなことよりもだ、一つ聞いてもいいか?」

「下々のモノの要求にこたえるのは貴族の務め。よろしくてよ」

「入試つて・・・筆記あつたのか?」

「「は?」」

一夏とオルコットが同時に疑問符を浮かべる

「いや、首席とか言つからで。点数のつくなかがあつたのかな?つて」

「はあ? 貴方入試に出でていませんですか?」

「いや、IS使って戦うのには出たぞ」

「それ以外に何があるというのですか。私、教官を唯一倒したエリート中のエリートですから」

「あれ?俺も倒したぞ、教官」

「「・・・は?」」

「俺、負けたぞ?」

「あんなのに勝つたとか、こいつは可能性の虎か何かか?」

「じゃ、じゃあ私だけたおしたつていうのは・・・」

「『女子限定』ってオチじゃない? ・・・つーかもうチャイムなりそうちだから、わざわざ席つこひぜ一夏。もつ俺出席簿アタックは

御免だぞ」

「え、ああ・・・」

「ちよつとー そういうつて逃げ・・・」

キーンゴーンカーンゴーン

ちよつとー3時間目を告げるチャイムが鳴る

「くつ・・・いいですかーまたあとで来ますから、逃げないでくださいー」

・・・マッハで逃げたい

## セシリ亞・オルゴット（後書き）

はい、一夏とのちゃんとしたファーストコンタクトでした  
・・・ちゃんとじてるのだるつか？

白手袋は投げられたらとりあえず拾つておく

「それではこの時間は、戦闘における各種装備の特性について説明する」

今回教壇に立つのは織斑先生だった

余程重要なんだから、山田先生までノートを出していい

「ああ。その前に再来週に行われるクラス対抗戦にでの代表を決めないとな」

代表・・・何とも言えない響きがある

「クラス代表はそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会が開く会議への出席・・・クラス長だな。一度決めたら一年間変更はないからそのつもりで」

簡単にいや、雑務担当か？

面倒な仕事が多いんだろうな

「はいっ。織斑君を推薦します！」

「私もそれに賛成！」

注目の的つていうのはつらいねえ。一夏よ

「では候補は織斑一夏。他にはないか？自薦他薦は問わないぞ

「つて、俺え！？」

「織斑、席につけ。邪魔だ。さて、他に居ないのか？いなければ無

投票当選だぞ」

「いや、俺やらな……」

「自薦他薦は問わないと書つたはずだ。選ばれた以上、覚悟を決めろ」

「うう……」

「一夏。男なら腹あくくれよ」

『あ、柳瀬君もいいかも……』

『だね、私もいこと思うよ』

はあっ！？

つつーか一人目、そんな簡単に乗つかるな！

「ふむ。ではもう候補二人目は柳瀬薰。他に居ないのであれば、この一人への投票になるぞ」

「ちょ、ええつ！？俺辞退……」

「選ばれた以上、覚悟を決めるとやつを言つた筈だが？」

「薰。男なら腹あくくれよ」

「ぐつ・・・上手く返してくるじやねえか」

くそっ！余計な事を言つたじやなかつた

パパアン！

「うるさいぞお前達。喚くなんて男らしくない

「すみません・・・」

うう・・・要是一夏よりも票が少なければいいんだろ？

それはそれでなんか悔しいけど、一年面倒おしつけられるよりはまづつとまし・・・だよな？

「待つてください！納得がいきませんわ！」

そういうのは、さつき一夏との会話に割って入ってきた、セシリア・オルコットだった

「そのような選出は認められません！だいたい、男がクラス代表なんていい恥さらしです！そのような屈辱を、一年間通して味わえとおっしゃるのですか？」

『男が代表は恥さらし』ねえ・・・

だったら俺たちが候補に挙がる前に自薦すりやよかつただろうに

「実力から行けば私がクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由だけで極東の猿になるのは困ります！私は、サーカスをする気はありません」

サークัสだつてさ

俺たちが猿なら『猿まわし』だろ

いや、そうじやないか

「だいたい、文化としても後進的な国で暮らさなければいけないと自己、私にとつては耐えがたい・・・」

「ちよつと、黙ろうか」

「なんですか？極東の猿の分際で私に口答えをするとでも？」

「とりあえずハツキリさせておきたいのは、俺は猿ではなく、人。  
それとも？英國人<sup>ブリテン</sup>人は皆自分ら以外の人間は猿にしか見えないとか？  
御大層なもんで」

「なつ・・・・！あ、あなた！私の祖国の人々を侮辱する気ですか！」

？」

アレか、自分が見えてないのか？この児は

「まず、俺の祖国を侮辱したよな『文化としても後進的な国』とか何とか」

「それは事実を言つたまででしよう！？」

「なら、俺も事実を言つたまで。それとも？他人をいきなり猿呼ばわりするのは貴女だけ？品がありませんね」

実際、あつて間もない人間を猿呼ばわりするのは男女問わず『品がない』

といふか恥ずかしくないのか？『自分は礼儀を知りません』つていつてるようなもんだろ？

お互い一歩も譲らない

『一度張つた意地は貫き通せ』  
お袋がいつてたつけ

・・・なんか違つ氣がするが、まあいいだろ？

「あーもう一こつなつたら決闘ですわ！」

どうしてこの流れでそななるのかはよく分からぬが、頭に血が上つてゐる人間には何をいつても無駄

投げられた手袋は拾うしかないだろ？し、そもそも今の俺に拾わないという選択肢もない

賽は投げられた。とか、そんな感じなんだろうな

「・・・四の五の言つよつ分かりやすい。『勝者が代表』ってことか？」

「その通り。弱者に代表は務まりませんわ。だからと言つて、手を抜くのは許しませんことよ？」

「真剣勝負にそれは無粋つてもんだよな。貴女も手を抜く必要はありませんよ？」

「もちろんです。獅子というのは、一匹の兎を狩るのにも全力を注ぐこと。わたくしもそれにならい、一切手加減しません」

「上等」

「話はまとまつたな。それでは、勝負は一週間後の月曜日。放課後、第三アリーナにて行う。オルコット、柳瀬、織斑の三名はそれぞれ準備をしておくよ。では授業を始めろ」

そういうて、織斑先生は授業を始めた

「・・・って、俺もなの！？」

「当たり前だ。お前だって候補に挙がったのだ。『勝者が代表』のルール上、お前が参加するのは当然だらうが」

で、その日の放課後

「あ、～～～」

やつちやつた

相手は代表候補生。エリート中のエリート  
対して、俺は展示品を偶然起動させただけ  
無論、戦闘経験などゼロに同義

どつちが勝つかなんて明白だつたし、冷静になつて考えてみると勝

てる訳がない

だけど、俺にだつて塩粒ながら意地があるつてもんだ

「薰・・・。大丈夫なのか?」

「大丈夫な訳がないだろう。アレだ、差し出されたものはありがたく受け取る性分なんだよ。つづーかお前も大丈夫なのか?」

「大丈夫な訳がないだろう」

「お前もか」

「「はあ・・・」

俺らIIS初心者

オルコットは代表候補生

その差は明白。戦つ前から牙を折られた気分だ

「あ、織斑君、柳瀬君。まだ教室に居たんですね。よかつた」

そういうわれた方を見てみると、山田先生がいた女性としては平均的な慎重なのだろうが、サイズがあつていなさそうなゆつたりとした服のせいか、結構小さく見える

「あ、山田先生。どうしました?」

「えつとですね・・・寮の部屋が決まりました」

そういうつて番号の書かれたキーを俺たち二人にくれる山田先生

そういうえば、先生は山田真耶っていうんだつけ  
ヤマダマヤ・・・おお!逆さに読んでもヤマダマヤ  
どうでもいいか

「あ、ありがとうございます」

「じゃあ時間を見て部屋に行つてくださいね。夕食は六時から七時、寮の一年生用食堂でとつてください。部屋には個別にシャワーがあるので、当面はそちらをつかってください」

「そちらってことは、他にもあるんですか？」

「はい、大浴場がありますが、一人は今は使えません

「え、何ですか？」

・・・ここに、とびつきりの阿呆がいた

「お前は、同年代の見知らぬ女子大勢と一緒に風呂に入りたいんだな？」

ちなみに俺は、好きな人と入れればヒヤッホウだが、大勢となれば話は別だ

場違い感のなかではゆっくり出来ないし、下の方も縮こまつて落ちつかない

というか、俺はともかく、一夏が入ればそこは、大浴場ではなく大欲情  
絶対一年間使用禁止になる

「あ・・・」

「お、織斑君は女子とお風呂に入りたいんですか！？ だつ、ダメですよ」

「いえはいりたくないです」

「妙に即答だが、お前はひょつとしてオンナスキーでなく、オトコスキか？ それはそれで問題だぞ・・・」

「そういう訳じゃねえから！」

で、そんな会話が伝播したのか、廊下の女子は腐じよ・・・もとい『婦女子談義』が始まっていた

『織斑君・・・男にしか興味ないのかしら?』

『それはそれで・・・いいわね』

『「薰、俺もう・・・」「一夏、こんなところでダメだよ・・・』

ああっ・・・』

最後の奴、妄想だろうと俺を巻き込むな!

一夏はどうか知らんが、俺はノンケだ!

「俺もノンケだよ! まだそういうのに興味がないだけで」

「こんなうら若き少女たちに興味がわからないなんて、枯れた爺かお

前はっ』

「なんでだよ!』

『薰くん、私たちに興味津々みたいね』

『十五歳の男の子なら普通そんなんじやいの?』

『え、えつちなののはいけないと私は思います!』

そんな、『婦女子談義』が聞こえてくる

ふとそちらを向けば、みてもいないので胸元を隠す人もちらほら

・・・穴があつたら入りたい

むしろ、穴掘つてでも埋まつてたい

「え、えつと・・・柳瀬君と相部屋にして大丈夫なのでしょうか・・・個室の方が・・・」

「大丈夫ですよ! 何もしませんつて」

「もし何かやついたら、かつります

「怖っ！」

まあ最終防衛手段、といつか、武術とかそういうものの経験は皆無だから、爪を尖らせて引っ搔くぐらいしかできないが  
・・・授業云々で身についていくのだろうか？といつか、身につけたいな

「それはそれで困るんですけど・・・。んんっ。と、とにかく部屋の力ギ、たしかに渡しましたからね。それじゃ、私は会議があるのでこれにて」

「お仕事頑張つてくださいね～」

「は～い」

「やつぱり、部屋を分けたほうがいいのかな・・・いやでも、男の子だけ一人部屋という訳にも・・・」

そう呟きながら、山田先生は去つていった

「んじや、俺はアリーナいつてHS動かしてくるから。先に部屋行つてる」

「え？ 薫はHS持つてるの？」

「俺のは経緯が経緯だからな。んじや、いつてくるわー」

「おひ。先にシャワー浴びとくわ」

んー・・・、取りあえず空を飛ぶという感覚にだけ慣れておこなうかな角錐を開かがどうのいつの言つてたけど、いまいちわからない

あれだ、戦闘とかをボードゲームでイメージしてる人とか居るけど、あれって上手いくのか？

結局、飛行のイメージを何となくつかんだよつた気になつただけで、あつといつ間に月曜日

白半袋は投げられたらとりあえず拾つておく（後書き）

とこひでで四話目でした。

・・・次は戦闘シーンですが、あまり期待しないでいてください

## クラス代表決定戦

「薰、本当に大丈夫なのか？」

「・・・」

「目をそらすな・・・つたく、大丈夫かよ」

「ここはピット

簡単な説明をすると、ISの出撃準備をする場所だ

訓練の結果、ISをとりあえず飛ばせるようになつたが、俺にはISの手ほどきをしてくれるような人はいないし、一夏のような幼馴染というシテもない

相手のISについても知らないし、機体の管制にも自信がない  
ないないづくりで、圧倒的に分が悪い  
良くて5分持つかどうか・・・

「つーか、お前のISは届いたのか？」

「いや・・・それがだな・・・」

「目をそらすな」

ISというのは女性用に設計されている

だからこそ、男が使おうと思つと、男用にISを再設計して作り上げなければいけないので

それ以外にもデータ取りとかそういうのもあるらしい

え？俺の？

気が付いたら俺色に染まつてた。以上

とこりが、俺の「データってデータに向かうのかな？」

「まさか、まだ届いてないとか？」

「いや……そろそろ来るらしくんだけじゃ」

「そういうや、篠ノ之とはどうなったんだ？ IIS のサーチになつても  
らつたんだろう？」

「第？ ……よくわからないが、剣道をみっちり復習せられた」

一夏曰く、『お前に IIS がいつ来てもいいよ、しっかり稽古つ  
けてやる…』とか『IIS 起動以前の問題だ！』とか、篠ノ之に言わ  
れたらしく

「やつぱりエラつて基本的な体さばきは武術と変わらないのかな？」  
「さあな。でも IIS の基礎についてはあんまり教えてくれなかつた  
「案外、詳しいことは知らな・・・」お、織斑君織斑くんおりむら  
くんつ…。」「

一夏の名前を叫びながら、誰かが走つてくる音がある  
少しして、Aピットに現れたのは山田先生だった

「や、山田先生、落ちついて・・・」

「これが落ち着いていられますか！ 来ましたよ！ 織斑君のエラつ…」

「・・・え？」

「よかつたじやないか一夏」

運び込まれてきたのは『白』

一夏を待つて いるかのように、白エラがコックピットを開いている

「これが・・・」

「そうだ。お前専用の IIS 『白式』だ

気がつけばそこには織斑先生がいた

多分 IIS の搬入と一緒にやつてきたのだろう

「すぐに装着しろ。初期化<sup>フオーマット</sup>と最適化<sup>フッティング</sup>を行つておけ」

「はい！」

そういうて、一夏は背中を預けるようにして白式に乗り込む  
へえ。最初はああやつて乗るのか

「柳瀬はすぐに準備をしろ。アリーナを使用できる時間は限られて  
いるからな」

「了解です」

そこで俺は口を閉じ、意識を腰のウォレットチーンに向ける

『起動要請確認。』<sup>アルカナ</sup>『Arcana』、起動します』

機械質の音声とともに、あの口のように光が俺を包む。消える頃にはアルカナが装備されていた

「3秒か、遅い。熟練の IIS 乗りならそんなにかかるないぞ」

「うつ・・・」

「つていうか、薫は専用・・・ IIS?」

何故『IIS?』と疑問形なのか。ぶっちゃけ俺も疑問なのだ  
白式のような洗練された、剣のような鋭いシリエットと違い、アル  
カナは博物館の時と、小学生の粘土人形  
戦えるのかも疑問だ

「一応ISだぞ。『アルカナ』つていうらし」

「アルカナ・・・タロットカードの類か?」

「千冬姉、しつてるの?」

## スッパーン

出席簿アタックが一夏に飛ぶ

「織斑先生と呼べと言つているだろ? タロットカードというのは占いに使われるカードでな、トランプの起源になつたなんて説もある」

「へえ」

「たしか、それぞれのカードに暗示といつか、意味があるんでしたよね」

「ああ、正位置か逆位置かでそれも変わつてくるらしい。私はあまり知らんが、何故『アルカナ』なんだ?」

たしかに、まったくタロットカードとの関連性が見えてこない

「こんな訳の分からぬ名付けをしたものは、まさしく『愚か者』だな。意味が分からない」

「あー・・・そういうえば、たしか『愚者』というカードがありましたね」

「ほお? そういうことか、くだらない・・・」

名付け親が『愚者』。そのカードがあるから『アルカナ』  
・・・ホントにそれだけなの?

「とにかく、試合開始だ。さつさと行つて来い」

「了解です」

ハイパーセンサーにより、いつもどこかぼやつとしている視界が鮮明になる

しかも、360°どこでも顔を向けなくても知覚できるのだから優れモノだ

『戦闘待機状態のISを確認。搭乗者セシリア・オルコット ISネーム《ブルーティアーズ》中距離射撃型 特殊装備保有 解析開始』

そんなISのアナウンスのあと、みるだけで眩暈がするほどの数と文字が忙しく動きまわる時折、画像データが見えるのはオルコットのHGUやそれの武器だろうか？

「薰、大丈夫か？」

一夏がそう聞いてくる  
たぶん、ハイパーセンサーがないとわからなかつたと思づ少し不安げな気がした

「・・・お前、『大丈夫か？』以外言えないのか？」  
「あ・・・そういうわれればそうだな」

うつて変わつて間の抜けた声に変わる  
織斑先生がどこか呆れたように表情を変化させた気がした

「そうだな・・・頑張れ！ 薰！」  
「おうよつー《アルカナ》柳瀬薰、出ますー！」

俺とアルカナの初陣！  
きばつてこうか！

「あら、逃げずに来ましたのね」

「逃げるだけじゃ、男が廢るつてものぞ」

それもそうですわねと、オルコットは笑う

それは、楽しいとかそういうのではなく、勝者の余裕を纏つたものだ  
尻尾巻いて逃げなかつたためか、嘲りのような不快になるものは無い

つーか、腰に手を当てるポーズがお前ほど様になる奴、みたことない

「あなたのIIS・・・泥人形？お似合いでしてよ」

「そりやどうも」

オルコットのIIS『ブルーティアーズ』

鮮やかな青が綺麗な、中距離射撃型

劣等感を感じてしまつるのは致し方のない」とある

もう試合開始の鐘は鳴つてゐる、いつ撃つにきてもおかしくない

「最後のチャンスをあげますわ」

「チャンス？今なら許してやるとか、んなもんならいりねえよ」

「あら、それは残念ですわね」

『警戒、敵射撃武器《スター・ライトMK?》のセーフティーロック

解除を確認

アナウンスが聞こえてくる

「ならいいで・・・」

次第に、銃口が俺の方を向いてくる

『警告！敵I-S射撃体勢に移行！ロックされています！』

『警告！<sup>アラート</sup>に従い、いつでも飛び退けることができるよう<sup>ヒテ</sup>、足に力を込める

「お別れですねっ！」

「つ！」

間一髪、射撃を横つ跳びでかわす

『右脚部に被弾。ダメージ21。シールドエネルギー残量は629  
実体ダメージ最低。大きな問題はありません』

機械質な音声の報告が流れれる

「くそつー！」

回避で崩れた姿勢を整えて、俺はブルーティアーズとの距離を縮めるため接近する

敵の銃はスナイパーライフル。距離を縮めれば思うようには撃てない

いはず・・・

それに武器はただの長めの鉄棒一本。コレを持つて女に飛びかかるとか、ビックのゲスだよまったく・・・

「ブルーティアーズの装備はこれだけではなくってよー。」

そういうて、さつきアルカナが言っていた特殊装備『ブルーティアーズ』を展開してきた

早い話、これはビット兵器。少し前のアニメとかだと『ファンネル』なんて呼ばれていたりする、アレだ

ちなみに、ビット兵器の名前が先

その試験機だから、ISネームはブルーティアーズなのだと  
オルコットが射撃しながらそんなこと言っているのが聞こえた

そのビット群が、射撃の隙をカバーするかのようにビームを撃ちこんでくる

手数が多いし、攻撃していく方向が読めない  
回避につぐ回避で、とてもじゃないが前进できるようなものではない  
むしろ一発も当たつていなことを褒めて欲しいくらいだ

「ああもう一回まかとー。」

オルコットは当たらないことに若干苛立つている様だが、そんなことを気にかけていられる状態ではない  
防戦一方では勝てない。何とか道を開かなくては

(手取り早いのは、ビットを叩く事だよな・・・)

何とか姿勢を整え持つている棒を使い、ブルーティアーズを叩き落

とやうとする

が、全部棒の軌道からそらされる。当たり前と言えば当たり前

「隙ありですわ！」

棒を振った時の硬直を狙われ、シールドエネルギーを削られる

『敵IS解析率70%に到達。《ブルーティアーズ》は全部で6基。ビーム発射型4基と、ミサイル発射型2基です』

ISからそんな報告が届く

今そんな情報がなんだというんだ！

『なお、ブルーティアーズはオート操作ではなく、使用者が一つ一つマニュアルで操作している模様』

だから、そんな情報が・・・

ぢゅぢん！

「ぐつ・・・・」

『肩装甲に被弾、シールドバリアの消耗はありませんが、被弾部が破損』

「ぐちつー！」

肩装甲と言え、一撃は一撃

それで姿勢の崩れた俺は、そのまま立て続けにビットの攻撃をくら  
い、シールドバリアは一気に消耗

『シールドバリア残量436』

「やはり、口ほどにもありませんわね！」  
「ええい、黙つてろい！」

とりあえず距離をとつたが、相手の思うツボだったようだ  
このビットの射撃に加え、あの銃からのビームもじく稀に来るようにな  
やばいな・・・

『<sup>ブルティアーズ</sup>敵I Sの解析終了、データ反映・・・』<sup>トレース</sup>《複写開始》』

「はあ？」

途端、アルカナから光がほとばしる

歪な粘土人形だった装甲は削られていき、次第に新たな装甲を形成  
してゆく  
ただの鉄棒も、銃のような形に変化していく  
ごちゃごちゃとした考えは消え失せ、頭の中が妙にスッキリする

「つ！させませんわ！」

セシリ亞がスタートライトで射撃してくる  
が、アルカナの放つ光に当たった瞬間、『消えた』

「なつ・・・」

無力化なのか、吸収なのか  
それすらもよくわからないまま、アルカナの光は輝きを増し、そしてある一瞬に強く輝いて消えた

『複写完了。システムオールグリーン。アルカナ・カルレムサジタリー、いけるよ!』

気がつけば、洗練されたE.Sが、そこにあつた

## クラス代表決定戦（後書き）

という訳で、アルカナの初陣です  
次も戦闘ですが、テンポがちゃんとつかめているのか不安です

## 青き射手《カルレムサジタリー》

「え、あ、アレって何ですか！？」

ピットでリアルタイムモニターを見ているのは山田麻耶、織斑千冬  
に、初期化と最適化の完了した白式に乗っている一夏だ

「あのIS、セシリ亞が乗つてゐるのにそつくりだ・・・」

ちなみに、早々に喧嘩してセシリ亞と険悪になつていたのは薰だけ  
であり、一夏は普通にセシリ亞と接していた  
正直な話、あの日は一夏もブチギレ寸前だったのだが、薰が先にキ  
レたため、頭が冷えた  
人というのは、近くに自分より強い感情があるほど相対的な意識が  
働いて落ちつくらい

「ふむ・・・」

さて、あの日の一夏の話はこれぐらいにしておこうか  
ここの人だけでなく、観客も<sup>キャラリー</sup>唖然としていることだろう  
柳瀬薰の乗る粘土人形のようなISが、セシリ亞の乗るISそつく  
<sup>アルカナ</sup>  
<sup>ブルーティアーズ</sup>

りに形態移行したのだ

人によつては、『変身した』とも表現しそうなそれは、形態移行とはかけ離れたものかもしれない

「一次移行・・・なのか？」  
〔ファースト・シフト〕

「で、でも I.S が形態移行で装甲全体の形を急激に変化させること  
なんてないんじやないんですか！？」

「・・・ありえないなんてことは、ありえない」

そう一夏はつぶやく

「ふむ・・・おそらく、『愚者』は、自分を愚者だとわかっている。  
そういうことだろうな」

「え？」

「I.S の完成形なんてものは未だに存在しない。だからこそ、他の  
I.S のデータを引っ張ってきて、自分に最適な形で完成形に持つて  
いこうとしているのだろう。見た目がブルーティアーズそのままな  
のは、他に使えるデータがないからということか？」

「そ、それって・・・」

「I.S の公開情報である『自己進化』の設定を、どこかの誰かが過  
剰なまでに刺激するような何かを施したのだろう」

「ということは・・・まさか」

「あの歪な粘土人形のような形も、I.S のコアが作り上げたのかも  
しれん」

実際のところは、何とも言えないがな。そう千冬は付け足す  
それを聞いて、真耶は何と言つていいか分からなくなる

そう考へれば、装甲の形が急激に変わつたのも納得がいく

『I.S のコアが作りだした装甲』だから、形も I.S の意のままなのだ

制作者は、ISの作成に必要な知識と素材をISの「ア」に『え、あとはISの好きにさせる他のISとの戦いを続ければ学習し、自然に装甲を作り上げ、自然に強くなつていく

「じゃあ、あのISって戦えば戦いつほじ強くなるつことなの？」  
冬姉

「元々ISはそういうものだ。あれはその働きが他のと比べて強いのだろう。あのブルーティアーズに似た姿、おそらくは持っている能力も似ている」

「それって、BT兵器が使えるつことですか？」

「おそらくは。まあ、今ここで理論を飛ばしていても仕方ない。試合を見ていれば、その「つか」から教えてくれるはず」

そういうつて、千冬はモニターを食に入るよつて見つめている

#### 『青い射手』

ISネームをそつ變えてもいいんじやないかと思つほど、そのISはブルーティアーズに似ていた

「な・・・ま、まさか・・・わたくしの『ブルーティアーズ』が・・・」

歪んだ形状でもなく、『ブルーティアーズ』どうして・・・

『どうぞ、この形、気にいつてくれた?』

「お、ビックリした」

急に頭の中に声が響く

それはあの日博物館で聞いたのと同じ質のものだった

『ブルーティアーズの解析に手一杯で、適当な機械音声使つてごめんね。でも、もう大丈夫だよ』

つーか、君は誰だい?

『ん? ボク? ボクは《アルカナ》。今、マスターをのせてるIISだよ。やつとボクの原型をつくることができたから、いざつて出で来たの』

・・・は? IISのコアは深層に意識があるって聞いたことがあるけど、ひょっとして、それか?

『んー・・・難しい』とあんまりわかんないけど、これからよろしくね、マスター』

お、おつ・・・

『それで、今のボクの状態なんだけどね、ブルーティアーズのデータをもらつて、ボクがちょっと弄つたのを反映させたんだよ。す』りいでしょ?』

な、なるほどな・・・よくわからんが、なるほどな

自信満々なその声に、なぜか胸を張るみさとの姿が頭によぎった  
俺つて、パソコン? それとも軽いホームシックになつているのだろうか?

ああ家が恋しい・・・

『ちょうどいいから、試してみよつよ。ボク、マスターの戦い方も  
つと知りたいし』

あ、ああそだな、アル

『・・・アル?』

うん。アルカナじや長いし、縮めてアル

『そつか、えへへ・・・アルかあ・・・。って、言つてる場合じやないよね。マスター、いくよ!』

おう!

この間、約0・5秒

コンピューターより速く思考ができるようになる、ハイパー・センサーの恩恵であった

「さて・・・これからはこっちから行くぞっ!」

『ブルーティアーズをロックオン!』

「くつ・・・ただのモノマネ上手なISなんかに!」

「ただのモノマネ上手か、戦えば分かることだ!」

そんな口上と一緒に俺は、ブルーティアーズの『スター・ライトMK?』を模した銃、『フルメン』を構える

なんと今まで唯一の武器だった棒も銃に変化していたのだから他にも色々増えてるんだろうな。確認しておかないと・・・

(銃を扱う機会なんて、俺は願い下げだぞ)

なんて、親父の話の間に考えていた自分を急に思い出すISを使う以上、こういうのを持たなければいけないどうも、俺の願いは現状では叶うこともないようだった

とにかく、銃を扱うのは初めての経験だがアルがサポートしてくれる

『軌道予測・・・』  
ちー

ターゲットサイトが左にずれる。そのまま引き金を引く  
アルの予測した射線に、オルコットの移動先が重なる

直撃

「きやつ！」

「おー！ジャストショット！」

『ボク、軌道予測とかISの解析とかって得意なんだ！』

おおつ！超頭脳派IS

『ISに筋はいないよ？それよりマスター、くるよー。』

「ブルーティアーズならば！」

そういうて、ビットのブルーティアーズを再び展開する  
・・・ややこしいから俺たちのなかではこれから先ビットで統一

「アル！」

『任せて！ビット軌道予測中・・・！真上だよマスター！』

「了解つー！」

上に銃口を上げると、ちょうど奥へその位置にビットが来た

「なつ・・・」  
「ますーつー！」

爆炎をあげて、ビットは砕け散った

『お見事っ！それと、セシリ亞さんはマスターの注意がいきにいく場所、つまりは後ろとか真上とかからビットを攻撃するみたいだよ！』

そうか、だから反応が遅れて回避に専念するしかなかつたのか

「攻撃支援ビット、《トリックスター》展開！」

『トリックスターの操作はボクがやるよ。マスターはセシリ亞さんを攻撃して！ボクがビットアートを破壊するよ』

「たのむゼアル！」

ああ・・・一人いるつてこんなに色々できちやうのか  
俺が引っ張られてる感じなのはこの際しちゃうがないとして

ちなみに《トリックスター》とはビットのブルーティアーズを模したものだ

性能はブルーティアーズと同じだが、一基しかない

ビット同士の戦いが始まる

俺はその間もオルコットに狙撃を仕掛けた

オルコットは俺たちと違つて、ビット操作と同時に他の作業を行うことができないようだ

足が完全に止まっている

いくら銃器初心者の俺だつて静止している<sup>ターゲット</sup>標的なら大丈夫しっかりと照準を合わせ、また引き金を引く

稻妻のような鋭い光が、オルコットに向かつてまつすぐ飛んでいく

「」のハ・・・・

さすが代表候補生。俺みたいにむざむざ当たるのではなく、しっかり回避

だけど、その時集中が若干途切れ、ビットの動きが鈍る

『いまだっ！』

『しまつ・・・・』

アルがビットを一基落とす

オルコットが動搖した隙を狙って撃とつとするが、チャージ中で、撃てなかつた

そつか、連射ができないのか

「アル！フルメンの性能を変える」としてできるか？

『今やううとするとい、それに掛かりきりになつかけつけつよ。マスター、トリックスターの操作出来る？』

出来っこないとか言つてられる状況ではない  
やらなくちゃいけないんだよな。多分

「コツを教えてくれ

『チエスとか将棋の駒を動かす感じだよ』

「オッケー！やってみる！』

『頑張れマスター！』

「おつよー。』

そういうと、アルは喋らなくなり、フルメンが粒子に戻る

「チエスの駒を動かす感じ……」

戦場を頭のなかでチエス盤に置き換える。俺はキング、ビットは差し詰めクイーンか  
クイーンが二つ……最強じゃないのか？

敵のビットは同じクイーン、オルコットはキング  
やることはさつきどいたい同じだ  
オルコットをトリックスターで攻撃チエック  
それを避けるために移動した隙に、もう一つのトリックスターでブルーティアーズをとる

射撃！  
ファイア-

「くつ・・・」

成功！

残りのビットはあと一基

悔しがつてゐるうちに、一気に詰め寄り、蹴り飛ばす

「ビット駆除、終了！」  
ファイードバック  
『「いつも終わつたよ。反映！」』

アルがそういうと、新しいフルメンが出て来た  
銃身は半分程度になり、片手でも扱える仕様だ

スコープはついたままだが、飾りか？

「な・・・何なんですか！？」さつきと銃の形が・・・  
『銃身を短くして、すぐに撃ちだせるようにしたんだよ』  
「なるほど！ ガダムのビーム イフルみたいだ！」  
『ガン・・・よくわかんないけど、さつきより連射出来るはずだ  
よ』

「それと、接近戦闘武器つてある？」

『あるよ。だけど迎撃用の武器みたいだよ』

「よし、それ出してくれないか？」

『いいよ。《グラティウス》！』

左手に現れたのは、剣としては小型の武器だった  
なるほど、斬るよりは受け流したりの方が得意そうな形だ

「でも斬りこむ！」

『ええっ！？ でも・・・』

相手の方が射撃の腕は上。それは間違いない  
それなのに射撃戦をやれば腕前の差でこちらがジリ貧だらつ  
回避と射撃を行なうことは今の俺にはできない  
ならば間合いをつめて、斬り伏せればいい  
武器は心許ないが、相手の得意な間合いであるよりはずっとましだ  
らう

新しくなったフルメンを構え、突撃

「動きが直線的すぎますわ！」

セシリ亞は、スターライトを構え、撃つてくる  
それをきりもみ運動でよけ、射撃で牽制  
狙いなんてつけない。とにかく撃つて息つく隙すら『えない

速度は落とさない。最大速度で一気に間合いを詰める

フルスロットル

『む、無茶苦茶だよ・・・』

昔から言ひじやん。エリートとかつて自分の予想だにしない攻撃に弱いって

方向修正が何度も入りながらも、着実にブルーティアーズとの距離を縮める

「くっ！」

スターライトからの近距離射撃が飛んでくる直撃だったが、構わずに寛つ込む

「獲った！」

間合いを詰め、相手の胸元めがけてグラディウスを構え対戦する！いくら相手のシールドエネルギーが残っていていようと『絶対防御』が発動すれば、勝機はあるはず！

「ふつ・・・・」

不意にセシリ亞の口元がゆがむ

「！？」

「おあいにく様！ブルーティアーズは6基あってよー！」

「んなあ！？」

『・・・ボク、少し前に報告したと思ったんだけど。ビームビット

4基 ミサイルビット2基って』

何故もう一度言わない！

『いや、了解して突っ込んでるのかなって  
ちくしょおつ！

「わようなら！」

「くわつーじこまで来てやられるかよつー！」

近距離でミサイルが撃ち込まれる。今の姿勢を考へると、おもへらく  
は回避不能

「うひあああああつー！」

ミサイルに照準を合わせて引き金を引く

シユウウウン・・・

情けない音を立てて、中空に霧散するフルメン

『考えなしに撃ち過ぎだよ、マスター。もう銃弾に回せるエネルギー  
ーは無いよ』

「くわつーくそがあつー。」

次第に迫つてくるミサイル

IISは高速で移動しているはずなのに、着弾までが妙に長く感じる  
そのまま、俺が弾頭に突っ込む形で 着弾

ドガアアアン！

赤色を通り越して白色をした爆発に、俺は巻き込まれていた

遅れてやつてくるくる着弾の衝撃  
鉄球か何かで思い切り殴られたような衝撃と、炎に手を突っ込んだ  
ような熱が、一瞬体を通る

『敵のシールドエネルギー残量は133……ボクらはもう〇だよ』

『試合終了。勝者、セシリ亞・オルコット』

そんなアナウンスを、俺は自分の浅はかさを呪いながら聞いていた

## 青き射手『カルレムサジタリー』（後書き）

という訳で戦闘パート後半でした

初陣は黒星

戦闘シーンはやつぱり難しいです。はい

## アル（前書き）

今回は解説が入るので、若干長めになります

その上、ちゃんと解説できているのかさえ分からぬといつ・・・

## アル

『「じめんねマスター。ボクがもつとしつかりしてれば……」「いや、気にすることは無いさ。俺が考えなしに飛び込んだのが悪いわけだし。というか、あつという間に減ったな、エネルギー』

400以上あつたエネルギーがゲームの直撃とミサイルの直撃で全部消えた

当然なか多いのかは俺はよくわからないが、5とかそれくらい残つてもよかつたのではないだろうか？

『トレースにもエネルギーを使つからね。それに、トトレース後2時間は機体へのダメージも一倍ぐらいに膨れ上がるし』

アレか。羽化したての昆虫みたいな感じか  
羽化したては脆いもんな・・・

『エネルギーの効率的な運用方法も学んでいかないとなあ』  
『だなあ・・・俺は、乗り手としての技術も学ばないとなあ』  
『言つとくけど、ボクは制御とかの補助は出来ても指導はできない』

『ナ

俺のスキルが上がれば、アルが裏でやれることが増える  
結局、損は無いのだ

『ほひ、セシリ亞さんをほつといついいの？ 詳しいことはまた寮で話そうね、マスター』

『ああ。あとでな』

『何をぶつぶつ言つてるのですか？ピットに戻りましょ~』

ひょっとして、アルと話てるのが聞こえてたのかな？

それがひとつ、「として受け取られた。なんという赤つ恥か

「ん？ ああそだなオルコット。・・・すいませんでした」

『相手が怒つたら、取りあえず謝つとけ。自分が酷い目に合わないうちに』

親父がいつてたっけ・・・ビクビクしそぎだろ  
といづか、もう遅いな。これは

「何をこまさら。それに元々この決闘を申し込んだのはわたくしで  
してよ？」

ああ、そういうやうだつたな

「わたくしが勝つなんて元々当然の結果でしてよ。それよりも、なぜ搭乗経験が一回しかない人間が、初めて触る《ブルーティアーズ》を操作できたのですか？」

「お、俺はもう猿ではないんだな」

負けた悔しさは残るが、そこはオルコットに当たつても仕方がない  
ISの道は鍛錬に次ぐ鍛錬。それだけなんだろうな

今は、今後三年間こいつから猿呼ばわりされることがなくなつただ  
けでも良しとしよう

「認めた相手には敬意を。それがイギリスでしてよ」

「つづることは俺は、お前に認められたのか？」

「一応は。でしてよ」

一応、か。もつと確立したものにしていかないと、また猿にされそうだ

「セリー・立ち話をしていな」で、やつをピラシトに帰つてへるよつ

「こー」

「お、これは出席簿アタックへりあがつた。じゅあオルコシト、  
またあとで」

「・・・セシリ亞でよくなじよ。薰さん」

「ん? そう? んじやあセシリ亞、またあとで」

「はー。またあとで」

そつこつセシリ亞は向ひのペシトに帰つて行つた

「いやあ、戦いのあの友情といつものは、いいものですね  
『・・・マスター、言い方がオヤジへきこと』

とりあえずピシトに戻るか。アルがなんか言つた気がしたが、気に  
しないでおこつ

「考えなしに動きすぎだ、馬鹿モノ」

「はこ・・・」

俺は、到着一番に織斑先生よりありがた~いお言葉をもらっていた

「今回のように馬鹿みたいな動きをしていれば、ヒロが泣くぞ」

「・・・はい」

## スパン

「もつとしゃあつとした返事が返せないのかー。」  
「はこいつー。」

くぞ、やつぱりこの人容赦ねえ  
ことさらHIRに關しては先生といつより教官だな。やつぱり

ちなみに一夏はこまセシリアと対戦中  
わりと劣勢だった

「それと、お前に少し聞きたいことがある」

「なんでしょうか？」

「そうだな、『粘土人形』から『ブルーティアーズモドキ』に変化  
したあとの事だ」

モドキ。やつぱり周りからみればそんな感じなんだろくな

『ぶーつ。仕方ないじゃん。まだ材料だつて足りないんだしねー』

アルがぶー垂れてるが、ほつておじつ、織斑教官の話を放つてお  
いた方がまずい

『ぶーぶー』

「あの、形態移行の後、明らかにお前の動きが変わっていたのだが、  
何故だ？」

『複写だもん、形態移行とはちょっと違つんだもん』

「変わっていた、と言いますと?』

「HS初心者丸出しだった動きのはずが、オルコットにもまだ出来ない、ビット操作中の射撃をやってのけたな。何があった」

「・・・言つちやつていいのかな？」

『別にいいんじゃないの？ボクにとっては困ることないし』

信じてもらえるかだよなあ

・・・かくかくしかじか

「HSの深層にあるはずの意識が顯在化しただと？」

「はい。それで、そいつが色々補助してくれたんです

「・・・にわかには信じ難いな」

「でしようね。そして、今は僕にもそれを証明する術はありません」

『証明なんてできないよねー、ボクはマスター専用だし。他に誰も  
のせたくないし』

「ふむう・・・

「あの、織斑先生？」

「まあいいだろう。今田はもう寮に帰つて寝てしまえ。織斑、お前  
もだ

「はー」「はー」

いつの間にか帰つて來ていた一夏と一緒に、おわれ右してピットを  
出る

あー・・・ビット疲れが

で、今は寮に向かつて移動中

先頭に俺、後ろに一夏。一夏の隣に篠ノ之

この三人で歩くときは、俺が前か後ろかの違いである事が多い

。

「あー・・・結局、俺たちぼろ負けだつたな」

「いや、俺はあの一撃が入つていれば・・・」

俺は振り向かずに応える

「五十歩百歩つて故事成語を知つてるか?」

「大差がないことの喻えだつたな?」

「そりだよ篠ノ之。つまりは、俺たちが何を言つても・・・」

「なるほど。いまのお前たちが何を言つても・・・」

「負け犬の遠吠えということだ」

「ぐおおおおつ!」

顔は向けてない、なのに一夏がどんな表情をしているかがわかる  
そして、俺がそれ以上に酷い表情をしているのも分かる

・・・といふかアル、どうしてハイパー・センサー開きっぱなしんだよ

『だつて、いろいろ知りたいもん。ハイパー・センサーはボクの目と  
同然だもん、マスターだつて、便利でしょ? イロイロと』  
・・・否定はしない

『ならいいじゃんか』

はあ・・・目立たないようだけしててくれよ・・・

『はいはーい』

俺の頭にはカチューシャがついていた

・・・男なのに

「はあ・・・」

「ん? どうしたんだ薰、ため息なんかついて

「・・・俺、体力もつかなあ?」

常時ハイパー・センサーとか、体力使いそうなんだけど・・・

「? ? ?」

なんのことだから分からなって表情だな一夏君

「訳のわからない男だな。お前は

「分からなくともいいと思つ

「?」

「で、結局お前はなんだ?」

ここは、学生寮。一夏を先にシャワーに入れさせ

そのさい一夏は『こねた。が、そこはあれだ。平和的解決手段で何と

かした

『んー？なんだ、つてどうこういふこと？』

そんな声が頭に響く

・・・傍目にはこれって俺の独り言にしか見えないのかな？

頭で感じても通じるようならそれに越したことは無いか

以下、俺の思考との区別のために、《「」》がついてるだけになります。俺は喋つてしません

「たしかに、質問が曖昧すぎたな。そつだな、まず一つ。何で博物館に居たんだ？」

『それは簡単だよ。マスター以外、誰ひとりとして起動できなかつたんだよ？ 完全に博物館用の模造品だと間違えられたつてワケ。失礼しちゃうよね』

「そういやそうだつたつけ？」

じゃあ問題はそこぢやなくて

「・・・エラつて、女性に反応するもんぢろ？ 何で俺に反応したんだ？」

『女の子だからいいつてわけじゃないもん！ 他の皆コアが人を選ばなすぎるの！』

「それで、男を選んだお前も、かなり偏屈だと思つぞ」

『え、そーかな？ それだつたら、白式も男の子を選んでるよ？』

「・・・といふか、エラつてエラ乗りを選んでたんだ」

『そりや、命を預け合ひ仲になるんだもん。他の皆はどうか知らなければ、ボクはしっかり選びたいんだよね』

「で、俺はお前のお眼鏡にかなつたと」

『そーゆーこと。マスターとなら、憧れのブリュンヒルデにもなる! って思ったんだ』

「根拠は?」

『直感』

ガタツ

「・・・しつかり選ぶんじやなかつたのかよ」

『自分の感覺は大事にしたいもん』

「はあ・・・で、次だ。《複<sup>トレー</sup>写》ってなんだ?』

正直俺もビックリした

だつていきなり相手のそつくりさんになるんだぜ?

『ボクの得意技だよつ! 相手の<sup>トレー</sup>ISデータを複<sup>トレー</sup>写して、それにボク自身の経験を加えて、マスターに最適の形で機体に反映<sup>フィードバック</sup>させるんだ』

待つてましたと言わんばかりに、言いだすアル  
心なしか、早口だ

「で? 先いつてた《材料》っていうのは?』

『ISのデータ。ボクは装備を作る基礎的な技能はあつても、具体的な設計プランとかないんだ』

だから、相手のISから構造データを引っ張ってきて、自分なりのアレンジを加えるのか

それって要は相手IS次第で強くもなつたり弱くもなつたりするわけだろ?』

なんつーか、俺を選んだ理由といい、行き当たりばったりで無計画

だな

ひょっとして、その行き当たりばったりもコイツは計画してたんだ  
るつか

「それで、形態移行との違いはなんだ？」

『トレイス<sup>ワンオフ・アビリティ</sup>複写は单一仕様能力のような扱いだから、何度も出来るんだ。

形態移行がほとんど一度きりなのにに対してオトクだよね』

### 单一仕様能力

たしか、使用者とHSが最高の形で同調した時、発生する現象だつたっけ？

普通は『一次移行』からしか発現しないって話だけど

『不思議な話だよねー。ボクも白式も、一次移行から使えるんだよね』

『え？ 白式もそんなの？』

『うん、ちょっとショアリングしだけなんだけどね、使えるっていつてたよ』

「・・・ひょっとして、お前ってHSデータをショアリングして捨つてくるのか？』

『そうだよ。ちょっとお話しすると構造とかの詳しいデータくれるんだ』

・・・そのお話、なんか怖い

『細かいことは気にしないー。・・・老けるよ？』

「老けねぇよ！」

『あははっ』

「・・・で、あのあとHSネームに追加されていた《カルレムサジタリー》つづーのは何なんだ？』

『簡単だよ。これからも色々な形態が出てくると思うから、それを整理するための表記だよ。カルレムは、青という意味の《カエルレウム》と射手っていう意味の《サジタリウス》から』

なるほど。何でそんなことを知ってるのかは甚だ疑問だが、おそらくはネーム用に辞書でもインプットされてるんだろう。中一臭いと思ったのは、俺とキミの秘密だぞ。

・・・キモいな

『装備はさつき作った三つを基本にして、色々弄つていくつもりだよ』

「・・・俺でも扱えるようなチューンでな」

『ちがうんだよ。いやとなつたら、ボクも補助するし、あ、でも・・・』

・  
「補助の分、余計にエネルギーを消費するとか?」

『そつそつ。それと操作の補助はできるんだけど、それやってるうちはかかりきりになるから、機体制御とかはマニュアル操作になるよ。マスターも自分を磨くのを忘れないでよね』

「じょーかいだ。アル」

『うむつ。素直でよろしく』

どっちが使われてんのかわからねえな。これじゃそこまで話した時、シャワー室の扉が開く

「あー、早く風呂につかりたい・・・」

『お、一夏くんが上がったようだね。マスター、お風呂じゃないけどシャワー浴びてくれば?』

「ん。そうするわ

そのまま一夏と入れ替わりで、シャワーを浴びた  
程よく調整された温度は気持ちよかつた

・・・アルカナの意識『アル』か

シャワーの音が響く

もぐもぐと湯気が立ちあがる中、セシリ亞・オルコットは今日の試合を思い出していた

(まさか、あのようなことを・・・)

突然、『ブルーティアーズ』のような形になつた彼のIIS  
おそらくブルーティアーズと同じ、中距離射撃型である「スペック」  
のIISなのに突っ込んできた

それ自体は、ただ愚かな行為でしかなかつたが、何よりも驚いたのが『『ビット操作中と同時に他の行動をやつた』』という点だ  
セシリ亞自身ができない事を、薰はやってのけたのだ

・・・本当のところはIISのサポートがあつたから出来たのだが、  
彼女はそれを知らない  
故に、薰一人で、代表候補生である自分以上の事を、やってのけた

と思つてゐるのだ

(「いや、わたくしが・・・まさかあのよつた男に後れをとるとか）

知識も経験も自分より劣つている人間に、あそこまで追い詰められる  
それは、彼女自身の経験がまだまだ足りないことの証であつ

だが、彼女の胸は高鳴つていた

（骨のある人間がいなければ、面白くありませんものね）

フフッ

彼女は、とても楽しそうに笑う

（他のところはまだ初心者ですから、基礎基本はわたくしが教えて  
差し上げましょうか・・・）

とにかく、セシリア・オルゴットは試合以降、柳瀬薰のことを好敵<sup>ライバル</sup>  
手となりつむ存在として意識するよつになつた

（どんなHIS操縦者になるのか、楽しみですわ・・・）

シャワーの音が、セシリアの鼓動の高鳴りを隠すかのように響き続  
けていた

で、代表決定戦の次の日

「という訳で、一年一組のクラス代表は柳瀬薰君に決定です。」

パチパチパチーッ

クラスのあらゆる場所から『おめでとう』とか聞こえてくる  
どういう訳かをしつかり聞きたいが、まず、聞きたい

「・・・辞退していいですか?」

スッパーン!

「・・・つ。つづーか俺昨日負けただろ!『勝った方がクラス代表  
つて話じゃなかつたのかよ!?』

そう、たしか昨日の決闘は『勝った方がクラス代表』という内容だ  
つたはず

俺は見事なまでの完敗を喫していただはないか

『馬鹿正直に突っ込んで近距離でミサイル直撃だもんね』  
それを言つた恥ずかしいつ

「あ、それはですね・・・」

「わたくしが辞退したからですわ!」

そういうつて、相変わらず例のポーズをとつてセシリアがそいつた

「は?辞退?」

「そうです、まあ、あなたは結果的に負けましたが、それは相手が

このセシリ亞・オルコットだつたから。仕方のない事ですわ

『実際負けてるんだから、セシリ亞さんの言つことに文句は言えないよね』

「む、むぐう・・・」

約束されていた勝利みたいな言い草に思わずまた怒つてしまいそう  
だったが、アルの一言で出かけた言葉を止める

実際俺らは負けたんだもんな。『敗者は勝者にしたがうべき』って、  
両親に揃つて言われたつけ?

言つてた時は、明らかにお袋の方から勝者のオーラが漂つていた

「それであ、大人げなく怒つたことを反省しまして。薰さんに、  
クラス代表を・・・」

「あれ? 織斑君はどうなるの?」

「たしか候補にあつたよね?」

「そつだそつだ、むしろ織斑君が代表の方が・・・」

流れに乗つて一夏を代表に仕立てるように言つてみるが、声質的に  
無理があつたらしい。セシリ亞はあつといつ間に反応した

「さりげなく自分の期待をいつてみても却下ですわー私は一夏さん  
よりも、あなたがいいと思います!」

「なんだそれ!?」

一夏でもよいではないか!

「だつてそつちの方が一夏さんとつきつきり指導が・・・」

「・・・言いたい事があるなら、ハツキリ言つたらどうだ?」

セシリ亞が何か言いだすが、まあ俺にはバツチリ聞こえている訳で

ハイパーセンサーって聴覚にも作用するのか？それともただの地獄耳？

うーん？

「な、なんでもありませんわ！それにいまならば、一夏さんと一緒に、クラス対抗戦まで放課後ISの指導をしてあげます！」

「えっ！俺もかよつ！」

そりゃそうだ

お前だつて専用機持ちなのに、遊ばせてる余裕は無いだろ

「あいにくだが、一夏の教官役は私が直々に頼まれたからな。必要ないぞ」

篠ノ之が『一夏さんと一緒に』に反応してくる

そういうえば、一夏もそんなこと言つてたな

『直々に』とこうこうがやけに強調されている

つーかそんなに睨むなよ。なんか周りの空気が冷えてる気がするぞ

「あら、あなたは篠ノ之さん。IS適正Cのあなたより、IS適正Aのわたくしのほうが、指導者役としては適切でなくて？」  
「て、適性は関係ないだろつ！適性は…」

そんな篠ノ之の睨みも関係なしに、セシリ亞は切り返す  
ちなみに俺はIS適正は『…（ナシ）』。まったくのひだつたらしき  
じやあなんで動かせるのか

俺が知りたいわ！！

『マスター、セシリ亞さんが指導者になつてくれるつて  
そこはこいつのことつてもありがたい話だ

さすがに指導者なしの独力で行くのは限界がある。というかもうす  
でに頭打ち

セシリ亞は結構な人の中から選ばれているであるひHリート  
教えを請うてみるのも悪くは無いかもしない

「それに、代表ともなれば実戦経験を積む機会も多くなります」  
「・・・」

『ボクはこの話乗つたほうがいいと思うよ。ボク、いろんなIISと  
戦つて、相手を知りたいし』  
「・・・そこまで言われて辞退したら、俺つてとんだKYOUだよな」  
「よく分かっていらしてますね」  
「えつと、じゃあ、決定でいいんですね？後悔しませんね？』  
「ろしくお願ひします」

山田先生が俺の意思を聞いてくる

「はい」  
「じゃあ、一年一組、クラス代表は柳瀬薰君に正式に決定です！」  
「これから一年間、ままならないこともあるかもしませんが、よ  
ろしくお願ひします」

今度は形だけの拍手でなく、暖かく迎え入れてくれる拍手な気がした

「柳瀬君はIIS操縦の経験が積める。私たちは他のクラスに柳瀬君  
の情報が売れる。そこからついでに織斑君の情報も売れる。一粒で

二度おいしいわね

そんなことを『きゅぴん』とか言いそつたでいう女子がいた  
・・・俺的には、商売しないでほしいって感じかな  
売るなら一夏オンラインで

「俺の情報も売るなよ。」

「さて、次はエラの基本操縦訓練だ。各人遅れないよう!。遅れた  
ら罰としてグラウンド5周」

ちなみに、グランドの外周はたしか10kmぐらいあつたと思つ  
五周したら50km。パネエツス

れつやと行く」と云ひよつ

## アル（後書き）

とこう訳で、前書きにも書いたとおり、いつもより長めの回でした  
分けたほうがよかつたですかね・・・？

## THE 飛行訓練

「ではこれより I-S の基本的な飛行操縦を実践してもらひ。柳瀬、織斑、オルコット、ためしに飛んでみろ」

遅咲きの桜も散った四月下旬

正直桜を見る機会もなくあつという間に月末に突入  
光陰矢のごとしとはよくいったもんだ

「せつせとしろ馬鹿共。オルコットはもう準備がすんでいるぞ」

セシリアの方に意識を向けてみると  
なるほど、あつという間に展開して、あつという間に浮かんでる  
ちなみに俺がブツ壊したビットの回復は終了しているようだ

ところが織斑先生、一夏と俺をまとめて呼ぶときは必ず『馬鹿共』  
なんだけど・・・なぜだ？

俺そんなに馬鹿な動きしてないと思つた

「集中しろ」

うーーっすー出席簿アタックはもうレコリッす！

(アル、出番だぞ)  
『了解、アルカナ I-S 展開！』

心で念じると、光の膜が俺を包み、次の瞬間に I-S が出てくる  
この間 0・8 秒

一夏よりも展開終了は若干遅かった。くつ・・・

「もつと、発光を抑えられないのか？目に悪い」

「すいません・・・」

「まあいいだろ？、飛べ」

セシリ亞の動きは速かつた。あつといつ間に飛んでいて、遙か頭上で停止する

俺もそれに続くが、セシリ亞よりは遅かつた

ちなみに一番遅かったのは一夏

スペックがどうのより慣れやイメージの問題なんだろ？な

ちなみに俺はトリックスター操作のイメージから『盤上を動く』イメージだつたりする

アレだ、ゲームにもある座標をクリックしたところにキャラが動く感じ

『マスター！自由に動いてみよつよー。』

半ば興奮気味の声

「いや、あかん。あの織斑先生だ。適当なことしたら、間違いなく俺が出席簿アタックくらう」

『えー・・・』

分かってくれアル。あれメツチャ痛いんだぞ

ふと、一夏とセシリ亞の方を見てみると何やら話しかけている  
おそらくはセシリ亞のレクチャーだろうな

『IDSの移動はイメージが大切。本に書かれているようなイメージ

をするよりも、自分でやりやすいイメージを作り上げたほうが建設的でしょ?』

なんて俺も言われたな。初期の初期に

「一夏つーいつまでそんなとこにいるー早く下りてこー。」

と、オープンチャンネルで怒号が飛んできた  
みてみれば、篠ノ介が山田先生のマイクを奪つて叫んでいた

あーあ、アレは篠ノ介に出席簿アタックだな

「ほら一夏。嫁が怒つてるぞ」

「よ、嫁え! ? い、いや、笄はただの幼馴染で・・・」

「・・・薰さん、そうこうからかい方は、どうかと思いましてよ? 」

「うう・・・すいません」

「分かれば、よろしくてよ・・・」

なんなんだ、このフレッシュヤーは?

本気で睨まれたようだ。気をつけないと

『たしかに今はちよつとなこと思つなー。あの一人、付けてないんじょ? 』

「うーん・・・絶対に脈ありだと思つんだけどなあ・・・」

特に篠ノ介は、指導の話の時の必死とか、そんな気がするんだけど

『確証のないうちからさんなこと叫びやダメだよ? 』

「くーい・・・」

「三人とも、急降下と完全停止をやって見せる。目標は地上十センチだ」

『マスター、自分で頑張つて！ボクはしっかり受け止める準備しつから』

「何故に、墜落前提！？」

『だつてボクが飛行の補助したら、マスターが成長しないじゃん。それじゃあ訓練じゃないよ』

もつともです・・・

「オルゴット、そこの一人に例を見せてやれ」

「わかりました」

セシリアは、急効果を開始

そして、ギリギリの位置に、すゞい綺麗に止まつた

「よし、柳瀬、やつてみろ

「了解」

頭のなかでイメージを起こす

チェス盤に見立てる

移動先は地面から10センチ上

『うわ、イメージはチェス盤なの？トリックスターの操作とおんなじで？』

「同じ形の方が、イメージしやすいだろ？」

『そりだけどさ、三次元的なイメージとしてつかみにくくないの？』

「開始地点と移動先をつなげた直線があるのは平面だ。問題ない」

『な、なるほど・・・』

この間までは特に何も考えずに動かしてたからな。」ここでイメージを確立させたい

「んじゃ、動くぞ。対衝撃に備えておいてくれ  
『了解だよ！マスター！』

一気に速度を上げる、目標は地面

結構おつかないが、アルがいる。多分大丈夫だ

100センチ、60センチ、30センチ・・・

次第にセンサーに表示される高度が下がってゆく

いまだっ！

自転車のブレーキをかけるイメージを起こす  
物体を止めるところイメージはどうしてもコレしか浮かんでこなか  
つた

『ちぐはぐだよね』

今は応える余裕もない

自転車のブレーキのイメージがまづかったのか、ぴったりと制止せ  
ずにエスが少し滑る

結局勢いを全て殺すことほりできず、地面にぶつかる

「ぐつ・・・」

鈍い音を立てて、俺は地面にぶつかった  
殺しきれていなかつた衝撃の分、ゴムまつの方に二回ほどはねた

「いつてえ・・・」

「ふん、まあいいだろう。次、織斑」

女子のクスクス笑いが辛い  
うう・・・

「まあ、地面を抉らなかつただけまじやないですか？」  
「……地面を抉つたほうがよかつたかもしれない」

このクスクス笑いをハイパー・センサーで鮮明に見るよりは  
つづーかアル、いちいち拡大するなつ  
俺の心が死んでしまう

「あら？ かなり痛いですわよ？ 激突つて」

でも、セシリ亞もやつたことがあるらしい  
皆、最初は初心者であるところだらうか。  
なんだか気分が楽になつた

とができたんだ

(なら、俺にだつて・・・)

自分よりも先をいつている人が、自分と同じ道をたどつた事を考へると、そう思えるから人間面白い

「うえつー?」

「あやつー!」

思考の海にふけっこるときに大きな音がしたもんだから、変な声が出た

頭をあげてみると、土煙がもくもくと立ちあがっていた

『一夏くんがね、減速なしで突っ込んだみたいなんだよ』

白式がかわいそう・・・なんて、アルはぼやいてる

人はそれを、墜落といつ

「セシリ亞」

「なんでした?」

「・・・前言撤回、勢いを殺せてよかつたよ」

「理解していただけまして? なら、まずは武器の運用云々よりも、機体制御をモノにしましょうか?」

「ああ、頼む。それよりも、一夏の様子を見に行こつか」

「わづですわね。行きましょうか」

一夏は、特に問題は無かった

IIS装甲がひしゃげてる様子も、本人が怪我をした様子もない

ただ、おそらくは俺と同じでくすくす笑いに瀕死状態だつた。心が

そのあと、武装の展開の練習をしたあと、時間が来た

「時間だな。柳瀬、織斑はグラウンドを片付けておけ」

「うつ・・・はい」

何故に俺まで！？

「お前も墜落しただらうへ、なりば連帶責任とこりやせつだ  
『・・・ガンバ、マスター』

ぐすん

「ふうん。」ジジがそうなんだ・・・」

その日の夜、小柄な体に不釣り合のボストンバックを持った少女  
が、正面ゲートに立っていた

「それで、受け付けてビリよ？」

ポケットでくしゃくしゃになつた紙を取り出して、確認する

「本校舎一階総合事務受付・・・って、ビリよそれ？」

文句をいつても紙は返事しない

周りを見ても、地図らしきものは無い

「ふん！自分で探せばいいんでしょー。」

そうぶー垂れながらも彼女の足は止まっていない  
考えるよりも行動。それが彼女

『実践主義』であり、『よく考えない』といつことでもある

「だから、そのイメージがだな・・・」

不意に男の声を聞いて、ビクッと反応する彼女  
すこくよく似た声、というか、おそらく同一人物  
どぎまぎしながら見てみると、彼女の予測は当たっていた

「くいって感じってなんだよ。くいって感じって」

「・・・くいって感じだ」

「だから分からぬいって　おい待てって、筹一！」

・・・あの子は誰？

気がつくと胸の高鳴りは、恐ろしく冷え込んだ怒りともつかない苛立ちに変わる

しかし、それは仕方のないこと

想い人が、自分の知らない子と話をしていれば、誰だつてイラッ  
と来るもの

ゆえに、苛立つのは仕方のないこと

彼女の名前は鳳鈴音ファン・リンイン

一夏に思いを寄せる乙女がまた一人、蝶が花の蜜に寄せられるよう  
にやつてきた

・・・というか、どれだけこの男は色々な乙女から想われているの  
だろうか

そして、それに気がつかない鈍感さは、どこから来るのか  
ハツキリしたことは、誰も、知らない

## THE 飛行訓練（後書き）

といつ訳で飛行訓練でした

IS初心者の薰君は、現時点での一夏よりはマシなもの、それで  
も操縦はヘタクソというレベルです

今はイメージ組立の最中です

クラス代表決定祝賀会？ 要はパーティー時間です

「という訳でっ！ 柳瀬君クラス代表おめでとう！」

パンツ！ パーン！

クラッカーの音が鳴り響く  
そのあとしばらくしてから漂つてくる火薬のにおい

「・・・・・」

えーと、なにこれ？

たしか俺は夕食後の自由時間。ここでセシリ亞にHSの戦術を教えてもららうために待ち合わせてたんだよな  
で、気が付いたらこの状況。何で？

『多分、待ち伏せされてたんじゃない？』

セシリ亞も一枚かんでんのか  
壁には、『柳瀬薰 クラス代表就任パーティ』なんてでかでかと貼  
られている

「いやーやっぱり祝い事つていつのはサプライズに限るねえ

「ほんとほんと」

「クラス対抗戦も面白くなりそうだねえ

「ほんとほんと」

とか、相槌うつてるのは一組のか？

見たことない顔だけ

「ひょっとしたら、優勝しちゃうかもねえ」

「いや、それは一組じゃないかな?」

おお、適当にうつてる訳じゃなかつた

『ボクら合わせて43人・・・クラスの人数超えちゃつてるね』

なんだつて

「人気者だなあ。薰」

少しにやけたようにして一夏が言つてくれる

「・・・一夏、いつ死ぬかい?」

「え、遠慮しておきます・・・」

よろしい

女子といつのは、とにかく騒ぎたい生き物なのだよ

「はいはーい。新聞部でーす。話題の新入生、織斑一夏と、柳瀬薰  
君に特別インタビューしに来ましたー!」

「「おおーーー!」」

誰が呼んだか新聞部

いや、盛り上がるなよ

「あ、私は一年の薫子。よろしくね。新聞部副部長やつてまーす。

はこじれ名刺

そつこつて差し出される名刺

・・・やつぱり、薰つて女の名前なのか？

子供の頃はよく『薰ちゃん』なんて間違え方されたし  
いや、男でも薰つているけどさ

「ではずばり柳瀬君！クラス代表に就任した感想は？」

ボイスレコーダーを俺に向けて、目を爛々と輝かせてくる新聞部副  
部長さん

『マスター、ビシッヒー。』

いや、ビシッヒー。

「んー・・・と」

そんな期待を込めた目で見られても

「こうやつて就任パーティまでやつてもらつた以上、クラス代表と  
して恥じないよう、精一杯務めさせていただきます」

「んー・・・平凡な政治家みたいだねえ。もつといつ個性をもあ」

「じゃあなんですか？『運命の人はどこですか？』とでもいつとい  
たほうが？」

周りがどよめく

あ、やばい・・・

「お、それいいねえ。つかわせてもうひつ

「やめてー頼むからやめてくださいー。」

俺の心が死んでしまってー。

「じゃあ今度学食で何か奢つてー。」

にんまりした顔でそりこしてくる薫子先輩  
仕方ないので承諾した

ただでさえ少ない、最近の小遣いが・・・

『あんまり変なことは言つもんじゃないね』

「う・・・」

「じゃあ次、織斑一夏くんー女の子のなかに飛び込んだ感想は?」「え、ええっと・・・頑張ります」

「何をがんばるのかよくわかんないけど、わざといいコメントちょうだいよー。俺に触ると火傷するぜー!的なさあ」「・・・自分、不器用ですから」

『「うわ、前代的!」』

「日本の誇る名優を侮辱するなー。」

一夏がつっこひどきた

ところが、お前は不器用よりも鈍感の方があつてるんじゃないかな?

「じゃあいいや。勝手に捏造しておくとして」

「情報を扱う者として、それでいいのか?！」

「あつ、セシリ亞ちゃんもコメントちょうだい」

スルーですか?!

「わたくし、いつこつたコメントはあまり好きではありませんが、

仕方ないですわね

「ほん、と咳払いして、セシリアは始めた

『満更でもないみたいだね』

まあ、本当はこういうの好きそつだもんがあ

「ではまず、どうしてわたくしがクラス代表を辞退したかと言いますと、それはつまり」

「あー長くなるからいいや。写真だけちょうどいい。あとで勝手に作つておくから」

「う、最後まで聞きなさい」

そんなセシリアの要求も華麗にスルー

・・ひでえ

「じゃあ柳瀬君に惚れたから、つてことでいいよね？」

「「んなつ・・・」」

何でそういう方向になるんだよつ！

「彼は、経験を積めばわたくしの良き好敵手になるであろうと判断したまでで、別に惚れた訳ではありませんわ！」

グサアツ！

勝手に惚れたとかそういう話を作りれるのもいやだが、真っ向から否定されるのも・・・ね  
気まぐれで、面倒な十代の夜

『でもライバルだつて！ボク達やつぱり認めてはもうつてるみたいだよ やつたね！』

「ふーん・・・。じゃあ、織斑君に惚れたつてことにしておこうか」

「なつ・・・」

セシリ亞が言葉に詰まる

顔は真っ赤だった

「何をバカな事を」

そんなことを言いだしたのは、一夏だった

「え、 そうかなー」

「そ、 そうですわ！ 何をもつてバカとしているのかしらー..」

あれ？ 怒るところはそっちなの？  
とすると・・・あれれ？

「だいたいあなたは 」

「まあ とりあえず写真撮ろうか。三人とも並んでね」

「え？」

「折角の専用機持ち三人なんだからさ、 やつぱり写真に納めておきたいよね。セシリ亞ちゃんを真中で センター」

「え、 わ、 わたくしがセンター？」

「うん、 バランス的にね」

何だかセシリ亞は落ちつかない様子だった

まあ、男二人に囲まれるんだもんな。そら落ち着かないわなあ

「ちなみに、撮った写真は貰えるのですか？」

「ちひろんだよ。あ、でも着替えてくるのは無しだよ、時間ないか

ら

「うー

・・・着替えてくる気だつたのか？

そんな会話の間も、さつさと並ぶ

「・・・」

「なんだよ、筈」

「なんでもない」

一夏をじゅじゅ見る篠ノ之

「それじゃあとゐるよー 35×51÷24は?」

「は?」

『47・375だよ』

パシヤ

不意をついた顔を取られてしまった

「写り酷いだろうなー

「んー、いい顔だねえ。はいこれ。撮れたの

あ・・・ありのまま、いま起こつたことを話さつ

『3人で並んで撮つた筈なのに、その写真には、1年1組全員がい

た』

しかも、篠ノ之はしつかり一夏の隣を確保していた  
何をいつてるのか分からねえと思うが、俺も何があつたか分からない

催眠術だと超スピードだと、そんなチャチなもんじゃあ断じて  
ねえ

もつと恐ろしいものの片鱗を味わつたぜ・・・

つーか誰だ。俺の頭に角つけてる奴。古いぞ

「あ、あなたたちねえっ」

「セシリ亞だけ両手に花なんてずるいもんねー」

「クラスの思い出になつていーじやん」「ねー」

よく見れば、あんな瞬間的に集まつたのに、ちゃんと俺たちがセンターでバランスの良い配置になつていていたてるところはたてる女子力、恐るべし

とにかく、この『』だと完全にセシリ亞が代表だな

ともあれ、この代表就任パーティーは十時近くまで続いた  
はつきりって、俺はもうヘトヘトだ

女子力、恐るべき

『大事なことなので・・・』

『一回言こました』

『マスター、途中でセツフをとらないでよ・・・』

『へいへーい』

『むーっ・・・』

クラス代表決定祝賀会？ 要はパーティータイムです（後書き）

という訳で、薰がクラス代表です

・・・正直、ここを変えるはどうかと思いましたが、ぶっちゃけ  
クラス対抗戦以外、特に使われてない設定のような気がしたので勝  
手に改变させていただきました

文句があれば、受け止めます

## 転校生はセカンド幼馴染 『B Y一夏』

「転校生？」

「や。この時期に、面白いよなあ」

食堂への移動中、噂の転校生の話を一夏に振つてみる

その方面にはあまり明るくない一夏のことだ

多分詳細どころか転校生の話自体知らなことと思つ

「へえ。で、どんな奴なの？」

「なんでも中国の代表候補生だとか

「よく知つてるな」

そりや、俺の近くで『ねえねえしつてるうー？』なんていつて話しがしてんだもん。いやでも耳に入つてくるわ

女子三人寄れば姦しいとはよく言つたもんだとおもつ

「まあな。代表候補生と言えば……」

「あら、わたくしの存在を危ぶんでの転入かしら？」

「一組に転入したわけではないのだろう？騒ぐほどのことでもあるまい」

「「「うおっ、ビックリした……」

気がつけば俺たちの横にセシリアと篠ノ之がいた  
本当にびっくりした

「でもさあ、どんな奴なの？そいつ」  
「あら、やはり気になりました？」

「うーん……そりゃあな

「一夏でも気になるのか?」

「ん? ああ、少しさは・・・って、でもってなんだよ、でもって」

途端に篠ノ之はふくれつ面になつた

・・・ハムスターのよつて膨らんだそのほっぺをついついてみたい

『マスター?』

いや、なんでもないです

朝からグーで殴られたくは無いです

「今あなた方に、他の女子を氣にしてる暇がありますの? 来月にはクラス代表戦があつまよ」

「ん、それもそうだな」

転校生も氣になるが、今はそれどうひがじやないな

「セシリア、そろそろ基礎的な動きからより実践的な訓練をお願いしても良いかな?」

「もちろんですわ。このセシリア・オルコシトが指導したのに、負けでもうつては困ります」

そつか、俺が惨めな負け方すれば、セシリアの名前も傷つくのか

「ま、やれるだけやつてみるか」

「『やれるだけ』ではなく、優勝ですわ! それ以外は認めません」

キビシー

『それだけ期待されてるつてことだよ。わ、一緒にがんばろー』

「そうそう。柳瀬君が勝てれば皆はハッピーなんだよ」

「え？ ああ、フリー・バスね」

気がつけば食堂に到着してたもんだから、周りには女子がちらほら  
ちなみにフリー・バスとは、一位クラスの優勝賞品の、学食デザート  
半年フリー・バスだ

・・・まさか、食べ物で釣るとは

「今のところ、専用機持ちが代表なのは一組と四組だけだから、余  
裕だよ」

「その情報、古いよ」

ふと、そんな声が聞こえる

「一組も専用機持ちが代表になったの。そう簡単には優勝できない  
から」

声の方向を見てみると、白慢げな顔をした少女がいた

・・・手に朝ごはんを持ちながら  
つーか、朝からラーメンつてつらくねえの？

「鈴・・・お前鈴か？」

え？ なに、一夏この子を知つてんの？

「そうよ。中国代表候補生、凰鈴音。今日は宣戦布告つてわけ」

ふつと小さく笑みを漏らす

・・・なんつーか

「何がつこつけてるんだ？すっげえ似合わないぞ」

こら、そこのド直球

たしかに、かつこつけてるけど、朝食持つてるせいできこか痛々しくなつてる感じはあるけど

思つても言わないので優しさじやないのか？

『その子が恥をかく前にやめさせるのも優しさだよね』

む、それもそうだな

優しさとは人によつて変わるもの。朝からいい事を学んだな。俺

「んなつ・・・!なんてこと言つのよ、アンタはー！」

「おい

「なによ！」

スッパーン！－

ああ、いつもより強く入った

「ち、千冬さん・・・」

スッパーン

「織斑先生と呼べ。そして、わざわざ席にひこて食事を摂れ。私も  
なくば、授業に遅れるだ」

そう織斑先生に言われて、時計を見る

ヤベホー！もう時間ないじゃんか！

朝の早食いはよくなにして話だけど、今日は別だ

集まつていた女子も皆『おさきー』とかいつて行つてしまつた  
やつこや、エシリアと篠ノ花は、

もぐもぐもぐもぐ  
もぐもぐもぐもぐ

あこづり、先に食つてやがる

「一夏、早くしないと出席簿アタックだけじゃ済まなくなるかもし  
れないぞー！」

出席簿チヨップとか飛んできやつ。首に  
痛いだらうなあ・・・

「お、おっ

「ぐわ、またあわねえ。今日は残すか・・・

「お残しはあるしまへんでえー！」

食堂のおばちゃんのそんな声が聞こえてきた

鳳についても聞きたかったが、今はそれどころではない  
食堂のおばちゃんは残したものを見たら小一時間説教してきやうな  
空氣をだしてくる

最速の速さで食べるしかない

そのあと、最速の動きで教室まで走ったが遅刻

スッパーン！

軽快ながら質量を感じる音によって、今日もヨーヨーの訓練と学習が始まる

「お前のせいだ！」  
「あなたのせいですわ！」

昼休みに入るなり、篠ノ之とセシリアが一夏にそういった二人とも、あんなに集中できない奴だったつけ？  
山田先生に結構注意されてたし、織斑先生にはかなり叩かれていた  
篠ノ之はどうか知らないが、セシリアはあんなにボーッとしている

子ではなかつた筈だ

それほど、鳳の登場は衝撃だつたといつ訳だらうか

「まあ、話なら飯食いながら聞くから。どうあえず学食に行こうぜ」  
「む・・・。ま、まあ、お前がそう言つのなら、いいだろ?」「  
「ん? ジヤあちよつどいこし、俺も行こうかな。セシリ亞も行こう  
よ」

「そりですわね。」一緒にさせていただこうかしら?..「

で、その他学食組の女子も連なり、ぞろぞろと食堂に移動した

ちなみに一夏は田替わらランチ、篠ノ花はまきつねびことセシリ亞  
は洋食ランチ

お前らそばっかだな

「待つてたわよ、一夏!」「  
「一夏よ、モテる男とこいつのまつりこねえ  
「薰さん!」「柳瀬!」「  
「すいません・・・」「

何でそんなに過剰反応するんだよ

「はあ・・・まあとりあえずセレブをビコでてくれ、食券が買えないし、  
何より通行の邪魔だ」「  
「わ、わかつてるわよ!」

そのお盆にはラーメンが乗つかつている

「・・・早く食べないと伸びるんじゃない?」

「わ、分かってるわよーつーがあんた誰よー。」

あ、そりこや駄乗つてなかつたつけ？

「柳瀬薰つていうモンだ。よろしくな、凰」

「よ、よろしく・・・つー、アンタを待つてたのよ一夏ー。もつと早く来なせこよー。」

はつはつは

元氣のこころだなあ

おばけやんに食券を渡し、しづかく会話を聞いてみる

「それにしても久しぶりだな。ちよつじ丸一年ぶりになるが、元氣だつたか？」

「げ、元氣にしてたわよ。あんたこそ怪我病気しなさこよ」

なんつー挨拶だ

「んんっ！」

「一夏さん、注文の品、出てきましてよ~？」

「お、向こうのテーブルが空いてるな。行こひー」

で、一夏の見つけた席に皆で座り、食事タイム

つーかこの人数が入れるだけの席なんてよくあつたな

「んで一夏よ、つもる話もあるのだろうが、俺たちに凰との関係を教えてくれないか」

「やうだぞ一夏。それとも、まさか付き合つているのか？」

他の子も興味津々の様子  
俺も興味がないと言えば嘘になる

「べ、べべ、別に付き合つてる訳じゃ……」「  
「そうだぞ。何でそういう話になるかな。鈴とはただの幼馴染だ」

こいつ、もう一人いたのか幼馴染

「幼馴染……？」

「あー、えーっとだな……。篠が転校したのが小四の終わりだろ  
？　で、鈴が転入してきたのが小5の頭。で、中一の時に国に帰つ  
たから、会うのは一年ぶりだな」

・・・それって、幼馴染っていうのか？

こひ、もっと小さいころの話じゃないのか？

誰か詳しい幼馴染の定義をプリーズミー

ちなみに、この学校に俺にとって幼馴染と言えるような人間は一人  
もおりません  
ぐすん

「で、こっちが篠。前に話したろ？小学校からの幼馴染で、俺の通  
つていた剣術道場の娘」

「ふうん。そうなんだ」

しばしのにらみ合いのあと、挨拶を交わす二人  
終始火花が見えた気がした

そのあと、『一夏の指導をする』なんて言いだしたり、代表候補生  
であることによらず持つていてるセシリアルに『誰？』とか言いだ

すもんだから、二人とも怒って帰ってしまった  
結局、何がしたかったんだろうか・・・

「はあ・・・疲れた」

今日の授業も、セシリアの指導も終わり、部屋にいく  
セシリアの指導は的確だ  
的確なんだが・・・言葉が難しいといつか、角度の話が出てくる様  
になつた

『回避運動は左前方20。に移動ですわ!』

といった具合だ

理路整然としているはいいのだが、水を吸うスポンジのよう・・・  
とはなかなかいかないのが現状  
アルが噛み砕いて教えてくれなきや三分の一も理解できなかつたと  
思う

「まあ。文句垂れても仕方ないんだけどさあ」

『指導してもらつてるだけ、ありがたい話だもんね』

「そーそー・・・ん?」

部屋の近くまで来た時、うろついている女子を見つけた  
あのツインテールは間違いない、凰鈴音だろう

「えーっと、凰。何してんの？」

「あ、えーっと・・・柳瀬だつたつけ？ アンタの部屋つてどうよ？」

は？俺の部屋

・・・ああ

「一夏か。俺もこれから戻るといひだつたから、一緒に行くか？」

「うん」

そういうて、凰は俺の後ろをついてきた

「とひろでだ、凰」

「な、何よ」

「一夏のこと、じつ思つてゐるへ。」

「なつ・・・・・」

顔を真っ赤にしてうつむく凰

『マスター、直球すぎだよ・・・』

俺は変化球の使えないド直球男児だからね

「べ、別にじうとも思つてないわよー馬鹿じゃないのー！？」

『ウソだね。思いつきり』

だなあ・・・・

ハイパーセンサー開きっぱなしの俺にて、ウソは通じないので  
声が揺らぐからな。嘘発見器つてこうこう事やつてるんだろうか  
大方素直になれないってだけなんだろうなあ

「そっか。お、ここだ。あけるぞ？」

俺は、自室でもある『1032室』に入る

「一夏ー。お前にお密さんだぞー」

「おー。誰だ？・・・ああ、鈴か。どうした？」

「あのねえ、『積もる話はあとで』っていつてたじゃない。だから、話をしに来たの」

あー・・・

「じゃあ俺は先にシャワー浴びてるから

「おひ

部屋のシャワールームにはいる

俺はこの時が一番落ち着く

この時だけハイパー・センサーが解除されるからな  
さすがにシャワーにまでカチューシャとウォレット・チーンをつけ  
て入る人間ではない

この時だけ、俺はあの微妙な声の変化でウソが分かるとか、真上真  
後ろを振り向かないで知覚できるとか、そんな奇妙な状態から解放  
されるのだ  
家に居た時は結構さつと流していたが、この状態になつてからは、  
シャワーの時間が妙に長くなつた気がする

そうそう。アルは待機形態の時ウォレット・チーン（腰につけるオ  
サレな鎖）なんだけどさ、TIS・スースを着た時とかつてどうすれば

いいのかちょっと困るんだよね

腰につけられないときは腕にぐるぐるに巻きつけてるけど、左手が使えないのは不便  
やはり、常に制服の下にエスースーツを着込んでおいたほうがいいのか？

スーツに穴をあけて・・・

いや、それは無いな。それだつたらスーツにひもかなんか付け足して、そこにぐぐらせた方がいいだろう

あ、首にかけてればいいのか

それするには輪が少しい大きいけどしようがない。他の方法は面倒だからな

そんな、どうでもいいことを考えながらシャワーを浴びる

部屋着ジャージに着替えて、脱衣場の扉を開ける

「最つつづ低！女の子との約束もちゃんと覚えてないなんて、男の風上にも置けない奴！犬にかまれて死ねっ！」

バン！

「へふつ……」

あけた扉がものすごい勢いで返ってきて、思いつきり顔面に当たる  
めちゃくちゃ痛いが、どうも扉を返した主はもう帰ってしまったよ  
うだった

「……なにがあつたんだ?」

脱衣場から出て、一夏を見れば、頬に鮮やかなもみじが俺は鼻先がクリスマスの歌に出てくるトナカイのようになつていた

「……ほんと、何があつたんだ?」

一夏に事情を聞いてみると、ぶー垂れながら説明してくれた

「鳳の料理が上手くなつたら、毎日酢豚を一夏においしる?お前、んな約束してたのかよ」

「ああ。しつかり覚えてたのこ、『ちやんと覚えてない』って言われて、ひっぱたかれた」

なんだよそれ・・・

全然わからねえぞ

『マスター。それってさ、《毎日鈴ちゃん手作りの酢豚を一夏くんに食べさせてあげる》ってことだよね?』

ああ、なるほど。それをおいしむからって解釈した訳か

・・・ん?

それって、昨日じゃねえの?

さつきの怒り具合といい、おそらく間違いないだろう

かなりの勇気を要したであろうそれを、こいつは『奢ってくれる』程度にしか考えていなかつたと

「……なるほどね。一夏、ちょっとといいか?」

「なんだよ」

「スッ

「うがつー・薰何しやが・・・」

「そのまま、馬に蹴られて死ね」

「なんでだよ！俺が何したってんだよー！」

『マスター、なんで頭突きしたの？』

頭突きだから、俺もめちゃくちゃ痛い  
めちゃくちゃ痛いが、その分一夏も痛いはず

「『毎日手料理を作つてやる』といつ意味をもつ一度考え直してみ  
ろ・・・」

「だから、わからんねえから・・・おい？・薰？」

ああ・・・頭がくらくらしてきました・・・

ばたんわゆー

翌日、クラス対抗戦の日程表が張り出された  
一回戦の相手は、二組代表、凰鈴音

転校生はセカンド幼馴染 『B Y —夏』（後書き）

ところ訳で、十話目です

作中の幼馴染への疑問は俺がふと疑問に思ったことです

私のイメージとしては小三くらいでまだだと感づのですが・・・みな  
さんどう思ってます？

## 酢豚とクラス対抗戦

で、そんな一件があつてじばらへ

四月は終わり、五月

凰の機嫌は俺が悪くなつていいくばかり  
あれ以来、一夏と俺の部屋に来ることは無くなつたし、一夏を見て  
もそっぽを向いて、取りつく島もない  
俺がフォローに回るうとしても

「関係ないやつは引っ込んで！」

もつともです

一夏も一夏で、未だに見当違いであらう答えばかり  
それを聞いて笑つてられるほどの余裕は今の俺になく、『何故分か  
らないのかが分からない』故の苛立ちを募らせる  
そして自分が何も出来ないことに苛立つて、ISに乗つて発散し  
ていた

簡単な話、俺はむしゃくしゃしててしょうがない

『マスター、最近思うようにいかないからって、ボクに当たらぬ  
でよ。最近のマスター、ボクの使い方荒過ぎだよ・・・』  
『悪い・・・でもさあ、なんでこうも思うようにいかないのかねえ・

・・・

『ボクが知るわけないよ』

それもそうだ  
やつぱり、時が解決してくれるのを待つしかないのかねえ  
こんなモヤモヤした気分で凰と戦いたくは無い  
といふか俺、間違いなくハツ当たりの対象にされる

『ボクはその分データがとれてうれしいんだけどね』

「・・・いつまでそうしてボーッとしているつもりなのかしら?」

「!? ああ、すまん。それで・・・なんの話だっけ?」

そうだ、今はセシリ亞との訓練中だ

一夏と凰のことも気になるが、こっちに集中しないと・・・

「まつたく・・・今日は昨日教えました、無反動旋回ゼロコアクト・ターンと三次元躍動クロス・グリップ・ターン、それに今までやってきたもの全部の総復習としましょう」

「おう」

「アリーナが使えるのは、対抗戦前では今日までのようすで、  
みっちりやりますわよ」

「お、お手柔らかに頼む・・・」

こうして、セシリ亞とのHS制御の訓練も総復習といつ段階  
クラス対抗戦への仕上げにはいつていった

「そういうや凰の奴、今日珍しく話しかけて来たよな」

『今日の一夏の訓練はどのアリーナでやるの!?』だっけ?

一夏のHS訓練はセシリ亞と篠ノ之が交代で行つていて  
故に俺の訓練も一日置きなのだが、逆にどこが分からないとかがハ

ツキリと分かつていい

それよりも、凰と一夏・・・和解は近いかもな

#### 「」は第四アリーナ

今は中央にて一夏と篠ノ之箒がISの操縦訓練をやつしている

装備の関係上、一人の訓練は、薰とセシリアのような撃ち合いではなく、剣道の稽古そのもの

一夏が乗るは白式。彼の専用機である

対して、箒が載るは『打鉄』。防御能力の高い、純日本製の量産型IS。学園では、訓練機として用いられているものだ

スペック的には白式の方が圧倒的に上なのだが、試合展開は打鉄が有利に運んでいる

やはり、格闘戦はスペック云々よりも操縦者の経験や勘と言つたものの方が如実に表れてくる

あるいは、一夏の方が集中しきれていないのかも知れない

ほどなくして白式はエネルギー切れを起こし、箒に軍配が上がる

「はあ・・・はあ・・・」

「息が上がっているぞ、だらしない」

本来ならエリを装備していくて息が上がるなどと云ふことは起らなければ  
つまりそれほど今の一夏は集中できていないのだ

「今日はこれくらいにしておこう」  
「……ありがとうございました」

ふたりでピットに戻る

「はあ・・・」

「一夏、集中が乱れているよつて見えるだ?」

「うつ」

「まったく・・・剣の基礎にして究極たる『集中』をおろそかにするなど・・・」

そんな、ありがたい?お小言を聞きながら、ピットに戻る一夏  
そこには、人影が一つ、ぽつんとたたずんでいた

「ありやあ、鈴じやねえか。何しに来たんだ?」

「はあ? 鈴が?」

とつあえずピットに降りる一人

待つてましたと言わんばかりに駆け寄つてくる鈴

「待つてたわよ、一夏!」

「貴様、どうやつてこられた? 今日は今日関係者以外立ち入り禁止だ  
ぞ!」

そんな筈の問いかけに、鈴は「まつ」という挑発的な笑いとともに、元気満々に言こわかる

「あたしは関係者よ。一夏関係者」

「・・・盗人猛々しいことは、また二〇のことだな」

呆れたように 笛は鈴にそういうが、相手にされず

「悪いけど、今はアンタの相手している場合じゃないの」

「なつ」

鈴は矛先を変え、一夏に問う

肩すかしをくらつたような 笛は、黙つて聞くしかなくなってしまった

「で・・・一夏。反省した?」

「へ? 何が?」

「だから、あたしを怒らせて申し訳なかつたなー。とか、仲直りしたいなーとか。そういうのないの?」

「いや、避けていたのは鈴じやん・・・」

「アンタねえ! ジやあ何? 女の子が放つておいてって言つたら放つておくれの?」

「おひ」

さらつと、すぐ戻す一夏

「ああ・・・もうつーとにかく謝りなさいよ。」

一方的にまくしたてる鈴

一夏だつて、何が悪いかも分からぬのここまで言われるのは心外だ

「んだよ! 約束ならちゃんと覚えてただろ!」

「意味が違うのよ、意味が! とにかく謝りなさい!」

「薰もそんなことを呟いてたナビ、意味が違つてなんだよ、説明してくれたら謝るの！」・・・」

「せ、説明したくないから」「うつて来てるんでしょうが！」

さすがに、告白文句を説明などできるわけがない

愈えとしてはどうかと思つたが、自分が思つたギャグを分かつて  
もらひえず、説明するのと同じ  
滑るとかそういうのならまだしも、そもそも理解されていないのだ  
すゞく恥ずかしいし、惨めな気分になる」とは田に見えていた

が  
・  
・  
・  
一夏としては、鈴のその態度の意味がまったく分からなかつたのだ

「じゃあ、こいつしましょう！来週のクラス対抗戦、私が柳瀬に勝つたら、私に謝りなさい！」

本当なら、一夏が戦つた方がよいのだろうが、彼はクラス代表に非ず  
今週中に決着をつけようにも、明日から調整のためアリーナの使用  
がしばらく禁止となる

しかも今日はもうアリーナの使用時間終了間際  
一番手っ取り早いのはコレだつた

「薰次第のは凄い不満だけど仕方ない。その代わり、薰が勝つた  
ら説明してもらうからな」

「何だ？ やめんなさいやめてやつてしまおうか？」

それは、一夏は親切心でいったのだろうが、挑発に聞こえなくもな

いそれは、鈴をあおる結果となつた

「誰がやめるのよー 馬鹿！朴念仁！アホ！間抜け！」

立て続けに来る罵りに、ついに一夏の何かが切れた

「つむせこな、貧乳

ドガアアアン！

一夏がやばいと思ったころには、部屋全体が揺れるほどの衝撃をともなつた爆発音がした

『貧乳』。それは、鈴の心の琴線に触れる禁忌の言葉  
彼女だつて女の子。やっぱり一番のコンプレックスなのだと冗談抜きで鬼のようだった

特殊合金製の壁が、三十センチほどくこんでいる  
そして激しく、静かに立つ鈴は、部分展開したTJSの装甲もあって、冗談抜きで鬼のようだった

「・・・ちょっと手加減して当たつてやれつと思つたけど止めよ、全力で潰しに行く！」

そういつて、鈴は一夏が謝る隙をとらずに、出て行った

「一夏」

「・・・何だ？」

「最低」

「つづ・・・」

そこには、心が折れそうになつた一夏がいた

「薰は無事に生きて帰ることができるのだ」つか

そして、迎えたクラス対抗戦

「はあ・・・・。なんつーか、お前は話を『じりせらる』との天才だな  
「すまん・・・・」

事情を聞いた俺は、そう言わずにはいられなかつた  
しかも、俺は知らない所で巻き込まれていた

「・・・まあ、仕方がないか。で、『酢豚を食べさせむ』事の意味  
は分かつたのか?」  
「全然わかんねえよ。説明してくれ」

ここまでの時間、考へても分からぬほど君はバカなのか?織斑一  
夏クンよ

それとも、結局自分で考へることを放棄しちまつたのかな?ん?

「説明しちまつのは簡単だけど、それじゃ意味がないんだよ」

『マスター、時間だよ。こーじ?』

「ん。そつだな……じゃあ一夏、俺に期待しないで謝る練習して

おいでくれ」

「お、おう……」

頭を抱えて考へ出す一夏

「先週、篠さんがあつしゃつていたことを聞く限り、彼女のEVAはおそらく一夏さんと同じ近距離格闘型。距離を取つて射撃ですわよ」

「了解だ。・・・セシリ亞」

「なんですか?」

「今日までありがとな」

「えつ・・・」

『発進するよ!』

「おう、それじゃ、行つてくるわ

「あ、あの・・・」

ハツチが開き、EVAが押し出される

すぐに視界は開け、センサーはアリーナの観客を映す

超満員のアリーナの客席ギャラリー

中には、階段や通路に立つて見てくる子もいた

「はは、俺たち人氣者だな

『だねえ。恥かかないよつにしないとな

「おうつ

少し進むと、そこには、すでに凰がいた

「準備はいい？それじゃいくよっ！」

「こいやあ！」

『敵I S《甲龍》・・・解析開始！』

こうして、前口上もなしにクラス対抗戦の火蓋は切って落とされた

## 酢豚とクラス対抗戦（後書き）

ところ訳で、次は鈴との戦いです

・・・そろそろ一巻の内容も終わりそつなんですが、閑話を挟むか  
どうか考えています

一夏▽△薰とか、薰とセシリ亞の絡みとか

でも閑話挟もうとするが確実にペース崩れるしなあ・・・

どうしましょひへ

## 招かれたる客

「やるじゃえねえか・・・」

「代表候補生をなめないでよつー」

試合は甲龍の有利に動く

射撃しよつにも衝撃砲《龍砲》による《見えない砲弾》により阻まれる

近距離戦闘は出力・技術共にあちらの方が断然上  
衝撃砲の届かない間合いに行こうにも付かず離れず、衝撃砲の射程  
を常に保つてくる

アルが解析にかかりきりなので、ロックオンやハイパーセンサー等  
の自動測量以外全てマニコアル操作  
つまり、今の俺にはビット<sup>トリックスター</sup>を操作しながら移動などは出来ないので  
ある

どうじょつもないとまさにこのことか

今は反撃を諦め、アルの解析が終わるまで粘ることにした  
セシリ亞にならつたISの基礎移動術をフルに使って避けまくる

衝撃砲の特徴はアルによつて隨時送られてくる  
空間自体に圧力をかけ砲身を生成。余つたエネルギーでそれ自体を  
砲弾として打ち出す  
故に砲弾は不可視なのだ

そして、その生成機<sup>ジェネレーター</sup>は球形。背中に回り込もうが、振り返ること  
なく撃ちこんでくる

大気の揺らぎを解析の片手間にアルに計測してもらっているが、後手に回つてゐる感が否めない  
反撃に転じるタイミングが訪れない

「逃げてばかりじゃ、勝てないわよっ！」

「つるせつ！秘策があるんだよ！もつちゅうとしたら見せてやるから待つてな！」

完全に他力本願だがな！

「へえ・・・面白いわね！じゃあ耐えきつて見せなさい！」

攻撃がさらに苛烈になる  
どうやってこの攻撃を・・・

ズドオオオオオオオオオン！

俺の思考は、そんな爆音に遮られた  
明らかに、衝撃砲の物と違う

「は？」

「つ！柳瀬！試合は中止！すぐにピットに戻つて！」

「え？・・・え？」

『解析中断・・・マスター！アリーナに所属不明のEVAが乱入！ボクらロックされてるよ！』

「はあ！？」

解析が終わったのか、アルがそんな警戒を叫ぶ  
中央からはもくもくと土煙<sup>アラート</sup>が上がっている

「えっと・・・アリーナのシールドってたしか・・・」

『ISのシールドバリアと同じ。それを貫通するほどの出力を持つ  
た機体が、ボクらをロックしている』

『つまり、柳瀬ピーンチーという状況か』

『バカ言つてる場合じゃないよ！』

すいません

「はやく！アンタはピットに戻つてなさい！」

『どうするの？鈴ちゃんの言つとおり、ピットに戻る？』

「・・・いや、背中見せたら狙い撃ちにされるだろ？危なっかしい

『そうだね。それじゃ、叩くの？』

「それしか、ないんじゃないの？！？』

土煙をかき消そうとするかのように、撃ちこまれるビーム  
避けて発射先を見れば、そこにあつたのは手が以上に長い、異形の  
ISだった

灰色の『全身装甲』<sup>フル・スキン</sup>、足の爪先よりも長い手、複眼式のカメラアイ

ISはシールドバリアの関係上、甲冑のような、全身を覆う装甲を  
必要としない

動きやすくするために、どこかしらに肌の露出があるものなのだ

つまりすべてが異形。ISは人が乗っているはずなのに、人ではな  
いよう

ボ一ツと立つている姿は、『人形』のような印象を与える

「ほひ、わつあと逃げなさいー。」

「・・・お前はどうすんだ?」

「あたしが時間を稼ぐ! だからあんたは・・・」「逃避してたら狙い撃ちにされるだろ、あれ? つづーか、女置いて逃げられつかよ!」

「弱いやつは引っ込んでなむー。」

ムカア!

「弱かるうが、尻尾巻いて逃げる気はねえよー。」

「はあ!? 何それ! ・・・だいたい、こんな異常事態、すぐに先生が来て收拾!」

『マスター! 喋つてないで! 敵の攻撃がくるよー。』

「まじか! ええい! わつあと動け!」

寄つて来ていた凰のI-Uをビツく

「わやつー何・・・」

瞬間、凰と俺の間を太めのビームが貫く  
ちゃんと避けたのに、すごい熱だ

ひょっとしなくとも、セシリアのビームよりすぐえんじゃねえ?

「機体、溶けねえよな?」

『もちろん。ボクはそんなにヤフじやないよ?』  
「ならオッケーだ」

誰だか知らないが、先に手を出したのは向こう  
なら交渉はムダなんだろうな。戦うしかない

「柳瀬くん！鳳さん！今すぐアリーナを脱出してください。先生たちで制圧に行きます！」

「聞こえねえ。なあ？鳳？」

「そうね。それに、あたしたちが退いたら観客の皆が危ないわ」

「あいつも、逃がす気は無いみたいだしな」

わっせからロジックオンのアラートが止まらない

「アル、アラート止め。わっせー」

『うる』

これでよし

「そんじゃ、やりますか！」

「柳瀬！足引つ張んないでよー。」

「ついで、招かれた時の戦闘が始まった

「もしもし柳瀬くん？！鳳さんもー聞いてますーっー？」

ISのプライベートチャンネルは声を出す必要は無い  
だが、そんなことを失念するぐらい、今の真耶は焦っていた

「本人たちがやりたいと言つてゐるのだ。やうせでやつてもよからう」

「織斑先生！何をのんきな事を言つてるんですか！？」

「山田先生、糖分がたりてないからイライラするんだ。コーヒーでも飲んで落ちつけ」

そうこつて千冬は、コーヒーを真耶に差し出す

「あ、ありがとうございます・・・」

真耶はちびちびと飲み始める

落ちついてきたところを見計らつて、千冬は話し始めた

「・・・現状の確認だ。現在アリーナの遮断シールドはレベル4。しかも、扉は全部ロックされている」

「は、はい。・・・おそらく、あのHSの仕業ですね。今3年生の精鋭たちが必死にシステムクラッシュをかけています。ですが・・・それも難航しているようです」

「それが終了次第、我々が突入、制圧。・・・といつ手筈だつたなどちらにしろ、それまではあの一人に何とか耐えてもりうしかない訳なのだろう？」

「うつ・・・それもそうですね。でも柳瀬君は初心者ですよ？大丈夫なんですか？」

「なに、凰がいるさ。それに、オルコットが移動の基礎を教えていた。闘えなくても、生き残ることは出来るだろ」

そう話しこゑでいた千冬と真耶は、ふとあたりを見る

「あれ？ そういうえば織斑くんたちは・・・」

一緒に観戦していた、一夏、セシリア、篠の三名が、ビリにもいない

「・・・あいつらは」

千冬は一瞬、頭の痛くなる思いがしたが、すぐに視線が鋭いものへと変え、カメラに映る『侵入者』に向ける

「くそがつ！」

「じれつたいわね！」

フルメンで狙い、ビームを打ち出しても、侵入者は異常なほど速度でかわす

そこに凰が見えない衝撃を放つも、巨大な腕で叩き落とす

『ノーナラ・・・』

アルが、『体勢上避けられない位置』からトリックスターで攻撃しても、人と思えない柔軟な動きでかわす

真正面から撃てば背中をほぼ九十度曲げてかわす。マックスか

そしてそのまま突っ込んでくる

コマのようにぶんぶんと腕をでたらめに振り回し、ビームを放つてくる

距離を取ろうにも、相手のスラスターの出力が異常で、それを許さない

本日一回田の、どうしようもない状態

今は引ひつけて、観客席に乱射しないよつてしている

どつも、IJの時の射程はさつきのビームよつずつと短いよつだ

「・・・アル、エネルギー残量はどれくらい?」

『100くらい。もう少しこけるよ』

ボディは所々、損壊しだしている

損壊レベルBと言つたところだろうか

「鳳、エネルギー残量は?」

「180くらいよ」

やつぱり俺よりも多く残つて  
いる  
そして損壊箇所は俺よりも少ない

『ねえマスター。ボク、ちょっと気になつたことがあるんだ』

「なんだ?言つてみる」

『うん。それがね、あのIJから生体反応を感じないんだ』

「はあ?」

生体反応がないつてことは、無人機つてことだろ?

IJは人が乗り込み操作するもの。人なしでは絶対に動かない  
だから、それはあり得ない訳で・・・

『でもね、何度調べてみても搭乗者の名前も、反応も出てこないん  
だ』

「むう・・・」

誰かいつてたな。あり得ないことはあり得ない。常識にとらわれて

いては、目の前の眞実を見逃す  
無人ＥＳの作成に成功してたつて、國が黙らせておけばいいんだも  
んな

「なら・・・凰！」

「なによ！」

「アレ『無人機』かもしんない！」

「はあ？ そんなことありえないわよ！ だつてＥＳは人が乗らなきゃ・  
・・」

「俺もそう思う！ でもアルが無人機だつていつてる！」

「アルつて誰よ！ ・・でも、そいつられてみると、妙に機械じみ  
た動きをしていたり、私たちの会話に興味があるみたいに攻撃の手  
を止めてるような・・・」

しばらく考えたあと、凰は思考を止めて、こちらを向く

「分かつたわ。じゃあ、アレを無人機だとして戦いましょう。あり  
得ないけどね。でもどうするの？」

「うーん・・・どうしよう？」

『マスター・・・アレ？』

ん？ なんだ？ ・・ああ

「よし、凰。とにかく、いい案思いつくまであいつの氣を引くぞ」  
「結局、何も変わらないんじゃないの・・・」

そして、また動きだす

「・・・アル、プライベートチャンネル開いてくれ」

『いいよ。・・・で、誰に？』

それはな・・・

ここは、アリーナの観客席

ISを纏つた、一組の男女がいた

「で、本当に出来ますの？」

「ああ、『雪片式型』の特殊能力は『バリア無効化攻撃』。アリーナのシールドが、ISのシールドバリアと同じなら多分・・・」

それは一夏とセシリ亞だった

この二人がやるうとしていることは単純明快

道にロックが掛かっているのだったら、そこ以外の道を通ればいい  
雪片式型でアリーナのシールドを破壊。そこから侵入  
先程の侵入者のように、だ

そこから先は、一夏に考えがある

「準備はいいか？」

確認を取ろうとした時、急に回線が開く

『あーあー。織斑一夏に告ぐ』

「あ、薰だ。何？」

『どうせお前のことだ。プライベートチャンネル開けないだろ？か  
ら、一方的に話して、一方的に切る』

「強引な」

『進入したIS、アレはおそらく無人機だ』

「はあっ！？」

『まあ、思つところもあるだろ？が、少なくとも俺たちはアレを無  
人機と仮定して戦うつもりだ。下手な手加減いらないから、全力ぶ  
つけちまえ』

「・・・」

『ああそりそり。こっちに策は無いから、あとはお前次第だ。俺た  
ちのエネルギー残量は200を切つてるからな。しごじつたらお前  
たち一人で教師が来るまでジリ貧戦闘。よろしくな』

そういうて、薰は通信を切る

「準備、よろしくてよ」

「あ、ああ。じゃ、やるべ

一夏はそういうて、雪片を構え、目を閉じる  
イメージするのは、鋭い斬撃

『エネルギー充填率90% 零落白夜 使用可能』  
雪片が、光を放つ

「アアツ！」

シールドに袈裟切りを放つ

すると、ISが一機通れそうな程の穴が出来あがる

「よし、コレでいいな、セシリ亞、頼むっ！」

「セシリ亞、頼むっ！」

「どうなつても知りませんことよー！」

一夏がセシリ亞を背に、あの灰色の侵入者に向く  
ちなみに、完全に真後。背後を取つている

いやあ、アルがいると位置誘導とかやりやすい

『まつとしてないで！動かないように釘をさしておかないと

ウナギを捌く時みたいだな

あれ、活のいいやつが逃げないように首筋あたりに釘うつんだけ  
そんなことほともかく、一夏達に侵入者が気付き、すぐに動こうと  
する

「させつかよー」「させないわよー」

射撃と、衝撃を同時に繰り出す

衝撃を叩き落とすのに、足が止まり、そこごビームが入る  
受け止められはしたもの、隙を作るには充分だった

一夏の背中から、光が奔る

『イグニッショングースト・・・』

『**瞬時加速**』

イグニッショングースト

スラスター翼よりエネルギーを放出、それをまた内部に取り込み、圧縮して放出。その時得られる慣性で、一気に加速する。それは外部からのエネルギーでもよいらしい。そして、得る慣性はエネルギーに比例する

つまり何が言いたいかつていうとだ

「「いけええつ！」」

「オオオオオツ！」

セシリ亞のビームの一斉射撃を背中にくらつた一夏が、ハイパー・センサーでもギリギリ捉えられるかどうかつてくらいの速度で侵入者に急接近

『『零落白夜』。白式の単一仕様能力。全てのエネルギーによる攻撃を書き消す、一撃必殺の大技・・・』

「こないだつてたやつか」

『本氣で撃ちこむと、HS搭乗者』と真つ一本にしちゃうくらいの威力があるんだって』

白式が教えてくれたよ。アルはそう続ける

背後から繰り出されたのでは、無人機だらう何だらうが対応できる訳もなく、一閃

固そうだつた装甲は、胴と断面より下にあつた右腕の方方が斬り飛ばされる

「アル

『うん、ちゃんと位置にあるよ』  
「じゃあ、<sup>ファイバー</sup>射撃！』

切り飛ばされた上半身に向かつて、侵入者が一夏達に気が向いた隙に、後ろに回しておいたトリックスターその射撃は、スラスターを撃ち抜いた

侵入者は、羽をもがれた蝶のように、力なく落ちていった

「一夏。お疲れさん」

「おう、何にしてもコレで終わ

『敵のIS再起動を確認！マスター！』

叫ぶようにアルがそういう

周りにまた緊張が走る

最大出力モードと思わしき左腕から、閃光がほとばしむ

向かつた先は　白式

ビームを確認した瞬間、何を思ったのか白式はビームに突っ込んだ

侵入者のビーム照射が終わったとき、そこにあつたのは、頭を潰された侵入者と、うつ伏せになつて動かない白式だった

## 招かれたる客（後書き）

というわけで、黒い無人機との対戦でした

一応次で一巻の内容はおしまいです

・・・あまり話に変化がない気がする

## HΠローグ・一夏と算 強さと笑顔

あのあと、一夏は保健室へと運ばれた  
一時は死んだかと思ったが、なんてことない

全身打撲だけ。命に別状なし  
セシリ亞のビームを背中にもろに受けたのに、アリーナのシールド  
を壊すほどのビームに突っ込んだのに、それだけ

『白式が一夏くんを護ったのかもね』

『案外、白式も一夏に惚れてたりしてな』

『そうかもね・・・』

『ん?どうした?』

『ううん。白式が惚れてても、一夏くん、鈍感だから・・・』  
『なるほどね。そう考えると切ねぇなあ・・・』

そんな話をしてたら、つまづきりで見ていた織斑先生が出てきた

「田を覚ましたぞ。よかつたら見てやつてくれ」

「ありがとうございます」

織斑先生と入れ違いで、保健室に入る  
半開きだったカーテンを開ける

「よう。薰か」

「よ、体の調子はどうだ?」

「数日は地獄だつてや」

「まあ、頑張れ。つづーかお前はゲームに突っ込んで死なないとかしぶといな。黒光りするあれか？」

「俺はGと一緒に・・・」

まあさすがに、友人を本気でG扱いすることは無いぞ

「冗談冗談。・・・ありがとな。お前があの一撃を決めてなけりや、俺も凰もエネルギー切れで大ピンチだつたろ?」

「そんな大げさな」

「大げさなもんか。・・・まあ、いま言いたいことはそれだけだ。それよりもゆっくり休めよな。それじゃあなー」

「ああ」

そういうて、俺は保健室を出る  
今度は、篠ノ之と入れ違いになつた

『ところでマスター、黒光りするGってなに?』

「・・・世の中にはね、知らなくてもいいことだつてあるんだよ」

たぶん、教えたところであの全身にぶわっと寒気が来る感じは分からぬと思う

『えーっ! ボクね、世の中の全部のことが知りたいんだ!』

「おいおい、欲張りだな」

『うん! 何だか知ることが楽しくなっちゃつて! IS以外の、他のものもいろいろ知りたいんだ!』

「へえー・・・感心するわ」

『でしょー! えへへ・・・』

「で、ではなー！」

そういうて、早足で保健室を出る

「はあ・・・」

篠ノ之箇はブルーな気分になっていた

『戦っている時のお前は、格好よかつた』

その言葉一つ言えない自分が、情けなかつた

（だいたい！私だって一緒に戦いたかったのだ！なのに・・・）

なのに、戦うためのIISがなかつた

専用機さえあれば・・・と、最近思い始めている彼女

（専用機さえあれば、一夏と一緒になのに・・・）

イギリス代表候補生のセシリアに、最近来た一夏曰く、セカンド幼

馴染の鈴

彼女たちも専用機を持っている

それに、一夏も持つている

持つてないのは自分だけ

そのこと、彼女はちゅうとした寂しさと、悔しさを感じていた

（やはり『あの人』に頼むしかないのだらうか・・・）

でもできれば、『あの人』の力は借りたくない  
そうやって、いつ終わるとも分からぬ思考のなかに、彼女は陥っていた

「あれ、篠ノ之じゃん。何してんの？」

「ん？・・・ああ、柳瀬か。お前これ何でここに居るんだ？」

「いやね、職員室に呼び出されてさ。『ジジヨーチヨーシュ』だと

よ

「ふうん・・・」

柳瀬薰

篠が彼を見るときはいつも一夏の近くに居る

「ところでさ、篠ノ之」

「なんだ？」

「・・・一夏のこと、『好き』なのか？」

少し前から、彼が気になっていた事を本人に訊いてみる  
彼自身は、こうするのが一番正確で間違いないと思つていい  
子供じみていくとは思うが、彼だって十五歳。そういう話に興味がない訳がない訳で

「なつ・・・・ベ、別にそういう訳じゃ・・・」

否定をする篠だが、その顔は赤く、説得力のないものだった

「ふーん。ならいいや。じゃ」

「お、おう

そうこうで、薰は筈とすれ違つ

「……早に一步を踏み出わないと、後悔するよ?」

すれ違いざまに、その言葉を残して

「・・・」

筈は、黙つてそれを見送る

「・・・誰もが皆、お前みたいではないのだぞ・・・」

その言葉は、筈の心に残る  
急に、空が曇りだす

ここはIS学園の地下50mにある、関係者のなかでも選ばれた者  
しか入れない隠された空間

あの侵入者も機能停止後すぐに運ばれて、解析がなされた  
解析の結果、侵入者は『無人機』だったことが判明

ISの分野において、まだ開発されていないとされている遠隔操作リモートコントロール  
か、独立稼働スタンダードローンの技術が、謎のISに使われていたことになる  
すぐさま学園関係者に命令が敷かれたことを考えると、それが

どれだけの重大な事態であったのか、想像に難くない

「…………」

織斑千冬は、またここに来ていた

彼女が見ているのは、柳瀬薰と、その搭乗IS、アルカナのクラス代表決定戦の時のものだった  
ただの粘土人形のようだった装甲が、光を放つたかと思うとブルーティアーズに変化した

「織斑先生。あのISについてなのですが……」「どうぞ」

山田真耶が入室する

「柳瀬君の乗る、ISなのですが、登録されていないコアが使われている可能性があるようです」

ISというのは世界に467個しかコアがない  
つまり、ISは同時に467機しか存在できない  
そしてその個体数は、全て所在とともに管理されている

それはIS学園にあるISのコアも例外ではない  
だが実際にIS学園に存在するコアの数と、登録されているコアの総数が合わないので

存在するコアと、登録されているコアとの数の差は1

謎の能力も含め、真耶はアルカナがそうではないかとにらんでいる

「・・・」

「まだ調査は続いているが、一度柳瀬君に頼んでEISそのものをじっくり調べてみる必要があると思います」

「やうか。引き続き頑張ってくれ。それと、そのことは口外するなよ」

「はい」

そういうて、真耶は退出する

登録されていないといふ」とは、新規に作られたコアであるということだ

そして、EISのコアを作れるのは、今のところただ一人

「・・・まつたく、お前は何がしたいんだ?」

織斑千冬は、その場に居ない友人に、そう問い合わせた  
その声は部屋のなかに消え、外に漏れることは無かつた

ここは一夏と薰の部屋

事情聴取と保健室から解放された一人は、のんびりくつろいでいた

「やうこやわあ。凰との喧嘩はどうなったの?」

「ん？ああ・・・なんか別にいって。で、酢豚の話、タダメシくわせてやるっていう話だそうだ。その方が上達するからって」

・・・じゃあ結局一体なんだつたんだ？あの怒り具合は

「いやあ、起きた時に鈴の顔が間近にあつた時はびっくりした・・・

「

・・・？

それってひょっとしてキス・・・

まあいいや。もつあのギスギスした感じから解放されるだけでも良しとしよう

でめたしでめたし

『それを言うならめでたしめでたしだよ』

それもそうだな

結局、リーグマッチは侵入者により中止

あの侵入者については、『無人機』か『有人機』かを告げられぬまま、かん口令が敷かれた

特に戦つた俺たちには、宣誓書まで書かせる始末

学園の対応だけでも、結局はどうちらだったのか想像に難くない

正直どっちでもいいというか、アルがずっと『アレは絶対無人機だつた・・・でもだつたら、どうやって動かしてたんだろう？』とか言つてるから、無人機で間違いないと思う

お前、その構造解析してEIS型のビットとか作る気なのか？

『『I Sは質量的に無理だけビ、ビットよりも大きくて複雑なものが動かせるようになるかも・・・』』  
ふーん・・・

アルはともかく、俺は一夏にちょっと訊きたい事があった

「なあ一夏。お前の思う『強さ』ってなんなのよ  
「はあ？ こきなり何だよ・・・」  
「いやあね。いきなりこんなこと言われても、中一臭いとは思つだろうけどさ。I Sという、ほとんど絶対的な『強さ』を持つてしまつた以上、そういうのをハッキリと教えておくことは重要だと、俺は思つてた」

自分を見失つたまま、力に使われるような関係だけは避けたい  
それはとても苦しいだろうし、何よりアルに申し訳ない  
そう思つ

「そりだな・・・『強さ』つづーのは心の在り処。己の拠所。つて  
といひかな？」

「ふむ・・・どうして？」

「だつてそりだろ？自分がどうしたいかもわからぬ一奴は、強い弱い以前に歩き方を知らないだろ」

「で、早い話が？」

「やりたいことはやつたもん勝ち。やりたいよつてやらなきや、それは自分の人生じゃないだろ？」

・・・なかなか、大人びたことを言つもんだな

なにか強烈な経験でもあつたのか？

『『強烈な経験は早熟をうながす』なんて、どこかで聞いたことがある気がしなくもないぞ

ちなみに俺はそういうの一切皆無

普通の中学生だったんだから、やうこいつのは期待しないでほしい

「つまりとこいの、『強さ』ひとつのは自分がやりたいことやるための『手段』ってことか?『目的』ではなく?」

「まあ、そんな感じじゃないかな?」

「なるほどね。で、お前が強くなつてやりたいこといつて?」

「・・・俺は、俺に関わる人を皆を『守る』ことかな?ただ誰かのために戦つてみたいっていうか・・・」

「結構ハードル高いな。それ」

「あはは」

だつてよ、アル

『強さは田的じゃない、か・・・なら、ボクは向のための手段にしよつかない?』

もひ、お前は答えあるじやん

『え?』

『叡智の園への道』を切り拓くために強くなる、コレでいいじゃん『なるほど・・・』

「・・・それで、薫にとつての『強さ』ってのは?」

「それが思いつかないから、いつもやつてお前に聞いたんじゃないかな?」

「あ、なるほど」

ほんと、変に抜けている

「やうだな・・・強さの答えはまだだけど、一夏の案に乗っ取った、

『強くなつてやりたいこと』なら出来た気がする」

「へえ・・・なに?」

「『助ける』こと。いや、誰かが傷ついても、挫けそうなときに黙つて支えてやれたら、男としてかつっこいじやん。で、そのままそいつを『守る』みたいな・・・」

「俺と一緒にじやん」

「あ、あくまでもやりたいことの一つを」

「思いつかなかつた訳じゃないんだからなー!」

「一つついでには、他にもやりたいことあんの?」

「んー・・・やうだなあ

ふと、ベットの近くに置いてある写真立てを見る  
それは、一年の夏に母の実家で撮った家族写真

親父とお袋にみさと

ばあちゃんと一緒にじやん

それに、俺

みんな幸せそうに笑つてている

「・・・『笑う』ため。自分が強けりや、自信が生まれる。自信がありや、いつでも笑つてられる。俺が笑つていりや、きっと周りも一緒になつて笑いだす。で、その笑顔を『守る』みたいな・・・」

「やっぱり俺と一緒にじやん」

「つるさいなあ。とにかく、『自分より弱い人のためにありたい』

つてことだよ

「それが、薫の『強さ』じゃないのか?」

「あ・・・」

結局、言葉をいくら変えても、あるのは「一夏」と回り、「やる」といふことらしい

何も知らないただの学生の俺の誓いは、ここにいつとちがつてどれだけ脆く、崩れやすいのかは知らない

或いは、一夏のもろく、中身の伴わないものなのかもしれない  
だけど、せめて家族の笑つていられる場所になつてやるぐらいにはなりたいと思う

ノンノン

ちよつと考えがまとまつたころに、ノックが響く

「お、一夏。お密さんだぞ」

「……何で俺？」

「バーか。この学園での部屋にノックするのは、お前に用がある  
奴だけだよ。悲しいことにな」

「ふーん……」

ドンドンー

「お、おい、拳に変わつたぞ。ドアが壊れる前にこいつでこ」

「お、おひ」

そんな話をしてから、一夏は扉を開ける

「あ、簞？」

ハツキリ言つて、この部屋の扉を叩くのは、今のところ鳳か篠ノ木、  
それにセシリ亞の三人に一人

理由はお察しあげたい

「…………」

篠ノ之は黙つたままだ

「どうかしたのか？ まあ、とつあえず部屋に入れよ

「いや、ここでいい

「そうか

「そうだ

「…………」

「…………」

「…………何しに来たんだ？

「…………篠、用がないなら、俺たちはもう寝るぞ

「用ないうある！」

ビックリした……鬼寮長に怒られてもしらねえぞ  
思いだしたら、出席簿で叩かれたところが痛くなってきた

「う、来月のトーナメントだが……」

篠ノ之は、言葉を切りながら、ゆっくり喋り始める

セコイ一回切るやして……

「わ、私が優勝したら」

「つ、付き合いつもりー」

誰にかは分からぬ、宣戦布告のようなそのセリフ  
聞いた時、俺は思わず笑みをこぼしていた

少年の誓いと、少女が踏み出した一步

それは、とてもちっぽけな、小さなものかもしけないが、それが『  
種』となり、いつか大輪の花を咲かせることを願つて・・・

## HΠローグ・一夏と算 強さと笑顔（後書き）

とこうわけで、一巻の内容はこれにて終了です。  
・・・なんて言つか、頑張つて綺麗にまとめようと思つたら撃沈しました。・・。

一巻の内容はグダグダですが一応暴走のあたりまでは出来てます。  
グダグダですが  
ちょっと間を開けてから投稿をしようかと考えています。＝曰く＝  
い

## プロローグ・懇いの時間（前書き）

とこう訳で、早速第一部に入ります！

それと、つらつらと自分の書きたいように書いているだけのこれですが、気がつけば2万PVを超えていました。

まだまだ稚拙で、所々意味不明、一貫しない点などが出てくるかもしれませんが、これからも宜しくお願ひします

では、本編をどうぞ

## プロローグ・憩いの時間

六月頭の日曜日

俺は一度家に帰つて来ていた  
ところから今まで忙しくて、やつと帰つてこれたと言つた方がいい  
かも知れない  
まあ、家でくつねぎたいなつていうのが本音だ

「それで、学園生活の方はどうなんだ？」

「んー・・・ぼちぼちだなあ」

「うう・・・」

さすがに、いきなりIIS戦で負けたとかは言いたくない  
凰との試合はかん口令だし、思えば話せるよつなモノがない

「つーか今話しかけてくんなよ。この映画今いじとこりじゃないか  
「つれねえ」というなよ」

今見ている映画は『死神の断罪4』。死神が悪行を行つた人間を断罪してゆくという内容で、タイトルからも極めて分かりやすい、シリーズ第4作目

分かりやすいことはとてもいいことだと、お兄さんは思つ

映画自体は、死神が迫つてゐるという《対象》ターゲットが感じる恐怖や、逃げられないと悟つた時の対象の絶望などがすくリアルに描写され

ていて面白い

逃げる対象。<sup>ターゲット</sup>死神は対象の足を痩せこけた手に持ったクロスボウで射抜き、痛みに絶叫を上げている対象<sup>えもの</sup>に、ゆっくり近づいてゆく必死に逃げようとするが、足を射抜かれた痛みで動けない

ゆっくり、ゆっくりと近づいてくる死神

必死に叫びをあげ、来ない助けを求める対象

そして、死神の鎌で断頭。断罪終了

その時に移される死神の、紅く光る瞳のアップ（次はお前だ、的な  
ドヤ顔）は何度見ても恐怖を感じるほどだ

ほら、今も

バアアン！

「『みぎやあああつ！…』」

「つおつ」

女の子の悲鳴が聞こえる・・・っておかしいな。今回のターゲット  
は40過ぎの男だったはず・・・

ああ、みさとか

親父の影に隠れて死神に震えている

・・・ちょっとかわいそつだ

「・・・みさとをほづつておいていいの?」

「いいんじやないの?本人が『大丈夫だよ!』つていってたからな

でも小学生にはきついんじやないのかな?これ

『うう・・・マスター。止めてよお』

いやだ、止めない。コレも学びの一環だよ

『こんなの知らなくたって・・・』

そういうや、I-S学園についてから変わったことが一つあつたつけ?

『アル』。俺のI-Sであるアルカナの『コアの意識』だそうだ  
I-Sの意識というものは通常コアの深層にいるらしい  
だがどういう原理かは知らないが、こいつはそれが人格を伴つて顕  
在化しているらしい

知識欲豊富な知りたがりで、この世のすべてを知りたいとか  
彼(彼女?)の声は俺にしか聞こえないため、その存在を他者に証  
明する術は今のところ無い  
ちなみに織斑先生に話してみたが、にわかには信じがたいと言つた  
ので、親父たちにはいっていない

戦闘ではデュメスやケディムのハのように、機体の姿勢調節  
やビット操作など、俺のいたらない部分を補ってくれている

「それよりも、H.S学園への招待券つてないのか?」

「ねえよバカ親父。それに、もしあつてもお前にほやりん」

「ケチくせこ」とこうんじゅねえよ。俺の銃器「コレクション」持つて飛びこんじまつわ」

「不審者とみなされて逮捕、そのまま独房入りなんてパターンだけはやめてくれよ」

とこりか、そのケースしか思い浮かばないぞ

「それにH.Sを使わなくとも、武術とかそんなん習つてたりするのが多いからあつといつ間にやられるわ。多分」

「ちえっ・・・」

「そうね?。わざわざ学園について聞いて来たよな

「おー、で、どうだ?彼女イナイ歴=年齢に終止符はつてやうかい?」

「そこはまつとけ。・・・まあ、女子三人寄れば姦しことは言つたもんだ。ついていくのがやつとつていうか

「爺みたいな事を言つこんじゅねえよ」

「ひむきー

「まああれだ、彼女ができるかどうかなど、環境による。環境は、自分で動かなければ変わらないぞ?」

「なんで彼女作りが前提なんだよ」

「だつてほしいだろ?」

「そりや、まあ・・・」

「じゃあ頑張んな」

そのあの部屋のなかは、不安の渦のなかに誘つよつた死神のテー  
マと、みせと（トアル）の悲鳴が聞こえるだけになつた

「お、もう昼時か。みせと、薰、玉ねぎー」

「はーー」

親父は料理ができない

だから俺やみせとが休みの日の昼飯はほとんどが外食  
あとは、時々お袋を作るぐらいだ

『お前らに食わせるにはまだ早い』とか何とか言つていたから、練  
習はしているんだろうな

で、移動中

「親父、 いーとこ知つてんのか?」

俺たち柳瀬家は、俺のHIS学園編入とお袋の転勤によつてこの町に  
引っ越してきたため、この辺の地理はあまり詳しくない  
親父もしかりだと思つていたが、どうも昼間から色々回つてこるよ  
うで迷うことなく進んでいく

「ん? もちろんだとも。いじだよ」

そこには、看板に『五反田食堂』と書かている食堂だった

「『早い!』『安い!』『うまい!』の三拍子が揃っている上、『近い』という、まさに四拍子揃った食堂なのだよ」

見つけて以来、ちょくちょくお世話になつてゐる」と

「あ、看板娘が『可愛い』で五拍子だな。うんうん」

どうせ評価ははまる100点のようだ  
店に入り、空いている席につく

「で、何食べる?」

「じゃあ、俺は焼き魚定食」

「みさとは力ボチャ煮定食ー」

「じゃあ俺は業火野菜炒め定食ーつで。すいませーん」

そう、親父が呼ぶと、お店の人であろうつ女の人人が、注文を取りに来た

「焼き魚定食と、力ボチャ煮定食。それに業火野菜炒め定食を一つ  
ずつで」

「はーい。いつもありがとうございます」

にじても・・・

「看板・・・娘?」

いや、綺麗だけどさ。綺麗だけど娘というのは少し無理がある  
どつかつていうと、美人女将とかそういう感じじゃん、あの人は

「いや、あの人じゃないよ。眞の看板娘は・・・」

そういうて、親父はあたりを見回す  
すぐに田標のものが見つかったのか、動きをやめる

「あの子だよ。蘭ちゃんつてこいつのこと

そつ言つた方向を見てみると、中学生だらつか。女の子が匂いはん  
と一緒に座つていた

六月に入つてから急に暑くなつたためか、白い半袖のワンピースを  
着ている

頭に巻いたバンダナ？はトレーデマークといふことなのだらけ。普  
通に似合つ

「へえ。可愛こじやん」

「だろひ、常連のなかにはファンクラブ同盟を作つなんて動きも  
あるらしこぞ」

「ふーん・・・」

「おまちどうりまどーす」

「お、来たな。じゃあ作つてもうつたことに感謝しながら、ゆつく  
り食べよう」

「「はーい。」「いただきまーす」」

もぐもぐ

もきゅもきゅ

むしゃむしゃ

「こ」の焼き魚いいな。『こ』飯が進むな

「このかぼちや、甘くておいしー！」

「こ」の味はじょひむか。ほかには・・・ショウガか？

三者三様、色々な食べ方をする俺たち  
家族といえど、さすがに食べ方まで同じなどとこいつは無い

ガタン！

「お、お前、何言つて」

急に、椅子の倒れる音がしたため、反射的に俺たちはさつちを向く

スコーン！

振り向いたときには、すでに声の主は倒れていた  
近くにオタマが落ちていて、頭を押さえているところから察する、  
オタマがドタマにクリーンヒットしたのだろう

俺達はどうあえず見なかつたことにして、食事に戻る  
こうこうの意思疎通はさすが家族と言つべきか

もぐもぐ  
もぐもぐ  
もじゅもじゅ

「・・・一夏！お前すぐに彼女作れ！今月以内に！」

ん・・・一夏？何故ここで奴の名が？

そう思つてまた声の主の方を見てみると  
そこには、一夏がいた

「あら、一夏？おー・・・・」

「お兄」

わつき親父が教えてくれた看板娘、蘭ちゃんがそんなことを言つて、  
わつき倒れていた奴に近づく  
なるほど、お兄さんだったのか。兄妹して頭のバンダナ？が目印つ  
てことか

ぐわしつ！

そのまま、お兄さんが振りむいた瞬間に蘭ちゃんはアイアンクローケをかます

口封じだらうか。というか、なんか妙に空気が冷えた感じがするんだが、俺だけ？

お兄と呼ばれた男は、ただただ必死にうなずいているだけだった  
・・・粹がつて夫婦喧嘩してみたけど、まったく頭の上がらなかつた時の親父にそっくりだ

「『』ひそりそまーつ！」

「『』ひになりました」

『食べ終わつてないの、マスターだけだよ？』  
「げえつ！？わきせと食わないと・・・・」

がつがつがつがつがつがつがつがつ

結局、一夏にコンタクトをとることは出来なかつた  
といふか、入る余地がなかつた

『あー・・・怖かつた・・・』  
「つたく、ビビり過ぎだつての」

学園への帰り道、震えたような声でアルが話しかけて来る  
アルがビビつているのは、午前中に見た『死神の断罪』だろう  
時間が結構たつていてるといふのに、頭から離れないようだ

『マスターは怖くなかったの?』  
「いやね、実を言つと死神のアップがちょっと怖かつた」  
『だよねー。アレを怖がらない人はいないと思つよ。・・・みさと  
ちゃん、今日眠れるのかな?』  
「あれだ、死神は悪い人のところにしか出ないんだから、みせとの  
ところに出る訳がないだろ? 親父がそういうふうに安心させのつて  
『そういえばお母さんは?』  
「仕事」

今は親父が『主夫』をやつていて、母が働き手なのだ  
何をしているのかはよく分からぬが、日曜出勤があつたり、教師  
とこゝものは忙しいようだつた

ちなみにみさとが生まれるまで共働き。どちらが世話をかちりと話した結果、くじ引で今の役割へと落ちついたのだ

最初は忙しかったようだが、みさとも次第に手がかからなくなり、俺も手伝いするようになったりで、次第に親父は時間にゆとりができてきていた

『といふかお父さん、銃器コレクションとか言つてたけど、なんなもの?』

「Hアガンだ。本物じゃないよ」

ほんで、その暇な時間を使ったのが『銃』。

種類はもとより、射撃の腕前の方もピカ一で、標的がどんなに動いていようが必ず当ってしまう

余談だが祭りの時に、射的屋の店主と、景品を欲しがつてた子供を泣かしていた  
おとなげねえの

『じゃあ今度、銃について教えてもらつたら、博物館の時も色々語つてたし、詳しいんでしょ?』

たしかに、気持ち悪いくらい詳しい

親父の持つてる銃系統の武器に関しての知識を訊いたら、それこそ日が暮れるまで語りだしそうなほどに

「悪くは無いと思うけど、実銃とエアガンは違うだろ?」

『それもそつか。はあ・・・』

結局、セシリアの講義は《クラス対抗戦まで》という期限付きだつたため、対抗戦直前に総仕上げして以降、一夏の方にかかりきりになつていた

「ホイホイとコーチの集まつてへる一夏が羨ましい・・・」

それこそ、渾名をコーチホイホイとでもしたいような  
・・・いや《唐変木オブ唐変木ズ》でいいか

『だよねえ・・・』

「『はあ・・・』『・・・』

どちらからもなく溜息が出てへる俺たち

「・・・よし。一夏にちよつとしたイタズラをしてやるわ」「  
『え? 何するの』

「簡単だ。夜、あいつが寝よつとしだしたときにさつげなくせつぎのホラー映画の続編を流す。それで一夏は眠れなくなる」

『・・・陰湿すぎない? というか、持ってきてたの?』

「おう。またゆつくり見よつと思つてな。それに俺が眠れば、俺に実害は無い」

『いや、そういう問題じやないと・・・』

「大丈夫だ。問題ない」

『・・・すでに失敗しそうなんだけど』

で、その夜

9 : 02 PM

「おーい、一夏。コレ見よつぜ」  
「ん? なにこれ?『死神の断罪5』・・・すげえやな予感しかしないんだけど」  
「とてもハートフルで胸の中が暖かくなる物語だよ」  
「ウソだつ!」  
「まあまあいいから、ピッ」

•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•

バアアアン！

「うああああつー」

1  
:  
3  
2  
A  
M

「ね、眠れねえよ・・・・どうしてくれんだよ薰」  
「知るか・・・・俺も眠れねえ」  
「あの部屋の隅、《何か》がいる気がして仕方な・・・・」  
「やめろ！余計眠れなくなるだろ！ただでさえ目を閉じれば死神が  
浮かんでくるというのに・・・・」  
『「わいみづこわいよう」「わいよう

『ひどいよ・・・』

結局、俺たちは二人(+一機)揃つて寝坊。初夏の青空の下、出席簿の音が鳴り響くのだつた

スッパーン

## プロローグ・懇いの時間（後書き）

ところ訳で、第一部始動のお話でした

久々に登場した兵器オタのお父さんと妹のみさとちやんでした

ちなみに、『死神の断罪』はフィクションであり、実在の人物、名  
称、その他のあらゆるものとは関係ありません。一応言つておきま  
す

## ボーイ ミーツ ボーイズ

「まつたく・・・今日から本格的な操縦訓練を始めるところだ、元のうちはお前らは一人そろつて何をやつてるんだ」

「薰が！」「俺が！」

スッパーン！

「「つてえ・・・・・」

またか・・・しかも、さつきよりも強くはいった・・・  
眠気もばっかり覚めるつてもんだよ。まつたく・・・

「言い訳無用。とつとと席につけ」

言われた通り、席につく

「さて、さつきも言つた通り今日から本格的な操縦訓練を開始する。  
訓練機ではあるがEISを使用しての授業になるため、各人気を引き締めるように」

はーい。と返事が返る

返事を確認してから、織斑先生は続ける

「また、各人のHHS-1が届くまでは、学校指定の物を使うので忘れないよつにな。忘れたものは水着で出てもいい。それすらないものは・・まあ、下着でかまわんだろう」「いや、さすがにそこは構いましょう・・・」

声を出したのは俺だけだったが、きっとクラス皆が思つた事だと思つ  
男が一人もいるのに、下着はまずいだろ。下着は

ちなみに I.S 学園の水着は何を思つたのかスクール水着。紺色のやつ  
アレつて何がいいんだ? 誰か教えてくれ  
目のやり場に困らない・・・つてことでいいのか? いや、逆に困るか

「では山田先生。ホームルームを  
「は、はいっ」

連絡事項が終わり、織斑先生は山田先生にバトンタッチする  
慌ててメガネをかけ直し、ホームルームを始める山田先生

「ええとですね、今日は転校生を紹介しますーしかも一名です!」  
「は?」

「ええええっつー!?」

うわさ好きの十代の女子だが、どうせこの情報は把握していなかつ  
たらしい  
他に噂になることでもあつたのだろうか。しかも、とびきりでっか  
いの

つーかこいつのつて普通分散させるもんだよな?  
というか、凰といい、転校生多いな。I.S 学園

『まあ、施設の関係上しようがないんじゃない? I.S の技術を開示  
しないで試験できる唯一の場所だつていづし』

おお。物知り

『自分の周りの事から、少しずつ知つていかないとね』

そんな掛け合いをアルとしていたら、ドアがひらく

「失礼します」

「…………」

クラスに一人が入ると、さわめきがピタリとやむ

それは仕方がないかもしね。だつて、転校生の一人が

男子だつたんだから

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れな事も多いと思いますが、皆さんよろしくお願ひします」

シャルル・デュノアと名乗つた転校生は、そうにこやかやな笑顔で礼をする

呆気に取られているクラスのメンバー

「お、男……」

誰かがそつとぶやく

「はい。こちらにボクと同じ境遇の人一人もいると聞いて本国より転入を」

輝くような金髪を、後ろで束ねている  
碧眼というんだったか、青い瞳が広い大空を連想させる  
まぶしい笑顔は、彼という人間の印象をよりよいものとしている  
礼儀の良さは、紳士の精神ジョンナルマンだらうか  
纏う空気は暖かく柔らかい、太陽のよう

『貴公子』と言ひ印象を受けるテュノアは、

「きや……」  
「はい？」  
「きやあああああつ……！」  
「うえつ……？」

あつといつ間にクラスの女子の心をつかんだ

あまりの大歎声に思わず耳をふさぐ  
織斑先生と顔合わせした時よりもずっと大きい  
どつから声出してるんだよ。

ああ喉か

「男子！三人目の男子！」  
「しかもうちのクラス！」  
「美形！護つてあげたくなる系の！」

「地球上に生まれてよかつた」

(・・・立場が薄くなつてゆく予感)

うちのクラスの女子は、皆元気だなあ  
ちなみに最後のは俺

「あー。騒ぐな、静かにしろ」

心底めんどくさそうに、織斑先生が制する  
ひょっとして、女子のこうこうテニンショーンは苦手なんだろ？  
俺も得意つてわけではないが

「み、みなさんお静かに。まだ自己紹介は終わってませんから～！」

もう一人の方を忘れていた訳ではない。ただ、デュノアのインパクトが強すぎるのだ

『ISは女性しか動かせない』というルールの、三人目の例外者。  
なんでこんなに例外があるんだよ

実は男でも動かるんじゃないかな？コアが好き嫌いしているだけで  
で、もう一人を見てみると、見た目からして異端といつか・・・

輝くように綺麗な銀髪を、腰近くまでおろしている  
だけど、それは整えているというよりはただ伸ばしているだけ  
左目には眼帯。戦争映画の大佐とかが使つていそうな黒眼帯  
右目にはきれいな紅い瞳。だけどそれは、宝石のよう<sup>ルビー</sup>にただ冷たい  
光を放つだけだ

纏う空氣は、冷たく鋭い氷のよつ

『軍人』という印象を受けるその子は、腕組みしたまま周囲の女子をくだらなそうに見ている

「えーと、名前は・・・」

このどこかピリッとした空気は嫌いだ  
ひょっとしたらこの子はシャイガールなのか?  
口を開かないなら、こいつから訊くべき・・・

ギン!

「つ・・・」

視線で人を殺せるんじゃないかつてぐらいの、鋭い睨み  
ヘビに睨まれたカエルとはこのことか  
結局、俺は黙ってしまう  
何事もなかったかのようにクラス全体を見渡したあと、その子は教室のある一点を見つめる

「・・・挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

やっぱり、織斑先生は織斑教官だったのか  
きちつと居住まいをなおして、異国の中のものであつて敬礼をする彼女は、『軍人』という印象をさらに強くさせる

それに対し、織斑先生はさつきとは違つためんべいくさを感じているようだった

「リリではそう呼ぶな。私はもう教官ではないし、リリではお前も

ただの生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ

「了解しました」

また、ぴつと姿勢をただし、敬礼をする  
間違いなく軍人。もしくは軍事施設関係者

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

「・・・・・」

自分の名前をいつて、また口を開かずボーデヴィッヒ  
もつとなこのかよ、出身国とかさ。アピールポイントとかさ

「質問いいか?」

「・・・なんだ?」

空気がアレだったので、もうちょっと話せりふと思つたら、やつ  
ぱり睨まれる

すくんでしまつのは俺がヘタレだからじやない。あいつが睨みきか  
せすぎなんだ

「しゅ、出身国は?」

「ドイツだ。それが、どうかしたか?」

「いや・・・別に何もないです・・・はい」

時間を取らせてしまつて申し訳ないといつ氣持けになつてくるから  
不思議だ

「・・・・・」  
「・・・・・」  
「あ、あの、以上ですか?」

「以上だ」

ああ、山田先生がボーデヴィッヒの即答に泣きそうだ。先生をいじめてやるなよ。硝子のハートなんだから

『マスター』  
ん？

『あの子、もしかしなくても軍事関係の人でしょ？』

多分な。しかも、ドイツの

『ドイツって確かに、織斑先生が教官として赴任してたなんて話があるよね』

え、そうなの？

『うん。ちょっと調べたら出て来た。それでさ・・・』

・・・なるほど、言いたいことは分かった。お前がどんな調べをしたのかは気になるが、そうだな。頼むだけ頼んでみるか

『うん。そうしてみ』

パシンッ！

急に乾いた音が響く

クラスを見渡せば、頬を抑えた一夏の前にボーデヴィッヒが手を振り切った形で立っていた

「私は認めない。お前があの人の弟であるなど、認めるものか」

そんな事を言われて怒らない人間はない  
だけど、混乱したのである。一夏が怒るまでには少し間があった

「こきなり何しやがるー。」

「ふん・・・」

その激昂を無視して、ボーデヴィイッヒは空いている席に座る  
つーか、隣だつた

「よ、よろしく・・・」

「・・・」

うわ、ガン無視

## ボーイ ミーツ ボーイズ（後書き）

といつわけで、二人の転校生でした

ちなみに、アルに答える薰ですが、「」があつたりなかつたりするのは仕様です

見づらいかと思いますが、いつしないと、薰が独り言ぶつぶつ言ってる危ない人ですから（笑）

IS非展開時は脳内での会話ですので、「」はつきません  
IS展開時はプライベート通信のようなものを使うので、「」がつきます。あと一人きりの時も

別につっこみはなかつたのですが、いつか突つ込まれると思ったので、予防線として張つておきます

## シャルル・デュノア

「あー……ゴホンゴホン。これにてHRを終わる。各人はすぐに着替えて第一グラウンドへ集合。今日は一組と合同でIS模擬戦闘を行う。解散！」

手を叩いて織斑先生が移動を促す

「……なんで俺は殴られたんだ？」

やつぱり殴られていたらしい。一夏が頬をさすりながらこちらへ向かって

「俺が知るか。今年は女難の相でも出でんだろ

「……なんで今年の相でなんだ？」

「自分の胸に手を当てて、ゆっくり考えてみろ。……さて、気にくわない事だらうと思うが、さつさと行こうぜ。時間がない」

「お、おつ」

早くいかないと、女子と一緒に着替えることになる  
それは「ぐら木念仁」の一夏だらうと非常に困るだらうから、とりあえずさつさと動くように促す

「織斑、柳瀬。デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子だろ?」「あ、それもそうですね。ほれ、デュノアも行くぞ」

そういうつて、やつきの金髪の方に話しかける

「君達が織斑君と柳瀬君?はじめてまして、僕は  
「はいはい、積もる話は後な」

「とにかく移動が先だ。女子が着替え始めるからな」

説明と同時に、一夏はデュノアの手を取つて教室を出る

おお、ナイス行動力

「とりあえず男子はアリーナの空いている更衣室で着替え。実習の度にこの移動だから、早めに慣れておいてくれ」

「う、うん……」

れつきから、シャルルは落ちつかないのか、妙にそわそわしている

「トイレか？」

「トイ・・・・っち、違つよ！」

「はいはい。転校早々からデュノアを困らせるなよ。・・・つーか、早くいかないと来るぞ」

「何が？」

・・・デュノアさん。『ISを動かせる男子』といつ特異点である自覚はあるのかい？

一夏はさつきと階段を降つてゆく。それに引つ張られるように、デュノアが続く

「あのなあ、ISを動かせる男子っていうのはな・・・」

『マスター、前方より熱っぽい何か。その数いつぱい。接触までたぶんあと少し』

・・・アバウトで無気力な警告どいつも

「ああっ！転校生発見！」

「織斑君も一緒！」

「ついでに柳瀬君も！」

そんな女子の声が聞こえたかと思うと、そろそろと集まつてくる女子集団

・・・何故だ？某ゲームの援軍無き籠城戦、倒せども敵がわらわら出てくるシーンが頭のなかをよぎる

ハンドガン縛りでも結構つらいのに、アレをナイフ縛りでやれるとかどんな神だよ

つて、俺はついでか「フフー

「いたつー！」ちよー！

「ものども、出会え出会え！」

「・・・御覧のように、淑女の皆様の注目の的なんだよ」

間にあわず、すでに包囲網が敷かれている  
やつぱり俺たちの入学のときのように、『動物園の』新しいオトモ  
ダチを見るような視線でテュノアを見る

「織斑君の黒髪もいいけど、金髪もいいわね

「しかも瞳はエメラルド！」

「きやあつ！一人、手をつけないでるー！」

「一夏×転校生・・・いえ、一夏×転校生×柳瀬のドロドロとした

・

だから最後、俺を巻き込むなつての！

何度も言つけど俺はノンケだ！

おまえは毎日録画して見てろ！

「な、なに、みんな、何騒いでるの？」

「ほら。足止めるとすぐに捕まるぞ」

「あ、うん」

『デュノアの足が止まっているのを、背中を押して歩かせる

『最短ルートは、そこを右。その先には誰もいないよ  
お、サンキュー』

「そら、男子が俺たちしかいないからだ！」

「マイノリティ  
少数派はつらいねえ」

「・・・・？」

いや、そこで「意味が分からぬよ」みたいな顔をされても・・・

「男子は俺たちしかいないんだから・・・」

「あっ！　うん、そうだね」

一瞬驚いた顔をして、無理矢理話を合わせようとするデュノア  
その動作に、ちょっとした《違和感》を感じる。何だ？

『今はそんなこと言ひてる場合じゃないってーまた出席簿アタック  
が飛んでくるよ』

おお、そうだったな。アレは痛い。一週間に一回くらえれば充分だ。  
月曜に気合入れるための一発だけで充分だ  
今週はすでに一発くらつたけど

「さて、じゃあ一夏を人身御供にして逃げるか

「そういうことをさらつと言つな！薰が人身御供になればいいじゃ  
ないか！」

「いやだ。それに、俺を人身御供にしたところで効果は無いぞ。後  
ろの群衆の空氣を肌で感じてみろ。明らかに《織斑くーん！》とか

『転校生くーん!』つていう空氣。『柳瀬くーん!』のやの字も感じないだろ?」

「・・・色々とすまん」

「大丈夫。問題ない・・・」

くつ・・・

「とにかくススメ!足を止めるな!」

「お、おづ」「う、うん・・・」

その「」、何とか女子の猛追を振り切り、無事第一アリーナの更衣室にたどり着いた

「しかしまあ助かったよ。男子一人だけじゃ心細いもんな」「たしかに、こういうところに飛び込んでみると、むさい男友達のありがたみが分かるつてもんだよ」

「「うんうん」」

「そうなの?」

「・・・・・」

二人揃つてなんて言つていいか分からなくなつた

人とは、いつも価値観が変わるものだったのか  
なるほど、環境一つでこんなにも価値観とは違つてくるんだ。宗教  
戦争とかがいつまでつたつても無くならない訳と多分一緒なんだろうな

皆が皆同じ価値観だつたら、どんなに平和だつたことか・・・

『それは違うと思つよ、ボクは。皆違うから、それぞれの意見をぶつけられるんでしょう?』

なるほど。価値観の相違があるからこそ、新たな価値観を生み出し、人類という輪をさらなる高みへと導くのだということをつまるところ、価値観が違うからといって、その人を分かろうがないのは間違いだ・・・・・と思つ

以上、アニメとかに影響された俺の訴え終わり

にしておこの環境の辛さが分からぬといふことは、フランスには共学のエコにに関する学校があるのだろうか?

操縦できるのは原則女性だけだが、整備は男がやっても問題ないはずだからな

そういう意味では共学のところもあるのかもしれない

「まあなんにしろ、俺は織斑一夏だ。一夏って呼んでくれ。で、こ

つちは柳瀬薫。特徴は・・・特にないな」

「平凡結構。お前みたいに変に目立つよりすつといい。・・・柳瀬

薫だ。おれも薫でいいぞ」

「うん。よろしく一人とも。僕もシャルルでいいよ」

とりあえず、友好の証に握手をするショイクハinz

「・・・・・って、げえつーともうこんな時間ー。さつさと着替えないと・・・」

一夏が時計を見て、そうさけぶ

時間は結構おしている。というか、もう始まる寸前

「さつさと着替えないと!」

そういう一夏は着替え始める

ちなみに、ISは専用のISスーツに着替える

山田先生曰く、ISスーツは肌表面の微弱な電位差を検知することによって、より速くISへ使用者の意思を伝達するためにあるとのこと

ちなみに耐久性にも優れ、銃弾ですら穴を開けることは出来ない・・・  
・着弾の衝撃はモロに来るらしいが

「薰、見てないでお前も着替え・・・」  
「ふふふ・・・甘いな、一夏」

バツ！

「なつ・・・お前」

「俺はもうすでに着替えているのだ！それじゃあさうばー・・・  
「あ、ちょ・・・待ちやがれ！」

ダッシュで駆け出す俺

自分のミスで遅れるのは仕方ないが、一夏のミスで出席簿アタック  
だけは勘弁だ！

ムレて熱くなかったかだつて？

ISスーツは吸汗性も抜群なのだ。多少ムレたところで問題ない

「ほれ、シャルルも行くぞ！織斑先生の出席簿アタックは痛いぞ」「え？」

もう着替え終わっているシャルル  
速いなあ。」「いつも着こんでるのか？

「え？でも一夏は……」

ちよつと困ったように顔を曇らせるシャルル

「放つておけ。何の準備もしていない自分の愚かさを呪わせろ」  
「でも……」「

そういうて、シャルルは子犬のような眼で見てくる  
・・・何だか凄く悪い事をしている気分  
いやしかし出席簿は……

「・・・」

無言の瞳で物語つてくるシャルル

・・・負けた

「遅い！」

結局遅くなつた一夏に巻き込まれ、俺たちは三人まとめて出席簿ア  
タックをくらつていた

スッパン　スッパン　スッパン

「い、いたいよ・・・」

「だからほつとけつて言ったのに・・・」

「二人とも、すまん・・・」

## シャルル・デュノア（後書き）

とこり訳で第一二部二話目、全体で十六話目でした

途中の価値観や宗教観がどうのつていつのは、あまり深く考えない  
でください

高校上がつても中一から抜けられない、たわけの妄想です

ちなみに、第一部の話は結構出来ています

・・・ですが、読み返しても大多数がラウラとの絡みです  
流れ上、一夏含めて他の原作キャラとの絡みは、かなり少なめにな  
つてしまっています

宣言しておきます。第一部はずつとラウラのターンです  
あと、そのラウラでさえ性格保てるか自信ありません

それでもいいよ、駄文でもいいよといつ方は、期待しないで待つて  
いてください

「あら、ずいぶんゆっくりでしたわね。スーツを着るだけで、どうしてこんなに時間がかかるのかしら？」  
「色々あるんだよ。オトコノコにはな」

そういうて、セシリ亞との会話を打ち切る

訓練をしてもらつた恩はあるが、それとこれとは話が違う

一夏のように剣道云々の経験はない

代表候補生の様なIIS稼働時間のアドバンテージもない  
アルという補佐があつてもギリギリくいついていくてるかどうか程度の技能しかない

ないないづくしの俺は、少しでも吸收しないとあつと/or>う間に後れを取つてしまつ

セシリ亞に手ほどきをしてもらつたと言つても、IIS全体でみれば基本的な操作が身につきだした程度

未だ初心者の域を出ないのは俺自身分かっていることだ

「・・・」

セシリ亞は分かつてくれたのか、それ以上はつつかつてこなかつた

「では、本日より格闘及び射撃を含む実戦訓練を始める

「はいっ！」

一、二組合同なため、いつもの倍の人数がいる

そして、その声はいつも空返事のよくなあれではなく、眞面目なこつたものだった

「今日は戦闘を実践してもらおう。凰一・オルコット…」

「ええっ！？」「な、何故わたくしまで！？」

「専用機持ちはすぐに始められるからな。あの馬鹿者一人よりはましだらう？」

「だからって、どうしてわたくしが……」

ぶーたれていのセシリアと凰に歩み寄り、織斑先生は話しかける

「お前ら少しさやる気を出せ。」

距離があつて何を言つたかは分からなかつたが、何かを耳打ちした  
ようだつた

「まあ」にはイギリスの代表候補生、わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね！」

「まあ実力の違いを見せるいい機会よね！専用機持ちの…」

さつきと打つて変わつてやる気を出す一人

「一人とも、何を言われたんだ？」

「ま、だいたい予想はつくよな。な、一夏」

「え？」

『一夏くんにいいとい見せられるぞ。とか、そんな感じかな』

だらうなー

「……あー勝つたらガートでもおいつてもらえるとかか！？女

子は甘こもん好まだから、やる気も出ぬよな

「『せあへ』」

・・・まあいいや。今に始まつたことじやない。セシリ亞、鳳。南無

「それで、相手はひいひへわたくしは鈴さんとの勝負でもかまいませんが」

「ふふん。それはこいつの企図。返り討ちだよ

「慌てるなバカども。対戦相手は

キィイイン

空を割く音が聞こえる

『マスター！！後方よつてヒジが急速接近中…』のままだとボクらがぶつかっつけよう。

ハア…？

「ああああーつーべ、ゼニトへだぞーーー！」

『とにかく回避一』

「一夏ー！横つとびー

「は？」

「早くしりー

「お、おつ

俺は甘こもん好まだから、それぞれ横に飛び

刹那、俺たちが立っていたところはあとかもなく吹き飛んでいた

「お、おつかねえ・・・」

アルのアラートがなければ吹き飛んでたのか、俺たち  
ISと正面衝突とか、死ぬほど痛いんだろうな・・・

「いたたた・・・」

土煙が晴れた先に居たのは、山田先生だった

「あの、怪我ですか？」

「だ、大丈夫です・・・。うう・・・」

山田先生が呻くが、多分痛みよりも恥ずかしさから来るものだと思  
う。顔が赤い

「・・・山田先生」

「はいっ！」

織斑先生が山田先生を呼び、そのまま自然な流れで左手を擧げる  
するどどこからともなく弾が飛んでくる

「はあっ！」

「ドンードンードンー

銃撃の音と、発射の閃光

着弾先を見てみれば、全部的に命中

『しかも、全部ど真ん中だつたよ。・・・あの姿勢か』

山田先生は地面にぶつかつた時ときの姿勢から、わずかに上体を起こした姿勢で射撃したのだ

I-Sの補助があつても、どれくらい難しいか分からぬ

「山田先生はああ見えて元代表候補生だからな。あれくらいの射撃は造作もない」

「む、昔の事ですよ。それに候補生止まりでしたし・・・」

代表候補生止まり。じゃあ代表はもつとすいこののか・・・

そつ思つて織斑先生を見る

やはり、國家代表の名は伊達じやないところだとひつ

『すういね・・・』

「さて子娘ども。いつまで惚けてくる? わたし始めるぞ」

「え、ですが一対一では・・・」

「いや、さすがにそれは・・・」

「安心しろ。今のお前たちならすぐに負ける」

その言葉に力チンと来たのか、セシリ亞と凰は飛翔し、戦闘形態へと入る

それを見て山田先生も飛翔する

「手加減はしませんわ!」

「さつきのは本気じやなかつたしね!」

「い、行きます!」

セシリ亞が後衛。牽制、補助を担当

凰が前衛。衝撃砲と双天牙月を駆使して切り込んでいる

「さて、今之間に・・・そうだな。ちょうどいい。『デュノア、山田先生が使っているEISの解説をして見せろ』

「あつ、はい。・・・山田先生の使用されているEISは『デュノア社製『ラファール・リヴィアイヴ』です。第一世代開発最後期の機体ですが』

ラファール・リヴィアイヴというEISは第一世代最後期に開発された機体である

対応している後付装備イコライザの種類も豊富で、試作段階の第二世代よりも安定した活躍が見込める良機

操縦も簡易で、乗る人を問わない汎用性の高さもウリの一つ

シャルルの説明はそんなところだらうか

ずっと山田先生の戦闘を見ていたため、あまりよくは覚えていないセシリ亞がビットのブルーティアーズを使うも、足の止まっていたところに射撃を浴びる

『あれは、相手を誘導する射撃だね。当てる気は無いみたい』

それを避けるために動くが、ビットの動きは止まる。回避先にはまた弾丸が飛んできていて、すぐに回避に手いっぱいになるセシリ亞。当然ビットを動かす余裕はない

そこへ、凰が山田先生の背後をとつた斬撃を かわされる

反転し、もう一度アタックを仕掛けるために凰が衝撃砲を撃ちまくりながら距離をとる

視線は完全に山田先生の方だ。後ろを気にしている気配は無いで、凰の移動先に居たのは、回避に手いっぱいで周りの見えていないセシリア

お互いがお互いの位置を把握していないのだ。ぶつかり、動きが止まる  
その隙を山田先生が逃すはずがなく、すかさずグレネードを投げつける

爆発が起き、地面に一つの影が落ちた  
落ちたセシリアと凰は何か言いあつていいようだったが、織斑先生は構わず続ける

「さて、これで諸君にも工学園職員の実力は理解できただろう。  
以後は敬意を持って接するように」

パンパンと手を叩き、皆の意識を切り替えさせる

「専用機持ちは、織斑、オルコット、デュノア、ボーデヴィッヒ、柳瀬、凰だな。ではハングループになつて実習を行う。各グループリーダーは専用機持ちがやること。柳瀬はボーデヴィッヒの補佐をやれ。では、分かれろ」

一夏の班かシャルルの班になるかで、十五の乙女たちがもたついたのは言つまでもない話だった

「EJの馬鹿者共が……出席番号順に一人ずつ各グループに入れ！順番はさつき言つた通り。次にもたつくよつなら今日はEJを背負つてグランドを百周させるからな！」

結局、一夏の班かシャルルの班になるかで騒ぐもんだから、織斑先生の鶴の一聲で、綺麗に名簿順で並ばされる女子たち

「最初からそうしろ。馬鹿者ども」

で、各自がグループリーダーについて感想を言つて居る中で

「・・・・・」  
「・・・・・」  
「・・・・・」  
「・・・・・」

ラウラと俺の班は、他に比べておしゃべりが少ない  
うん。真面目に受けようとするその心構えは大事だと思つ  
『ラウラちゃんの前で萎縮してんじやないのかな?』  
・・・言つてやるな

「自己紹介がまだだつたかな？柳瀬薰だ。ようしく頼むな  
「・・・」

差し出した手への応答は無かつた

相変わらずの沈黙

冷たい氷は、溶けるといつことを知らなによつだつた

手を引き、咳払いをして班の女子に向ひ合つ

「さて、とりあえず『リヴァイヴ』をもらつて来た訳なんだが……

ボーデヴィッシュを横田で見みる。田が逢つ瞬間に、その意図を察した

『お前がやね』

田は口ほどに物を言つんだも

その撫然とした態度に一言こいつてやりたくなつたが、一回でもたついて授業が進まないので本末転倒

何も言わずに、もらつて來たり。ヴァイヴで実習を始めた元氣にした  
「それじゃ、とつあえず出席番号順にリヴァイヴに搭乗。起動して、  
歩行までやろうか。えーと……」

またボーデヴィッシュを見る。やっぱり動く氣は無いみたいだ  
あまりじろじろ見たからだらうか。冷たい光を宿した瞳で睨まれる

はい。すいません。やらせていただきます

『弱い』

ほつとけ

・・・・・・・じぱりへして

「やうやう。そんな感じだ。解除するときはしゃがんでだな・  
・」

結局、俺の指示と、それへの返事以外誰一人としてしゃべることなく、全員の搭乗及び歩行の訓練は終わつた

ボーデヴィッシュは、終始腕組をして、その様子をくだらなそつて見ていた

リーダー、しつかり仕事してくれ・・・頼むから

THE 戦闘訓練（後書き）

ところ訳で十七話目でした

戦闘描写が淡々としている気がします。とにかく難しいです  
IS戦闘のスピード感を出すには一体どうしたら・・・

## ルームメイトはプラチナ軍人《ソルジャー》

「引越しですか？」

一日の授業が終わり、寮でくつろいでいると、山田先生がやつてきて《引越し》の話をされる

「はい。その、デュノア君を織斑君に任せることが決まりましたので」

なるほど、俺への退去命令か

たしかに俺に任せることは一夏に任せた方がいいのかも知れない  
ここにはシャルルの面倒見るの好きそうだからな

「じゃあ荷物まとめますね。部屋のカギを渡してもうえれば、あと  
は自分で行きます」

「はい。じゃ、じゃあ、よろしくお願ひしますね」

「うひっす」

ほどなくして準備が終わり、俺はしばらく使っていた部屋を出て行  
つた

「んじやな。一夏、あまりシャルルに迷惑かけんなよ」

「おう。薰もあまりルームメイトに迷惑かけんなよ」

「おう」

「おじやましまーす」

ノックをしてから、部屋に入る

中は真っ暗だった

とりあえず電気をつけると、そこに倒たのは

銀色の輝く髪

軍服のようなカスタムを施した制服（HHS学園の制服は、カスタム自由なのだ。カスタムした時点でもう制服じゃないよな。ちなみに俺は年中半袖長ズボン）

それに、左目の黒眼帯

フウラ・ボーテヴィッヒだった

「・・・何故だ？」

「は？」

「何故お前がこの部屋に来るんだ？」

一夏とデュノア、俺とボーテヴィッヒの組み合わせか  
一夏にデュノアの面倒を見させただけじゃないようだな

「シャルルの為の寮の組み合わせだってや。・・・それとも、一夏  
の方がよかつた？」

ギン！

名前を出しただけで睨まれた  
本人が来たら殺しかねないな

「とにかく、俺がルームメイトだ。よろしく頼むわ」  
「・・・フン。勝手にしろ」

許可が出たという事でいいのだろうか?  
いや、許可も何もないけど

『マスター』

うん。分かつてる。分かつてるが、とりあえず荷物の整理だけさせて  
『ビビつてやらないのだけはダメだからね』

分かつてるつて

整理と言つても、音楽プレイヤーと制服を取り出すだけだな  
部屋着ジャージも今着てるし、他に出すものといつてもなあ・・・

そんな、整理とも言えない整理のあと、俺はボーデヴィッヒに体を  
向ける

「ボーデヴィッヒ。お前に頼みたい事がある  
「・・・」

相変わらず黙つたままだが、構わずに続ける

「俺のIS訓練に付き合つてくれな「断る」・・・即答ですか」

図々しいのは百も承知だったが、即答か・・・

だが、俺だって引き下がるわけにはいかない  
セシリ亞たちは一夏の指導をやりたがっているようだつたし、俺の  
ために時間を割かせる訳にもいかない  
だからつて、ボーデヴィッヒの時間を割いていいのかと聞かれると、  
どう答えていいものやら・・・

『あなたはもう機動の基礎は十分でしてよ？それよりも一夏さんの・・・』

『はあ！？なんであたしがあんたの指導しなくちゃいけないのよ！？それよりも、問題は一夏よ！』

『・・・（無言の圧力）』

・・・人の恋路を邪魔するやつは馬に蹴られるんだよ。齡十五で死にたくは無いんだよ！俺は！

そしておそらくはシャルルも一夏につく。ルームメイトのよしみとか言いだし、一夏の方から頼むだろ。多分

『回避時は右前方二十度に移動ですわ！』

『なんでわかんないの？感覚よ。感覚』

『くいって感じだ』

コーチ三人がこれだ

セシリ亞以外は、アルでもよくわからないうらしく  
アルのような補助のない一夏が、シャルルに泣きつくのは目に見えている

つまり、俺はボーデヴィッヒに頼るしかないのだ

「・・・何故？」

「お前のIFS訓練を行ふ必要性を感じないからだ。代表候補生は私の方にもいるだろう？そいつらを当たれ」

「だつて皆、一夏。一夏…一夏…俺を構ってくれる奴なんていな  
いんだよ」

「ならばアレと一緒に受けついでいいだろー」

「俺はまだ馬に蹴られて死にたかないんだよー」

とこりか、俺が混じつた時に篠ノ介と凰が発する空氣が辛いんだよー。  
凰なんかは本当に空氣を発射してくれるし

「はあ？ 馬などじどりにもこないだろー」

「『人の恋路を邪魔するやつは』ってこりじやないか！」

「…・・・

「あ」

さらりと言つてしまつたが、まあ気がついてないのは一夏ぐらくな  
もんだからいいか

それよりも、その一言はボーテヴィッシュの気分を害したようだったた

あの、心底くだらないなとこり田をして、ボーテヴィッシュは話しだす

「…・・・とにかく、お前への指導はやらない。そんな上つこた、危  
機意識の足りない者たちとつるんでこる奴などに指導をして、時  
間の無駄だ」

「えーつー。わんな」と言つなよーな、頼むからー。」

学年別トーナメントで醜態をさらしたくは無こんだよ  
俺だって、男のプライドを一応は持つてゐる

「…・・・

そしてそのままひりひりに背中を見せ、ベッドに向かう

背中で、『黙れ』と語つてゐる

男は背中で語るとまじつたが、女も背中で語るんだな。主に凍りつく  
様な空氣で

ボー・デ・ヴィイッヒに向かつて、ちっぽけなプライドをかなぐり捨てた  
土下座

反応してくれたこの機会を逃せば、多分次は無い。話題になる度に  
貝のように口を開けただろう  
ならなりふり構わぬ、ごり押ししかない。というか、それ以外知らん

「お願いします！俺の指導をしてください！先生！師匠！《教官》  
！」

今まで微動だにせずに聞いていたボー・デ・ヴィイッヒが、ピクリと動く  
そして、こっちの方に体を向ける

「……今なんといつた」  
「え、俺の指導をしてくださいーーって……」  
「そのあとだ」  
「えつと……先生！師匠！《教官》……」

ボー・デ・ヴィイッヒは、しばらく考え込んだ後

「……良いだらう。お前の指導をしてやる  
「……え？」  
「一度も言わせるな、指導してやると書いたのだ。一ヶ月での男  
や、その周りの奴らよりも強くしてやる。なにせ、私が教えるの  
だからな。心配無用だ」

……

『やつたね！マスター！』

あ、ああ・・・

あんなにいやそうに断っていたのに、一体なにがあつたんだ？妙に呆気なく決まつた気がしなくもないが、とにかくよかつた

「但し条件がある」

「な、なに？」

「私の教えには忠実に従え。それと、一夏（あの男）と、一切かわるな。いいな」

「！？」

・・・なんというか、悪魔との契約みたいだな。《お前の命の次に大切な物と引き換えに》的な。俺の一番大切なものは、今のところ家族だけど

「さて、どうする？」

「むう・・・」

一夏との縁を切つて強さを望むか・・・

今必要なのはISの指導者

だけど折角出来た一夏との関係を、壊したくは無い  
だけど今必要なのは・・・  
いやしかし・・・

そんな思考をいつたん打ち切り、仕方がないので損得の視点に立て天秤にかけてみて  
決断を迷つた時は、こうするのが一番いいらしい。父曰く、一番客観的に判断できるそうだ

結果は、おのずと見えて来た

「・・・わかった。その条件を飲み込む」

「よひしー。では土曜日より訓練を開始する」

「はーー!」

「うして俺は、妙な感じはあつたものの、無事に指導者となつてく  
れる人間を見つけられたのだった

「さて、以上だ。あとは寝るなり好きにしている」  
「うっす。さて、それじゃあシャワーでも・・・」

しゃるり

「は?」

しゃるり

衣擦れの音がして、気になつたもんだから振り向く  
そこには、全裸になろうとしているボーテヴィッシュがいた  
その肌は白く綺麗で、ひかえめな双丘が静かに・・・って、そうじ  
やなくて!..

「な、何やつてんだよー!」

「はあ? 寝るにきまつているだろ? へー?」

「そりゃなくて、なんで脱いでのんだよー。パジャマとかないのか  
よー?」

「そんなものは無い」

「じゃあせめて俺に一言こいつてから・・・

「・・・?」

・・・なんで「わけがわからなによ」なんて田をじてこるんだ?  
異性が田の前にいるところの認識がないのか!?

「とかく、俺は一回部屋出るからつー布団でもぐつーんだりするんだ

つー

「あ、おー、あ・

ボーティングの返事はきかず、すぐ部屋を出る

「あー・・・、ビックリした

まさか、こきなり脱ぎだすとは・・・

まあ、たしかに『「わざ」をするのがいやだ』とか言って下着だけで寝る人とかいるけど

まさか、こきなり脱ぎだすとは・・・

『「ひつひつ」のなんて言つんだっけ?・・・眼福?』

眼福とか言つてる余裕なんてなかつたよ。吃驚しかなかつたよ

はあー。今日も罪れないなあ・・・

『でもマスター、本当によかったの?あんな条件で

「・・・仕方ないだろ？あれば、ボーデヴィイツヒの最大譲歩なんだ  
るから。下手に文句言つて、『じゃあコーキしない』なんて事にな  
つたら、それこそ本末転倒だろ？」

『でもさあ・・・』

「まあそれでも指導者は得たんだ。動きを盗めるだけ盗もつじゃな  
いか。それに、一夏に関わらないでいいのは指導期間中だけだろ？  
からな」「

『・・・うん』

納得いってないみたいだなあ・・・

実際、俺も納得いかない

他者との拒むメリツトってなんだ？

『王者とは常に孤独なもの』なんて言つている某芸能プロの唯我獨  
尊社長もいたからな・・・そういうのか？

「約束しちまつた以上、今はちゃんと従うしか・・・」

ドン！

急に、頭頂部に衝撃が走る

「つてえ！いきなり何す・・・」

すぐに背後を向く

「騒がしいぞ馬鹿者」「すいませんでした」

いたのは織斑先生。即座下座余裕でした  
というか、チヨップか

出席簿ほどではなかつたものの、それでも結構痛い

「独り言は、トイレにでも入つてやれ。・・・といひで、ラウハはどうだ？」

「ボーデヴィッヒですか？うーん・・・一応、コーチの話をじひとつに成功したぐらーいですかね」

「ほう。アイツにそんな話をじじつけるとはな。・・・どんな魔法の言葉を使つたんだ？」

「べつに。日本人らしく、馬鹿正直に頼みこんだだけですよ」

心なしか、織斑先生は面白がつてゐるようだつた  
笑いをこらえているのか、口元がひきつつてゐる  
そうか。ドイツの時のアイツは、引き受けないような奴だつたのか  
そういえば、前カードにあつたな。アイツ、ソイツ、コイツ、ディ  
ツ。今は別にビリでもいいけど

「それで、出た条件は何なんだ？」

「は？」

「あいつの事だ。どうせ交換条件をつけての譲歩だろ？で、それは  
何だ？」

むう・・・さすが元教師。よく分かつてらひしゃる

「教えに忠実に従つゝ」と。それと・・・

「それと？」

「・・・一夏と一切関わらないこと、です」

今まで口元の笑いを必死に抑えていた先生が、急に表情を変える

「・・・さうか。まったく、あいつは・・・」

頭を押さえる織斑先生

「・・・まあ仕方がない。とにかく、ルームメイトになつたのも何かの縁だ。アイツの事を気にかけてやってくれ」

「はい」

「ではな。ゆつくり休め」

そういうて、織斑先生は去つていった

・・・前途は洋々とは行かないようだな  
とりあえず、部屋に入ろうか。そろそろアイツも布団に入ったころ  
だらうし・・・

## ルームメイトはプラチナ軍人『ソルジャー』（後書き）

という訳で、ラウラとルームメイトになる話でした  
どうして教官役をラウラが受けたのかは、また後で  
とまあ、そんなことはさておき、次回にはあの子が登場予定です  
モブなんて言葉で終わらせられないほどの人気赤丸急上昇中のあの  
子です  
・・・ 篠のあだ名ってなんでしたっけ？

## ルームメイトはプロンド貴公子《ジョントル》

薰が必死の土下座でラウラからの指導（条件付き）を勝ちつとつて  
いたところ

一夏＆シャルルの部屋では

「じゃあ、改めてよろしくな」  
「へ、うん・・・よねじへ、一夏」

シャルルは何だか氣まずやつてしてこねが、どうかしたのだらつか

ああ。そっか

「薰の事が気になるのか？」  
「えつ？」

人のいいシャルルのことだ。多分自分のせいに薰が追い出されたの  
だとでも考えているんだろう

「アイツは誰とでも氣兼ねなく話せる奴だからな。誰と相部屋にな  
つても上手くやつてこくな」

「う、うん・・・」

「それに、これはシャルルの我儘とか、そういうんじゃないんだろ  
？だったら氣する必要なんてないだろ？」

薰も納得してたみたいだし。とつなげる

「僕が気にすることじゃない、か・・・。うん、それもそつかも」「だらり・すっと薫の事気にしながら使ってちゃ、気持ちも休まらないだろ?」

休むための寮なのに、それでは本末転倒といつものだ

「・・・うん、やうだね」

「ところ訳でコーンをどうぞ」

そういうて、俺は日本茶を差し出す  
シャルルの気持ちを落ち着けるのと、食後の休憩をかねたものだ  
ちなみにセシリアは飲めない。曰く、『色が・・・』だそうだ  
縁つてそんなに変か?

「ふう〜・・・。紅茶とはずいぶん違つんだね。不思議な感じ。でもおこしこよ」

「気に言つてもらえてよかつたよ。あ、そうだ、今度抹茶を飲みに行こう。駅前に抹茶カフェなんてのもあるし」

「抹茶カフェ?」

「うん。抹茶をコーヒーみたいな感覚で飲めるんだ。それに、特別な技能とかも必要ないから、気軽に飲めるのもウリだな」

「ふうん。そうなんだ。じゃあ今度誘つてよ。一度飲んでみたかつたんだ」

「おう。ついでに色々案内するぜ。折角だし今度の日曜にでも出かけるか

「本当?嬉しいなあ。あつがとう、一夏」

柔らかな笑顔を浮かべるシャルルに、男と分かつていってもドキッとしてしまう

彼のもつ中性的な雰囲気がそうさせるのだろうか。素直な笑顔というものを向けると、何故か戸惑ってしまう俺がいた

「ま、まあ、俺も久しぶりに抹茶飲みたかったし、ついでだよついで。ああそうだ。折角だから薰も呼ぶか。男三人、親睦を深めるつて意味でも」

それに、一人で行くよりも三人で回ったほうが楽しいだろうし

「うん！ それいいね！」

「お、おう。じゃあ俺が誘つておくわ」

心底うれしそうなシャルルの笑顔に、男と分かっていても以下同文千冬姉と二人で暮らしていると分からぬが、シャルルの笑顔はいわゆる『家庭的な笑み』というやつなんだろうか  
そういうや、薰の家族も写真のなかで笑っていたな

「そういえば一夏はいつも放課後にIS特訓してるって聞いたけど、本当なの？」

「ああ。俺は他の皆よりも遅れているから、人一倍訓練時間を重ねるしかないからな」

今日はシャルルと薰の引っ越し（と言つても二人とも全然荷物がなかつた）があつたので、放課後の特訓は休みにしたのだ  
しかし明日からまた再開しないといけない。何せ今月には学年別トーナメントがあるのでから

「僕も加わって良いかな？ 何かお礼がしたいし、専用機もあるから少しくらいは役に立てると思うんだ」

「おお、それはありがたい話だ。ぜひ頼む」

「うん。任せて。あと薫も特訓とかしてるので?」

「いや、アイツはやつてないみたいだ。なんでも教えてくれる人がいないからだとか」

俺が誘つても《馬に蹴られるのはいやだ》とか言つてやらない  
どうしてそこで馬が出てくるんだよ。訳わからねえ

今は一人でセシリアに教えてもらつていた基礎的な移動訓練を一人  
で復習しているようだった

「ふうん。じゃあ薫の特訓も手伝つてあげたほうがいいのかな?」

「おう。アイツきっと喜ぶぞ」

「そつかな? ふふつ」

なんだか嬉しそうな顔をするシャルル

「・・・つて、これ、薫の忘れものか?」

テレビの前には、『死神の断罪5』が置かれていた

翌日

「あ～・・・」

眠い。超絶眠い

一夏と今後どう接したらいいのか。同じ年の女の子が同じ部屋で寝ている。しかも全裸でそれ考えると悶々としてしまって、眠れなかつたのだ

「・・・」

どいつもボーテヴィッシュは先に行つたようだつた

そんなことはともかく、俺も支度をし、学食へと向かう

食堂につくと、ある人に出会つた

「あ、ヤナツキー。おはよー」

「おお、布仏か・・・」

布仏本音。のほとけほんねいつでもダボダボの袖口と、人懐っこいスマイルが特徴

こっちに袖を振りながら近づいてくる

「ヤナツキー。どうしたのー?」

「いやね・・・もう眠くて眠くて・・・いまはそのあだ名に対してもつこむ気力も起きないんだ」

「ふーん・・・あ。さてはヤナツキー、エッチな事考えてて眠れなかつたんだねー?」

「ばつ・・・んなんじゅ・・・」

団星ですが、何か?

眠れぬ訳

一夏20% 全裸80%

・・・男なんだから、仕方ないよな

「えー。でもヤナッキーは女子に興味津々だつて、みんな言つて  
るよ~。」

「興味はあつても津々ではないな。うふ。あとヤナッキーの『やー』  
はどうから来たんだ?」

よつやく頭が回りだしてきました

それに伴つて眠気も次第に消えてゆき、ヤナッキーのあだ名について  
て突つ込む余裕が出てきた

「えー、だつて『やなつせー』じゃ語感が悪いからー、ヤナッキー  
「・・・薰のほうで考えないのか?」

「んーそれは先客がいるからだめなんだよねー」

・・・ああ、薰子さんか

「じゃあさ、『たかし』なんてどお?」

「アンパ マンはかけないから、それはダメだな。はあ、ヤナッキ  
ーでいいや。もう」

人生諦めも肝心。親父が言つてたな

布仏とそんな話をしながら、朝食をもらひ席につく  
といふが、そんなダボダボした袖口で箸使いにくくないのか?

「そういえばヤナッキーって、引越したんだよね?」

「ああ。やうだけど?」

「同じ部屋の人って、誰?」

「ボーデヴィッヒだ。ほら、転校してきた・・・」

「ああ、ボーチャンかー」

それもマズくないか?

アイツは鼻水飛ばしたりはしないぞ。というか、そんなところ想像したくない

「びつくりしたよねー。いきなりオリムー叩いたやうなんだもん」

「ああ・・・」

織斑先生は気にかけてやつてくれつて言つていた  
でも、俺つて何か出来るのか?  
うーん?

「ヤナツキー?ビーしたの?変な顔して  
「ん?ああ悪い。それよりもせつむと食つまみがねつぜ。遅刻しちま  
う」

「それは大変だねー。オリムーやヤナツキーみたいに叩かれちやう  
「アレは結構痛いぞ」

布仏は袖口のせいで食べ辛そうにしながらも完食。とりあえず朝会  
つたのも縁なので一緒に教室に向かう  
・・・つーか、袖まくれよ。いろいろ面倒じゃないのか?

訊いてみたら「ずり落ちて来たのを直すほつがめんどくさい」だつて

「じゃあ制服の袖口のサイズを小さくするのは?」

「…………その発想は無かつたねー。でもやうない」

はあ・・・

「あ、薰。おはよう」

「お～シャルル。おはようわん。寮の部屋はどうだ？」「…

「うん。すごく快適だよ

「それはなにより」

「それで、一夏から聞いたんだけどね。薰って今HSの指導してくれる人を探してるんでしょ？」

「あ、ああ・・・」

「それでね、よかつたら僕が教えてあげようかなって・・・」

「まじで？ぜひ頼む！」

俺はまだまだ初心者。知識吸収のチャンスは積極的につかんでいくべきだと思う訳だ

ボーデヴィッシュの事を教官と呼ぶようになつた訳だが、別に流派に所属したとかそういうのじゃないなら、他の誰からの教えも請けてもいいはず

「本当にいいやあ土曜日こ一夏と一緒に・・・」

《あの男と一切かかわるな》

ボーデヴィッシュのHS指導を仰いだ時の、《例の条件》が頭をよぎる

「・・・ちょっと待つてくれないか?」

「え? うん・・・」

シャルルはどうだ?

あの三人みたいに俺への指導をないがしろにすることは無いか?

『別に頼んだ訳じゃないんだから、ないがしろも何もないじゃん』  
そりゃあそудだが、結局土曜に一回やったきり一夏にかかりきりになる事は無いのかな? って話だよ

『・・・どうだろ? ボクはシャルルの事はよく知らないし・・・』  
じゃあボーデヴィッヒは?

『うーん・・・。多分真面目な子だと思つから、条件さえ守つていれば打ち切ることは無いんじゃないかな?』

ボーデヴィッヒの条件は厳しいものだが、逆を言えばその条件さえクリアしていればずっとHIS指導をしてやるという事なのだろう  
ここで『一夏とともに』指導を受けるという事で関わりを持てば、初日でアイツを殴つたボーデヴィッヒのことだ。間違いなく約束を反故にしたとして教えてくれなくなる

なら答へは決まった

「・・・わりい。俺、その日先約があるんだ」  
「え? そうなの? ・・・残念だよ」

シャルルの口調が明らかに暗くなる

キーンコーンカーンコーン

「じゃあさ、また今度操縦で分からぬ所とあつたら、その時教

えてくれないか？」

「うん、いいよ」

ちょっとした申し訳なさを感じつつも、予鈴が鳴ったため、自分の席へと進む  
隣には、ボーディング教官ガイシヒがいた

「薰一。今度の日曜だけれどー。駅前の抹茶喫茶に・・・」

「悪い一夏。その日は予定が・・・」

「ヤナツキー。日曜日に手伝つてもらいたい事があるんだけどね・・・

・

「ああいいぜ。で、何やればいいんだ?」

「んとねー・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・なあ篠。俺、なんか薰にやつたつけ?」

「私が知る訳がないだろう。それよりも、放課後は第三アリーナだ

ぞ

「あ、ああ・・・」

## ルームメイトはプロンド貴公子《ジョントル》（後書き）

ところ訳で、19話目でした

かまつてもらえるという意味で一夏がつらやましいです

それと、チョイ役ですが本音さんを出してみました

・・・ヤナッキーは、大丈夫ですよね?といつかこれぐらいしか思いつきませんでした

物語全体の感想やダメ出しをもらえると、より一層励みになります  
『じつしたほうが読みやすくて良いよ!』といったアドバイスも大歓迎です

よろしくお願ひします

## ラウワの訓練 シャルルの指導

「それでは、これよりE.Sの実技訓練を開始する  
「はい！」

土曜日。この日は半日で授業が終わる  
また、今月には学年別トーナメントもあるため、午後のアリーナは  
訓練する生徒でいっぱいだった

その中の一角で、ボーデヴィッシュから操作を学ぶのだ  
何故か知らないが今日は人口密度の高いアリーナだが、ここら一体  
はがらんとしていた

「さて、これからE.S訓練を始めるが、その前に一つ聞きたい。お  
まえ、E.Sの操作はどれくらいできる?」  
「えーと・・・。移動や回避の基礎を習つただけです。操作自体は、  
復習ながら、毎日やつてきました」

ボーデヴィッシュの凛々しく、堂々とした態度に、思わず背筋が伸び、  
自然と『調』になる

「なるほど。攻めるにしろ撤退するにしろ、足取りが軽いに越したことはないからな。で、武器の扱いについてはどうなんだ?」  
「ほとんど行つていません」  
「ふむ・・・なら、まずはE.Sの移動がどれぐらい身についたかを  
テストする」  
「はい！」  
「テストは簡単だ。私と戦え。五分もつたら及第点をくれてやるつ  
「分かりやすくて良いですね」

「だらうへ・それでは始める」

「えすー。」

「そう言って、戦闘態勢に入る俺たち  
ボーティッシュ  
教官のI-Sは《シュバルツォア・レーゲン》と云ふ、ドイツの第三  
世代型I-Sで・・・」

「開始の合図を出したところに、動かなことはな」

「ドオンー。」

「つまつーー?」

「い、いきなり撃って来たよ・・・  
I-Sの解説をする暇もくれないんですか?」

「無論だ。戦場でそのような事をしている暇があるか?」

「・・・ありません」

「だつたら足を止めるな」

そう言ひて、カラカラは六基あるワイヤーブレードを操り、攻撃して  
くる

「手加減なですかっ!?」

「当たり前だ。手加減をしては、訓練の意味がないだらう」

ワイヤーブレードの攻撃

さすがに六基同時攻撃は無いにしろ、引っ込んでは別のが飛んでき  
て、また引っ込んでは・・・と、止めどなく降り続く《黒い雨》を  
想起するような連続攻撃が襲つてくる

回避 扱い 回避 受けながら 回避・・・

ワイヤーの処理に手いっぱいで、反撃する余裕がない

「注意がワイヤーの方ばかりに向き過ぎだ

ドオン！

また砲撃をくらう。しかも直撃

「ぐつ・・・」

『トリックスター展開！シユバルツェア・レーゲンを攻撃！』

アルの掛け声とともに、トリックスターが展開される  
ビットによる一方向からの攻撃

『捉え・・・』

「甘いな

「！？』

ボーデヴィッヒが手をかざすと、トリックスターは指示も出してい  
ないのに、空間に静止する

ドオン！

『！？ なんで・・・』

そのまま、プラズマ手刀とイヤーカッターにより撃ち落とされてし  
まう

しかも、その間も他のワイヤーは動きを止めることなく、俺を攻め  
立てる

結局、ギリギリ五分持つたかどつかといつてひだつた  
その間、ラウラは一步も動かず

「なんだあのビットの動かし方は？直線的すぎて、撃ち落としてく  
ださい」と言つてゐるようなものだぞ」

「はい・・・」

「まあいい。次はお前の射撃を見る。エネルギーを補充してこい」  
「はいっす

そういつて、柳瀬薫はピットへと戻つていった

『教官！』

ふと、あいつが言つた事を思い出す

教育。私にとつての憧れであり、目標とする人

（私は、あの人のようにになりたいのだ）

正直、柳瀬の動きには、無駄が多くすぎる

しかし、強さを渴望しているその姿は『出来損ない』と呼ばれた暗

黒時代の自分に重なる

私は、あの人のおかげで『出来損ない』から『部隊最強』の名を取  
り戻す事が出来たのだ

ならば、『取るに足らない有象無象』である柳瀬を『一年最強（無

論私を除いて)』に仕立て上げることで、よつあの人によづけるといふものだ

『うーん……ちょっとした火薬庫みたいだなあ』

あの男の声が聞こえる

見てみれば、女子に囲まれて、それはいた

柳瀬は今補給にいつている。十分程度は帰つてこないだろ？

十分もあれば事足りる

完膚なきまでに呪きのめす。私の手で……

「おい」

オープンチャンネルで、私はそれに声をかけた

「アル、補給は？」

『オーケだよ！エネルギー満タン！ビットも修復完了！』

アルカナのI.S装甲は、全てアルの手作りであるつまり、予備パーツ云々は存在せず、全てアルが勝手に修復しているのだという  
・・・原料はどうから調達してるんだ？

『トレース用の素材としてストックしてあるから、それを使ってる

んだよ』

「へえ・・・。まあいいか、じゃあ行くぞ」

『うん』

俺がアリーナに戻ると、何だか騒がしかつた  
何事かと思い、輪の中心をハイパーセンサーで見てみる  
そこにいたのは、砲撃姿勢のボーデヴィッヒ  
おそらくは一夏が<sup>ターゲット</sup>標的だろう  
そして、そのまま火を噴いた

ドオン！

「一。」

ゴガギンッ！

金属音が甲高く響く  
どうやら、シャルルが間に入つて砲弾を防いだようだ  
なんだ？小柄のシャルルがやけにでかく見えるぞ・・・。  
『俗にいう威圧感つてやつ?』  
「かもな」

『そこの生徒！何をやつている！学年とクラス、出席番号を言え！』

騒ぎを聞きつけたらしい。先生のアナウンスが聞こえる  
そして気勢をそがれたのか、ラウラはエスを解除してゲートへと戻  
つて・・・つて

「アル、プライベートチャンネル。ラウラ・ボーデヴィッヒ。開い

て

『うん』

すぐに回線がつながる

「ボーデヴィッシュ?俺の訓練は?」

「今日は一旦中止。実践の続きは明後日の放課後からだ

「・・・ええ~」

「・・・何か文句あるか?」

ドスの利いた、不機嫌そうな声で言われれば、答えは一つしかない

「なんでもないです。サー」

「よろしい。特訓の続きは明後日の放課後。忘れるなよ

「サー、イエス、サー」

回線が切れる

「・・・ふう」

『ねえマスター。ビーすんの?』

「どうしようもねえな・・・。もう休むか?」

「あ、薫だ!」

シャルルがこっちに気付いたのか、声をかけてくる  
ととりあえず、そっちに行く

「どうしたの?」

さっきまでの威圧感は無く、そこに居たのはいつも紳士的な、人  
懐っこいシャルルだった

「いやあ・・・指導を願つた人が帰つちゃつてな・・・」

「ふうん。・・・じゃあ僕が指導してあげよつか?」

「え?でも、俺いつかい・・・」

一回断つてる以上、なかなか頼みづらい

「いいのいいの。ね?」

「お、おう・・・」

なかなかにこのスマイルで振り向かれると、断りにくくい  
なんというか、なんだろ?どこかで感じたこの感覚。・・・なん  
だ?

「では、一夏さんの指導はわたくしが行いますわ!」

「ええっ!?

「当たり前でしょ!?私たちの言つてたことほとんど分かつてなか  
つたじゃない!」

「い、いや、俺は・・・」

「もうこちぢり、基礎からみつちつとたたきこんでやるわ!」

そうこうで、向こうに連れて行かれてしまった

「さすがは「一チ二人組。頼もしいな」

『人』とみたいに言つてて良いの?』

「実際人ごとだもん」

シャルルに向き直る

「とにかくでシャルル。銃撃戦についてだな・・・」

「うん。いいよ。じゃあちよつと戦ってみよつか?」

「おう、頼むわ

で、戦闘終了

「・・・えっとね、薰。センサーリンクできてる?」

高機動状態による射撃のため、ハイパー・センサーとの連携は必須となる

それを行うのがセンサー・リンク

ターゲットサイト他、射撃を行うのに必要な情報を送るために、武器とハイパー・センサーを接続するのだ

「おう。もちろんだ。だが当たらないんだ」

「狙いがすごく甘いからだよ。銃弾は外しても牽制にはなるけど、無駄撃ちとはまた違うからね」

「むう・・・」

動きながらの射撃は、セシリニアとの間をつめるために乱射していたつきり

侵入者騒動の時も、足を止めて撃つてたし

なるほど、経験が圧倒的に不足している

「じゃあ止まって撃つ練習からしてみようか。落ちついて、しつかり狙いを定めて・・・」

「おう」

遠めに出た的に、フルメンを構える  
しつかりと照準とのとを重ね、引き金を引く

放された光は、真っ直ぐに的に飛んでいき、貫く

「うん。いい感じ。じゃあ今度は連續で撃つてみよつか」

現れる複数の的

そういえば俺つてこんな感じの早撃ちはしたことなかつたな

「けどわあ、戦つてるとさに足止めで撃つてたら格好の的だろ?」

狙いをつけながら、シャルルに問う

「それはそなんだけど、動きながら撃つにはまず足を止めて、しつかり狙いをつけられるようにならないとね」

「それもそつか。・・・よし」

狙いをつけ、照準を合わせ、五回連続で引き金を引く  
発射された五つの光は、それぞれの標的に向かって真っ直ぐ飛んでいき、的を貫く

「お疲れ様。ビット戦術に関しては僕は分からぬから、今度セシリ亞に聞いてね」

「おう。でもセシリ亞かあ。最近は一夏にお熱だからなあ・・・」

「あはは・・・」

ボーデヴィイッヒの指導は的確だがスバルタン。シャルルの指導は的確でやさしい  
なるほど、シャルルがいれば一夏は大丈夫だな

あとは、俺がボーデヴィイッヒの指導についていけるかだけだな

ラウラの訓練 シャルルの指導（後書き）

という訳で、20話でした

気がつけばPVが5万超えていました  
ユニークは7千超えでした

高いのかどうかはよく分かりませんが、多くの人に読んでもらって  
いるようで、私の中では感激と、ちょっとした緊張が同居しています  
拙速であること以外特徴のないこの物語ですが、これからもよろし  
くお願いします

## 違和感

しばらく、シャルルから射撃指南を受けたあと、時間も時間だった  
ので今日は終了することにした

「お疲れ」

「お疲れ様。・・・それじゃ、先に着替えて戻つて」

そういえばシャルルって俺たちと着替えをしたがらないよな  
IS-SUITに着替える時も、着込んでいるか知らぬ間に俺たちよりも先に行つて着替えてたりとか

「なあ シャルル。たまには一緒に着替えようぜ」

「い、イヤ」

「つれない事言つなよ」

「つれないっていうか、どうして一夏はボクと着替えたいの?」

「というかどうしてシャルルは俺たちと着替えたがらないんだ?」

・・・質問を質問で返すのはマナー違反だろ。一夏

「どうしてって・・・その・・・恥ずかしいから」

「大丈夫。慣れるつて。ああ、一緒に着替えようぜ」

「・・・なるほど。お前は嫌がる男子の裸を見ていたい、とんだ変態だったのか」

「い、いや、そうじやなくてだな・・・」

「そうじやない? だつたら、他人に見せたくないなにかを無理矢理、  
見て愉悦に浸る変態か!」

「! ! !」

「あ

むんずつ

「はいはい、アンタはさつと着替えに行きなさい。引き際を知らないやつは友達なくすわよ」

「鈴、やめて。鈴。・・・シャルル、無理強いして『ermen』

「あ・・・うん」

鈴に首根っこ掴まれて、更衣室の方に運ばれる

小学校の担任がウサギに同じ事やつてたな・・・

「い、コホン！・・・どうしても誰かと着替えたいのでしたら、仕方ありません。私がいつしょに」

「篠ノズ。そこの淑女へんたいをさつさと連れていってくれないか？」

「分かっている。ほらセシリア、こっちも着替えに行くぞ」

「ちょ、わたくしはまだ何も

むんずつ

「ほ、篠さん！首根っこをつかむのはやめ わ、わかりました！  
すぐ行きましょう！ええ、ちやんと女子更衣室に行きますから！放  
してくださいー！」

・・・幼馴染、強いな

ISースーツからの着替えが終わり、軽くシャワーを浴びてから、寮に戻る  
待っていたのは

「遅い！」

何だか不機嫌なルームメイト、ラウラだった

「いや、遅いって言われても・・・」

「まあ」ちらりとしては好都合だったんだがな

えー・・・じゃあなんでどなったんだよ

「さて、お前がゆっくりしている間に、今日の戦闘を振り返つていた。で、これがお前の動きだ」

「おお。凄いな」

そういつて、部屋のテレビに出てきたのは、今日の訓練中のものだ  
った

一通り見たあと、再びラウラが口を開く

「一番最初の砲撃の時点では、お前は私に主導権を取られていた。・  
・ 分かるな？」

「おう」

「ただ、私の動きの中にも、いくらか形勢を変えられるだけの隙があつた」

「いや、いいだ

そういうて戦闘の映像をシーン」とに分ける

「一度目の砲撃のとき、トリックスターの処理に回った時  
いずれも、ワイヤーによる攻撃の手が若干緩んでいるタイミングだ

「ここのタイミングの射撃であれば、私のワイヤー攻撃を中断させ、  
ある程度ながら形勢逆転が図れただろう。では、何故この時射撃が  
できなかつた？」

「・・・射撃ができる姿勢じゃなかつたから」

「何故だ？」

その時点でのワイヤーを回避している自分を見てみる  
砲撃の時なんて、直撃してゐる・・・

「・・・動きの無駄が多いから？」

「そうだ。お前の動きは大袈裟すぎるのだ。回避で必要以上に姿勢  
を崩しているから、ほんの一瞬の隙を逃してしまつ」

「・・・」

なるほどなあ・・・

「その隙を無くすのはどうしたらいいんだ？」

「・・・ふいつ

「雛鳥のように答えを待つだけでなく、自分で考えることも大切だ」

「なんで目をそらす！？まさか、お前もわからないのか？」

「私は分かつてゐる。私が教えるのは簡単だが、それではお前の力  
とはならないだろ」

キッヒーからじを睨みつけるボーテヴィッシュ

あー・・・なるほど、そういうことが

たしかに、考えるからこそ確実な力となる訳だもんな

「うーん……じゃあ」の回避は・・・

コンコン

「柳瀬君はいますかー？いま、入つていいですか？」  
「はーい・・・あ、山田先生」

ドアを開けると、いたのは山田先生だった

「えーと、そんなに大したことじゃないんですけど・・・大浴場が  
今月下旬から使えます」

「了解です。忘れないようにしておきます」

俺たちが大浴場使える時間を作るのは結構前・・・というか、入学当初から計画されていたのだ  
だがまあ、案の定というか、女子からの反発がすごかつたために今まで決まらずにいたのだ

俺たちの時間を女子の後にしたもんなら、『男子が後に入る風呂をどう使えばいいんですか！？』という反対意見で、女子の前に俺たちを入れたら、倍近い数で『男子が入った風呂をどう使えばいいんですか！？』という猛反対

たしかにちぢれた毛とかが浮いてる風呂に入るのって嫌だらうな少くとも、そういうのが浮いてると俺はどう対処していいか困るが・・・

「あ、そういうえば織斑君が渡したいものがあるって言つてましたよ？急ぎではないようですが、なるべく早めに言つてあげてくださいね」

「うごつす。ではでは」

バタンと音つて、ドアが閉まる

「・・・」

「んじやあ、取り合えず取りに・・・」

「ダメだ」

「え」

「『織斑一夏と一切かかわるな』といつ条件を忘れたのか？」

「むう・・・」

一夏の名前を聞いただけで、ラウラの放つ炎がさうに冷たいものに変わる

「・・・あ

「じゃあ、おまつと出るわ」

「・・・ぞこへ行く」

「シャルルんとこ。メシついでに『無駄のない動き』のヒントを聞きにな」

「・・・なら仕方ない。但し、それ以上のことはあるな」

バタン

薰がシャルルと夕食に行く為、部屋を出る

それにラウラは安堵の息つく

(・・・教官となつた手前、安易に分からぬなど言えないからな。だが、どうせなら・・・)

どうせなら、一緒に夕食を食べながら考へるでもよかつたか?

(まあいい。とつあえず、もう食事を摑つて寝てしまおう。さて、今日は何を食べようか・・・)

学食は、今のところルームメイトであり弟子である薰以外、誰とも絡まないラウラのややかな楽しみとなつてい

正直最初はどうでもいいと思つていたのだが、これがなかなかにうまい

最近のラウラがはまつてるのは日本食。朝食は、白ごはん飯に味噌汁に海苔にたまご、時々焼き鮭という具合だ

(・・・では、行くか)

バタン

『・・・マスターも変なことするよね』  
「なにがだ? 実際俺はシャルルにヒントをもらひに行くだけだぞ?  
一夏からものをもらうのはついでだ。ついで」  
『ボク、一夏君についてなんて一言も聞つてないよ? それにラウラちゃんにはいつてなかつたよね?』

「おひと、伝えるのを忘れてしました。いやあ、これは失敗失敗  
『・・・ラウラちゃんが見抜けてなかつた訳ないと思うけどなあ。  
ボクは』

まあ、そんときはそん時だ。俺としては何を渡されるか分からなければ夜も眠れん

「ところどよ、アル

『なに?』

「お前や、シャルルになんかミョーな《違和感》感じないか?」

『違和感って何?』

「いや、男なのに男じゃないっていうか、なんつーのかな、なんか変な違いを感じるんだ」

『カルチャー・ショックとかいうやつじゃないの?・・・それよりも、ボクはラウラちゃんのシユバルツニア・レーゲンのほうに違和感を感じたな』

は?

「具体的にはどうこいつ?」

『なんていうかさ、何かを隠していく気がするんだよ。とにかく力の《何か》を』

「・・・まじ?』

『うん、最初見た時、ISを一機待機させているんじゃないから思つたぐらいだから、相当デカイ《何か》だよ』

そんなにデカイのかよ

あいは、そんな力持つてるなんて素振りも見せなかつたが・・・

そんな話をしているうちに、シャルルの部屋につく

鍵は空いていた

「シャールールー。メシ行こうぜー」

ガチャツ

ルームメイトの一夏含め、全員男子なのだ。別に見られて困るよつ  
な・・・

「・・・・・あ」「  
・・・・え?」

俺は、その自分の迂闊な行動を悔むことになる  
・・・だつて、一夏が・・・あの一夏が・・・

『女』を連れ込んでたんだから

## 違和感（後書き）

とこう訳で、次回はシャルのカミングアウトなお話です

## シャルル・デュノアの秘密

「……え？」

ドアを開けたまま、呆然と立ち尽くしてしまつ  
あの……一夏が……鈍感な一夏が……

「と、とりあえず上がれ。見られると色々まずいから  
「お、おう……」

取り合えず、どう表現していいかわからない場違い感を感じつつ、  
シャルルの部屋に上がる

「え……で、でもわ……ルームメイトが女子ならともかく、自  
分から女連れ込むのつてまずいんじゃないのか……？」  
「いや、非常に言いにくいたんだが……」

そこで一度切り、その女子の方を見る  
その子とアイコンタクトを取り、結局は話すこととしたようだつた

「……シャルルだよ。この子は」「  
「……は？」

ウソだろ？

だって……シャルルは女っぽいけど、男だったし  
目の前の人物を見てみる

シャルルの特徴たる金髪碧眼。その女子も金髪碧眼

だが、体のラインが男でないことを訴えている

いや・・・似てるけど。たしかに似てるけどシャルルは・・・

『・・・虹彩データ一致。間違いなくあの子はシャルルくんだよ。・

・いや、シャルルちゃん?』

・・・おまえ、そんな記録まで取つてたのかよ

「でもなんで・・・」

「・・・それを、今から話すと悪いんだよ。よかつたら、薫  
も聞いてくれないかな?」

酷く弱々しい声でそう喋りだすシャルル

その声には、いつもの紳士的な気品は無く、虚脱感つていうんだろうか。とにかく諦めの色しか感じなかつた

一夏のベットを椅子代わりに、シャルルの話を聞く

「じゃあ改めて訊くが・・・なんで男のフリなんてしていたんだ?」

一夏が訊く。俺は、じつとシャルルを見る

「それは、その・・・実家にそつしろつて言われて」

「実家? シャルルの実家って何かやつてんのか?」

「うん。デュノア社の社長。それで、その人直接の命令で・・・」

・・・親の話をしだしてから急にシャルルの顔が曇りだした

どいつも、ただの社長令嬢つてワケじゃないらしい。

「命令つて・・・親だろう? なんでそんな

「僕はね、一夏、薫。愛人の子なんだよ」

「

一夏は絶句してしまっている

愛人の子。その意味が分からぬほど、俺は純情でも世間に疎くもないつもりだ

『それって、何か問題あるの?』

・・・アルはそうではないらしい

まずキミは愛人といつ言葉の意味を理解しよ。問題説明はそれからだ

「引き取られたのが一年前。ちょうどお母さんがなくなつた時にね、父の部下がやつてきたの。それで色々検査していくうちに、IS適性が高いことが分かつて、非公式だけどデュノア社のテストパイロットをやることになつてね」

シャルルの顔がどんどん曇つていく。そして、乾いてゆく

俺と一夏は目配せし、話をしつかり聞くことに専念することにした

「父にあつたのは一回くらい。会話は数回かな? 普段は別邸で生活しているんだけど、一度だけ本邸に呼ばれてね。あのときは酷かつたなあ。本妻の人には殴られたよ。『泥棒猫の娘がつ!』てね・・・」

あははと愛想笑いをするシャルルだったが、その声は乾いていて全然笑つていなかつたし、何より俺が愛想笑いを返す気にもならなか

つた

話を聞くたびに、心が冷えてゆく

腕を組んで、また話を聞く

「それから少し経つて、『デュノア社は経営危機に陥った』

「え？ だって『デュノア社つて量産機ISの世界シェア3位だろ？』

「・・・一夏。リヴィアイヴは最後発の第一世代だぞ。第二世代の開発が始まっている今の状況じゃ買い手なんざつかんだら？」

公式な（・・・）ISは、コアの絶対数の関係上、世界に467機しか存在できない。

つまり新型ISを作りたかったら、既存のISのフレームを破棄するしかない

第三世代の開発が始まっている現状で、第一世代の量産機に超貴重なコアを割く国があるとは思えない。ラファールではもう頭打ちなのだ

「薰のいとおり。それにISはね、開発に凄くお金がかかるんだ。ほとんどの企業は国の支援によつて何とか成り立つているところばかりだよ。それにフランスは歐州連合の統合防衛計画、『イグニッショングラン』からも除名されていてるからね」

「第二世代の開発は急務、ってか？」

「そうだよ。資本力で負ける国が最初のアドバンテージを取れないと悲惨な事になるんだよ」

・・・アル、イグニッショングランについて詳しく知ってるか？

『もちろんだよ。簡単にいうと、ヨーロッパの国々が共同で、プラン内の国の防衛にあたるうつてものだね。今は次期主力の選定中らしいよ？ イギリスのティアーズ型<sup>モテル</sup>、ドイツのレーゲン型、イタリアのテンペスター？型がトライアル中で、イギリスが実用化で一步リー

アシテる

- ・・・お前の勤勉さには脱帽だよ

『伊達に「アネットワーク」とインターネット使ってなによ。便利だよね』

いつ接続してるのが何の際置いておいて。イギリス、ドイツって  
「いつ」とは、セシリ亞とボーデヴィッヒが来たのはその辺の事情だ  
うな。今はどうでもいいが

「話を戻すね。それでデュノア社も第三世代型の開発をしていたんだけど、もともと遅れに遅れての第一世代開発だからね。データも時間も圧倒的に足りなくて、なかなか形にならなかつたんだよ。それで、政府から予算をカットされて、次のトライアルに選ばれなければ援助は打ち切り。IIS開発許可も剥奪つていう流れになつたんだよ」

「何となく話は分かつたが、それがどうして男装につながるんだ?」「簡単だよ。注目を集めるための広告塔。それに」

苛立ちを孕んだその声で、シャルルはつづけた

「それに、同じ男子なら日本で発生した特異ケースとの接触もしやすい。可能であれば、本人たちのデータもとれるだろう・・・ってね」

「それでつまづ

「お前のお父さんに」

黙つてうなずくシャルル

やつぱり、全てのことを諦めたような顔しかしていなかつた

卷之三

ISの適性があるなら、使おう。それぐらいにしか考えてないなんて、親父なのに随分希薄だと思つ

スパイを送るにしたつて女で送ったほうが、発覚した時にも色々と波風も立たないだろうに、男装での強行作戦  
それだけ経営が切羽詰まっていたのか。それともシャルルなんてどうなつてもいいとも思つているのか  
そこは社長のみぞ知るところだが、聞いてて俺は悲しくなつた

#### 『家族の愛情』

当たり前のものだと思っていた

そういう当たり前のものも『えられないものなのか  
意味を分かつてゐるつもりだった、『愛人の子』という意味を、家族とは当たり前のものではないということを、思い知らされた気がした

「ああ、何だか話したら楽になつたよ。聞いてくれてありがとう。  
それと、ウソついてごめんね」

「お前はどうなるんだよ? フランスに帰つたとしてもタダじゃないだろ?」

「・・・たぶん独房の中じゃないかな? デュノア社もこのままの体系で経営していくとは思わないけど、僕にとつてはひとつでもいいことかな?」

一夏は相当怒っている

うまく隠しているつもりなのかもしれないが、シャルルに見えない位置でにぎりしめた拳が震えている

「・・・なるほど。で、お前はどうしたかったんだ？」

「え？」

「お前が今やっていることは《言われた事だから仕方なくやっている》つてだけだろ？俺が聞きたいのは、お前自身はどうしたいんだってこと」

言われたからやる。それが楽しいなら結構だらつだが、どうして楽しくもない事をやれるんだ？

「どうするって言われたって、僕に選ぶ権利なんて・・・」「あるに」

「あるに決まってるだろ！親がなんだ！親が子供の自由を奪う権利があるか？そんなのおかしいだろ！」

「い、一夏？」

シャルルは怯えたような、戸惑っているような表情をして、しかし、心の壇を壊して流れ出る感情は止まらない

「たしかに親がいなければ子は生まれない。だけど、だからって、親が子供に何しても良いなんて、そんなバカな事があるか！生き方を選ぶ権利は誰にでもあるはずだ！親に指図されるもんじゃない！」  
「・・・気は済んだか？」  
「い、一夏。なんか変だよ？どうしたの」「あ、ああ悪い。・・・つい熱くなつて」「いいけど・・・ホントにどうしたの？」  
「俺は、俺と千冬姉は、親に捨てられたから」「あ・・・」  
・・・よくある当たり前の親子関係を持つていない奴らばかりなの

か？一年の専用機持つて

ふと、そんなツツ「ミミが生まれるが、心にしまう  
あれだらう。世界を変えてしまったほどの強い力を得たことによる  
代償なんだらうな。アニメ的に考えれば

「その、ゴメン」

「別にいいわ。今更会いたいとも思わないし」

ホントにそう思つているようだな  
さつきのシャルルみたいに、実の親を他人としか思つていなによつ  
な、淡々としたものだった

「まあ、一夏の身の上はともかく「ともかくってなんだ」、シャル  
ルの今後だ」

「・・・多分、時間の問題だね。発覚すればフランス政府だつて黙  
つていられないだらうし、僕は代表候補生をおろされて・・・」

「そりじゃなくてだな。スパイ活動していとなれば、学園生活で  
の風当たりも悪いだろ」

「え？」

「いや、だから学園生活が・・・」

「僕はまだここにいれるの？」

・・・あれ？

「・・・一夏、特記事項覚えてる？」

「！－！ そうか！特記事項第二十一、本学園における生徒はその在  
学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人  
の同意がない場合、それらの外的介入は許可されない！ これ使え  
るんじゃないか！？ シャルルはここに居ていいんだよ！」

早い話エリ学園は、多国籍学園ではなく、無国籍学園でした。そういうこと

だからこそ完全に各国の法とは無縁な無法地帯・・・というと何だかモラルのない場所のようだが、法は校則という形でちゃんとあるし、条約でも決まってる

「つまりこの学園に居る二年間は大丈夫。問題は三年のうち、たつた三人で問題解決の糸口を見つけられるかどうかということ。それに、学園内におけるシャルルの風評だな」

「一夏、薰」

「「ん？」

「よく覚えられたね、特記事項つて五十五個もあるのに」

「・・・勤勉なんだよ、俺は」

「そうだね、ふふつ」

やつと、この部屋に来てからシャルルが笑った  
屈託のない笑顔は、相変わらずまぶしい

『でもさ、三年は大丈夫つていっても、結局はただの先送りでしょ？たつた三人で、フランス国家を相手にして大丈夫なのかな？』  
三年という期間は長いようで短いからな。・・・結局、どうにもならないまま頭を抱えることになるかもな

『・・・根本的な解決になつてないよね？』

少なくとも、今はシャルルに笑顔が戻つたことでこの場を善しとするしかないな

『・・・なんだかなあ。あ！ デュノア社を潰しちゃうつていうのは？ そうすればシャルル・デュノアという人間は・・・』

・・・代表候補生になつてんだから、そこだけじゃ無理だろ。代表候補生のデータは、政府だつて記録してる。改ざんしようとしても、どうやってアクセスするんだ？

『・・・むーん。難しい  
やつこつむごだよ

「時に一夏、俺に渡したいものがあるって聞いていたのだが」

「ん？ああ・・・コレ」

「『死神の断罪5』・・・ああ、忘れてたやつね。サンキュ。じゃ

あな」

「うむ

それで、ちょっと遅くなっちゃったが部屋に・・・

ぐ

・・・うん、学食によつてからだな

## シャルル・デュノアの秘密（後書き）

という訳で、シャルルは男の子ではなかつた。という回でした

今更ながら、中古でバイハ4を買いました

ひょつとしたらソレをネタ元になつたりするかもしません  
値段にガツツの入つたアレとか、盾になつたり刃になつたりするア  
レとか、鉄骨だらうとお構いなしに刺さる便利なアレとか・・・

アレとかソレとか、ボケが始まつてゐるもかも（汗）

相変わらず駄文ですが、皆様方の感想やご要望、ご指摘などにより  
よいものに出来ればと考えております

## ブルーデイズ

さて、先の件より少し経った頃  
一夏は学食での食事を終え、シャルルに食事を持つてくれる

「え、えっとね、一夏が食べさせて・・・」

「え?」

「甘えても良いって言つたから・・・」

上田遣いの涙田でそう懇願するシャルル  
「つかばまづぐんだ!!」

「よし・・・男に一言は無い。はいあーん」「あーん・・・」

・・・この光景を見る三人組が見たら、一夏はトマトケチャップだ  
つただろう。或いは潰れたザクロか、トマト

「・・・次は和え物がいいな」

「はいあーん」

「あーん・・・」

シャルルと一夏がそんな時間を過ごしていた頃  
暗い闇の中に、それはいた

「・・・・・」

いつ、じるかこうなのかは知らない。ただ、生まれたころから彼女は闇の暗さを知っていた

人は、生まれた時に光を見るというが、この少女は違う。影より生まれ、闇の中で育まれた

### ラウラ・ボーデヴィッヒ

それが自分の名前だと知っているが、その名前に意味がないことも知っている

ただ、例外がある。教官 織斑千冬だ

彼女に呼ばれるときだけは、その響が特別な意味を持つている気がして、心にわずかな高揚を覚える

彼女のとの出会いは一条の光のようだった

出会ったその時、その強さに恐怖し、感動し、そして 欽喜した  
それと同時に強く願つたことが、一つだけある

これになりたい

この人のようにありたい

唯一自分を重ねてみたかった存在  
だからこそ、その存在に汚点を残した弟、織斑一夏が許せない

(私の手で、完膚なきまでに叩きのめしてやる・・・)

紅の瞳が鈍く、暗い輝きを放つ  
心には、真っ黒な雨が降っていた

「怖つ。何があつたんだよ」

「・・・別に、なんでもない」

「そういう顔ばっかりしてると、老けるぞ？」

「つるわい」

・・・・どうしてこうなったのだろうか

篠ノ之篠は一人、剣道場で頭を抱えていた

『学年別トーナメントの優勝者は、織斑一夏と交際できる。』

最近、一年女子の間でそんな噂がまことしやかにささやかれていた

本当は、私と一夏だけの約束だつたはずなのに・・・どうして、  
どうしてこうなつたのだろうか

一夏が言いふらす訳がないので、どこからか情報が漏れたのだと思う。たしかにあのときは声も大きかったし・・・  
だけどあくまで篠と一夏だけの約束だつたはずだし、一人の秘密と  
いうことで安心していた

あ・・・あの時はたしか柳瀬の奴が・・・

いや、あれは言いふらすたりではない・・・よな?

いや、人を疑っていても仕方がない。とにかく優勝すればいいの

だ！

雄たけびを上げ氣合を入れ、箒は木刀を振るつ

とにかく優勝！優勝すれば・・・

そこで、箒は過去の事を思い出す

前にも一夏とこの約束をしたことがあるのだ

その時は剣道の全国大会。小学生の部というくくりだつたため、上級生も参加していた

ただその中でも優勝候補と呼ばれたぐらい、箒は強かつたのだが、箒がその大会に出ることは無かつた。当田に引っ越し、不戦敗となつたのは、実姉である束のせいである

その性能の高さゆえに発表段階から兵器への転用が危ぶまれたIAS政府の要人保護プログラムにより、篠ノ一家は住居移転を余儀なくされたのだ

しかも、一夏からの手紙にも『第三者に居場所が割れるのは困る』といわれ返せない始末

そうして気がつけば一家離散。束は消息不明で、残された箒は毎日のように束の居場所を尋問される

そんな拘束された日々が續けば人間荒んでいくもの

誰かを叩きのめしたい

その時の束の頭の中にはそれしかなかつた

一夏とのただ一つつながりに思えて、続けていた剣道。やはりと

いうが、必然だらう。中学に上がつても全国大会で優勝できるほどのレベルだった

しかし、その優勝は他の者がどう思おつと、籌自身ことつてあまり喜ばしいものでは無かつた

太刀筋とは「」を映す鏡といわれている

そしてその鏡に映つた、醜悪な自分をつきつけられた。自己嫌悪に陥り、惨めな気持ちにしかならなかつた

さらにそれに拍車をかけたのは、自分に負けて涙する決勝の相手だつた

強さとは暴力に非ず。強さとは、そういう力を指すのではない  
籌はそれを分かつていた。分かつっていたつもりだつた

もう一度、私は強さを見誤らずに勝てるのだらうか・・・

気がつけば、木刀を振るう腕は止まつていた

## 次の日の日の休み時間

「なぜこんなところで教師など!」

「やれやれ・・・私には、私の役目があるのだ」

「」のような極東の地でなんの役割があるというのですか!」

私は、教官に訊く

いや、訊くというよりは自分の考えを、不満を、思いの丈をぶつけ

ているだけなのかもしない

「お願いです。教官。再び我がドイツで「J」指導を。」「は、あなた  
の能力は半分も生かされません」

私に、その力を見せて欲しい

「ほう？」

「だいたい、この学園の生徒など、教官が教えるに値する人間では  
ありません」

もつと、もつと

「なぜだ？」

「意識が甘く、危機感に疎く、IISをファッショーンか何かと勘違い  
している。そのような者たちに、教官が時間を割かれるなど・・・」

その力だけが、私の求める

「　そこまでにしておけよ、小娘

「・・・っ！」

私の中を、何かが駆け巡る

恐ろしく冷たい、何か

それが恐怖だと分かるには、なぜか少しだけ時間がかかった

「少し見ない間に偉くなつたな。十五歳でもう選ばれた人間気取り  
とは恐れ入る」

「わ、私は・・・」

動搖が、口に出る

言葉をつなぎたいのに、何も言葉が出てこない

教官との繋がりを切らないために、何を言えばいいのか、まるで分からぬのだ

「・・・さて、授業が始まるな。わっさと教室に戻れよ」  
「・・・」

いつもの教官に戻ったようだが、私には締め付けられたような感覚が残つた

「そういえば」

思い出したかのように、教官が言葉を紡ぐ

「おまえ、柳瀬を弟子に取つたそうだな」「・・・何故、それを知つてているのですか?」「どうでもいいだろう?そんなことは。私のマネ事をするのは結構。だが、今のお前に人を導くことができるのか?」「・・・導いてみせます。必ず!」

そうひつて、私は教室へと戻つた

やつとげてみせる。そうすれば、教官はきっと私を

「・・・さて、その男子。盗み聞きか?異常性癖は感心しないぞ」「な、なんでそうなるんだよ!千冬姉」

## スッパー

「エリでは織斑先生と呼べ  
「は、はい・・・」

やはり、今のところ織斑千冬に敵う者はいないのだろう  
一旅を始めたばかりの勇者（レーヴー）の目の前に、魔王がいきなり  
現れて寄つて斬つてくるような、そんな感じなのだろう

「それよりも、薫がラウラの弟子つて・・・  
「なんだ？本人から聞いてないのか？奴の転校初日にはすでに条件  
付きながら指導の依頼に成功したと言つてたが？  
「・・・最近の薫、俺とあまり話さないから」

抹茶カフエの話もやめことながら最近の薫は

『薫、ここわかんないんだけど・・・』  
『わるい。俺これから特訓。セシリニアにでも聞いてみれば?』  
『薫、今度の田曜さ、シャルルと・・・』  
『わるい。その日予定がある』

『かお・・・』

『わるい。俺もつ帰るわ』

とまあこんな感じで、あからさまに一夏との会話を避けているので  
ある

最近薫から話しかけて来たのは、シャルルの性別がバレたとき、部  
屋に入つたついでにDVDを返した時ぐらいなものだ

「・・・なるほど。師に忠実か」

小さな声、誰も聞きとれなれやうな声で、千冬はつぶやいた

「ん? なんか言つた?」

「このちの話だ。そら、走れ劣等生。このまおじやお前は月末のトーナメントで初戦敗退だぞ。勤勉を忘れんな」

「わかつてゐつて・・・」

「せうか、ならいこ」

今の千冬は、学園の先生ではなく、一夏の姉として戒めたようだった

「それと、織斑」

「なんですか?」

「廊下を走るなとは言わん。せめてバレないよつて走れ。薫のよつにな」

ちなみに薫は用を足しげに行ぐときは忍者走りだ。速度があるのに

足音が立たない

足音が立たないから、先生は誰かが走つてゐる事すら気がつかない

「ア解」

そのまま一夏は、廊下をバレないよつてダッシュした

## レッドスイッチ

「 「あ」

二人揃つて間の抜けた声を出す  
時間は放課後、場所は第三アリーナ。人物は、鈴とセシリ亞だった  
「奇遇ね。あたしはこれから月末のトーナメントに向けて特訓する  
の」

「奇遇ですね。わたくしもまったく同じですわ」

先に話した、『優勝したら以下略』の話  
当然ながらこの二人も耳に挟んでいるのだ

狙つぱどぢちらも優勝。火花が見える

「ちょうどいい機会だし、前の実習の時のことも含めてぢちらが上  
かはつきりさせようじゃない」

「あら、珍しく意見があいましたね。この場でぢちらの方がより強  
く、より優雅であるか、この場ではつきりさせましょうではあります  
せんか」

お互いにメインウェポンを取り出し、戦闘態勢に入る

「では」

そこでエスのアラート警笛が鳴り響く

声を遮り、音速の砲弾が飛来する

「 「 」 ？」 「

緊急回避の後、セシリ亞と鈴は砲弾が飛んできた方を見る  
そこには、あの漆黒のエリがたたずんでいた

機体名『シコバルツェア・レーゲン』登録操縦者

「ラウラ・ボーデヴィッヒ・・・」

セシリ亞の顔には、歐州連合のヒートライアルの相手以上のものが  
含まれていた

「どうこいつもり、いきなりりぶつ放すなんていい度胸してるじゃない」

「中国の『甲龍』にイギリスの『ブルーティアーズ』か。・・・ふ  
ん、データでみた時の方がまだ強そうではあつたな」

その言葉に、セシリ亞と鈴はカチンとくる

「何？ やるの？ わざわざドライツくんだけからやつてきてボコら  
れたいなんて大したマゾつぶりね。それともジャガイモの農場じゃ  
そういうのが流行つてんの？」

「あらあら鈴さん。こちらの方は言語をお持ちでないようですから、  
あまりいじめるのはかわいそうですわよ。犬だつてワンと鳴きます  
のに」

ラウラの見下したような目つきに並々ならぬ怒りを覚えた一人は、  
そのはけ口を何とか探そうとする

しかし、それも無駄だった

「はつ・・・。一人がかりで量産機に負ける程度の力量しか持たぬものが専用機持ちとはな。余程の人材不足と見える。数くらいしか能のない国と、古いだけが取り柄の国はな」

ブチツ

何かが切れる音がして、一人とも装備の最終安全装置を外す

「分かつたわよ。スクラップがお望みなのね セシリア、どっちが先やるかジャンケンしよ」

「ええ、そうですわね。わたくしはどちらでもいいのですが」

そこでラウラにプライベート通信に入る

『えーと、ボーデヴィッシュさん・・・何事?』

ラウラがピットの方を見れば、そこには薰がいた

そう、今日は第三アリーナでの特訓だったのだ

「・・・ちょうどいいな。柳瀬、今日は一対一の模擬戦だ」

『はいっ?』

「私の邪魔はするなよ」

『え、ちょ・・・』

回線を一方的に切り、ラウラは一人に向けてさらに挑発する

「ちょうどソレが来たから、一人でかかってきたらどうだ?ぐだらん種馬を取り合うメスに、私が負けるものか」

薰はただの数合させ。いてもいなぐても同じじりしい

「 今何て言った?私には『じうぞ好きなだけ殴つてください』としか聞こえなかつたんだけど」

「この場に居ない人間の侮辱までするとは、同じ歐州連合の候補生として恥ずかしい限りですわ。その軽口、一度と呪けないようになってあげましょう」

獲物を持ち、完全に戦闘態勢に入つた一人を見て、ラウラは手を広げ自分の方に向けて振る

「とつとと」

「上等ー。」

「えーと、ド コー状況?」「どうみても、セシリ亞ちゃんと鈴ちゃんと戦えつてことみたいだね

・・・あーセシリ亞たちは特訓のお手伝いかー?

「薰さん!/?じゃあツレつて・・・」

「柳瀬!/?邪魔するならアンタもろともに吹き飛ばすわよーー。」

・・・そんな空氣じや

ドオン！

「うへ、あひ、これなり撃つてくんなよー!?」

緊急回避でギリギリかわす。うわ、ちょっととかすつたぞ

「もうともて吹き飛ばすつて言つたでしょー。」

ひでえ・・・

プライベートチャンネルを開く

「ちょ、ボーデヴィッヒー!? 何事!?!?」

『アイツらは模擬戦闘の敵だ。敵は排除。以上』

「はあー!?」

『何度も言わせるな。これは、一対二での模擬戦闘だ。とりあえず、お前は私の邪魔をしなければいい』

そこで回線が切れる

・・・それは一対二ではなく、一対一が一つのことか?  
『或いは、一対一と他一じやないかな?』

なんてこつた

そんな、状況判断に時間を割いている間も、凰からの砲撃

『どうするの? 向こうは完全にやる気だよ?』

『ええいー やるつもやないだろー アル、トリックスターで凰を牽制  
!』

『分かつたよー!』

トリックスターが飛んでいき、鳳を側面から攻撃する

「邪魔くさいわね！」

鳳は砲撃でトリックスターを潰そうとする  
あ、まずい。絶対潰される

「やつぱ俺が指揮するー。」

『うんー。』

(かく乱させるだけ・・・攻撃は、最小限に)

チェス盤のイメージ。チーズの駒を適当に動かす  
クイーンはどうのとか、そういうのは完全無視だ  
クスターにあてられずにいた

「ああもうーうざつたい！ハエみたいね！  
「ちょうどいい！対抗戦の時のリベンジだ！」

トリックスターの操作を再びアルに任せ、俺は鳳にフルメンの照準  
を合わせる

(しつかり狙つて・・・)

ターゲットサイトが、甲龍と重なる

(いまだ！)

ドン！

「へりつー・せりてれれぬじやない！」

右肩のアーマーに命中し、右の衝撃砲を使えなくする

『だたみあるが武器があるんだ』

『どうあえず出してみる』

『うん。じゃあ・・・《カテナ》・・・』

左手の形状が変わり、袖口のよひなものが生まれる

「な、なによそれ！」

「さあな。とにかく使ってみるべー！」

凰に向け、発射のイメージを浮かべる

パン！

小さな炸裂音と一緒に、小さな碇がついた鎧が打ち出される

『ああ、ワイヤーカッターのイメージか』

『うん。まだ実験段階だけだね。腕の振りに合わせて動くよ

「それなら・・・・よいじょー！」

凰に叩きつけた時に、横薙ぎで振る

甲龍の装甲を支柱にてりかめると巻きついてゆく

「なによ、こんなもん・・・！」

甲龍のフルパワーで鎧を引きむしりとするが、碇がひつかかり、まったく動かない

むしろ無理に力を加えたもんだから、甲龍の装甲がひしゃげていた

「なにこれ！？全然ちぎれない・・・」

「そんじゃもう一発！」

「つ！」

すぐに凰は砲撃姿勢に入るも、ウェイトの差でビームの着弾の方が早かつた

残っていた左肩のアーマーを撃ち抜き、完全に衝撃砲を使えなくする

「あらよっ！」

そのまま、ボーデヴィッシュと戦っていたセシリアに向かって投げつける

「きやつ！」「なんですかー！？」

どうも、ミサイルビットによる攻撃をしようとしていたらしく射線に凰が割り込む形で、セシリアもろともに吹き飛んだ

『案外むじいことあるね、マスター』

「いや、龍砲には酷い目にあわされたからな・・・」

そこで、プライベートチャンネルが開く

『・・・私の邪魔をするなと言った筈だが？』

「そんなつれない事言うなよ。それより、コレで決着でいいんじゅ

ないか?』

『いや、まだだ、まだ足りない』

「はあ?』

『そこを動くな。いいな』

そういうと、ボーデヴィッヒは吹き飛んだセシリアたちを追撃しにいった

一方で、一夏、シャルル、篠の三名は、特訓のために第三アリーナに向かっている

近づくたびに、何やらあわただしい様子が伝わってくる  
さつきから、廊下を走っている生徒も多いようだった

「なんだ?』

「誰かが模擬戦をしているみたいだね。それにしても様子が・・・

ドゴーン!』

「「「!?」」

いきなりの爆音に、三人そろって視線を向けると、その煙を翻ぐようになつの影が飛び出してくる

「鈴!セシリ亞!』

二人は苦い顔のまま、爆発の中心へと目を向ける

後を追うようにその煙を切り裂いて、漆黒のIS、シュバルツェア・レーゲンが飛び出してくる

セシリ亞と鈴は、よく見るとかなりのダメージを受けている  
鈴に至っては、肩のアーマが砕けているし、何かを巻かれていたよう  
に装甲がひしゃげている

「もう！何すんのよ！」

「あなたが急に」

声を遮るラウラの猛追

ケンカをしている余裕は無く、鈴は力なく蹴り飛ばされ、セシリ亞  
は砲弾の餌食となつた

そしてそのまま、ワイヤーブレードで手繩り寄せる  
そこから始まるのは、ただただ一方的な『暴虐』

「ああああっ！」

腕に、足に、体に、ラウラの拳がたたきこまれる

ISのシールドエネルギーはあつという間に無くなり、機体維持警  
告域を超えて、操縦者生命危険域へ到達する

これ以上の攻撃でISが強制解除されるようなことがあれば、冗談  
抜きで一人の生命にかかわつてくる

だが、ラウラは攻撃の手を緩めない。淡々と、ただ殴り続ける

無表情が、たしかな愉悦に口元を歪めた  
それを見た時、動いたものが一人いた

「おおおおつー！」  
「いい加減にしろ」

一夏と、薰だつた

アイツの表情が、ゆがんだ物に変わったのが見えた時、俺はその光景を見ていらなくなつた

「いい加減にしろ」

俺はセシリアと凰を縛るワイヤーを、手に出したグラディウスで切り裂く

「なつ！？柳瀬！？ 貴様も・・・」「その手を離せええつー！」くつ

！」

激昂した一夏がエネルギー消費を無視してラウラへと突っ込んでゆくなぜか一瞬だけ動搖したボーデヴィッヒだったが、一夏の突撃には冷静だつた

「感情的で直線的！絵にかいたような愚図だなー！」

手が差し出される

そしてそのまま、一夏は動きを止める。いや、止められたのだろう

『あの時、トリックスターを止めたのと同じもの……？』

「だろ？ な」

「な、なんだ！？ くそつ……体がつ……」

そのまま、小さくなつてゆく零落白夜  
ここまで距離を、瞬時加速と零落白夜使いながら突つ切つてきた  
んだ

エネルギーなんてもう残つてないだろ？

「やはり敵ではないな。私とのシユバルツェア・レーゲンの前では、貴様も有象無象の一いつでしかない。消えろ！」

肩の大型カノンが、一夏へと向く

「……だから、いい加減にしろつていいだろ？ が」

さつき凰にやつた要領で、カテナをレーゲンの砲身に絡みつけ、無理矢理引き上げる

砲台そのものは動かなかつたものの、砲身がひしゃげ、爆発する  
たぶん、すぐに砲撃するのは無理だろ？

そこに入るシャルルからのアサルトライフルによる弾丸の雨

「ちつ……」

さつきの力で受け止められるアサルトライフルの銃弾  
その隙に、俺は鎧でボーテヴィッヒの動きを止める

すぐに瞬時加速で間合いから逃れる一夏

・・・あんまり白式に無茶せんなど。お前は

「「一夏、二人は？」」

足を止め、三つの銃口でボーデヴィッヒを狙う  
連射速度は到底シャルルに及ばない。というか、効果あるのかも微妙  
妙で、シールドに完全に止められていた

「う・・・、一夏・・・」

「無様なところを・・・お見せしましたわね」

「喋るな。シャルル、薰・・・大丈夫みたいだ。二人とも意識がある」

「そうか。ならいい」「よかつた」

射撃の手は止めない

ボーデヴィッヒの頭は冷えないだろうが、とりあえずあの二人を何とかしないと・・・

「面白いー。世代差というものを見せつけてやるー。」

今まで見えない力で防がれていたシャルルの弾丸

それが届くようになつたと思えば、鎖がプラズマ手刀でいともたやすく焼き斬られる

「！？ さつきはあんなに頑丈だつたのに・・・」

『・・・衝撃みたいな力には強いけど、熱に弱いみたいだね』

なんだそれ！？

ボーデヴィッヒは姿勢を低くし、突つ込む体制をつくる

「行くぞ・・・」

「くつ！」

「シャルルっ！」

「・・・やれやれ、これだからガキの相手は疲れる」

そんな声が聞こえたと思ったら、シャルルとボーテヴィッヒの間に何かが飛び込んだ

ガギイン！

「・・・織斑先生か」「千冬姉ー？」

なら納得だ

というか、ISの部分展開一つなしに、IS用の近接ブレード（1

50センチ超）を軽々と扱つてあの横槍だ

・・・失礼ながら、人かどうかを疑つてしまつレベルの離れ業だと  
思つ

「模擬戦をやるのは構わん。だが、アリーナのバリアーまで破壊するような事態は、教師として黙認しかねる。この戦いは、学年別トーナメントで決着をつけてもらおう」

「教官がそうおっしゃるなら」

「了解ですよ・・・ふう」

ボーテヴィッヒと俺は素直に答え、ISを解く

「織斑、デュノアもそれでいいな？」

「あ、ああ・・・」

「教師の問には『はい』と答える」

「は、はいっ！」

「僕もそれで構いません」

そして、織斑先生はアリーナに居た全生徒に向けていった

「では、学年別トーナメントまでの私闘を一切禁止する！解散！」

## ケジメと鬱乱（前書き）

この辺から、作者の下手さが如実に表れてきてくる気がします  
気にいらないようだったら、ブラウザの『戻る』を押してください

## ケジメと錯乱

「 . . . .  
「 . . . .」

場所は保健室。第二アリーナでの騒ぎから小一時間が経過している  
ベットの上では包帯を巻かれたセシリアと凰がむすーつとしている

まあ、仕方ないか

あんなボロ負けしてたところを一夏にみられてるんだからな

「別に助けてくれなくてよかつたのに」

「あのまま戦つていれば、駆つていましたわ」

「・・・それだけ強がりが言えれば、大丈夫だな」

「強がりじゃありません！（ないわよ！）」

怒られてしまった

「大体、なんでアンタはアイツの味方だつたのよ！」

「そうですわ！なんであんな人なんかと・・・」

「あー・・・黙つてたんだつけ？そういうえば、俺はボーデヴィイツヒ  
から指導してもらつてんだ。ISの」

「えつ！？」「なつ！？」

そんなに驚くことかなあ

「な、なんであんな人の指導を・・・」  
「だつてお前ら一夏に掛かりきりだつたからな。邪魔しない方がいいと思つて。色々な意味で」

「・・・・・」

何故黙る。そして目をそらすな

「ま、まあ、二人とも怪我が大したこと無くて安心したぜ」

一夏が間を繋ぐように話しかける

「こんなの怪我のうちに入らな いたたつ！」

「そもそもこうやって横になっていること自体無意味 いたたつ！」

「ほらほら。大人しくしてねえと長引くぞ」

一夏の表情がちょっとだけ変わる。あれはバカにしてる表情だ

「バカって何よ！バカって！バカ！」

「一夏さんこそ大バカですわ！」

「お前つて、本当に顔に出る奴だな」

それとも、この一人が敏感なのか  
さすがは恋する乙女

「好きな人につっこ悪いところ見られたから、恥ずかしいんだよ  
「ん？」

そういうながらシャルルが入ってきた  
手にはウーロン茶と紅茶を持っている  
こういう気配りができる辺り、やはり紳士だ。いや、女だから淑女  
か？「うーん？」

「ななな何を言つてゐるのか全つ然わからないわねー。」これだからヨーロッパ人つて困るのよね！」

「べべつ別にわたくしはつーそういう邪推をされるのはこさか気分を害しますわね！」

「……素直じゃねえの。まあしようがないか  
今のやり取りでも、一夏は気づいていない。というか、シャルルの言葉が聞き取れていなかつたのか、怪訝な表情をしている

「どんだけ都合のいい耳してんだよお前は……」

「ん？ 何がだ？」

ウーロン茶と紅茶をひつたくるようにして、一人とも受け取つてはそして、ペットボトルを開け、「ぐぐぐ」と一気に飲みだす

「・・・それより。ごめんな、一人とも」

「ふはつ。・・・何がですか？」

「ボーデヴィッヒだよ。俺も、もう少し早く止められてたら……」

「ふはつ。・・・別に、アンタが謝るようなことでもないわよね」

「師の暴走は、弟子にも責任はあるさ。・・・それに、この事で恨みとか残してほしくないんだよ」

アイツは今一人だ。多分、今まで

どれぐらい寂しいもののかは、ただの学生の俺は知らない  
だけど、このことで周囲とさらに距離が開いたら、それはアイツのプラスにはなりえない

全てを水に流すのは無理な話かもしれない

『悪いと思ったら素直に謝れ。謝られたら、何があつても赦せ』ウチの家訓だ

別にウチの考えを押し付けたい訳じゃない。だけど、どうか寛容な心を持つて赦してほしい

ただのお節介なのは承知の上。俺の自己満足でしかないことも、承知している

だけど、一つのけじめをつけるべきだと想つ

頭を下げながら、俺は言葉を続ける

「気が済まないなら、後で俺に怒りをぶつけたって構わない。だから……」

「頭を上げてください……仕方ありませんね。薫さんに免じて、今日のことは不問にしておしあげますわ」

「本当か？」

「ええ。相手を赦す心を持つことも、貴族の務めですもの。鈴さんも、それで構いませんわよね？」

「……そう言われて、やるさないのも子供よね」

「……ありがとう」

当然ですわと言いたげな表情のセシリ亞

そして、それが起こったのは同時ぐらいだった

バアアアン！

保健室のドアが飛ぶ。比喩表現なしで、飛び

そして、綺麗な放物線を描いてドアは床へ軟着陸。窓ガラスが砕けることなし。位置は元あつた場所の真正面。距離よし。俺が審査員なら一〇点だ

なんの競技かは分からぬ

「織斑君！！」

「デュノア君！」

なだれ込んでくる女子の群れ  
集団は、シャルルと一夏を見つけるとバーゲンセールよりしきわら  
わらと集まつてくる  
近くに居た俺も一緒に囲まれる

伸びてくる手手手手千手手手

・・・バーゲン品つてこんな恐怖を感じながら売られてゆくのだろ  
うか

「な、な、なんだなんだ！？」

「ど、ど、どうしたの？」「ちよ、ちよ、ちょっと落ちついて・・・」

「「「」」

女子ズは息巻きながら何かの用紙を見せる

「な、なになに・・・」

「『今月末に行われる学年別トーナメントは、より実践的な模擬戦  
闘を行うため、二人組での参加を必須とする。なお、ペアが出来なかつた者は抽選により選ばれた生徒同士でくむものとする。締め切りは』」

「ああ、そこまでいいからーとにかくつー」

バツ！

規則たやすく、いつせいに一夏とシャルルに伸びてゆく手

アレだな。なんでか少し前のカードであつたよな。手がわらわらで出来て墓地に引きずり込むようなストリガーナの、肝心なところで発動しないことが多かったなちなみに、俺のところにはなぜか一本もこない。ちょっとホツとしたような、何だか悲しいような、そんな気分の俺がいる

「私と組もう！織斑君！」「私と組んで！デュノア君！」

んー・・・なあ、アル。どう見ても全員一年生だよな

『うん。リボンの色が青いもん。ボクが見た限り、この場に居るのは全員一年生。・・・先手必勝？』

だろうなあ・・・一度、俺の評判を聞いてみたいもんだよ。まったく・・・

『こないだのときと言い、全然いないもんね。柳瀬派』

まあ、ここまで積極的になられるのも怖いけどさ・・・

「え、えっと・・・」

まあ、非常にまずいわな

シャルルは実は女だから、誰かと組む訳にはいかないな

シャルルは困り果てた顔をしているのが見えた  
一夏の方を向くが、すぐに目があつて視線をもじす

「・・・悪い、俺はシャルルと組むから諦めてくれ！」

うん。ナイス判断

「じゃあ一夏、後任した」

「え？」

「俺は行くところあるからね。そんじゃ、お邪魔」「

はいはい道開けて。ほら、山田先生も入りにくそう……って、なんでいるんだろう?

彼女は一人だった

一人で食事を摂り、そのまま一人で部屋に戻っていた

(・・・今日は、やりすぎたか)

彼女、ラウラは一人部屋の中で物思いにふけっている

(いや。自分の身の程も知らずに私と戦う、弱いアイツらが悪い。  
そうだ、弱いのは罪だ)

そう自分に言い聞かせ、正当化。そこで思考の先を変える

(それよりも!なんで、なんであいつが・・・)

ラウラが今日一番驚いたこと

それは、薫が師である自分に銃を向けたこと

(やはリアイツも!アイツもそつなのか!?)

一夏を叩きのめすこと。それは、ラウラにとつては今一番の願い  
それを邪魔した薫は、ラウラにとつては裏切りに等しい事をしたのだ

驚いたし、そして、そして、悲しくなった

(アイツだけは！アイツだけは……)

自分を裏切つたりしない。そう思つていた  
師と弟子という関係ではあつたが、ラウラは少なからず薫に気を許  
していた  
だからこそ、銃を向けられた事に動搖を隠せない

ガツ

そこでドアが開くも、途中で遮られる  
チェーンロックが掛けられている

「……あの、入れないから、ロック外してくれないか？」

「いやだ。今日は外で寝ろ」

「……そうですか」

そういうて、ルームメイトは扉を閉めた

一夏を倒すことを邪魔したことを怒ればいいのか  
だんまりを決めればいいのか

何事もなかつたかのように今日の戦闘を振り返ればいいのか

どうすればいいかも、わからなかつた

「……ふう」

部屋の窓を開ける

初夏の夜の空氣は涼しかった

「……どんな顔をして、アイツにあえぱいいんだ？」

今アイツの顔を見ると、今日の自分が見えてくる

(その瞳には、今日の私はどんなふうに映つたのだろうか……)

今まで逆らつた事がなかつた、距離の近くなつていていた薰だからこそ、それを聞くのが一番怖かつた

「いんな顔して逢えばいいんじやないか？」

そうこうで、ぬつと上から何かが出てくる

「あやあつー」

思わず腰を抜かし、その場にへたり込んでしまう

「わざわざ、着地点を開けてくれてどうも。よつと……」

ニシシと笑つて、それは部屋に飛び込んでくる

・・・薰だった

『キミ、大丈夫ーっ！？』

『大丈夫ですーありがとうございましたー』

そんなやり取りを、上の住人とかわしている

そのやり取りが終わった後、ラウラの口から一言

「お、お前は何をしているんだ！？」

「んー？ だつて、扉が使えないんじゃ 窓から飛びこむしかないだろ？」

？」

「どうしてそんなことが……」

「いやあ。アルカナは万能だねえ。待機状態なのに、伸びたり縮んだり。しかも三十人くらいなら問題ない強度と来た」

しゅるんど、薫は鎖を上からおろしていく

その鎖はそのまま縮み、いつも通り、腰にくつつくウォレットチエ

ーンとなる

「輪のサイズも変わればいいのにねえ。そつすりやリストバンドみたいに……」

「……どうして」

「ん？」

「どうして、私を一人にしない！」

ダン！

気がつけば、ラウラは薫を組み伏していた

「うわっ！？ なに！？ なんですか！？」

「どうして、どうしてお前はそつなんだ！」

どうして私を一人にしてくれない！

「はあ！？」

「お前が！ お前さえいなければ！」

自分を見失うようなことは無かつた！

「どうしてーお前はつ！私の価値をーこんなにもー」

憎悪のこもった瞳で、ラウラは薰を睨む  
手は次第に首の方にいき、気道と頸動脈をふさぐ

「うつ・・・がはつ・・・お、落ちつけ、と、とにかく俺の上から・  
・・」

「どうしてー何故！お前はつー！」

ラウラは、完全に薰の話を聞いていない

目の前が酸欠と貧血でちかちかしてくる

(えりそろ、やばい・・・)

そう思つた時、薰の中の何かがまたはじけた

「い、いい加減に、しろつ・・・」

極力女に暴力をふるいたくは無い薰も、さすがに我慢の限界だ  
ドン！

「うつ・・・」

ラウラの腹に膝を入れ、以外にも怯んだ隙に姿勢を逆転させる  
そして、待機状態の鎖で縛りつける

アル

「こいつー、このつー

「はあ・・・。はあ・・・。暫く大人しくしてお・・・話ができる  
位までは、な

そう、深呼吸をして脳に空気を送りながら、薰は言った

## ケジメと錯乱（後書き）

錯乱している上に、力任せになつてている人は、意識外からの攻撃に  
怯む・・・  
素人の薫が、ラウラをひっくり返せたのは、生存本能とか、そういう  
のも働いたおかげでしょう

現実ではどうなるか分かりませんが、今回はそういうことにしてお  
いてください

以上、醜いイイワケでした

p.s .

諸事情により、今回は10月6日分の先行投稿となります  
次回は10月8日です

## 相棒（前書き）

えーと、オリジナル要素を盛り込んだ結果、大変見苦しいものとなつて いるかと思われます。どうか、ご容赦を

ラウラ side

私は、縛られたまま暴れていたようだった  
どれくらいたつた分からないが、しだいに無駄といつこと分かり、  
頭の中が冷えてくる

「まあ、これでも飲んで落ちつけ」

その様子を見た薫が拘束を解き、暖かいココアを差し出される  
ちびちびと飲みながら、『はああ・・・』と、ゆっくり息をはく

やはり、ホットココアはいい。身体の力が抜ける。程よい甘さ。心  
にしみわたるかのような、心地よい暖かさ  
よし、今度ココアが飲みたくなつたら柳瀬に頼もう

「・・・落ちついたか？」

「ああ。取り乱したりしてすまなかつた・・・」

「いいつてことよ。どう吐き出したらいいかわからない感情っての  
は、誰にでもあるもんな」

俺も親父にそういうの、グーにしてぶつけたなあと、笑いながら返  
していく

首には生々しい手のあとが残っている

それを見ると、後ろめたい気持ちになるが、本人がいいと言つてる  
からいいのだと、無理矢理納得させる

「……で、どうして私の価値を揺るがすのか？だつたか？」

柳瀬が聞いてきた

「……柳瀬。少し昔話に付き合つてくれないか？」

「……」

返ってきたのは、沈黙

「……そうか。なら、私の独り言だと思つて流しても構わない」

それを肯定ととらえ、私は喋ることにした

なぜか、喋りたくなったのだ

理由なんてない。あるとすれば、知つてほしい……だからだろうか

「私はな、薫。鉄の子宫で、遺伝子強化実験体として生まれ、そのときから軍人だった。戦うためだけに生を受けられ、育まれ、鍛えられていたのだ」

「……」

「知つているのは、いかにして人体を攻撃するかの知識。分かつているのは、どうすれば相手に有効な打撃を与えるかの戦略。それだけだった」

知つている、分かつてているというよりは、それしか知らない、教えられてこなかつた。と言つた方が眞実だ

「格闘を覚え、銃を習い、各種兵器の操縦方法を体得していった。私は、優秀だったのだよ。性能面において、最高のレベルを記録し続けた」

「・・・」

柳瀬はこっちを向かないが、しつかり聞いているのだろう

「それがある時、世界最強の兵器、ISが出たことで一変した。IS適正向上のための処置、『ヴォーダン・オージュ』によってな

「ヴォーダン・・・?」

「ヴォーダン・オージュ越境の瞳。擬似ハイパー・センサーとでも呼べるようなものだ。ナノマシンの移植により、脳への視覚信号の伝達速度を爆発的な速度向上。それに、超高速戦闘下における動体反射の強化を目的としたものだ。それを施した瞳についてもいえるな」

「・・・なるほど」

いつしか、私の独り言は、会話へと発展していった

「危険性も、不適合も全くなかつた

「はずだつた」

「これを見ろ」

そういうて、私は眼帯を外す

そこから除く瞳は、黄金の輝きを放っている

「・・・金色か。月並みなどばかもしないが、綺麗な色だな」「そつか？・・・話を戻すぞ。なぜかは知らないが、私の左目は金色に変色し、常に稼働状態のまま、カットできない制御不能となつたのだ」

「・・・よつは、ハイパー・センサーが開きっぱなしと同じか？」「あくまでも擬似だがな。似たようなものだろ？」「

思うところがあるのだろうか？少し苦い顔をしている気がするそして、『大変だよね』とでもいいたい様な、労いの目に変わっただが、構わず続ける

「そして、この事故によつて私は、部隊からも、IS訓練においても、後れをとることになった。そして、トップから落ちた私を待っていたのは、部隊員からの侮蔑、嘲笑。それに、『出来損ない』の烙印だった」

「・・・」

「ただでさえ、暗い闇の中にいた私は、さらに深いところへと落ちて行つた・・・」

「・・・そこに現れたのが、織斑先生だった、つてか？」

「そうだ。教官は、一筋の光のように現れた。そして、私はその指導を聞いて、実践していただけで、IS専門へと変化した部隊の中で、最強の座を取り戻すことができた。それに個別特訓などは一切なしに、だ」

「・・・お前の勤勉さの勝ちだろ？」

そういつともうると、何だかこそばゆい感じがしてきた

「そして私は、あの人の強さに、恐怖し、感動し、強烈に憧れた。だからこそ、私もある人のようになりたいと思つていて」

「なるほど。俺への指導も、それの一環だつたわけか」

「頭がいい弟子は話し易くて良いな。その通りだ。やり方は私のオーリジナルだがな」

なるほど、どうりでスバルタなわけだ

そう、柳瀬は返してきたが、これからもそのスバルタは続くだろ？  
いや、続ける

「だからこそ、織斑一夏が許せない。私にとつての光となつた教官を、不戦敗という汚名で汚した張本人を……」

「…………矛盾、してるなあ……」

頭を搔いている柳瀬

小言で何か言つたようだが、私は何か変な事を言つただろうか？

「その織斑一夏を完膚無きまでに叩き潰すためにも、力がほしかった。完全に叩きのめせるほどの、強大な力が」

「……それで、求めた力は手に入つたのか？」

「手に入りそうだった。だが……どうしていいか分からなくなってしまった」

「……？」

訊くのが怖いが、訊くしかないだろう

「今日の私の戦う姿、お前にはどう映つた？」

「……見ていられなくなつたな、俺は。折角強い力を持つのに、弱い者いじめのような事にしか使えないお前を、な」

教官の様な、恐怖、歡喜、感動ではなく、憐憫の対象。そういうことだろう

「だろうな。割つて入つた時のお前の顔は、みていて辛そつた」

力だけが、私のすべて。力だけが存在意義  
なのに、それを持つことに戸惑いを覚えているのだ

「これほどおかしなことはないだろ？。自分でも、やつ想つ

打ちのめされた悔しい顔、痛みと恐怖に震える顔を見るのと、優越感と悦楽を感じている自分がいる事は、結構前から知つていいだが、今まで一度も、憎々しい様な視線を飛ばされたことはあつても、今日の様な顔をされたことはなかつた

「・・・お前は、それでいいのか？」

「何がだ？」

「敬愛する教官（織斑先生）から学んだその力、下衆がやるところに使つて。それでいいのか？」

それを聞いて、さらに靄がかかる

今の私は、自分でもよく分からぬ・・・

「だから」私は、「のままでいいのかが分からぬ・・・」

少しの間の沈黙

だんだん気まずくなつてきたころに、柳瀬が喋り出す

「・・・悩むぐらになら、いつや進んじまうのはどつだ？」

「え？」

「足を止めてしまえば、思考も腐つてくる。悩んでも仕方ない時だつてあるさ。俺個人としては賛同しがたい目標だけど、『一夏を潰す』つていうのがあるんだろ？」

「ああ。それだけは、お前の賛同など得られなくとも、私の手でやらなければいけないのだ」

そう、私の手でやるからこそ、意味があるのだ

「なら今はそれに向かって進んでいくしかないんじゃないかな?」

「だが、お前は今日のようなことが起これば止めるだろ?」

「もちろん、俺が止める。殴られようが、腕を斬られようが、砲弾

喰らおうが止める

「・・・何がしたい?」

「つまりはだ、弱い者いじめにならない程度であれば、一夏と戦つても良い。そういうこと」

一夏をそれ以上潰すこと自体には、賛同しかねるが、それぐらいな

らしいだろ?

柳瀬は、そう続けた

「・・・織斑一夏は、お前の友人ではないのか?なぜ、それを潰す

のに肯定的になれるんだ?」

「友人だからこそ言える。アイツはただでは負けない

「何を世迷言を・・・」

「そう聞こえるか?強さの先のものとか、アイツは知ってるよ

「ふん。・・・強さとは力でしかないだろ?」

「うーん。お前にとつてはそなうんだろうけどさ。アイツの言葉を借りるのも癪なんだけど、力っていうのは《目的》でなく《手段》。そういうこつた」

訳が分からぬいで

「いつか分かるつて。ああ。それよつと・・・」

そういうて、ピッと紙を取り出した

どうやら、トーナメントのペア申請書のようだった

「これに、俺と出て欲しいんだ。お前の条件はなんでも飲むから。

な？」

「フン……いいだろ？ テーナメントで特訓の総仕上げとしよう。・・・但し、条件がある」

「・・・なんでしょう？」

師を敬うかのような態度

余裕だな

「本日付で、お前を破門にする」「えつ」

ピシリと、AICOを使つた訳でもないのに、薰は凍りつく面喰つた様だ

「そんな！ 酷い！ 総仕上げとか・・・」「そのかわり、私の『相棒』となれ・・・いいか？」「！」

今度は鳩が豆鉄砲をくらつたように驚いた

「・・・ああ！ もちろん！ これからようしくなつ！ ハカラカ！」

そういうて、奴は嬉しそうに笑つた

「次から次へと・・・本当に表情豊かな奴だな」

「？」

今度は、キヨトンとした顔をする  
つい、笑つてしまつ

「ひどいなあ」

そういうながらも、薫は笑っていた

ちょっとした騒動、と言つても生きるか死ぬかの瀬戸際 の後、ラウラが寝たから（布団に入るまでは目をつぶつていた。何度開きそ  
うになつたかは知らんが）、俺も寝ようかと思つたその時  
もう一人の相棒が話しかけて来た

『よかつたの？あれで？』

『いいんじゃないの？抑えつけ続けて大爆発させるよりはさ』

『・・・一夏くんは、自分の知らない所で巻き込まれてるね』

『対抗戦こないだのツケだと思ってもらつほかないな・・・。それにさ』

『それに？』

『男の友情的であれなんだけど、思いつきり戦つてみて分かること  
もあるんじやないかな？』

『ふーん・・・』

相棒（後書き）

といつ訳で、見事に相棒の座を勝ち取った薫でした

次の更新を予定している、10月10日は、おまけでアイマス短編  
を一本あげたいと思っています

なんせ、10月10日ですから。トクベツな日ですから・・・

## 学年別タッグマッチ 第一回戦

「いい加減にしろ!」

「アンタこそ! 調子乗つてんじゃないわよ!」

少し古ぼけた広い家

そこにはいたのは、中年の男と中年の女

「ふざけんな! 調子乗つてんのはおめえだらうが!」

「何よ!」

何をいがみ合つてこりのか、すうい剣幕で怒鳴りあつている  
近くで保育園児ぐるりの小さな女の子が、怒氣にあてられたのか、  
その顔をくしゃくしゃにして泣いている

「けんかはやめてよ・・・」

その近くで俺は、その子をなだめながら、ただ見ているだけだった

「起きあひ」

「つーん・・・」

「薰、起きあひと聞つてこるだらう」

「ゴスツ

「ゲフッ・・・。な、殴ることは無いだろ！殴ることは・・・  
「もう何度も呼びかけたんだがな。まったく、よく寝ていろいろな  
「最近、大分疲れがたまってるからなあ・・・」

やはり、弟子から相棒に変わったところで、今までと扱いが変わる  
訳もなく、俺はラウラから指導を受けていた  
まあ、やはり軍隊調というか、とにかくスバルタだった。その分的  
確で、力がついたのが実感できるものだつたけど、とにかくスバル  
タだった

「軟弱者め。もう少し、走りこむなりして体力をつけたらどうだ?  
「・・・そうすつかなあ。うん、そうするわ」

どれくらい走ればお前に追いつくかはわかんないがな

『一生無理だと思うよ  
ほっとけ

さて、ここはアリーナのピット

俺たちの一回戦は、Aブロックの第一試合

開幕戦だ。どうせなら、景気よく、ドンとこきたいよな

モニターを見れば、あふれん間ばかりの大観衆  
衆人環視の場で決闘つて、何だかコロッセオみたいだな

『コロッセオ?』

たしか、剣奴つていう特別な戦闘教育を施した人を、猛獸や、他の  
剣奴と戦わせるのを見て楽しむんだよ

『・・・趣味悪い』

まあ、そういうなつて。大衆に見られてる中で争うつて意味じやあ、

スポーツだって似たようなもんだらうし

「それにしても、妙な顔をして寝ていたな」

「どんな顔?」

「ムスッとした顔だつた」

そういうやうにして、このタイミングで昔の夢を見たんだらう?

『悪いと思つたら素直に謝れ。謝られたら、赦せ』

ウチにそんな家訓ができたのも、そのケンカからだつたと思つ

きつかけは覚えてないけど、終わり方は確か・・・

「おい。対戦表がでてきたぞ」

普通なら、前日までには出来あがつているはずの対戦表  
しかし、急なペア戦闘への変更のためか、本来の振り分けシステム  
が機能しなかつたらしい

結局、今まで生徒が頑張つて手作りでくじを作つていた

ちなみに凰とセシリアは、この間のラウラとの一件でIISダメージ

レベルが『C』になつていたらしい

IISは戦闘データやその他のデータを蓄積し、より自らを進化した  
形態へと移行させる

そして、そのデータは故障時のものも含まれる

何が言いたいかといふとだ。その故障時のデータを使つた場合、不  
完全なエネルギーバイパスを作つてしまい、逆に平常時の稼働効率  
が落ちてしまうのだ

骨折したのを無理に動かすと、筋肉を痛める。それと同じなんだろう

「お、えーと・・・俺らの相手は・・・」

対戦表を見るに、俺たちの対戦相手は・・・

織斑一夏

シャルル・デュノア

「まじか？・・・ラウ」織斑一夏は私がやる。お前は、デュノアの方をやれ・・・そうですか」

即答だった。早口だった。一秒でも早く叩き潰してやりたいらしい

「作戦は？」

「そんなものはない。あるとすれば、私の邪魔をしないといつ事だ」

・・・やつぱりか

一夏が絡むと途端にコレだ

まあ、仕方ないと言えば仕方ないのかもしれないが・・・

なら、せめてラウラが戦いやといよひに動いてやるしかないな・・・  
できんの？俺に

『そういうや、ボクたちはコンビネーションプレーって深くは習つてないよね』

やつこやうだなあ・・・

やはり男子三人（正確には一人）がほぼ貸し切り状態で使っているため、自然とここは人口密度が高まる

その中で、篠ノ之箇は一人、眼を閉じてじっとしていた

（・・・むう。初戦で一夏とアイツがぶつかるとは）

精神統一をしているようだつたが、心中は穏やかではなかつたラウラ・ボーデヴィッヒは、転校初日から一夏の頬をひっぱたいているのである

その後もケンカをふつかけてきたりと、何かと一夏を敵視しているしかも、先日鈴とセシリ亞を半殺しにしたらしい

（殺されはしないだろうか・・・いや、一夏なら問題ない。私が指導したのだ。負けてもらつては困る・・・それよりも）

篠ノ之箇は、もちろん一夏を誘いに行つた  
だが、その時にはすでにシャルルと組んでいた一夏  
当然返答はノ。アテがなくなつてしまつた箇は、どうするか考え  
ていた

そこに今のパートナーを連れて現れたのが薰だつた  
その時薰がつれていったのが・・・

「あれー？ 篇ぢやーん？ ねぢや だめだよー？」  
「・・・」

「・・・布仏本音だつた

別に不満がない訳ではない、本音はなぜかISの操縦が上手かつた  
のだ

ただ、リズムが合わない。それこそ、生活のリズムが違つとな、  
そんな根本的なレベルで合わない

「 篠ちやーん？」  
「 ・・・」  
「 ・・・モッピー？」  
「 その名を言つな！」  
「 おお。寝ちゃつたのかと思つたよー。よかつたー」  
(はあ・・・それよりも、柳瀬はあいつに影響されていないうだろ  
うか)

篠がラウラ・ボーテヴィッヒに對して感じているもの。それは、近  
親憎悪

力だけを全てと考へているラウラは、過去の自分の姿を見せつけら  
れていくようで気にいらな

風の噂によると、柳瀬はそのラウラを師匠としたこと  
そして、篠は友人が多くはない  
その中の一人である彼が、昔の自分のように力に溺れてしまふのは、  
出来れば見たくない

(いや、今はあいつらについて考へないでおいつ)

こんなところで一人心配しても仕方ない  
一夏とペアになれなかつたのであれば、せめて試合を見届けよう  
そう思つて、篠はモニターを見ていたのであつた

「一発で当たるって、何の因果かねえ・・・俺ひ

「ああね?でも・・・」

「待つ手間が省けたところのものだ」

「そりやあ何より、いつうちも同じ気持ちだ」

「・・・せぬ気満々だなお前ひ」

「当然だ」「当たり前だ」

「・・・」

試合開始まで。あと 五秒。四、三、二、一、開始

「呪きのめく」

奇しくも、一夏とラウラが放った言葉は同じだった

## 学年別タッグマッチ 第一回戦（後書き）

次から、戦闘シーンです  
上達した気がしねえ・・・

アイマスの短編をこそっと上げてみました  
とりあえず、告知しておきます  
響お誕生日おめでとう

## VS — 夏&シャルル

「おおおつー」

一夏の先制攻撃。真っ直ぐラウラを攻撃

「ふん・・・」

ラウラはゆっくりと右手を出す。もうAICか

『アクティブ・イシャーナル・キャンセラー』英文頭文字をとつて  
AICとは、相手のHSの動きを止める『慣性停止能力』の事だ  
原理を話すと長くなるから端折る（知らない訳ではない、断じてだ  
！）が、AICのエネルギー波を当てるによつて作用している

こんなチャチな解説の間にも、ラウラのAICの波は一夏の腕、胴、  
足と絡めとつていく

「開幕直後の先制攻撃か。・・・私が予想していなかつたども？」

「・・・以心伝心で何よりだな」

「ならば、次に私がすることも分かつてゐるだらう」

ガキン！ と音を立ててリボルバーが回転、砲弾を装填する  
早くも一夏に終わりが来そうだった

「・・・つと、ラウラと一緒に見ててもいられないよなつ！」

カテナを伸ばし、一夏を飛び越えて射撃しようとしていたシャルル

を狙う

ちなみにカテナの鎖は、輪が連結するように拡張領域から一つ一つ展開しているため、長さに限度はない。ただし、引っ込むように収納されるため、伸ばしきれないと床すのに時間がかかり、面倒くさい。

「くつ・・・！でも、させないよ！」

シャルルは器用なことに、回避しながらラウラに向けてアサルトカノンの爆破弾バーストを発射する

「チツ・・・」

爆発により肩のカノンをずらされ、一夏に放たれた砲弾は空を切るそこに入るシャルルからのマシンガンからの銃弾の雨・・・って、いつの間にシャルルは武器変えてたんだよ

たたみかける様なシャルルの攻撃に、ラウラはいつたん下がる

「俺を、忘れんなよなっ！」

回り込んでいたシャルルの真下から切り込むやつぱり自分から切り込むには心許ない得物だつたが、それでもシヤルルの射撃を止めるには十分だつた

そのまま、アル管制のトリックスターも駆り、ラッシュを仕掛ける

『マスターつて、意外と、接近戦多いよね！ボク、一応射撃型だよ！』

「細かいことは気にするな。それに、今はそれどころじゃないぞ」「じゃあ俺も忘れられないようにないとな！」

仕掛けようとした矢先、シャルルはぐるりと回転  
そこから出て来たのは、瞬時加速で突進してくる一夏

キィイイイイン！

得物と得物がぶつかるが、小振りの片手剣の俺の方が、リーチでも力でも不利

金属をこする音を立てながら、一夏の剣戟を受け流す  
そのまま左手に展開したフルメンを構え引き金を

「シャルル！」

「うん！」

引き金を引くが、そこに一夏はいなかつた

フルメンの光条が過ぎた後、真正面には両手にショットガンを構えたシャルルがいた

「しまつ

そこで急に、強烈な引力を感じる

ショットガンの銃弾を回避できたものの、このままでは振り回されてしまう

とつさにカテナを展開して、シャルルの腕にからめる

「！？」

「邪魔だ」

そういうて、ラウラは俺をシャルルごと引っ張り、壁の方へと投げつける

・・・多分シャルルの腕を反射でつかめたのは、アルの制御とワウラの訓練の賜物だな

「うあああつ！」

ワイヤーに牽引された勢いを回転に変え、半ばヤケクソで、シャルルを壁の方に投げつける  
カテナは展開方法上、根本から外すことが可能なのだ。鎖に直接触れないと戻せなくなるけど

ドゴォン！ と凄い音がして、壁がめり込み、土煙が上がる

「うう・・・今のは効いたなあ」

土煙が消えて来た頃、ようようと起き上がりつてくるシャルル  
どうやら出来づる限りの最大限の受け身で、ダメージを最小限に抑えたらしく  
致命的なダメージとはいかなかつた。いや、壁ドンドリでいくほ  
うがおかしいか

「こきなじやるなよ！ せめて一報ぐらい入れろってのー！」

とつあえず、プライベートチャンネルを開き、ラウラに一言

「アレで受け身をとれないほど、私の相棒は弱くないぞ」

「・・・そうですか」

そつこつたら言葉を返せないわな  
するこの

「薰はそのままデュノアを叩く。私は、織斑一夏を叩く！」

「了解だよ、相棒！」

もともと、『一夏はラウラが叩く』って約束もあつたしな  
今の一撃で、味方との距離は離れた。俺も、相手も  
二対一ではなく、一対一が二つの状況ができている

「手加減はしないよ？」

「そんなのはこっちから願い下げだ！」

「じゃあ、いくよっ！」

「こいやあ！」

そういうと、シャルルが剣を持って突撃していく  
俺もそれに剣をもつて応える

キィイン！

シャルルのソードが、俺のグラディウスの刃を削る  
剣戟を流し、こちらから再び切り結ぼうと距離を詰めるが

バン！

ショットガンによる攻撃をモロにくらい、エネルギーを結構削られる

「やば・・・」

距離を置き、フルメンによる射撃を行おうとすれば、今度は銃弾の雨  
一応射撃は出来たものの、動体への射撃は未だ難しい。命中率は芳  
しくなかつた

「クソつ・・・次から次に『ロロロロ』

『ざつと解析してみたけど、武器が急に変わるのは、カスタムされたり、ヴァイヴの能力じゃないみたい』

「そうなのか?」

『うん。それで、拡張領域の方には二十個以上も武器を確認したよ』

・・・ヤツはヨーロッパの火薬庫か。大戦前のバルカン半島か!

「それってつまり」

『うん。それだけの武器を、シャルルは扱えるってことだね』

「まじかよ」

武器や攻撃方法がこりこり変わるのは、シャルルの特技ってか?

そんな話をアルとしている間も、シャルルの銃撃は止まらない  
止まらないどころかそのまま突っ込んできて、気がつけば近接格闘  
に持ち込まれていた

「つたくー・器用だなー!」

「それはどうもー!」

剣戟を捌き、トリックスターで多角攻撃を試みるがあつさりとかわ  
され、さつきのように近距離ショットガン

半分程度被弾しながらも避ける

「くそつー・届きそうで届かない」ちらの攻撃。それに対しでさつきからずっと

攻撃を当て続けてくるシャルル

技量が、違すぎる。時間が立つたびにどんどん勝てる気がしなく

なつてくる

「ラウラツ！そっちはつ！まだかつ！？」

「黙ってくれ！くそつ・・・ちょこまかと！」

どうもあつちもあつちで一夏が粘つてゐるようだ  
といふかこれ、間違いなくシャルルに誘導されてるよな？さつきよ  
りも一人と距離が近くなつてる氣がするんだが・・・

「『めんね！そろそろ終わりにしよう！』  
「んなつ！？」

そういうて、瞬時加速なのか、一気に距離をとつたシャルルが出しだ  
たのは 口ケットランチャー？

ヨーロッパの寂れた村あたりで武器商人が売つてそつだつた  
・・・無限に撃てたりとかしないよな？

『対戦車用口ケットじゃないの！？アレつて！？』  
『正しくは、対E.S用口ケット、だろつ！』

弾の発射と同時に、射線から逃れる  
だけど

グググツ

曲がつた

「ありかよそんなの！？」

『熱源に向かつてホーミングするタイプだよー・マスター！叩き落とさないといつまでも追つてくるよーー』

「くそつ！面倒な！」

カテナではたき落そうとする  
が、武器の選択を誤った

カテナの間を掠りもせずに突き抜けてくるロケット弾

「！」おー！」

無理矢理カテナを引っこめることで先端の分銅にギリギリ当てる

とに成功

直撃は免れたが、爆発の位置が近かつた

ドオオオーン！

「うわあああっ！」

爆風に巻き込まれ、俺は吹き飛ばされてしまった

「先に片方を潰す戦法か。私たちには無意味だな」

ラウラは薰ははながら数に入れていないので、だけど、俺たちからしてみればそれは意味がある

とにかく俺は、シャルルが薫を倒すまでの間、ワイヤーブレード + プラズマ手刀の波状攻撃を耐えきることだ  
これらを捌きるのは容易ではない。距離を取りたくなるが、必死に食らいつく

「お前の武器はそのブレードのみ。近接戦でなければダメージを与えないからな」

それもある。それに離ればあのレールカノンのいい的だ  
なにより、また近づくために余計なエネルギーを使つてしまつ

とにかく、意地でも食らいつく！

右手に雪片を任せ、左手はラウラのプラズマ手刀　その腕 자체を払うのに使い、足でワイヤーブレードを蹴る  
ワイヤーブレードは正確にその側面を蹴らなければ、逆に足先がサックリ切り落とされてしまう

意識を集中させなければ、あつという間に終わりの状況なのだ

「うおおおつ！」

ガン！ギン！ガン！

零距离での高速戦闘

ふとした拍子に途切れてしまいそうな集中力を、シャルル信じて必死につなぎとめる

「・・・そろそろ終わらせるか」

ラウラがプラズマ手刀を解除する

刹那、ピシッと体が凍つたかのように動きが止まる。ラウラは腕を交差し、AICOを発動させている

「ふん」

「くそおおつーーー」

抵抗するも空しく、ワイヤーブレードの一斉射撃が白式の装甲を切り裂く。装甲の三分の一と、エネルギーの半分を持つていかかるラウラの追撃は止まらない。さつきの薫のように、足をワイヤーで掴まれ、地面にたたき落とされる

「がつ・・・・」

殺しきれなかつた衝撃に、情けない声を上げる  
すぐに体勢を立て直さないと・・・・！

「終わりだ」

その時、俺は、世界が妙にスローモーションに見えた  
砲口から溢れ出た炎と煙

それを突き抜けて、飛びだす砲弾

それは、真っ直ぐと俺の方に向かって

「おまたせー！」

ガギンーと重い音を立てて、シャルルの盾が砲弾を防ぐ

「・・・助かつたぜ。薫は？」

「お休み中」

シャルルのさした方を見ると、土煙が上がっていた  
中の様子はよく分からぬが、おそらくは薫がダウンしているのだ  
ら、

「さすがだな」

「その言葉は、試合に勝つてから、ね」

手に持つていたアサルトライフルを捨て、新たにマシンガンヒショ  
ットガンを呼びだす

「ここからが本番だね」

「ああ、見せてやるとこよ。俺たちのコンビネーションをな

「・・・薫。いつまでそつやつて伸びてるつもりだ?」

『わいい。まだエネルギーは結構残ってんだが、さっきのでスラス  
ターをやられたらしい。今ちょっと動けそうにないわ』

「分かった

『しばらく一人で頑張ってくれ』

「私を誰だと思ってこるんだ? そのくらいのことは、造作もなことさ」

「ふあー。すごいですねえ。一週間ちょっとの訓練であそこまで連携が取れるなんて」

教師だけが入ることが許される観察室で、モニターに映し出される戦闘を見て、真耶は感心したようにつぶやく

「やつぱり、織斑君は凄いです。才能を感じます」

「ふん。あれはデュノアが合わせてているから成り立つんだ。アイツ自身は、大して連携の役には立っていない」

身内には相変わらずの辛口評価の千冬に、真耶はやや苦笑気味にいう

「それでも、他人がそこまで合わせてくれる織斑君自身が凄いじゃないですか。魅力のない人間には、誰も力を貸してくれないものですよ」

一夏と薰の決定的な違いである氣もするが、ここでは関係ないので放つておく

「まあ・・・そうかもしれないな」

ぶすっとしたよつに「う冬

真耶はそれが照れ隠しだと最近分かつたため、何も言わない。それどころか、『やつぱり弟さん思いだなあ』と、しみじみ思う

「それにしても柳瀬くん、あつさり負けてしまいましたね」

「やはり経験の差だな。初心者にデュノアの戦法を攻略することは無理だろ？」

まあ、もつた方なんじゃないか？

千冬は興味なさむつにそつ付け加え、モニターに視線を戻す

そこには、一対一で互角に渡り合つてこるラウラの姿があった

「強いですね、ボーデヴィッシュさん」

「ふん・・・」

感心したように言つて真耶に対し、千冬は心底つまらなそうな声を漏らす

「変わつてないな。まだ強さと攻撃力を同一だと思っている。だがそれでは」

一夏に、勝てはしない  
それは心中にしまい、口には出れない。言つたら最後、真耶に何を言われるか畠田見当もつかない

わああああっ！

「あ、織斑くん零落白夜を出しましたね！　一気に勝負をかけるつもりでしょ？」

「さて、そつうまくいくかな」

「またまた、そつやつて気にしていないう度をしても」

「山田先生。久しぶりに武術組み手をしようか。折角だ、十本ほどな

「いっ！いえいえっ！私はそのつ！ええと、生徒たちの訓練機を見てないといけませんから！」

慌てふためく真耶をみながら、千冬は低い声でたたみかける

「私は身内のネタでいじられるのが嫌いだ。そろそろ覚えるよっ」「は、はい・・・」

見ていて可哀想になるくらいしょんぼりした真耶を見て、千冬もさすがにやり過ぎたと思ったのだろう  
頭を軽くポンポンと撫でていた

「さて、試合の続きだ。どう転がるか見ものだぞ」「は、はいっ！」

「んー・・・アル。どんな感じよ？」

俺はアリーナに出来たクレーターの中で、もう一人の相棒に問いかける  
ちなみに、三人とも俺なんか完全に忘れたように戦っている  
いや、ラウラがこっちに弾が飛んで来ないように動いてると考えておこう。ポジティブシンキングだ

『・・・ダメみたい。一回きりなら使えるかもしれないけど、修復不可能だね』

「・・・まじかよ」

戦うためのエネルギーはまだ充分に残っている  
だが、さつきの爆風でスラスターが潰され、飛べない  
翼が折れた鳥は、こんな気持ちになんだろうか

『背中に一基だけしかつけないつていうのは、さすがにダメだった  
ね』

「だなー・・・アレ(・・)しかないか?』

『今動きたいなら、アレするしかないね。多分、自力修復するより  
も時間もエネルギーもかかるないよ』

アレだな、修理するよりも新規に買つた方が安くて早いって感じだな

「んー・・・」

アレをやつたら、たしかに動けるだろ?  
だけど、問題はその後だ

今よりもダメージが増えるの?、あの銃弾の雨の中をビリ生きてるか

「まあそこは準備中に考えるとして、アル。よろしく

『了解。データ統合するから、ちょっと待つて』

「ん? こないだと違うのか?』

『こないだは、そのまんまブルーティアーズだったからね。今度は  
複数のデータを組み合わせた、ちょっと凝ったものにしてみようか  
なつて』

「ふーん・・・テーマは?』

『怖いもの』

「・・・大丈夫か?』

「コレで決めるー。」

そつ言いながら、零落白天を発動させた一夏はラウラに直進する

「触れれば一撃でシールドエネルギーを消し去ると聞いているが…。  
・それなら、当たらなければいい」

ラウラのA-HCによる攻撃が、一夏を襲う

一夏は、急停止、転身、急加速でそれらをかわし続ける

「ちゅろちゅろと田障りな…。」

そういうラウラはワイヤーブレードを展開。攻撃は熾烈を極める  
しかし一夏は先程と違い、一人で戦っている訳ではない

「一夏！前方一時の方向に突破！」

「分かった！」

そこに、シャルルの牽制。一夏への防御も忘れていない  
シャルルと組んでよかつた。そう、一夏は思った  
敵に回れば、十中八九勝ち目はないとも感じる

「小瀬な…。」

一夏はそのままワイヤーブレードを潜り抜け、そのまま射程圏内へ  
と収める

「お前の攻撃は読めている」

「普通に攻めればな。それなら…」

下げていた切つ先を起こし、身体の前へと持つていく

「！？」

これが、一夏が思いついた、対AIC戦法  
斬撃ではなく、突きで戦えば、読みやすさは変わらないにしても、  
腕の軌道は捉えにくいけれど、  
線より点の方が、捕まえるのは難しいのだ

「無駄な事を！」

凍りついたよつて一夏の動きが止まる

「よつは、お前の動きを止められれば」

「ああ、忘れているのか？俺たちは一人組なんだぜ？」

「つー？」

ラウラは慌てて視線を上げた  
だが遅かった

「ドン！」

零距離でシャルルのショットガン六連射を浴び、ラウラのレールカ  
ノンは音を上げて爆散した

そして、一夏を包んでいた、AICの網も解ける  
対象に意識を集中していないと、すぐに解除されてしまつ。AIC  
の弱点だった

「一夏っ！」

「おひつー。」

ラウラの顔に、ハッキリと焦りが浮かぶ  
必殺の一撃。間違いなく、そういうえる様な一撃が

しゅううん・・・

「なつ！？ エネルギーがつ！」

・・・一撃が入る前に、無情にもエネルギーが切れる  
情けない音を上げて、零落白夜の刀身が消えてゆく

「もう闘えまい！ 次の一撃で、私の勝ちだ！」

プラズマ手刀を展開したラウラが、一夏に寄つて斬る  
一夏は、必死で左右からの手刀による猛攻を弾く  
いつ崩れてもおかしくない

「させないよ！」「

「邪魔をするな！」

そこに牽制に入ろうとしたシャルルは、ワイヤーブレードによる正  
確かつ鋭い攻撃を受ける

「うわあっ！」  
「シャルルっ！」

「次は貴様だ！ 墮ちろつ！」

とうとう一夏に、手刀による一撃が入った  
火に手を突っ込んだような熱。電気を流されたかのような痺れ  
それらは、ダメージを受けた事を、高らかに主張している

白式からも、一夏からも力が抜けてゆく  
そのまま力なく、床にポトリと落ちた

「は、ははっ！私の勝ちだ！」

声たかだかに宣言するワウワ  
だけど・・・

「まだ、終わってないよ」

そこに超接近する物体

それはシャルルだった

「なつ・・・瞬時加速だと！？」

事前のデータには、瞬時加速ができるとは書いていなかつたのだろう  
酷く狼狽したラウラだが、同じくらい一夏も動搖している。パート  
ナーである彼ですら、知らなかつたのだから

「今初めて使つたからね」

「まさか、この戦いで覚えたというのか！？だ、だが、私の停止結  
界の前では・・・」

## AICを構える「リウ」

「これで、AICは  
「させつかよー！」

ダーン！

「ぐああつー？」

銃を構え、撃とうとした瞬間、一夏は何かに撥ね飛ばされた  
そしてその何かは、銃を撃たせまいと一夏をはがいじめにする

「薰！遅いぞ！」

「悪い！今無理矢理動かしたやつだから、また動けない！」

「なっ！お前はバカか！」

「バカバカ言つてんな！それより来るぞ！」

「つー！」

ラウラが田の前を向くと、そこにはシャルルがいた

「ここの距離なら、外さない」

「それがどうした！第一世代の攻撃力で、このシュバルツェア・  
レーゲンを落とすことなど」

そこで、ラウラはハツとする

「《シールド・ピアース  
盾殺し》……！」

「『』名答

盾がはじけ飛び、中からリボルバーと杭が融合した装備が現れる  
単純な攻撃力だけなら、第一世代型最強と言われた武器  
それは、拡張領域内にはない。ずっと盾の中に隠してあつたのだ

「「おおおおっ！」」

シャルルがそれにより行つ攻撃は、先程の一夏と同じ、点による攻撃  
しかも先程と違い、瞬時加速を使っての接近だ。全身にかけるには  
余裕がない  
つまりラウラは、パイルバンカーを止めなければならないのだ

「！…！」

狙いを澄まし、A I C 波を飛ばす

しかし、無情にもそれは外れた

ズガアーン！

「ぐうううつ！」

ラウラの腹部に、パイルバンカーの直撃が入る  
絶対防御が発動し、エネルギー残量をごそり持つていく

しかも、相殺しきれなかつた衝撃がラウラの中を駆け抜けたのだろう

苦悶に表情を浮かべている

「ラウラあ！」

薰は叫ぶが、何もできない

先程の強引な急襲で、本当にイカレてしまつたらしい  
背中のスラスターから煙が上がるだけだった

話は変わるが、シールド・ピアースはリボルバー機構を採用している  
つまり一発で終わりではなく、連射ができる

ズガアン！ズガアン！ズガアン！

さらば二発打ち出され、シユバルツェア・レーゲンからは紫電が走る

このままエラが強制解除され、この試合は終わり

そう誰もが思った時、異変は起きた

## 異変（後書き）

特に異変も起きてこないのに、異変といつタイトルの29話でした

次で30話

一日おきに投稿しているので、もうすぐ一ヵ月が経と感じています  
・・・時の流れって、早いなあ

## ヴァルキリー・トレース・システム

「んな、こんなとこで負けるのか、私は・・・

たしかに、相手の力量を見誤ったのは、私の重大なミスだ。だがそれでも！私は負けられない！

凛とした、私が憧れる教官を、腑抜た顔にしてしまうあの弟が許せない

そして、私の我儘に付き合ってくれた、たった一人の弟子の為にも

敗北させると決めたのだ。あれを、あの男を。完膚なきまでに叩き伏せると！

ならば、こんなところで負けるわけにはいかない

あの男はまだ動いているのだ。一度と立ち上がりなくなるまで、徹底的に叩き潰す！

そして、そのためには

力が、欲しい

どくん。と、私の奥底で何かが脈打つ

『願うか？汝、自らの変革を望むか・・・？より強い力を欲するか・・・？』

いうまでもない。それがあるのであれば、私など 空っぽの私な

ど、何から今までくれてやる！

だから、私に、比類なき最強を、唯一無二の絶対を私によじかへ。

Dam ege L avel · · ·  
Mind Condition · · · U p-l ift  
Cer tifi cation · · · Cle ar

『Valkyrie Trace System』 · · · · ·  
BOOT

「ああああああああああ！」

突然、ラウラが絶叫を上げる。同時に、シユバルツェア・レーゲンから電撃が迸り、シャルルが吹きとぼされる

「一 体何が ！？」  
「なつ！？」  
「・・・マジかよ」

俺を含めて、戦っていたものは目を疑った

ラウラが、ラウラのISが変形していたのだ

ぐにゅりと金属が溶けるように装甲が曲がり、ラウラを包むそして地面につくと同時に、粘土をこねあげるかのようにして、再び装甲が形成される

出来あがつたものは、シュヴァルツェア・レーゲン『だつた物』

ラウラにぴっちりと張りついた様なラインを持つ全身装甲のISが、そこにはいた

眼のあたりにある赤いラインアイが紅い光を、あやしく放っている

『そつか・・・これが、ボクの感じていた《何か》・・・』  
「なんだよ、アレ・・・薰のISと同じやつか?」

ISは原則として、その基礎形状を急激に変化させることはない。出来ないと言った方が正しい  
しかし、原則女子しか動かせないISを、男子が動せたりしているんだ。この原則に例外があつてもおかしくない  
というか、現にその例外がここに存在している  
・・・例外だらけのはぐれ者だな。俺ら

「アル、あれってトレースか?」  
『・・・ううん。あんなブサイクな物、ボクのトレースと一緒にしないでよ。あんなのはただの模写だよ。・・・たぶんヴァルキリーの、ね』  
「・・・」

一夏が、無意識のうちに雪片を中段に構える

「！」

その刹那、黒いISが一夏に切り込む  
鋭い一閃。俺には刃が見えなかつた  
ハイパーセンサーを通してやつと、それが一夏の雪片を弾いたとい  
うことが分かつた

そして、そのままそいつは上段に《雪片の様な刀》を構える  
気がつけば一夏は下がり、それは刀を振り下ろしていたようだつた

「ぐう・・・」

一夏を見ると、刃が触れたのだろう。左腕から血が滲んでいる  
白式の姿は、そこにはなかつた

「・・・がどうした・・・」

「は？」

「それがどうしたああああつ！……！」

そう叫びながら、一夏は生身であることを殴りかかる・・・つて

「馬鹿野郎！死にたいのか！？」

カテナを展開し、一夏を鎖で拘束する  
それでもなおアイツに向かつて進もうとする一夏  
油断すれば、引き摺られてしまいそうだつた

「放せ！アイツふざけやがつて！アレは千冬姉の太刀筋だ！」

「だからって、このままお前をみすみす殺す氣はない！」

「邪魔すんならお前も・・・」

「いい加減にしろよ・・・」

カテナで一夏を締めあげ、床に叩きつける。もちろん死なない程度  
に、だ

「ぐう・・・」

「どうあえず、落ちつけ。そして、わかるよつて説明してみる」

叩きつけた衝撃と、床の冷たさで正氣に戻ったのか。一夏は、話だした

「……あれは、千冬姉のデータだ。間違いない。それは、千冬姉だけのものなんだ！それを、アイツは……くそおつ！」

「はあ……お前は、いつも千冬姉、千冬姉だな」

「それだけじゃねえよ。あんな訳のわからない力に振り回されてるラウラも気に入らない。エジとラウラ。どちらも一発ぶつたたいてやらないと気が済まねえ」

それには同感

「アル。お前待ちだぞ？」

『トレスの準備ならできるよ。一夏くんを離してあげて』

「……おーい。シャルル。大丈夫かー？」

オープンチャンネルでシャルルに訊く

「通信機器は回復したみたいだけど、『めんね。もう少しかかるかも……』

「……だそうだ。一夏、シャルルが回復するまで暫く見てやってくれ」

そういうて、鎖から一夏を解放する

「……俺の代わりのつもりか？」

「勘違いするな。お前の代わりにやるんじゃないよ。……『意地でも止める』つていっちまたからな。俺

「はあ？」

「こいつの話だよ・・・アル、始めてくれ」

『了解！ 構成データ反映・・・準備完了・・・よし！複<sup>トランクス</sup>写、開始  
つ！』

俺はある時のようご、白い光に包まれた

真つ暗な部屋のなかに、私はいた  
どこか、狭苦しいだけだったドイツ軍の宿舎に雰囲気が似ている  
しかしそこと違うのは、どこまでも真つ暗  
置いてある物さえ、光を返さない、漆黒の部屋

唯一光を放つ物体は、テレビのような何か

その光が照らす場所さえ、何があるのか分からない。輪郭が浮き出  
て見えるだけだった

この場所には、私一人しかいないようだった

「こいつは、どこだ？」

まず思いついてあらうがの疑問。それは思いついたが、すぐに解決  
する

理屈はないが、何となく、そつなんだろうと思つた

しかし愚陋しきな。こいつは

部屋の狭さのせいだけではない気がする

ガン！

テレビからの音につられ、私はその映像を見てみる  
そこに映つたのは、私が先程まで戦つていたアリーナだつた

ああなるほど。これは私か

すぐに、この映像の意味を理解した

これは、今の私。正確には今のシユバルツェア・レーゲンか

あの男の唯一の武器である刀を弾き、斬撃が決まる  
奴は避けたが、切つ先がかすつたのだろう。EISは解除され、腕から  
は血を流している

もう闘えないであろうといつが映された時、声が聞こえて来た

『・・・これが、汝の力だ』

違う。私が求めた力は、こんなものではないのだ

もつと息苦しくなる

狭かつた部屋は、さらに狭くなつてゆく

私を部屋ごと締め上げるかのように、押しつぶすかのように

『違う？ 汝は最強の、唯一無一と呼べるほどの力を手にしたのだ  
ぞ。・・・なのに、違うだと？』

そうだ・・・私の望むものは・・・教官は・・・ぐううつ！

苦しい。呼吸と一緒に、思考が止まつてゆく

誰か・・・助けて・・・

そう願った瞬間、目の前のテレビから光が溢れ、私を包みこんだ

## ヴァルキリー・トレース・システム（後書き）

ところの事で、30話目でした

もつ投稿開始から2ヶ月です

ここまでずっと、一日に一度で更新できたのは自分でもビックリしています

第三章からへんからはちょっとペースが落ちるかもしれません。悪しからず

## 黒い幽霊『アーテルレムレス』

俺を包むように溢れ出でていた、光が弾ける。花火のように、虚空中に消えていった

『アルカナ・アーテルレムレス（黒い幽霊）。複数終了だよ』  
「薰……それってアレと同じ」

「いや、あんなのはただのロボー。アルのトレースとは違うんだよ」

そうこうして、俺は新しくなったアルのスペックを確認する

『『怖いもの』がテーマだったけど……まさか、ここまで露骨に出すとはな』

黒くてボロボロのマントで本体を覆い、武器はプラズマ手刀を模したのだろ？ か。プラズマ状の刃の大鎌が目を引く  
射撃武器は一丁のクロスボウのようだ。二丁とも腰にマウントされている

フェイスガードも兼任するかのような仮面のようなハイパーセンサーまで髑髏を模しているというあたり、手が込んでるとしか言ひようがない

ハツキリ言って『死神』だ

「……もつといひ、騎士サマとか、カッコイイもの無かったの？」

漫画とかだと、いつの間にか騎士が颯爽と出てくる場面じゃん？

間違つても死神様が通る場所じゃないと思つただけど……

『データがなかつたからね。諦めて』

・・・はあ

「・・・まあいいか。よし、いくぞアル！」

『うん…』

鎌を構える

すると、先程のよつに一気に斬りこんでくる、黒いHS

ハイパーセンサーや計測されたデータで、からつじて太刀筋が捉えられる

それくらい、剣の速度は速かつた

ガン！

「うがつ…」

見えないほど速い斬撃。俺は、鎌の柄を前に出すことで防ぐ  
だけど勢いを受け止めきれず、そのまま後方に吹き飛んでしまつ  
追撃と言わんばかりに、吹き飛んだ俺に切り込んでくるHS

「つーこつまでも後手後手でいられるかつてーのー！」

ぐるんと反転して姿勢を整え、壁に足をつき、屈伸運動で勢いを殺  
し、そのまま壁を蹴つて相手に飛びかかる

「うあああつー！」

そのまま鎌を振り上げて突進

相手も切り返すため、受けの姿勢を作り上げる  
このままいけば、カウンターで切り捨てられる

だが、それは意味のない事だった

「――？」

緊急回避の要領で進路を上に急変更。そして、そのまま腕をつきだす  
布からはみ出た腕は、骨のように細かつた

ガガガガガガガガッ！

金属がこする音を立てながら飛び出す、四つの鎖  
そのすべてが、黒いIISに襲いかかる

「――！」

やはりあの捉えきれない刀に全て弾かれる。だけど

「姿勢を崩したな――？」

相手に突っ込む  
要は、大鎌での突きだ

相手が武器の振る速さは、武器的な性質や個人差、経験等で圧倒的に俺を超える。そこは、今考へてもどうしようもない

なら、振らなければいい。斬りと突きだつたら、突きの方が速い・・・

・ハズ

こうすれば、俺みたいな初心者でも、あれとタメ張れるよつの攻撃ができる・・・ハズ

ハズばっかりだが、コレしか思いつかない。もし決まらなければそのままスライスハムだ

「 ！？」

慌てて姿勢を立て直し、突きを払おうと刀を振るう

「アルフ！』

『了解！イグニッショーン！』

瞬時加速。あの日の一夏のよつこ、一気に間合じを詰める  
払われることなく、俺の突きは決まった

ドオン！

ザシュツ！

「 つ・・・」

鈍い音と、何かが切り裂かれたような音が、ほぼ同時に聞こえる

アルのマントが切り裂かれ、どこかに飛ばされる  
下にあつたのは、骨のよつに全身を覆つ灰色の全身装甲

パキン！

装甲が割れ、少し遅れて赤いものが染み出していく

「・・・勝つた、よ、な?」

「ギ、ギ・・・ガ・・・」

相手のI.Sは紫電を発し、次第に光となつて消える

『マスター、ゴメン・・・ちょっと休むね・・・生命維持だけは・・・』

そういうて、アルも光を発しながら消える  
なんか、すげえ眠たくなってきた・・・

まぶたが閉じる直前、中から出て来たラウラと眼があつた  
いつもは冷たい光をたたえている深紅の瞳も、眼帯の下にあるあの  
綺麗な黄金の瞳も、助けて欲しそうな、捨てられた仔猫のような眼  
をしていた

今度は真っ白な空間にいた  
先程の光の中に引きこまれたらしい  
やはり真っ白でなにもないのだが、先程とは決定的に違うといふが、  
一つあった

あつたかい

ホットココアを飲んだ時の様な、心にしみわたるあの暖かさ

空間全体がそんな暖かさを持つている。先程の様な息苦しさは微塵にも感じない

そんな心地よさに浸つていると、一人の男が現れた

『どうだ?』の場所は?』

暖かい

『そつか。そうこうでもらえると、アイシも喜ぶよ。多分だけどな

そうこうで、そいつは笑う

お前は、いつの間にか私よりも強くなつてしまつたな

『あんなのは偶然さ。それに、あれはお前自身の強さじやないだろ? それじゃ、お前より強いなんて言えないよ』

結局、強さとはなんなのだろう?

『ん?  そうだなあ・・・俺が思つて、強さとは《赦すこと》かな?』

赦す?

『そうだ。一夏曰く、《強さとは心の在り処。己の拠所》。つまりは、自分がどうありたいかつて思うことだよな』

私が、どうあるか?

『そういうこと』

お前は、何故そう思うのだ？

『んー・・・それについてはちょっと長くなるかもよ?』

構わない。私に教えて欲しい

『そう? なら話そつか。・・・ある仲のよかつた夫婦がいきなり大ゲンカしたんだ。三日三晩も続いたそれは、とうとう離婚だのどうだのなんて騒ぎにまで発展したんだ』

それは、大変だな

『だろ? それが、四日目に終わって、気がつけば一人して笑いあつていたんだ。どうしてだと思う?』

何故?

『夫がとうとう謝つて、妻がそれを赦したんだ。・・・夫は、今ではすっかり尻に敷かれちゃってるけど、二人でいるときはいつまでも楽しそうに笑ってるんだ。・・・俺は、そんなのがうらやましくて』

なるほど

『だから思うんだ。赦し赦され、いつまでも笑いあつていられれば最高だつてな』

たしかにな。だが、それが崩れそつとなつたらいどうするんだ？

『そんとおり戦つぞ。それを崩れそつするやつ、自分とな

お前は、強いな

『いや、俺は強くはないよ。シャルルやセシリアにも負ける、ただのザーバ』

『もうこう事を言ったのではない。心が強いといったのだ。私と違つて、な・・・

『なにいってんだよ。らしくねえ』

『そうかも知れないな。・・・私は見つけられたのか？《本當の強さ》といつものを

『お前次第さ。少なくとも、力=強さじゃないことに気がつけたんだから、もう力に振り回されることもないだろ？だから』

だから？

『だから、一緒に笑おうぜ？《ラカラ》』

笑いながら、手を差し出してくる

その笑顔はとてもまぶしくて、思わずドキッとしてしまつ  
鼓動が早鐘を打つのが分かる。どうやら、ロイシの前では私もただの十五歳、ただの『女』のようだと告げているらしい

私は、その手が離れないかのように、ぎゅっと強く握りしめた

## 黒い幽靈『アーテルレムレス』（後書き）

ラ ウ ラ 陥 落

原作とほとんど変わらない。こんなのでいいのか。／（^○^）＼

アルカナの新しい形態、『アーテルレムレス』と、薫の見つけた、『強さの答え』でした。突拍子な感じは止めませんし、詰め込み過ぎた気もしますが・・・  
アルについての詳しい話は、また後ほどまとめてよづかと思っています

ついでに、作者はテンプレとかお約束とか大好きです。やっぱりしつくりまとめられますから

晴れ舞台が短いのは、まあ・・・尺の都合とこうした事で（笑）

さて、バトルのクライマックスを終えた訳ですが、恋のクライマックスはもう少し先です。

もうしばらく、作者の「都合」な妄想にあわせ合ってください

## 戦いのあと

「・・・知らない天井だ」

気が付いたら、知らない部屋の知らないベッドに寝かされていた

「あ？ 起きた？ 大丈夫？」

「あ・・・はい・・・」

どうせ、教師がいるところを見ると、保健室のようだ。

保健室の担当教師（名前は・・・なんだっけ？）が、訊いてくる

「キミも無茶するよね。一撃入れるために、自分が斬られるんだから

「・・・肉を切らせて、骨を絶つっていいますよね？」

「・・・はあ」

なんでそこでため息つくんですか

「そういうのもありかも知れないけど、IISが全身装甲じゃなかつたら、キミは少なくとも三日は寝たままだつたと思うよ。へタしたら死んでたかも・・・」

そんな攻撃だったのか、あれ

「IISに感謝しなきゃダメだよ？ キミの傷がもつぶさがってるのも、IISの生命維持機能のおかげなんだから」

ふと自分の格好を見てみると、上半身は何も着てなかつた

胸元には、見たことのない真一文字が出来ていた

「へえ・・・凄いなエス」

「でも、その凄いエスでもビリしようもないのが、あるみたいなんだよね」

「え・・・それってなんで・・・ぴぐう！？」

ふと膝を曲げようとすると、急に鋭い痛みが走る

「キミ、壁で受け身取った時に膝思いつきり曲げたでしょ？その時に異常な負荷がかかったみたいでね・・・」

「要は・・・関節痛、ですか？」

「うん、それも、かなり重症。動かすには問題ないんだけど、二、三日は痛むよ」

鎮痛剤をあげるから、動くときには使ってね

そういうて、錠剤を渡してくれた。水ナシ一錠らしい。すげえ苦そう

「それと、もう保健室出でいいよ。食堂に行つてなんか食べてくれば？」

・・・痛む足で？

「自業自得だよ。ちなみに、待つてもお見舞いの品とかはないよ

くつ・・・それで保健室の先生か？！

とは言わない。なぜなら、いつも無駄な気がしたからだ  
泣く泣く鎮痛剤を飲んで、俺はベットから立ち上がった

「そういえば、ラウラはどうしました？」

「ああ、ボーデヴィッシュさん？寮の方に連れていかれてたよ。多分自分の部屋じゃないかな？」

「うこうす。ありがと」「やこまわ」

そのまま、俺は保健室を去った

「いてて……」

とつあえず俺は、痛む足をさすりながら食堂に向かっている。こうやって歩いてみると、刀の傷よりも歩くたびに疼く膝の痛みの方がずっと辛い。膝をさすりながら、よぎよぎと歩く姿は、還暦じえた爺さんそのものなんだろうな。そして、眩暈がするほどの大空腹。リンゴ一個でもいいから、腹に入れておきたい……。

『細胞を活性化させたからね。消費も早かつたんだよ』

『ふーん……。で、結局あの空間はなんだったんだ？』

『んーと……。このマネットワークの影響だとおもうんだ。操縦者同士の波長が合って、その時に相互意識干渉が起きるんだ』

『ソーゴイシキカンショー？』

『えっとね……多分、テレパシーとか、そんなんじゃないかな？』

『へー……』

『それでね、マスターとラウリちゃんがいた空間は、その意識干渉が可視化されたもの。つまり、ボクの中だった……ってことにならぬのかな？』

「なるほど。って、やつぱり俺ラウリと会話してたのか?」

『つ』

「・・・夢じやなかつたんだ」

なんか恥ずかしいなあ・・・

「つーか、それじゃあお前きこひたのかよ」

『うん。カツコよかつたなあ、《だから、一緒に笑おつせ!》って  
といふ』

「・・・改めて聞いてみると、歯の浮く様な台詞だな

そりげなく自分がたりもしてゐるし、よく言えたな。あの時の俺

『やつぱり、ノコと勢こてに乗るのはいいけど、飲まれちやだめだね  
「そうだなあ・・・。言つてしまつた以上、なるようこしかならんか。  
・  
・』

『後悔してゐ?』

「まさか」

そういひてこひてこひて、食堂にひいた

「お、薰か」  
「あ、一夏にシャルル」

学食に入ると、少し遅めの夕食を摂つている一夏とシャルルがいた  
ちなみに時間はギリギリ。大方、事情聴取でもあつたのだろう

「薰、もう傷は大丈夫なの？」

「ああ。刀傷よりも、膝関節の方が重傷だよ。痛くてしおりがない・・・」

「なんだよそれ。ジイサンかよ

「・・・言わないでほしい」

自分でも思つてた事だけど、他人から言わるとキツイもんだな

「で、結局トーナメントは中止か？」

「そうみたいだね。データ取りのために一回戦だけは全部やるみたいだよ」

「まあ、あんなアクシデントがあつちや続けられないよな」

まあ、しょうがないよな

訓練結果を発揮すんのはまたの機会としよう

「・・・まあ薰。アレ(・・・)とお前のHSの能力ってさ、なんか似てるよな」

「いや、微妙に違う。動きまでマネするのか、そうでないといふとか」

「でも、装甲が急に大きく変形するといふとか、凄い似てたよね。・・・薰のHSはどこでつくられたの?」

「・・・さあ?拾い物だからな、コイツは

捨い物でなければ、捨てHSか?

『ペットみたいに言わないでほしいな』

「え、それって・・・?」

「なんことよりもだ。お前、篠ノ之はどつしたんだ?トーナメントが無効になつたんだから、やつぱり話自体がナシか?」

「いや、別に付合ひがりいいんじゃないか?」

「は?」

・・・そんな軽い感じでいいのか  
いや、暫く一緒に居て、事あるごとに思い知らされたんだった

「別イイだろ? 買い物ぐらー」

一 夏は鈍感であるという事を

・・・今更言つことでもないな。あまり強調しそうのも少へつた  
いだれうじ

「やつぱつやつこつとか。・・・お前つて、わざとやつてない?」

「何をだ?」

・・・だめだ!こつはやくなんとかしないと

「あ、三人とも揃っていますね。織斑君とテコノア君は、先程はお  
疲れさまでした」

気がつけば、山田先生がいた

「柳瀬君は、怪我の方は大丈夫ですか?」

「いえ、こんなの、怪我の内にも入りませんよ

『関節痛は?』

関節痛は怪我とはいはない。多分

「山田先生こそ、ずっと手記で疲れませんでした?」

「大丈夫です!私は昔からああいう地味な事得意ですからー。」

えへんと胸を張る山田先生。リンゴでもつめてんじゃないかと思ひ  
くらいいの膨らみが重たげにゆれる

・・・色即是空、煩惱退散、心頭滅却。目を下ろすな。目を見て話  
せば入つてこない

「・・・一夏のスケベ」

ぼそっとシャルルが呟くのが聞こえた

「ちよーちよーと待てシャルル！それは誤解・・・ムグッ」

とりあえず口をふさぐ

「誤解でもなんでもないだる。・・・それで俺たちに何か用事ですか？」

「あ、そうでした・・・三人に朗報です！なんと今日から大浴場が

使えます！」

「そうですか！　いやあ、てっきり来月からだと・・・」

「今日ボイラー点検があつたので、元々生徒たちはつかえないんですね。それなら、男子三人に使ってもらおうと。そういうことです！」

・・・一夏のテンションがぐぐっと上がったな

「そつか。じやあ一人とも、ゆっくりつかつてこいよ

「え？ 薫は行かないのか？ 折角の大浴場なのに」

「傷が開くだろ？ 今日はシャワーも我慢だよ」

「あ、そつか・・・お大事に」

「おう」

そのあとで、食堂の「まむやん」に頼んで、コンパクトを一個ほどもひらひらから部屋に戻った

「ただいまー」

やつぱり真っ暗。とりあえず電気をつけると、リカウは布団にもぐりついていた

「・・・まぶしー」

「悪い」

そういうながら、近くのシャンハイで買めたを調節する手元が見えないことはないくらいの明るさに調整して、俺は自分のベッドに座る

「・・・傷はもういいのか?」

「問題ない」と。それより、そつちは大丈夫なのか?」

「・・・全身打撲と筋肉疲労だそうだ。すぐくズキズキしていたが、今はいくらか楽になつた」

それでも痛いがな。そう続けた

「そつか。・・・といひで、ナイフとか持つてない?」  
「ん」

ラウラが、ナイフを取り出した

包丁なんかよりもずつしりと重い、人を切るためのナイフだった  
やつぱり軍人なんだなあと、しみじみと感じた瞬間だった

「まあいいや。どうせ、何も食つてないだろ?」

「そういうえば、何も食べてなかつたな」

「やっぱ一箇もらつてきて正解だつたわ」

俺は、リンゴの皮むきを始める

「・・・上手いな」

「小さい頃、よく剥いてたからな。料理つて程のものは出来ないけど、皮むきぐらいなら出来るぞ」

「やうか・・・」

リンゴを剥く音と、ほのかな蜜の甘い香りが部屋を包む

「・・・なあ、薰」

「なんだ?」

剥く手は手は止めずに、訊き返す

「お前は、なんであんなことを・・・」

「あんなことつて、ひょつとして最後の一撃のことか?」

「ああ」

たしかに、無謀だった。自分で振り返ってみてもそう思つ  
相手を止めるために、自分が死んでしまつては意味がない。だけど

「あの機会を逃したら、もう一度とチャンスは来ないとthoughtから

な。それに・・・  
「・・・それに?」

俺は皮をむく手を止め、ラウワを真つ直ぐに見る

「《斬られても止める》っていったら? 俺  
「・・・わづか」

ラウワは、寝返りをうつて、反対の方をむいてしまった  
・・・痛くないのか?

また屋内にリンゴを剥く音が響く  
そうじうすぬしづちにリンゴの皮を剥き終える  
六つに切り分けてタネを取つたものを、せりて半分に切る

「ナイフはあとで洗つとくわ」「わ  
「ああ・・・。お前はどつするんだ?」  
「俺は丸かじりだ」

シャクッと小気味よい音を立ててみると、口の中に甘い香りが広が  
つた

「お、甘いだ! れ。・・・ほり  
「う、うむ・・・」

わざと全身が痛む的な事を言つたので、口にリンゴを持つてゆく  
『はいあーん』といつやつだらつか。・・・いかん、意識したらい  
かん

シャク シャク シャク いくん

「本物」がこな。」のコンド・・・  
「だいへーわかがは食堂のおばあちゃんって感じだよな。素材から選んでる」

部屋にせっせつと一人のコンドを食べる音が響いた

「ああ、うるさいな」

- 1 -

全部食べ終わつた後、ラウラは急にうつむいて黙つてしまつた  
なんか、赤くなつていつてゐるような・・・

「アグシ、ハサミ、ヒト」

それは、いきなりだつた

暖かいものが唇に触れる。ラウラの顔が、すぐ近くにある

どうやら、キスされたらしい

「...・『?』」

層と層が離れた後、俺がかろうじて出せた声は、情けないことにそれがだけだった

「お、お前を、私の『嫁』にする！け、決定事項だから、異論は認めんぞ！・・・・けほつ」

照れ隠しなのか、急に声を張り上げるワカワカ

どうも、腹筋が痛かつたらしい、目に涙をためている  
ラウラを見てふと思つたんだが、涙目 + 上目遣いって最強だよな。  
つまり、そういうこと

「・・・婿の間違いだろ？」

「日本では、気にいった相手を『嫁』にするところの習わしがあるのだね？ ゆえに、お前を私の嫁にする」

・・・色々間違つてるな。情報ソースどこよ

どうでもいいけど『ジョーホース』って初めて聞いた時、新種のソースだと本気で思つてたことがあるんだ

「え、えーと・・・と、とにかくつ!俺はもう寝るからな!?な!

恥ずかしさの極みにいたり、着替えもせずに布団にもぐつこんでしまつ

経験のない」とにはとん対応できないへタれめ

だが、そこに追い打ちが掛かる

バタツ。モゾモゾ・・・

「！？！？！？！？！？」

何かが、俺の布団の中に入ってきた

「夫婦とは、全てを包み隠さず打ち明ける仲だと聞いたぞ？」

そういうつて下の方からもぞもぞラウラが入り込んできた  
服はもちろんきていない。全身痛いとか言いながら、器用な奴だ

しかしあかん・・・すつゞくあかん・・・  
いい感じにほの暗い部屋のせいか、ラウラが非常に色っぽく見える  
それに、リングの蜜のものではない、甘い香りが鼻をくすぐる

『あまり、変なこと考えちゃ・・・ダメだよ?』

そんな、何かの拍子にブツ飛んでしまった理性を保つていいら  
れたのは、頭の中に響く声があつたからだと思つ  
さすがは相棒。ノリと勢いに飲まそうになっている俺を助けてくれ  
るとは

「そ、それに、今日はこのまま寝たいのだ。・・・ダメか?」  
「え、いやそのそれはそのいきおいでのたいへんなことにあ、あ  
といょうちゅうがおこっちゃうかもしれな  
「・・・ダメか?」

また聞いてくるラウラ

・・・恥ずかしいからって、逃げてばっかじゃダメだよな  
「仕方ないなあ。・・・今日だけだから  
『マスター! ? なんで流されちゃうの?』  
変なことする気はないよ。添い寝だよ。添い寝  
『もし、変なことするようだつたら思いつきり絞めるからね』

そつこつて、腰につけている鎖が動く  
・・・なにそれこわい

「・・・ああ」

抱きしめたラウラの体は、柔らかくて暖かかった甘い香りを抱いて、俺は深い眠りへとついた

戦にのめのもと（後書き）

とこの事で、ラウラのトレーでした

「う、あ・・・」

天井からのぼやつとした光で、私は眼をあけた

「気がついたか」

その声には聞き覚えがある。  
いや、聞き覚えがあるなんでもない  
「どこで聞こうと一瞬で判断できる。白いが敬愛してやまない教官こ  
と、織斑千冬の声

「私・・・は・・・?」

「無理な負荷がかつたせいで、全身打撲と筋肉疲労がある。数日は  
地獄だらうが、まあ耐えろ」

「・・・薰、は?」

「アイツは特に問題ない。胸を斬られていたが、浅かつたんだろう  
な。医務室に運びこまれた頃にはISの生命維持機能だけで塞がつ  
ていたそうだ。まあ、刀傷だから痕にはなるだらうがな。それより  
も膝関節方が重症らしい」

「そう・・・ですか」

教官は私の気を逸らしたかったのだろう。やけに薰の状態について  
詳しく話した  
しかし、アイツが無事であるということはすでに分かっている  
それでは、私を誤魔化すことは出来ません

「何が、起きたのですか・・・?」

ゆっくりと上半身を上げる

全身に走る痛みに思わず声が出来なくなるが、そのままぐっと口ひげの

「ふう・・・。一応、重要案件であるついでに機密事項なのだがな」

沈黙が部屋を支配する

そこにある意図を汲んだ時、教官は話し始めた

「V-Tシステムは知っているな?」

「はい。・・・正式名称はヴァルキリートレースシステム。名前の通り、過去のモンド・グロッソにおける部門受賞者の動きを「ペーヴァルキリ」したもので・・・」

「条約において、すべての国家・組織・企業で研究・開発・使用を全面禁止されている。やはり、確認する必要はなかつたようだな」

何故、そのシステムの名前が・・・

「それが、お前のHSに積まれていた。巧妙に隠されていたがな。どうも操縦者の精神状態、機体のダメージレベル、操縦者の意思・・・いや、願望だな。この三つがそろつた時に発動するようになつていたらしい。近く、ドイツ軍に委員会より強制捜査が入るだろ?」

教官が話し終えた時、気がつけば私は眼をそらしてしまっていた

「私が・・・望んだからですね」

あなたになることを・・・

「・・・ラウラ・ボーテヴィッシュ！」

「は、はいっ！」

「おまえは誰だ？」

「わ、私は・・・私は・・・・・・・」

私はラウラ・ボーテヴィッシュでしかないとしかにそうなのだが、それを口にしようとしたら、引っ込んでしまう

遺伝子強化実験体C-0037というただの記号ですから、それは私に当てはまらない気がしてくる

私が誰であるか。その答えを、なぜかハッキリと言える自信がない

「誰でもないならうづうづいい。お前は、これからラウラ・ボーテヴィッシュになるとい。なに、時間はいくらでもある。あと三年間はこの学校に在籍することになる。それにまあ、死ぬまではずっとだ。たっぷり悩めよ。小娘」

「あ・・・」

あの厳しい教官が、私の事を励ましてくれた

その事実だけで、胸がいっぱいになってしまい、何かを言つべきなのだが、何を言つていいかわからない

教官はベッドから離れ、仕事に戻るよつだつた。だけど、結局何も言えず、餌を待つ雛のように口だけが開いていた

「ああ、それと」

思い出したよつこ、ひさしを振り返る

「お前は、私にはなれないぞ」

そうじつて、すたすたと去つてじつてしまつた

「ふふ・・・」

ずるい人だ。自分の言いたいことだけ言つて去つてしまつた

「ふふ・・・ははは・・・」

《自分で考えて、自分で行動しろ》

そつ言われた気がした

笑うたびに腹がズキズキと痛んだが、それさえも嬉しく感じてしまう負けたのに、今までで感じたことのないくらいの心地よさを覚えていり

「ウラ・ボーテヴィッシュは、これから始まるのだから

「ははは・・・よし、それなら・・・」

私はそのまま、ある人物にプライベートチャンネルで通信をつなげた

場所は遠く、ヨーロッパはドイツ軍の演習場

「35秒の遅れだ！何をしている！急げ！」

ドイツのHJ部隊である、シュヴァルツ・ハーゼ黒兔隊の副隊長、クラリッサ・ハルフォ

一フは今日も訓練で怒号を飛ばしている

十代の女子が多い黒兎隊の中で、彼女は唯一の二十代  
厳しくも面倒見良く牽引する、隊の『お姉さま』的ポジションとな  
つている

その彼女が駆る専用機、『シユバルツェア・ツヴァイク』に突如、  
緊急回線ともいえるプライベートチャンネルに連絡が入った

『クラリッサ。 私だ』

「隊長ですか。 定時報告にしてはこーセカが早い気もしますが・・・」

『いや・・・そりでなくてだな・・・すこし、訊きたいことがあります』

るのだ

「ふむ。 私に・・・ですか？」

隊長といつのは、ラウカの事である

彼女は齢15にして、ドイツIS部隊の隊長なのだ  
ついでに、階級は少佐。ドイツ軍の少佐なのである

『ああ。 私一人では、解決できなぞうでな・・・』

『部隊を派遣しましようか？』

『いや、そういう、軍事的なものでは、なくてだな・・・』

部隊の中でも人に頼るなんことはせず、隊長なのにどこか浮いて  
いた

いつもと違う黒兎隊隊長の様子に、クラリッサは【演習一時中止・  
招集せよ】のハンドサインを送る

すぐに集まつてくる隊員たち。このあたり、さすが軍人と言つべきだ

「では・・・一体どうした問題が？」

『実はな・・・好きな人ができるのだ』  
「・・・・・・・はい?』

以外な一言に、クラリッサは一瞬思考が止まってしまった  
先程の様な規律のある声でなく、半オクターブ程高い声がた

『だ、だから好きな人ができたのだ。それで、お、男の気を引くには一体どうしたらいい・・・?』

「・・・」

『ぐ、クラリッサ? その、黙つてないでだな・・・』

「も、申し訳ありません。そ、そうですね、日本には『氣にいつた相手を嫁にする』という風習があります」

『う、うむ・・・』

「そして、日本にはもう一つ、『郷ゴーイング・ゴウに入つては郷に従え』という言葉もあります。日本にいるからには、日本のルールに従え。という、先人の教えです」

『そりなのか・・・』

「つまり! 日本の風習に乗つ取り、その男を隊長の嫁にしてしまえばいいのです!」

『な、なるほどな! それで嫁にするには一体・・・』

「そこで誓いのキスです。隊長のキスで氣が引かれない男がいるでしょうか?! いやいない! どんな男だろうとイチコロでしょ!-!』

『・・・よし! 分かった! ありがとうクラリッサ!』

『いえ、当然のことです。・・・』武運を「

『つむ!』

そこで通信は切れた

「あの・・・副隊長?」  
「隊長は、一体・・・」

「それがだな……どいつも、好きな男ができたりしご

それをクラリッサが言つた時、何処からともなく銃声が聞こえて来た  
近くで、どこかの部隊が演習をしているのだろう。おそらくは

「え・・・・」

「「「ええへへへへつ……!……?……?……?」

まあ、聞こえて来たのはほんの三十秒からやうりで、すぐに女子の  
声でかき消された

「あの隊長に・・・好きな男が・・!？」

「私は、本気で織斑教官が好きなのだとばかりに・・・」

「そりだらう、そりだらう。私もそうだと思つていた。だがしかし、  
隊長が『男の氣を引くにはどうしたらいい・・・?』と言つたのだ  
ぞ!」

「「きやあへつ!」」

「だから私は教えた!日本には『氣にいつた相手を嫁にする』とい  
う風習があるという事を!」

「さすが副隊長!日本に詳しい!」

「当然だ、私は伊達や醉興で日本の少女漫画を読んでいた訳ではな  
い」

そういうクラリッサは、決めポーズをとつていた

先程までの、背筋が自然と伸びる様な空氣はなりを潜め、代わりに  
そこに漂うのはIFS学園の女子生徒たち(99·9%)となんら変  
わらない空氣だった

このあたり、さすが十代の少女たち(と、二十代の女性)と並んで  
きか

「か、かつこいい・・・」

「そんななかっこいい副隊長が好きです！」

「でも、可愛くなつた隊長はもつと好きです！」

「そつだろう！私もそうだ！よし、今日は祝いだ！」

「たしか、日本ではこういう時、赤いお米を炊くんでしたよね」

「そつらしい。おそらく、血よりもなお濃いものがあるという事なのだろうな」

「さすが日本！　痺れます！」

「憧れます！」

「よし・・・諸君！現時点を持つて訓練を終了する。今すぐ兵舎

食堂に向かい、赤い米を炊くぞ！」

「「はい副隊長！」」

その後、黒鬼隊にジャックされた兵舎食堂では、血よりもなお濃い赤をした米が出された

においや見た目からして、おそらくはケチャップ、タバスコ、トマトピューレ、赤パプリカ。とにかく食堂の赤い食べ物一通りを一緒に炊いたのだろう

全員分を、まとめて

米派のドイツ軍歩兵一同（大多数が男）が、泣きに泣いたことを、ラウラが知ることはなかつた

## Zeit nach dem Kriege(後書き)

・・・まずタイトルですが、ドイツ語で戦後という意味だそうですね。  
読みは調べなかつたのできかないでください

ラウラと黒魔隊がメインだったので、何となく出しただけです  
時期的には前回のチップスのきつかけを書いたものです  
もう少しまともなオチを考えていたのに・・・いつの間に

「うげ……時間ぎりぎりか……」

時間がぎりぎりになつた理由は簡単。事情聽取を受けていたのだが、まあ、事情聽取自体は三十分前ぐらいには終わっていたんだけど、その、膝が痛くて思うように歩けなかつたのだ

「うー・・・鎮痛剤のんでこの痛みつてなんだよ・・・」

『まあ、結構すごかつたからね。・・・《いろいろ》と』

その《いろいろ》にスプラッタのような惨劇が混じつていな事を祈るばかりだ

痛む足をさすりながら教室に入ると、シャルルがいなかつたついでに言つとラウラもない。だけど、あいつは俺と入れ替わりで事情聽取だから、当然と言えば当然だ  
ちなみに、もう全快らしい。うらやましいつたらありやしない席につくと同時に、始業のチャイムが鳴つた

「み、みなさん、おはよござります」

朝から山田先生はふらふらしていた。朝からショックなことでもあつたのだろうか

「織斑くん。何となく先生を子供扱いしようとしているのが分かりますよ。私、怒りますよ。もつ・・・」

ホントに顔に出る奴だな

しかし、山田先生には覇気がなかつた

「今日は、転校生を紹介します……というか、もう紹介は済んで  
いるというか……」

また転校生か？

I.S学園の性質上仕方ない気もするが、今月で三人目とか、一学期  
も終わつてないのに四人目とか、いくらなんでも多くな……

「じゃあ、入つてきてください」

「失礼します」

な……え？

「シャルロット・デュノアです。みなさん、改めてよろしくお願ひ  
します」

「という事で、デュノア君はデュノアさんでした。はあ……また  
部屋割が……」

問題点はそこなんですか。というか、シャルルってホントの名前は  
シャルロットっていうんだよね

「デュノア君つて女？」

「おかしいと思つたんだよね！美少年じゃなくて、美少女だつたつ  
てわけね」

「織斑君、同室だから知らなかつた訳じや」

「ちょっとまつて！ 昨日男子つて大浴場使つたよね！？」

「え！じゃあ柳瀬君も知つてたの！？」

「大浴場じやなくて、大欲情じやないのそれ！」

「いら、白昼堂々と女子がそういう事を言つもんじやあります。といふか、第四部の後の方とネタがかぶつてるぞ」「」

『・・・・メタ発言は自重しよつよ。マスター』  
メタ発言といふ発言そのものがメタだ！

そんな話はともかく、教室は次第に騒ぎ始め、あつといつ間に飲まれる

「・・・なんつーか、なんつーかなあ・・・」

『なにか、とつてもやな感じだよね・・・。』う、虎が飛んでくるよつな・・・』

バーン！

ドアを蹴破ったかのような音を立てて、ISが飛び出してきたこんな時間に、ISを展開できるクラス外の人間は、一人しかいない

「一夏あああつ！」

凰鈴音だつた。ISを展開し、烈火の」とく怒つているうわあ・・・虎じやなくて龍がきた。甲龍だけにちなみに、龍砲はすでに撃てる状態だつた

「死ねつ！」

あ、撃ちだした

『よく、こんな教室内で攻撃とか出来るよね』

十代の乙女とは、そういう、周りが見えなくなるものなんだらうな。

つて、そうじやないだろ！？一夏が・・・

ドォン！

余波で巻き起こった衝撃が開きっぱなしの教科書類を吹き飛ばす  
吹き飛ばされた教科書類の向こうでは、汚い花が

「あーあ・・・あれ？」

汚い花は、そこにはなかつた  
間一髪割つて入つた黒い影

シユバルツェア・レーゲンを纏つたラウラだった

「ふう・・・助かつたぜ。サンキュー。といひでお前、IS無事だつ  
たんだな」

「・・・」アは辛うじて無事だつたからな。予備パートで組み直し  
た

仕事速いな。壊されたのつてたしか昨日だぞ？

「へえ、それで・・・え？」

突然、ラウラが頭を下げた

「その、ここまで色々とすまなかつた  
「え？ ・・・あ、ああ。もう過ぎた事だからな。別にいいぞ」  
「さうか、それならよかつた」

すぐにまたいつもの調子に戻り、IISを解除して席についてしまった

「・・・なんなのよ！アイツ！」「  
「なんだつて、俺に聞くくなよ！」「  
「とにかく、死ねつ！」

そういうて、また龍砲を構える凰

「はいはい。いい加減にしような」

見かねた俺は、とりあえず腕部を部分展開する

「アル。対象は四名。サポート頼んだ」「  
『わかつたよ』

鎧が音を立てて、ある四人に向かう

「わっ？！」  
「うわっ！？」  
「ちょ・・・なんですかー？」  
「あやつー！」

アルのサポートもあるが、四本のトリックスター全てを操り、凰、一夏、セシリ亞、篠ノ之の順に捕らえる

「ちょ・・・薰、離せー！」

「何すんのよー。」

「とりあえず、お前たちは教室で暴れるな。他の子が巻き込まれたらどうすんだよ」

「う・・・それは・・・その

「目をそらすな」

「俺は暴れてないだろ!つー?」

ホントに一直線だな

「わ、私たちは何もしてませんわよー。」

「そうだ!」

「いや、銃と刀取り出すの見えたし。やつこいつのせ、廊下でやれ」

「あやあああつー。」

「薰ー!やめて!話せば分かるー。」

「問答無用!」

「やめてくれえええー。」

バンー

四人すべてを廊下につまみだし、鎖でドアを閉める

『さあ、一夏』

『覚悟はよひじへて?』

『・・・』

『うわよせなにをするやめアーッー。』

『い、一夏ー?』

『ゴーンー』 ところが爆音が、朝から学園にこだました

んー？

「偉い事をした人間には、報酬と言つものがあるはずだが？」  
「え・・・いや、なんのこと？」  
「だから、報酬だと言つてているのだ

赦すことも赦されようとすることも、結構勇気いる事だし  
恨みごととかなしで許せた一夏も、素直に謝ったラウラも偉いと思  
うぞ。少なくとも俺は

「え？・・・ああ、偉いんじゃないかな？」

「・・・ふう。スッキリした」  
「お前もなかなかやるな」  
「一夏は昨日イイモノ見ただろうからな。そのツケだよ  
「なるほどな。・・・みたいのか？」

「は？」

胸元を広げる仕種をされるまで、なんのことだか分らなかつた  
「・・・ああ、いや、そういう訳じゃないけど・・・。つーか、ど  
うしていきなり一夏に謝つたんだ？」  
「お前は言つただろ？『赦すこと』は強さだと。だから、私もアイ  
ツを赦すことにしたのだ。そうしたら、アイツに対する、今までの  
自分が子供のようだつたと思つてな・・・」  
「それで謝つたと。・・・なるほどね」  
「・・・偉いか？」

報酬・・・褒美・・・「」ほづび・・・

ティンときた！

「これか？」

ナデナデ

「ん・・・悪くないものだな」

「そうか？・・・よしよし」

頭をなでてやると、ラウラは気持け良さげに手を細める  
すげえ。みさとみたいだ

『いいなあ・・・なでなでいいな』  
『柳瀬君って、こうやってみるといいお兄さんだよね』  
『どうして私たち、今までスルーしてたんだろう？』  
『『『あ・・・?』』

そんな女子談義の中でも、穏やかな時間を過ごしている一人  
忘れてはいけないのは、廊下は阿鼻叫喚の地獄絵図だという事だ  
いまだに銃声や、壁のへこむ音、金属と金属がこする音が聞こえてくる  
そして、そんな地獄を潜り抜けた修羅が教室内にやってきた

「まつたく。お前たちとこうものは・・・青春を謳歌するのは一向

に構わんが、時と場所を選べ！！

スッパン×7

朝から、クラスには快音が響いた

やつて口算へ（後書き）

ところが、第一部は次でラストです

## Hピローグ・深淵への交渉人

『ねーねー。マスター』

「なんだ?』

『シャルル……じゃなかつた、シャルロットちゃんのこと、いいの?』

「ん? ……ああ、今はそつとしておくしかないんじゃないのか? 解決策もないし』

『フランスのシャルル・デュノアのデータを消しちゃうつていうのは?』

「んー……。それだけじゃだめだろ。デュノア社の人にも口止めしたりしないと、消したところでまた登録されるだろうし……『むー……あ! そうだ! マスター、ボク、ちょっと用事できた! ジヤー!』

「え? あ、おい……何なんだ?』

つーか、意識なのに入りできるんだ……変なの

そこは奇妙な部屋だつた

何かよく分からぬ部品が散らばつていて、ケーブルが樹海のよつに広がつてゐる

「いやあ、久しぶりに声が聞けて、束さん嬉しかつたなあ。やっぱりちーちゃんも篠ちゃんも素敵ングだよ。夕陽の向こうにほいかなでほしいよね』

その奇妙な部屋の中で、一人の女性がそんなことを言いながら、うふふふと笑みを添える

部屋も奇妙だが、その人物の服装も奇妙だつた  
後ろにある大きなリボンが特徴の、真っ青なブルーのワンピース  
頭につけたカチューシャには、白ウサギがついている

この、『一人不思議のアリス』状態の人物こそ、笄の実姉であり、  
独力でＩＳを開発させた天才、篠ノ之束である  
そして、樹海の様な部屋は、彼女の秘密のラボである

「さあて・・・また暇になっちゃつたな。何処のコンピューター  
にハッキングしようかな~」

ペペペ

今度は機械的な音が、ラボのディスプレイより響く

「おつとおー今田はお密さんが多い田だねえ・・・よつとー」

ディスプレイのボタンを押すと、そこには赤い髪の子供がうつる

『あー通じた！よかつたあ・・・』

「おう！アーチちゃんの方からここに繋げてくるなんて以外だねえ。  
寂しくなつたのかい？」

『ちょっとだけね・・・って、そうじゃなくて、ちょっと頼みたい  
事があるんだけど、いいかな？』

『はいはい！可愛い可愛いアーチちゃんの頼みだからねー束さん頑張

つちやうよー万事屋だつて田じやないつてぐらこーそれで、頼みたいことひいてのはなんだい?」

『それはね・・・』

・・・

「・・・はこはこなるほど。フランスね。地図はこむかい?」

『ううん。あとは自分でやる』

「相変わらずアーチャンは自分でやりたがる子だねえ。もつと甘えても良いんだよ?」

『一人で出来るもん!』

「あつはつは!そつかあ。束さんけよつとさみしいなあ。あー! そうそうー近々エス学園に行くんだけど、何かほしいものあるかい?」「ほしい物?うーん・・・あ! ボクね、いろんな事が知りたいんだ!』

「アーチャンらしいね!アーチャンの持つ能力は知識や情報がってこそのものだからね、それを求めるのは当然だよねー。で、その知識の使い方とかはいいのかい?」

『うん。あとは・・・』

「自分でがんばる。でしょ? おつけいだよー束さんの持つてる情報全部あげちゃう!」

『うん。ありがとう、あ、あとそれと・・・もつ一ついいかな?』

『なんでもいっていいよーお母さんにもつと甘えなさい!』

『あのね、今のマスターと一緒にいるとな、色々な人とお話しするんだ。ボク、きいてるだけでも楽しくて・・・それでね』

「・・・ははーん。それとお話してみたいと?」

『うん。だから、そういう事ができるような何かを・・・』

「おつけいだよーまあーて束さん頑張つちやつもんね!アーチャンがほしい物はそれだけかい?」

『うん。じゃあ、行ってきます!』

「頑張ってね～」

ぶつん と、画面が落ちる

「さーて、ママちょっとがんばっけやおうかなあ！・・・でもデータだけ消してもどうしようもないのにね。やっぱりまだまだアーチャンは子供だなあ」

その日の夜、フランス政府が保持するデータ全てが、何者かによつて抹消されていた  
一時的な混乱はあつたものの、バックアップにより事態はほどなくして終息した

しかし『シャルル・デュノア』に関するデータがバックアップすらされなかつたことに、気がついた人間はいなかつたとか

「社長。HJ学園に送つた《例の子》についてですが・・・  
「続ける」

「はい。どうも『アルカナ』と『白咲』のデータ奪取は難航している模様です」  
「・・・無能者め。わざと取つてくるよつて云えど。どんな手段を講じても構わん」  
「はっ」

「IJ」はデュノア本社の社長室

「IJのままでは、わが社は倒産。やはり、どこの社の傘下に收まるべきか・・・」

第三世代ISの案件はいくつか出でている  
リヴァイヴの上位型としての第三世代。まったくの新規構想の第三  
世代  
だが、どれもイマイチぱつとしない。構想を掛け合わせてみても決  
め手に欠けるものだつた

「あの無能者め・・・」

ふと、社長室の照明が落ちる  
備え付けられたパソコンだけが、煌々と輝いている  
それは、どこかとつながつたようだつた

『デュノア社の社長さんですか？』  
「いかにも、私が社長だが・・・何者だ？」  
『ちょっとワケありでして、名前は明かせません』  
「・・・ひょっとして、今の状態も君の仕業かね？』  
『はい。一対一で話をしたかったので。ご無礼をお許しください』  
「構わんよ。ただし、ここまでしたのだ。わが社にとつて無益なものではあるまい？』

社長の目がギラリと光る

『おそらくは』

「よろしい。続けたまえ』

『実は、私はある第三世代型ISの稼働データを入手することに成

功しました。それを提供させていただきたかったのです』

やはり田口はギラリとした光を湛えたまま、社長は口を開いた

「・・・条件は?」

『簡単です。《シャルル・デュノアの抹殺》。あ、もちろん物理的に殺すって意味じゃないですよ。書類上、といつ意味です』

『無能者』の事後処理。たったそれだけで、のどから手が出るほど欲しい第三世代のエスが手に入るのだ  
その条件は、破格としか言いようのないものだ  
社長としてもすぐに取引に応じたかったが、すぐにはうなづかない。  
むしろ怪しいとすら思う

「ふむ・・・。それが第三世代エスのデータであるとの証明は出来るかね?」

『そこは、こちらを信用してもらいつほかありません』

「顔も見せない相手を、か?』

『はい』

「ふん・・・良いだろ?。その条件をのんでやる。第三世代のデータであれば、約束どおり《シャルル・デュノアの抹殺》を行おう

『・・・それを、ちゃんと証明できますか?』

「そこは、こちらを信用してもらいつほかないな』

少しの沈黙の後、耐えられなかつたかのようにパソコン側から、幼さの残る声が聞こえた

『・・・分かりました。では、私はこれで。データはこちらになり

ます』

「つむ。お互い有意義なものだったな』

回線は切れ、社長室には明かりが戻った

「まさか、こんな形で使い物になるとはな。しかし……あれをどうやって処分したものか……」

広告塔として宣言してしまった以上、情報の全てを止めて自然消滅を待つか

それとも、アレの存在が露むほどの何かをだすか……

考えながら、送付されたデータをあけてみる

「これは……！？　ふふふ……ふはははははは……」

『ただいま』

「おう。おかえり。何してたんだ？」

『別に何もしてないよ。いうなら、ちょっとおひびき』

「へえ。……何処にあんの？」

『ふふふ……ヒミツだよ』

「えーっ……教えてくれーーーー！」

『そのうひ、ね？』

## エピローグ・深淵への交渉人（後書き）

ところで、第一巻エピローグでした

シャルロットが無能者扱いであつた点については、色々な人を敵に回しそうで怖いです。悲しいことですが、デュノア社社長なら平氣でいいかねない。そう思ったので、なつた次第です

さてさて重要なお知らせです

一日おきに投稿していたこの物語でしたが、十一月中『』のままで更新を止めます

『止めるかも』ではなく『止めます』

詳しい話は、活動報告にて

## 主人公設定 柳瀬薰（前書き）

私の地域はド田舎なためか、アイマス2は店頭にすら並んでませんでした

売り切れとかは諦めつきますけど、店頭にすら並んでないって・・・  
予約しておけばよかったです

さて、そんなことはともかく、今回からその場しのぎにもならない  
オリ主 and オリエイジ設定になります

私の頭の中にはもう一人くらい出来あがっている訳ですが、まあ、  
それは本編に登場してからとこいつ事で

## 主人公設定 柳瀬薰

柳瀬 薫 やなせ かおる 16

黒目黒髪の、普通の日本男児  
ちょっと長めの髪を、白いカチューシャでオールバックにしている  
というか、今現在その髪型しかできない

春休み旅行の最後にいった博物館の展示品だったISを起動させた  
ため、IS学園に入学させられた経緯を持つ  
一夏との相性はなかなかのもの

実家は田舎の方にあり、夏休みには毎年親戚共々全員集合している  
家族は、みさとという10歳の妹と、兵器オタで主夫な父親がいる  
Chapter 2終了時では未登場だが、他にも一家の大黒柱とな  
つている母ちゃん、元気なおばあちゃんとおじいちゃん、それに従  
姉がいる

詳細はまた日を改めて

ISに関しては初心者で、ようやく基本操作を身につけたレベル

ステータス

格闘：滅多にしないケンカで身につけたレベルのため、剣術云々にはほとんど通用しない

射撃：センスがあるらしい。が、まだまだ経験不足

能力：集中するとやってのけるタイプ

心情：相手を赦すこと。それと、周り皆と笑って生きる」と

#### 戦闘傾向

射撃・格闘共に同じくらいだが、気持ち格闘が多く、近距離戦闘になりがち

だが初心者なのであつという間に距離を取られたり、不意の一発でダウンすることも多い

## 主人公設定 柳瀬薰（後書き）

こんな感じでしょうか

薰に関してはあまり煮詰めてません

今後、細かな設定が増えるかもしないです

さて、次はアルカナについてです

## オリジナルIS Arcana（前書き）

とこう訳で前回に引き続きオリジナル・アルカナの設定です  
えーと・・・薰君と比べて、文章量がかなり多くなっています  
というか、作者のコメント付きです  
ええ、ノリでつけました

また、最後の方には中二及び作者論が待っています  
間をあけてありますので、そういうもののがお嫌いな方は、ブラウザ  
右上の戻るを押してください

## オリジナルIS Arcana

Arcana  
アルカナ

通常のISよりも過敏に自己進化を行うIS  
コアそのものの学習能力が高く、人の言葉を理解し、搭乗者限定ながら会話を行う事ができる  
作中の機体名は、主にカナ表記で使われます。アルファベットだとながいですし

『<sup>トレース</sup>複写』という特殊能力を持ち、装甲を自在に変化させる事ができる  
これは、收拾や経験で得たデータを、搭乗者に最適な形（もしくはコアの趣向）で反映させるというもの。いわば簡易形態移行  
形態移行と違い、データさえあれば装甲の形状すら変化させることができ

ただし、トレース直後約一時間は不安定で、ダメージが増加する。  
この時装甲についた傷は、安定後も残る

ちなみに、装甲素材は拡張領域内に膨大な量が内蔵されているらしい  
待機形態は鎖状のアクセサリー。輪の大きさは変わらないものの、伸縮自在

普段はウォレットローンとして腰についている

アル

ISアルカナのコアの人格。アルカナでは長いので、薰より『アル』と名付けられた

本来 I.S. コアの人格は、内部の深層にあるものなのに、それがなぜか表面化したもの

一人称は『ボク』で、子供っぽい喋り方をする

戦闘中は、主にビット操作や機体制御など、搭乗者のサポートをしている

今のところ「サウンド・オンライン」

情報収集に余念がなく、眼となるハイパーセンサーは待機状態だろうと簡素な力チュー・シャとなつて常に展開されている

『作者より、裏話?』

I.S.としてですが、ネタは既出な気がした中でのスタートでした  
ネタは既出でも、機体の方で頑張ればいいかなつて思いまして

ついでにアルといつ名前の相方つて結構多い気がします  
バーニーの相方もアル。エドの相方、とか弟もアル。ソースケの相方も、たしかアルだった気がします。ACERどちらつと聞いただけですが

この三人とそのアルは、相方という表現は微妙な気もしますね  
ですが、多分私の中では潜在的に相棒はアルつてなつてたのかもしれません

コアの意識のイメージは純真無垢な子供です。まだ物心ついて間もない、知識だけが先行している・・・みたいな  
うまく表現できているのかは甚だ疑問ですが・・・

以下、今まで登場した形態・タイプ

各タイプの名前については、基礎形態を除いてラテン語を参考にしています

語感を意識したため、発音云々を文法無視して変えているモノがあります。『注意ください

#### 『アルカナ 基礎形態』

アルカナの基礎となる純白の装甲

参考に出来る機体デザインがなく、コア自らが手探りで作り上げた

そのため形状は、小学生か幼稚園児が粘土でつくる人の様な、歪で曲がったデザインとなっている

武器は鉄棒一本。拡張領域は装甲素材や複写処理などで埋まっている

#### 『作者より』

自分の力だけで装甲を生成しようとした結果、失敗してしまったという流れです

傍目から見ればただの馬鹿者でしかないのですが、この苦い経験からアルは学んで、色々なデータを取り込むようになった、という流れも持っていたりします

モチーフは、タロットカードの番の『愚者』

### 『カルレム・サジタリー』

『青い射手』の名の通り、青い中距離射撃向けの形態  
ブルー・ティアーズの他に参考に出来るデータがないため、形はほぼ  
パクリ

相違点はスラスターの数。こちらは角錐状のものが背中に一基のみ

### 武器

アサルトライフル『フルメン』と、攻撃支援ビット『トリックスター』。そして接近戦迎撃用装備である『グラディウス』を装備

次形態への試験装備で、左腕にワイヤーカッターを模した鎖、『力テナ』を搭載

個々の輪をつなげるようにして展開するため、実質長さは無限。出し過ぎると引っ込めるのが面倒

衝撃や力に対する強度は十分だが、熱に弱い

### 『作者より』

初めて戦った相手の、ブルー・ティアーズのマネッコです

本当の初めての相手は、入試の打鉄ですが、なぜかノーカウントです。というか忘れてました

モチーフはそのまんまブルー・ティアーズです

## 『アーテルレムレス』

『黒い幽靈』の名を冠する、中・近距離戦闘向けの形態  
骨の様な全身装甲を、黒くてボロボロのマントが覆っている  
髑髏の様なデザインの、フェイスガードを兼任するハイパー・センサーが死神という印象を強める

マントはボロボロのくせに耐衝撃性・耐熱性に優れる  
胸部装甲には、真一文字の刀傷が生々しく残っている

### 武器

二丁のビームクロスボウ『フルメン』と、ワイヤーブレード『トリックスター』。そして大鎌の『グラディウス』を装備

グラディウスの意味は剣だが、ここでは固有名称なのでなんでもあり  
トリックスターは、両手首に各四基内蔵されていて、そこは枷がつ  
いているかのようにふくらんでいる  
能力的には『カーナ』と同じ

## 『作者より』

第一部後半で登場しました、トレースの新たな形態です  
モチーフは、タロットカードより13番（死神）です  
愚者とは、タロットカードの中でも、同じ欠けた者同士です  
愚者には数字が、13番田のカードには正式な名前がないんですよ。  
たしか

ISとしては、今後出場予定の形態の中でも、私一番のお気に入りです

言わざもがな、第一章冒頭のエピソードが反映されています。といふか、この機体が先で、エピソードは無理矢理くつつけたものでさて、ラウラを助けたシーンだった訳ですが、何故騎士サマではなく、死神だったのか

なんというか、自分的にはここで死神は適役だったと考えています。意表を・・・つけましたよね？

後付け的な理由も一応は考えてあります

宗教観つていうんですかね？ そういう価値観の問題が出てくるような気もします

しかも私の持っている情報は、ウイキペディアで調べただけの浅いものです。程度の低いものです

さて、注意書きはしたので色々書かせてもらいます

死神は、彷徨える魂が悪靈になる前に、冥界に送る神です  
冥界に送られた魂は、穢れの一切ない清らかな魂となり、再び現世に生まれ変わる・・・そういうもんだと、私は思っています  
この考えなら、死神はつまり、転生・変化を促す存在といえます。

つまつせんつこつ事です

## オリジナルIS Arcana（後書き）

という訳で、オリIS・アルカナでした

さて、これよりしばらくの間更新は止まります  
皆様、戻って来た時には、またよろしくお願ひいたします

## プロローグ・風薫る朝（前書き）

とこゝ訳で予告通り更新再開です

ですが問題が二つ

- 1・ストックがない
- 2・三巻が行方不明

という訳で、更新遅延＆オリジナルな方向へ行くかも・・・  
長くなりましたが、本編へどうぞ

## プロローグ・風薫る朝

「ほつ・・・ほつ・・・」

もうすぐ夏休みという今日この頃。夏真っ盛りなのだが、やはり早朝は少し肌寒いが、それも目を覚まさせるいい要因となっている

軽快なリズムを刻みながら、俺はグランドの外周を走っている

この間のトーナメントの時、『すこしは走りこんで体力をつける』と、師匠兼相棒からのありがたい言葉があつたからだ  
はじめは朝起きるのもしんどかったが、今ではもう習慣となっている  
まあ、起きられるようになつたものあいつのおかげなんだけど・・・

『マスター。そろそろ時間だよ』

「お？ そつか？ なら戻りつか」

んー・・・時計いらずつていいな

『・・・ボクつて、時計扱い？』

「んー・・・時計に人物認証機に計算機。あとはとても便利なロー  
プ」

『・・・なんだか泣きたくなつてきたよ』

「冗談だつて」

『冗談に聞こえないもん・・・』

そんな話を、もう一人の相棒の『アル』としながら、俺は自分の部屋に戻った

寮に戻ると、一夏が気持ち良さそうに寝ていた

『マイシめ・・・

「やつと戻ってきたか」

「おひ。やつと戻って・・・って、ラウラ。起きてたのか」

俺のベッドの上には、ラウラがいた

長袖のメンズワイシャツを着ている。もちろん他には何も着ていない  
そそるものがなかつたといえば嘘になるが、もう慣れてしまった

そう、あれはあるすがすがしい朝のことだった・・・

／＼＼＼＼

『・・・はつ！？ら、ラウラー？なんで俺の布団の中に居るんだ  
よー？』

『日本では、これが将来結ばれる仲の者同士の起こし方らしいな』  
『誰だそんな知識教えたの！？ ああ、いいからーとにかく、コレ  
着てくれ！』

『・・・何故だ？夫婦とは、何事も包み隠さないものだろ？』  
『そりだらうけど！ほら、一夏もいるから・・・』  
『むう・・・仕方ないな』

／＼＼＼＼

という事があつたのだ

俺、たしか『今日だけだかんな』って言つたと思つたんだけど・・・  
ちなみに、初めて見た時は全裸の時よりもドギマギしたのはコレだけの話

『しかし、効果はてきめんだな』

『はあ？』

『目は覚めただろ』

『・・・男女問わず、目が覚めない奴の方がおかしいと思う』

次には、けろっとした顔でこのやり取り

積極的なのは嫌いではないが、もう少し恥じらいといつものをだな・  
・

「何故いつも私を置いていつてしまふのだ？」

「気持ち良さそうに寝ているのを、起こすのも悪いかと思つてな」

がつしりと掘まれているのを抜けだすのって結構大変なんだぞ  
下手すると・・・なんでもない

「いや・・・しかしだな・・・」

頬を赤くして、ムスッとふくれつ面になるワウワ

ああ、そのほっぺをツンツンしたい

「その・・・おまえがいないと・・・」

「それよりも、朝食までもう少し時間があるな」

「うつ・・・そ、そうだな。何をするんだ？」

ラウラは落ちつかないのか、一度束ねた後ろ髪を散らす  
ふわりと舞う、朝日に輝く銀色の髪は、いつ見ても惚れ惚れしてしまつ

「・・・？ 何を見ているんだ？」

ラウラがこっちを見る

いつのまにか、見入ってしまっていたようだ

「いや？ なんにも？」

「おかしな奴だ・・・」

色の違う、ラウラの双眸が不思議そうにこちらを見てくる  
吸い込まれたかのように、視線を離すことができなかつた  
そうやつて見ているうちに、ふとあの夜の事を思い出してしまつ

「そりいや・・・なんであんなこと・・・」

「ん？ あんな事とはなんだ？」

「いや・・・その・・・キスのこと・・・」

全身が赤くなるのが分かる

やっぱり、改めて聞くと恥ずかしい

「初めてだつたんだが・・・」

恥ずかしながら私、柳瀬薰はアレが初めてのチュウ。ファーストキスである

「そりや」

「そりや・・・って、おま、「わ、私だつて初めてだつたんだぞ？」

まあ、嬉しくはあるな。うん

そうこうで、ラウラも顔を赤くする

「・・・」

「・・・」

お互いがトマトになつてしまはらく。何も言えないまま、じつとただラウラを見る

「お、お前はどうだつたのだ？ その・・・嫌、じゃなかつたか？」  
「そ、そうだな・・・嬉しかつた」

人の好意を嫌がる理由なんてない。まあ、ストーカーとかは論外だけど誰かが自分を好いてしてくれるというのは、それだけでも嬉しいものだ  
ああ、こんな自分でもちゃんと見ててくれている人がいるんだ。と、少なからず救われたような気持ちになる  
俺はそう思つ

「や、そつか・・・ふふ」

ラウラは照れながら笑う

その顔は、とても、その・・・可愛かつた

「なら・・・また味わいたいか？その、喜びを・・・」  
「・・・ラウラこそ」

どちらともなく近づいてゆく

そして、そのまま唇がふれ

『・・・マスター、右』

「ん？」

「うーん・・・。ふああつ・・・」

「・・・・・」

「・・・あれ？」

ふれ合う直前で、一夏が目を開けた  
何故にこのタイミングで目を覚ます。ルームメイトよ

「・・・邪魔したか？」

ヒュバツ！

ガシッ！

グググツ！

「イタタタたつ！？えつ！？な、なにつ！？」

「なぜ・・・今起きてしまふのだつ！？ もう少しで・・・もう少  
しでつ」

「え？あ、あれ？いつの間に！？」

隣にいたと思ったラウラは、気がつけば一夏を組みふせて、よく分  
からないが、寝技を極めていた  
・・・ホントに、仕事人だなあ

『それでいいのマスター！？』

「入るぞ一夏。早く支度しないと朝食が

「あ！」

そしてここに篠ノ之である

おいおい・・・田に見えてかたまつているぞ

まあ、裸ワイシャツの女に寝技を極められている一夏。シユールと言えばシユールだ

ラウラがマウントポジションとつて組みふせている姿は あ、なるほど

「あ・・・朝から何をやっているか!」この軟弱者め!..

「ほ、筈!? 話せばわか・・・」

「問答無用! 大人しくラウラと斬られる!」

「なんだよそれ! バカ!」

「バカとなんだ大バカ!」

一夏は、朝から災難だなあ・・・

女難の相が出ているんだろうな。あいつ。そしてそれは一生消えないんだろうな

薪割りみたいな姿勢で、真剣を振りかぶる篠ノ之

ああ、一夏が薪みたいに真っ二つ・・・ん? 真剣?

「つて、真剣はやめるよな! ? シャレになんないから! ..

『つて! えつ! ? ちよつ! マスター! ?』

「必殺! とつても頑丈な鎖アターックつ!」

『うわああああつ! ? ! ?』

待機形態のアルを投げて、篠ノ之の手の甲を叩く

ぱっしーん!

「いたつ・・・」『いつたあつ!』

さすがは剣道達人級。正確な級は知らないが、手の甲を叩かれたく  
らいじや剣を離すことなんてしないようだ  
だが手の甲を叩いたおかげで一瞬の隙が生じる

「さすがに、今まで一緒に斬られてはかなわないからな」  
「む、むう」

その隙に、ラウラがIDSを部分展開。得意のAICをかける  
ついかAICってIDS以外にも通じるんだ・・・便利だなあ

「はあ。・・・とりあえず落ちついて。朝食でも食べに行こうぜ?」  
そろそろ食堂も開いだらうし」

「うむ。そうだな。私も腹が減った」  
「だろ? とりあえずラウラも篠ノ之も着替えてこいよ。俺らも着  
替えるから」

「あ、ああ・・・」

「うむ」

『うう・・・痛いよお』

よしよし。』苦労さま

「・・・」

場所も時間も変わり、ここは一年生用の食堂  
俺たち四人は、少し遅めの昼食を取っていた

隣にラウラ、目の前に一夏、対角に篠ノ之だ

ラカラは、今日はパンとローンスープ、それにチキンサラダ。一夏

は納豆に焼き魚定食。篠ノ之内煮魚にほうれん草のおひたし

なるほど、どれもつまやつだ。ですが食事のおみやげなんちなみに俺は・・・

「よく太盛つの」＝シフヒ＝ウ一休で开前もつよな

「甘いな。フレークをコーティングしていたココアがしみでた牛乳よりも甘い。俺はサラダやデザートもしつかり取っているぞ」

二二二

むつ、興味なさげだな

不死身の殺し屋の強さの秘訣は、大盛りの「ローンフレーク一杯なんぞ。まあ、義手つけてまで銃を埋めようとは思わないけどさそれに、朝に限らず、食事で野菜を摂ることは重要だろ

ちなみにサラダはイタリアンでレッsing。異語は認める

『認めるんだ。そこは《異論は認めない》じゃないの?』

だって、青じそドレッシングだって、胡麻ダレだって、フレンチドレッシングだってうまいもん

『こだわりはないの?』

べつにー？うまければそれで

「つーか、一夏こそ結構量多いよな。ご飯大盛りだしー

「これくらいしつかり食わないとフルには動けないからな」

「」「」「」「」  
年三月廿一

いただきますの合図とともに、各自の朝食を食べ始める

好き嫌いは仕方ないけど、食べ残しは絶対ダメだかんな

もぐもぐ

チロツ

はむはむ

チロツ

「……一夏、人の朝ごはんをチロチロと見てるなよ」

「じめん。うまそうだつたから。つい……」

『うまそうじやない、うまいんだよ。って、おばちゃんいうよね』  
実際うまいからなあ

『ボクはそういうの食べられないからなあ……どんな感じなの?』  
どんな感じって……当たり前のようになつてたから……どう答  
えればよいものか……

「……薰、たまにはパンでも食べたらどうだ? そんな物ばかり  
食べていたら、噛む力がなくなるぞ」

「ん、それもそうだなあ」

「だらう? 仕方がないから、私のを分けてやうひつ。ほら」

ちぎったパンを俺の方に向けてくる

「じゃあ、ありがた(スカッ)……あれ?」

食べようと思つた瞬間、手をひつこめられる  
結局、開いた口には空気が入つたばかりだった

「……ひでえの」

「今朝の仕返しだ」

そういうて、ラウラはいたずらっぽく笑ひ  
今朝つて俺なんかした?

「せり・・・はむ」

「なんで口にくわえるんだよ・・・」

「かじつていいぞ」

あー・・・やうこつ・・・

「つて、んな」と出来るか! それじゃあキスまがい

ダーン!

「・・・食事中ぐりい、静かにしたりビリだ?」

ギン!

篠ノ之が、机を叩き、こらみをきかせる

ふつ、初めてあつたこのラウラに鍛えられた俺にとって、こんな睨みなど・・・

『マスター、足震えてるよ』

黙つてろ! あんな怖い笑顔してんだぞ! ? 目の光が消えてるんだよ!  
! ? ラウラだつてあんな顔しながら睨んでこなかつたぞ! ?

「ふむ・・・。嫉妬か?」

「な、なにいつ! ?」

「自分ができないから、つらやましいのだろう?」

「誰ができるものか! い、一夏つ! んつ・・・」

そういうて、篠ノ之は自分の味噌汁を口にぶくんで、一夏に迫る

『うでもいいけど、味噌汁をミソスープっていうと、なんかリッヂに聞こえるよね

でも味噌汁っていうと『オフクロの味』って感じで素朴な暖かさがあるよね。言葉ってフシギ

『ど、どひする・・・?』

『腹あ、括るしかないか・・・』

『決断早いぞ!?』

『大丈夫。朝食取るにはもう遅い時間だ。セシリ亞も凰も来ないだろ? なら・・・』

『どうしてそこでセシリ亞と鈴が出てくるのかわからないが、誰にも見られないなら・・・』

『『大人しく従つておこづ』』

こんなアイコンタクトが、一夏と俺の間であった結果、『殴られたくない』という方向で決着いやあ、便利だよなあ。アイコンタクトって

「・・・よし」

「やつとその気になつたか。ほら」

覚悟を決めて、パンを口移しでもりおひつとすると

「ち、遅刻だ遅刻だああつ!!」

そういうて、シャルロットが食堂に飛び込んできた二人とも、それを見るなり口に含んでいたものを急いで飲み込んだ

た・・・助かった。ありがとう神様仏様シャルロット様

『別にもうキスした仲なんだから、別にビリでもいいじゃん』  
『そういう事言わないの！ＴＰＯだ！ＴＰＯ－ 時間－！場所－！場合－！』  
『やつこいつわざこは、鼻の下が伸びてた気がするよ。』  
なつ・・・・・くつ・・

「つて、遅刻？」

「わざだよーもつ時間が・・・」

時間を見る

「・・・なるほど、たしかに遅刻してしまつた  
「だつたら、なんでそんなゆづくつと」

「今日が平日ならな

「え？」

「・・・今日は、日曜日だぞ？」

「・・・あ」

そう、今日は日曜日。部活はどつかは知らないが、授業や実技はない日  
ちなみにここにいる全員、今のところ部活に入っていない。あ、いや、篠ノ花はたしか剣道部に所属しているらしい。一夏から聞いただけだけど、俗にいう幽霊部員と言つやつだまあ、とにかくだからこそ、いつもやつしゆづくつと食事を取つているのではないか

「だ、だつたら、僕もゆづくつ食べよつかな？」

「おひ、そうすればいいんじや」

『食器洗いが進まないから、出来るだけ早めに食べやつてー。』

「・・・・・」

そんなおばけやんの声が聞こえてきた

「あ、俺自分で洗いますー！だからゆっくり食べてても良くてですかー？」

『そういうかい？助かるね！今度ちょっとおまかしたげるよー。』

「まじですかー？ やつりーーー！」

「じゃあ、私もわざわせてもらおう！」

『あなたもかい？！助かるよー。』

ゆっくりと、野菜の味をかみしめるように食べる

うん。やっぱり新鮮な野菜はおいしいな

野菜そのものの味を引きたててるフレッシュシングって、地味にすごいと思わないかい？

これはイタリアンフレッシングではなく、おばけやん特性フレッシングだつたようだ

「薰・・・

「ん？」

「なんか・・・すげえよお前・・・

「やつか？」

別に特別なことした気はないんだけど・・・

『そこのあなた達も手伝ってくれるかい？！そしたらのんびり食べ

てもいいけどー？！』

「じゃあ・・・俺たちおまかすの？」

「僕はゆっくり食べたいな」

「私もだ」

「なら・・・わかりましたー！自分たちで洗つておきまやーーー！」

『ありがとねえ！そこの洗剤使つてねーーー』

そういうで、おばあちゃんは食器洗いを切り上げて、お姉さんの仕込みに入った

忙しい人だ。でもその分手間暇かけてるから、こんなにうまいのか。

「しかし珍しいな。しつかり者のシャルロッテが、曜日を間違えるなんて・・・」

「ぼ、僕だって、そういう日はあるよ」

「一夏頬にご飯粒かーしてしまふ」

「ふが、ふが（のんびり食つのも、悪くはないな）」

『マスター、口に物を入れたまま喋っちゃダメだよ』

すまん

団欒のよつな、仲間との食卓はあつとこつ間に過ぎて行つた

そのあと皿洗いをしてから、自由時間となつた

## 『レゾナンス』……って、何語なの？

「うまい朝食だつたな」

「ああ。やっぱり朝、」はんは、皆で食べると一層「うまい感じ」るよな。  
さてと・・・俺は用事あるからちょっと出でにけど?」

「なら、私も一緒に行こう」

「言つと思つた」

「それで、何を買つんだ？」

さて、場所は飛んで『レゾナンス』。駅前の大型ショッピングモールに来ている

完全に駅とくつついているから駅前とは言わないのだろうが、なぜかみんな駅前というので、俺も駅前といつことにしている

和洋中全ての料理屋が存在し、なおかつ大抵のものはここに来ればある

『ここに來てもなけりゃ、この地域のどの店にもない。』 そういうわ  
れるほどの品揃えだつたりする  
もちろん内部も結構広い。目的の物の場所にたどり着く前に疲れて  
しまいそうだった

「んー、まずは水着だな。ほら、臨海学校があるだろ?」

らし

華の十代の女子達に配慮してか、初田は完全自由時間。もうひと海で遊んでよし

元々すんでいた場所が山地だつたため、海にはあまり縁がなかつた小さいときに家族旅行でいった海は、白くて熱かつたのがいい思い出だ

『・・・それって、砂浜だけじゃない?』

まあ・・・それはいいとして、早い話今の俺にあう水着がないといつ事で、駆け込みで買おうとしたことである

「そういや、ラウラは水着あんの?」

「いや、私もないな」

「そつか、なうひょうひどこにな。つこでこ買つておけば?..」

「そうしようつ」

『・・・マスター、アレン?』

『なるほど、この中華スープは・・・』

『あ、あの、お齧れん・・・? そう行つた事をなされるのはちよつと・・・』

『黙つてろいー。』

見るとそこはある中華レストラン

そこには、メモを取りながら調味料や素材を研究している、中年のおっちゃんがいた

「どうした？」

「いや……なんでもない、い」「ばい」

「？」

昼間から、何してんだよ……親父よ

「ふう……びっくりしました」

「あ、危なかつたわね……」

心臓をどきどきさせながら、物陰から一つの影が出てくる  
セシリアと、鈴だった

傍目から見れば、不審なお客その一とその二だつたが、コレにはマ  
リアナ海溝より深い事情がある

「まさか、あの一人まで来てるなんて」

「一夏さんとシャルロットさんも気になりますけど、あの二人に見  
つかるのも、何だか……」

そう、一夏がシャルロットを誘い、ここに買い物に来ているのだ  
一夏からすればただの友人との買い物でしかないのだが、三人にと  
つて、これは『一夏とのデート』である。当然気にならない訳がない  
という訳で尾行していたのだが、ばったり薫とラウラに出来くわし、  
とつさに身を隠したという事である

「あの一人にも見つからないように、一夏さんとシャルロットさん

を追跡する・・・

「難しいだろうけど、やるしかないわよね」

二人は人ごみにまぎれ、尾行を続けるのだった

「ほえー。ここが水着売り場か」

『カラフルなのがいっぱいあるね』

赤い水着、黒い水着、白い水着、黄色い水着  
ビキニやレオタードの様な物や、露出のかなり多い際どい物、果て  
には競泳水着もある

「しかし、男物は影も形もないな」

「だなー・・・見た感じ、女物ばかりみたいだし」

『マスター、ここは女性用の水着しか売つてないみたいだよ』

そうなの?じゃあ、男性用は?

『地図によると、ここから三十メートルくらい進んだところみたい。

かなり小さいね』

「はあ・・・。ラウラ、どうやら男物と売り場が違うみたいだ」

『そのようだな』

・・・こいつ、ひょっとして分かつてた?

「どうする?俺は自分の選んでくるけど」

「なら、私はここで水着を見ていく」

「りょーかい、んじや、買ってくるから、勝手に動くなよ」

「・・・さて。もうそろそろ出でてもいいのではないか?」

薰が水着選びに行つたのを確認したあと、ラウラは向かいの衣料品の店に声をかけた

「・・・やっぱ、アンタには勝てないわよね」

セシリアと、鈴だつた

ちなみに、一夏に謝つた後、ラウラは一人にも謝罪したすでに水に流すことに決めていた一人だつたため、結局は特に禍根もなく終わつたのであつた

「しかし、何故分かつたのですか?」

「簡単だ。そして、目的も何となく分かる

「へえ。じゃあ、教えてくれないかしら」

「ISの『ステルスマード潜伏状態』だ。普通ISは互いの位置が分かるようになつてゐる。が、お前たち二人は潜伏状態で位置が分からぬようになつていた

「・・・つまり、私たちが何か隠れなければいけない状態だつた。」

「そういうみたい訳ですね」

「そういう事だ。それに水着売り場から、シャルロットと一夏の反応があつた。そこから察するに、大方一人の尾行というところだろう。そしてこのあたりで隠れられそうな場所は、その衣服の間ぐらいなものだ」

「ぐうつ・・・」

「正解・・・です」

『さうだらう?』と言いたげな得意顔に、一人は苦虫を噛み潰した  
よつな顔で応えることとなつた

「それで、私たちをぐうつしよつてこいつの?」

「別にどうする氣もなこぞ。あ・・・いや、少し聞きたことがあ  
る」

「なんですか?」

「水着がほしいのだが、選んでくれないか?」

果てには、色を組み合わせずきでピソの絵かと思ひぬぞのものもあつた

「……」の色合に見ると、『普通が一番』つていうのがよく分かるな

「奇遇だな。俺もそう思った」

「俺らつて、妙なところで馬があつた」

といつ訳で俺たちは、出来るだけシンプルな物を購入することにした

一夏は単色ネイビーの水着を取り、俺は波のよつた白いラインが右側に入った、マリンブルーの水着を取りた

「ところで一夏。今日は一人か？」

「いや、シャルと来たんだ」

「シャル・・・？ ああ、シャルロットか。」

「そういうお前はどうなんだ？」

「俺？ ラウラと来たぞ」

「・・・ひょっとしてデートか？」

「お前はどうなんだ？」

「どうつて何が？」

・・・最早、何も言つま

「だつてよ、シャルロットと二人きりなんだろ？」一人で買い物とか、

それ即ちデートだろ

「別に、デートとかそんなんじゃねーよ

・・・はあ

？」

分かつていないらしい

多分、この状況でデーターと思いつかないのはお前だけだと思つ

『ホント、じうじうとこころで揃してゐるっていつか・・・』

「・・・まあいいや、じゃあ、女物のこころに戻もどつぜ?」

「おう。・・・あ、ちょっと待つてくれ。もづいくつかほしいもの

がある」

「いいぞ。先行つてるからな」

「りょーかい」

そうして、一夏は行つてしまつた

『マスター。それホントに必要だつたの?』

「気分だよ。気分。大事だぞ?』

『ふーん・・・お小遣いは大丈夫なの?』

『正直大丈夫じゃないけど、あとで親父からもらつから』

昼間から何もしないで飲食店に入り浸り、あまつさえお店の人迷惑をかけていたと知られれば、間違いなく親父は殴られるからな。  
母さんから

「へー」

鼻歌を歌いながら、女モノの水着売り場に戻る

「うわー！ どちらも似合ひそうです！」

「やつが？ なら、この二つから選ぼつか

・・・ 憂い聞きなれた声が聞こえる

「あー、柳瀬君！」

「山田先生と織斑先生。どうもです」

声の主は、山田先生と織斑先生だった

『みんな、自分の水着もつてなかつたのかな?』

まあ、先生方はみんな忙しくて、旅行とかあまりいけないんだろう  
からね・・・

「・・・ひょつとして、明日もつていいく水着ですか?」

「なんだ？お前ももつていないクチか？ それとも、休日はいつも  
ここで水着を見ているのか？」

「俺は変態じやありませんよ」

「冗談だ。気にするな」

「冗談に聞こえません・・・」

とこりうか、真顔でいっている時点で半分本気なんぢやないだらうか・  
・

「とこりうでだ。お前に聞きたい」

「なんですか？」

「山田先生と一緒に水着選んだのだが、男の意見がほしい。どっち  
がいいと思つ？」

そういうて、織斑先生はもつていた水着を一つ見せて來た  
白い水着と、黒い水着ね

『どっちも似合いそうだよね』

「白い水着が『よし、黒い水着だな』俺の意見は無視ですか！？」

聞いていてそれはないんじやないんですか！？

先生は生徒の話も聞くべきだ！

「いや、そんなことを言われてもだな」

「柳瀬君、白い水着の方をほとんど見てませんでしたよ？」

「え？ マジですか？」

「はい。マジです」

・・・いつたい、何故？

「大方、無意識のうちにあいつ（・・・）を意識したんじゃないのか？」

「・・・そつなんすか？ まあ、でも確かにラウラ（・・・）に黒は似合いでそうですよね」

黒色は、あの子の銀色の髪の毛とかを一層際立出させて見せる・・・  
気がする

「うーん・・・」

『・・・マスター、一人の顔を見てみれば？』

ん？

「なににやけてるんですか？ 一人して」

「いや、だつて・・・」

「おい柳瀬。私は一言も『ラウラ』とはいひないぞ？」

「・・・え？ ・・・マジですか？」

「おひ。マジだ

『マジだよ』

・・・・・あ

「ここには俺、・・・自爆つすか?」

「自爆ですね」

「自爆だな」

『自爆だね』

・・・・・急に暑くなってきたな。特に顔面当たりが

「お前、相当ラウラの事を気にこいつているみたいだな」

「い、いや俺は別にそんなことは・・・」

「嘘をつくな。明らかについたえているぞ?まああいつは見た目だけは」

シャーツ

いつの間にか、試着室の前まで来ていたらじ  
着替え終わった男女が一人出て来た

あれ?試着室つて二人で入るものだったかな?  
それに、俺なんか変な事言つたような

「・・・あ」

田の前に立つ一夏とシャルロットがいた

## 『レゾナンス』……って、何語なの？（後書き）

とこう訳で、レゾナンスなお話でした（謎）

・・・どうじましょり。

「ハイあん」なイベントとかにひやこひやシーンとか、恥ずかしくて書けません；いや、私にそういう経験がないだけですが（泣）

ヘタしたら、全面カットの可能性が・・・

## とびに飛んで臨海学校！

さて、ここは臨海学校に向かうバスの中

位置としては、トンネルに差し掛かつたところだらうか

「オオとこうトンネル特有の雑音と、オレンジ色のランプが見える

「つたく、あんときはマジでビビッたじゃねえか・・・」

「う、だから俺だってだな・・・」

一夏が、シャルロットと一緒に試着室（女性用水着売り場）から出て来たあの一件

どうも、尾行していたセシリアと凰を巻くためのものだつたらしく

つーか、あの時セシリアも凰もいたのかよ

『・・・多分、気づいてなかつたのマスターだけだよ

・・・そういうや、さつきから前からの視線がきついんだが

『さらつと話を逸らさないでよ。・・・でもまあ、一夏くんの隣を取つたらわうなるよね』

デスヨネー

どうも、とある女子三人が一夏の隣をめぐつて恋の駆け引きをしていたらしい

そんなこと知る由もない俺が、横からさらつとかすめ取つてしまつた訳だ

一夏の隣は、倍率が高いのを忘れていた・・・

いつこう時、なんと言つたらいいんだっけ・・・？

『ん～・・・漁夫の利?』

俺に利がないからそれは違うな

そうそう。キミはガンマナイフというものを知っているかい?

たしか放射線治療に使われる器具で、無数のレーザー装置を備えているらしい

一つ一つは、そこまで強い力はないんだけど、その無数がある一点で重なると、ものすごい力になるそうだ

で、それをつかって隊内の腫瘍をピンポイントで死滅させることができるので

『つまり、どうこうこと?』

一つ一つの視線はそこまで重くはないんだけど、三つ重なるもんだから、非常に重くなる訳だ

それこそ、移動中はいつも寝ていてる俺でも眠れないほどに

つーか、海はまだか。もう一時間は走ってんじゃないか・・・

そんなこんなしているうちに、トンネルを抜ける

「海つ!見えたあああつ!」

『イエエエエツつ!』

「や、やかましい・・・

一夏が隣でぼそっと言つ。まあ、わからんでもない  
こつ、ぐお～んと来たもんがあ・・・

「はあ・・・。移動中ぐらいは、静かにしていろ!」

そんな織斑先生の一喝があつても、女子たちはテンションがかなり

高かつた

「それでは、ここが3日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員の仕事を増やさないように注意しろ」

「「「よろしくおねがいしまーす」「「「よろしくお願ひします」

「

全員で一礼。うん、ここにひととおりは締めないとな

「はい、じゅうじゅ。今年の一年生も元気があってよろしくですね。あの、こちらが噂の・・・？」

俺たちを見た後、女将さんが織斑先生に尋ねる

「ええ。まあ。部屋分けも浴場分けもコイツらのせいで難しくしてしまいましたね。ほら、挨拶をしろ」

そうこうして、先生は俺らの頭を掴む

「お、織斑一夏です。よろしくお願ひします」

「柳瀬薫です。よろしくお願ひします」

「ふふふ。どうも」「一寧に。清州景子です」

なんといつか、おじとやかで上品な、『オトナの対応』を見た気がする

するぞ

俺の頭をつかんでいる人とは大違いだな。うん

「・・・」

『あ、青筋たつた』

### メキメキメキッ

「イタイ痛いいたい！ 無言で力強めないでくださいよつー・」

「分かつたなら、くだらないことは考えるな」

「りょ、りょーかい・・・」

ブリュンヒルデの青筋。それは死亡フラグ  
またひとつ学習したぞ

「とまあ、冗談はともかく。お前たちの部屋に案内する。ついてこ  
い」

笑えない冗談だつてこととか、実は本気だつたでしょつてこととか、  
ツツ「ミミズクばかりなんですけど。

『それを言って、また青筋が立つたら、今度こそマスターはザクロ  
だよ』

黙つておきます

「さて、ここがお前たちの部屋だ。鍵はこれだ」

中に入ると、そこは綺麗な和室だった  
オーシャンビューっていうんだつけ？窓からは真っ青な海を、水平  
線まで一望できるようになつている  
日の出か日の入りかは知らないが、海に浮かぶ太陽を見れるんだろう  
うな

「女子たちの部屋とは少し離れているが、それでも尋ねてくる」と  
が予想される。ゆっくり休みたいのであれば、締め出すなりあしら  
うなりしておけ。どうじょつもなこよつなら、隣は職員用の部屋だ  
から私を呼べ」

「多分、お菓子の城があつても、鬼の根城が隣じゃ誰も来ませんよ。  
・・

「私は鬼扱いか？ 上等だな？」

あ、やつちつた

「いや、薫のはあくまでも喩え話ですよ。・・・といふが、正直な  
ところを狙つてるんですね？」

「まあ、それはそうだがな。よく分かってるじゃないか織斑。どこ  
ぞのボンクラと違つてな。さて、予定は分かっているだろ？ 今日  
は一日自由時間だ。さつさと荷物をまとめて、海に行け」

そういうて、織斑先生は部屋を出て行つた

「・・・一夏。ナイスフォローだ

「薫、もっと考えてからモノ言おつば」

「よく言われんだ。それ」

その後荷物をまとめた後、タオルを持って（・・・水着？ もう着こ  
んでる）途中に合流した篠ノ之と一緒に、更衣室へ向かっていた

「・・・・・・・・・・

『あ～・・・これって・・・』

アル？なんか知ってるの？

『あ～・・・ん～・・・いや、知らない』

そうか・・・

目の前に落ちている いや、刺さつてるウサギの耳  
いくらなんでも本物ではない。『ウサミミ』というアレだ。ちなみ  
に俺は『ネコミミ』・・・といふか、猫が好きだ

俺には、これがなにだかさっぱりだが、篠ノ之と一夏が神妙そうに  
しているところ、アルが微妙そうにしているところをみると、俺以  
外、これがなにだか知っているみたいだな

「『引っ張つてください。』って書いてあるな。・・・引っ張るか  
？」

「なあ、これって」

「知らない、私に訊くな

「イツとそっぽを向いてしまう篠ノ之  
む、何かありげだな

「・・・引っ張つていいのかな？」

「知らない、勝手にしてくれ」

そついつて、すたすたと去つていつてしまつた  
ますます気になるな・・・

「えーと、じゃ勝手に引っ張らつか・・・ほい」と

結局、そんなに力を入れずともさつと抜けてしまった

ウサ耳の下には何もない

「あ、あれ・・・？ おかしいな」

「いや、この下に何があると思うお前の方が・・・」

『・・・マスター。上空より未確認飛行物体が高速で接近中。・・・  
ぶつからないようにだけ注意して』

迎撃いらないのか？

『要らないよ・・・たぶん、ママ（・・・）だもん』

それって・・・

ズドオオオン！

凄い衝撃と共に砂煙が巻きあがる

それが晴れると、俺の目の前少し先に、人一人入れそうな未確認飛行物体ジンが刺さった

## 『ACT』と『バスタオルお化け』

「……だれ？ 束さんのお楽しみの邪魔したのは？」

そういうて、ニンジンの中から出て来たのは変人……もとい、アルの『ママ』だった

『人のママに変人つて、酷いんじゃないの？』

いや……そうはいつてもだな……

ブルーのワンピースにエプロン

頭には、いつの間にか俺からひつたくつたウサミミ  
それでいていかにも不機嫌そうなしかめつ面

他に言い表せる言葉がなかつたぞ

「……一人アリス？」

「キミに束さんの趣味を理解されても面白くもなんともないよ。人のお楽しみの邪魔をしておいて……」

そこで、その人は言葉を止め、待機状態のアルをじっと見つめる  
ちょうどいいので、一夏に聞いてみる

「……一夏、この人だれ？」

「……篠ノ之束さん。EJつくつた人だよ」

へえ～。なら、アルが『ママ』っていうのも分かるな  
『驚かないの？』

驚いてるんだけどね。一周回つて落ちついてしまった

「ん~・・・おおつー！」

何かを見つけたように、その人は声を上げる

「アーチャンじやないのーなるほどね、じゃあ、コレがキミのマスターか！へえー！アーチャンもモノ好きだねえー！」

「あ、アーチャン？」

「そうだよー！アーチャンだよ。キミが、マスターか、えーっと、たしか・・・んー・・・『かーくん』ー。」

「か、かーくん・・・また独創的なニックネームですね」

かーくんとアル・・・なんかおしゃべり

「んー？ 不満は受け付けないよ。ホントなら、キミなんてどうでもいいんだから」

うわ・・・手厳しい

「まあいいやー！それよりアーチャン！ 頼まれたもの持つて来たよーえーと、たしかここいらに・・・」

そうこうで、二エンジンの中を『ルナ』やしだす、篠ノ井博士

「あ、あの、東さん・・・？」

「おつー！ なんだい、いつくん？」

「いや、さっきから『気になつてたんだけど』、『アーチャン』って誰なの？」

「んつふつふ~。それなら今から分かるよー。コレでねー！」

じゃじゃ～んと言いながら、その人はケータイよりもひとつ大きいぐらいの何かを取りだした

「『アクティブ・コミュニケーショントークン・ターミナル』！縮めてAC<sup>アク</sup>  
ト！いや～やつぱり東さんは大天才だね～」  
「あ、あくていぶ・・・？なんですかそれ？」  
「ふふふつ～よく分かっていないいつくんのために教えてあげよう！これは、ISUと会話できちゃう端末なんだよ！」  
「へえ～」

それって、大分す～いんじゃないの？  
なんて言つか、おおやつは過ぎてピンとこないけど

「使い方は簡単！ISUとの端末をリンクさせるだけ！分かりやすいでしょ～？じゃあ、アーチャンでやってみようか！」

そういうと、篠ノ井博士はいきなり俺の腰にあつた鎖をひつたくて、端末の背中にあつた出っ張りに巻いた

「ああ～準備は出来た～いくよ～・・・3！2！1！～ ポチット～」

画面に光がともり、次第に人の姿のようなものが見えてくる

「ママ、もう少し慎重に扱ってくれてもいいんじゃない・・・？」  
「あつはつは～ごめんねアーチャン～つましくいか実験してなかつたもんだからついつい～」  
「もう・・・でもママは完璧なんでしょう？」  
「まあね～」

博士は、画面に映った誰かと会話している

鎮が邪魔して顔までは見えないが、赤い髪の毛をツインテールでまとめている辺り、女の子なのだろう

「束さん、 しれ、 誰なの？」

「つふふふつー！」のはね、『アルカナ』の『ア』の意識だよ  
「す、すげえ・・・」

なんて言ひか、他にどうぞ表していか分からなって感じだな  
俺なんて、言葉に出来ない

「まあ…れいとじさんもんだよー白式で上手くいくかは分からない  
けど、アーチャンは使えるみたいだねーそれと、コレもあげるやつ  
！」

やつこつて博士は何かをおしつけて来た  
みるときは、このB記録メモリのよつたチップだった

「やの中にま古今東西あらゆる武器のデータ、束さん考案のHIS兵器  
・装備のデータなどなど盛りだくさんデータの使い方は、まあ  
自分で考えてね」

「うん。 ありがとうママ」

「・・・」「・・・」

大変だ。俺も一夏も会話につこうけていない

「うといーわうこつくんー篠ちゃん知らないー！？」  
「え、あ、篠なら、海に・・・」

急に話題を振られたせいか、多少じびりもびりになつて応える一夏

「まあ、私のつくった篠ちゃん探知機ですぐ見つかるよ。じゃあね  
いつくん！またあとでね。それと、キミはもひいかな？ ばいば  
い」

そうこうで、一ーンジンに飛び乗って飛んで行ってしまった

「・・・こまのつて」

「あの、一夏さん、今の方は一体・・・」

「うおおつー？」

「ひつ！？」

「な、なんだセシリ亞か・・・びつくつした  
す、すいません。声をかけよづかと思ったのですが・・・  
「タイミングがなかつたのか」

嵐のような人だつたもんない・・・  
どつと疲れが・・・

「今のが、束さん。篠の姉さんだよ」

セシリ亞は一瞬、ほんの一瞬だけキヨトンとしてから

「ええええつー？あの、各国で指名手配されてるHIS開発者のー・

？

「ああ、その束さんで間違いないよ」

「なんつーか、凄い人が知り合いだな。一夏。俺、なんかつかれち  
まつたから、少し昼寝でもするわ。午後には出れると思づから・・・

？

「お、おつ・・・じやあ、セシリ亞、行こつか  
「え、ええ・・・」

楽しさなきや損! とは思つんだがなあ・・・

『中途半端にはじけても、面白くないもんね』

そつこいつひつた

といふ事で、旅館の部屋で三十分ほどの小休止をした後、更衣室に向かつた

同じころ、女子更衣室前

「む、むう・・・

もぞもぞと動くバスタオルから、何やらそんな声が聞こえてくる

(「う・・・セシリ亞と鈴が推してたから買つてしまつたもの・・・  
・派手すぎやしないか?」)

ちなみに、購入後にクラリッサ達黒兔隊に聞いたところ、『最高です! 隊長!』『可愛いです! 隊長!』

とまあ、こんな感じの返答が返ってきた

それを聞いて自信が湧いたといえば湧いた のだが、やはり肌の露出が気になるのか、一步踏み出せないでいる

「やはり、戻るつか・・・

そう思い、綺麗な回れ右で女子更衣室に戻るつとしたラウラだった  
が・・・

がちやつ

「むう～。監置いくなんてひどこよつ～。・・・はつ！バスタオルのお化け～！？」

バッヂリなタイミングで、布仏本音が女子更衣室から出て来たのだった

「あ、いや、私は・・・」  
「成敗～！ ええいっ！」

そういうて本音は、バスタオルの端をつまみ、ぐるぐると引つ張る。

「の、布仏！？やめ・・・」  
「ふはは～。よいではないか～！」  
「何がだ！？」

これは、完全に楽しんでいる。そう思ったラウラだったが、気がついた時にはバスタオルはすでに取り上げられてしまっていた

「んー・・・氣分爽快全力全快！つとーよし、着替えに行くか！」

勢いよく飛び起きて、荷物を持って更衣室に飛んでゆく風が気持ち良くて、わきの疲れが吹っ飛んだようだつた

ちなみに、俺たちの部屋から海へは更衣室をくぐれば直行……らしい

部屋にあつたマップをよくみてたら、発見してしまったのである

更衣室に飛びこんで、制服をさつと脱げば着替えは終了便利だね、あらかじめ着込むのって

『なんか、テンション高いね』

日常と違つといひに飛びこむと、人間不思議とテンションが上がるるものや

『ふーん……。マスター、あれなに?』

「え?」

よく見れば、きぐるみとバスタオルが何かしているこんなところでもきぐるみなんて着るのは、布ぬぐいなもんだりじゃあ・・・あのバスタオルは?

『あ、引っ張がしだした』

『お代官様! おやめください!』

『よいではないか!』

『あ~れ~』

そんな時代劇が、頭の中に浮かんだ

で、バスタオルの正体は・・・

「ア、ラウラ・・? 何してんだあいつ・・・?」

なんと、ラウラだった

「あ、ヤナツキーだ～！」

「なつー？ か、薰ー？」

「こよつ。おー一人さん。・・・つーか、布仏は暑くないのか？」

こんな真夏の海岸線。きぐるみはさすがに暑いと黙つただけで・・・

「おしゃれは我慢だよ～」

・・・なんか違ひ気がする

「といひで、ボーチャん見てどいつも思わなないの？」

「え、あー・・・んー・・・・」

黒くて、フリルのついた水着  
思つていていたとおり、リカの丘へきれいな肌や銀髪によく似合

つている

「正直にいなう・・・その・・・可憐二」

瞬間、リカの顔がトマトになつた

「だよね～。私もつい黙つてたんだ～。まうまうボーチャーん。こい

～よ～」

「こや、でも・・・の・・・・

「どうこう説か、進もうとした

「むっ～、ここやーヤナツキー、行けりやー・・・」

「なつ・・・・・」

「え、いいの？」

「いいよ~ ボーちゃんは海に出たくないみたいだから~」

「ん~・・・どうしたものか・・・

と、そんなことを考へてゐる間に、布仏は俺の肩までよじ登つていて

「ん~じゃーしゅっぽーつー!」

「へーへー。出発進行つと」

「ま、待てつ! や、やつぱり私も行くぞ!」

ラウラもつこてきて、結局三人で海岸まで行つた

## 『ACT』と『バスタオルお化け』（後書き）

ところ訳で、束さんとバスタオルお化け（ラウラ）でした

### 本編補足

ACTとは

Active Communication Terminal

（自発的意味伝達端末）

の略で、名前の通りEHSの自発的なコミュニケーションを補助する端末です

今どき、他者とのコミュニケーションに積極的なアル以外では成功しないとか。AICの親戚ではありません。ぶつちやけ某メガマンのPT

です

サポートとかでしを使おうかとも思いましたが、語感を意識した結果、微妙な日本語に・・・

使い方、その他機能は・・・まあおいおい本編で

## 海とお魚（前書き）

ヒーひとつですがっ！

とうとうクリスマスまであと一月です  
ツリーを飾りつけて、靴下用意して、大切な人と大切な時間を・・・  
はあ

12月初めにテストとかまじで現実から逃げたいです

話題に出しておいてあれですが、クリスマスネタを出すのはあり  
ません。へタしなくても真冬に夏休みの話書きます

## 海とお魚

ところ訳でやつてきました。海です

波打ち際には、夏の海を堪能している女の子たちがたくさん・・・  
とこ'うか、女しかいない  
この中に一人、男がいるはずなのだが、どうこう訳か見当たらなか  
つた

「ほい。到着つと・・・よつ」

「ありがとヤナツキー！ またあとでね~」

いたずらが成功した子供のような笑顔を見せてから、野仏は友達の  
ところに行つた

・・・はて？

「まあいいか。折角来たんだから、いろいろ楽しもうぜー! ラウラー。」

「あ、ああ・・・そうだなーうんーしつこいつー。」

ラウラも何かをふつ切るよつ、ぶんぶん首を振る

「んで、何しよ・・・」

『あ！ 柳瀬君だー！』

『ホントだ！ ねーねー私にサンオイル塗つてー。』

「・・・どつこいつなるんだ」

ついぞ最近まで一夏ばかりだったのに、ここにきてひつひつ来る  
女子が増えてこる

人気が上がるのは嬉しいっちゃ嬉しいけど……

「ビーチボールやろー！」

「あの岩まで競争しようよ」

「ねーねー。サンオイルぬつてーー！」

御覧の通り、ゆっくりしている暇がないのだ

しかも、ラウラが気勢をそがれてしまつほどどの勢いで来る  
そんな勢いを俺が受け止められると思う?

「その、薫は、私と・・・」

「うわーっ！ ラウラの水着つて大胆！」

「だ、だいた・・・・・つ！？」

よっぽど恥ずかしいのか、また顔が真っ赤になるラウラ。心なしか  
身体もほんのり赤い

「や、やつぱり私は部屋に戻る！」

「あ、ちょ、ラウラっ！」

びゅーん！

『・・・・いつちゃつたね』

あーあ・・・

「あれ？ ラウラいつちゃつた・・・・・・残念だね」

「うん。チヨー似合つてたのにね」

「多分、露出に耐性が無いんだろ。・・・で、キミは何しに来た  
んだい？」

出来るだけの紳士スマイルを見せながら、出来るだけ穢やかに訊く

「うう・・・、ねえ、柳瀬君。・・・怒つてない？」

「オーラシテマセンヨー。ホントダヨー」

「・・・じめんなさい。なんでもないです」

何故謝る？

そしてなぜ去つてゆく？

「ヤナッキー！・・・あれ？ ボーちゃんは〜？」

「なんか、やつぱり部屋に戻るつて」

「恥ずかしがり屋さんだな〜。一緒にビーチバレーやりたかったのにな〜」

「そうだなあ」

「といふでせ、ヤナッキー」

野仏がこいつを見て訊いてくる

「ボーちゃんのこと、好きなの？」

「ブハッ」

ど直球かこの子はー

「ど、どひしてそつ懲つとだい？」

「あ、図星だね〜？」

グサッ！

「ふふふ・・・乙女の勘つてこいつやつだらうな〜。で、ボーちゃん

のどさんといふが 「

結局その後、野仏の友達が呼びに来るまで、詰問され続けた  
野仏本音、恐るべし・・・

「うう・・・」

あのあと海には行けず、部屋でじっとしていた  
何度も行こうとは思つたものの、またあの水着の事を考へると、恥  
ずかしくてどうしようもなかつた

楽しみにしていた臨海学校だったが、初日をほとんど楽しむ間もなく、夕食の時間となつてしまつた

夕食は海鮮料理。刺身が出された

生臭いのが嫌という者もいるが、私は別に問題ない  
生だろうとなんだろうと、食えるものは食つ。そうでもしないと無  
人島では生き残れない。そつドイツ軍で教わつた

「・・・・」

「あ、あの、ラ、ラウラ・・・」

ふいつ

しかし、どうしたものか

(薰と顔が合わせられない……。)

薰の顔をみると、どうしても水着の事を思い出てしまい、恥ずかしいのだ

(そうだ…こんなときは……)

私は、プライベートチャネルで、ある人物にプライベートチャネルで通信をかける

『はい。こちら、クラリッサ・ハルフォーフ大尉です』

『う、うむ……ラウラ・ボーデヴィッヒ少佐だ』

『隊長？ 何か問題でも発生しましたか？』

『あ、ああ……その、個人的にとても重要な問題でな。相談に乗つてほしいのだ』

『私でよければ』

や、やはりクラリッサは頼りになるな

『その……薰と食事の席が隣になつたのだが、どうすればいい？…』

『薰……ああ、隊長の片思いの人でしたね。そうですね……』

『じゃあ、そ、そ、そ、そ……』

『なつ！ し、しかしだな、その、他人の目の前でやるのは……』  
『だからこそ、です。誰もやらないだろ？と思つからこそ、効果は絶大になるのです』

『む、むう・・・そつか。よしつ！ ありがとウクワリッサー。』  
『隊長を支えるのが、副隊長の役目です。では、『武運を』

そこで、通信をかける

「か、薰・・・」

「ん？ なんだ？」

正座が苦手な私に会わせて、テーブル席に来てくれた彼は、さつきから不思議そうに私を見ている

「や、その・・・はい、あ～ん・・・」

クラリッサが教えてくれた、日本の心。『ハイあ～ん  
どいつも、日本ではこれが普通らしい

「・・・あのや、ワウワウ・・・」

「む？ なんだ？ これが日本では普通なのでは・・・」

「いや、そうじやなくてさ。・・・それ、ワサビ玉だぞ？」

「え？」

そうじつて、箸でつまんだものを見ると、刺身ではなく、緑色の何かだった

たしか、刺身が傷んでいても、多少もたせるために使つものだった  
気がする・・・

「・・・・・・・」

たしか、これは凄く鼻にくる辛たらじい

「・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・はい、あ～ん」

「そこで強行策！？ セメテ刺身をのつけてくれ！」

「あ～ん」

「・・・・・はあ。あ～ん」

溜息をつかれるのは仕方がないかもしれない  
だが、ここで箸をあいてしまったら、ハイあ～んは出来ない・・・  
と思つ

「ううう！・・・・だ、大丈夫・・・多分」

その後、明らかに箸の手が止まつた薰だつた

・・・悪い事を、してしまつたな

海とお魚（後書き）

えーと・・・  
すいませんでした

書き進めていくうちに、何だかラウラがアホの子に・・・  
テンパつてたつてことで、取めてください  
文句があれば受け付けます。はい

それと、ラウラは気の知れた仲の中ではグイグイいけるけど、あまり大勢だと恥ずかしがる・・・と思つてます

謎の擬音『カポーン』（前書き）

お風呂場の力ポーンっておと。なんの音なんでしょう？  
未だにピンともません

多分本編とは何らかかわりあつません

## 謎の擬音『カポーン』

「まだ口がひりひりする・・・」

『なんていうか・・・その、災難、だつたね』

食事が終わってしばらく

俺は一夏と湯船に浸かっている

眼前には月に照らされた海が広がっている  
男一人で入るには、いささか贅沢な露天風呂だ

「しかし、ラウラはどうしたもんだが・・・」

「ラウラ? どうかしたのか?」

「夕食の時のワサビ玉といい、今日は何だか空回りしてゐる気がして

な」

「ワサビ玉? 何かはわからないけど、多分思い出を作りつゝて躍起になつてるんじゃないかな?」

・・・あの一夏が恋について語りだした

「おもひで?」

「そうやつ。学園行事とはいえ、好きな人との初めての海だろ?  
それなら、思い出作りたいつて思うのは当たり前じやん?」

「あー・・・そうだな」

「いつも以上に躍起になつて、結局空回りしてんだと思つぞ  
「なるほどな。・・・お前、他人の恋愛事情に関しては鋭いな  
「はあ?」

・・・やつぱ、二フチンな奴つて他人には鋭いもんなんだな

「その鋭さがなあ・・・」

「別に鋭くは無いだろ。俺は、思つた事を言つてるだけだよ」

「へえ・・・」

あー・・・湯船が気持ちいい

「お前、俺の話聞いてないだろ」

「おう。『はあ?』のあたりから聞いてない」

「・・・はあ」

「つーかお前、イイヒトイないのか?」

「どついう意味だよ、それ」

「言葉どおりの意味だよ。魅力的な奴だつて結構多いと思つぞ?」

シャルロットとか、セシリ亞とか

この一人と比較すると凰と篠ノ之は厳しいかもしけんなあ  
一夏と距離が近すぎるから、多分『幼馴染』で終わる可能性がでかいかもしちゃん

初代のデジンでも、完全体から究極体にはなれないだろ?  
つまり、そういうこと

「友達だよ。そういうお前は、ラウラに首つただけだよな」

「・・・ホント鋭いなお前は。野仏といい、どつからその鋭さが出てんだよ」

「のほほんさん?」

「いや、昼間の話だよ。で、どつしてそつ思つ」

「ラウラがいるときは、ほとんどラウラを見るからな。結構分か

りやすいぞ」

「なるほどね……」

俺って、わかりやすい人間だったのか

『・・・』

それから、一夏も俺も喋らずに、湯船で今田の疲れを取つた  
掘り下げるこなかつたのは、一夏なりの配慮だらうか

カポーン

時を同じくして、ラウラの部屋

「ラウラ、何処行くの？」

「少し風にあたろうと思つてな」

もちろん、嘘である

本当は、薰の部屋に遊びに行く気だ

「ふん・・・どうでもいいけど、織斑君ならお風呂だよっ」

「別に、薰の部屋に行こうとは思つていないぞ」

そこで、部屋の空気がガラツと変わる

「な、なんだ・・・?」

ラウラも気がつき、思わず訊き返してしまった  
しかし、口で訊き返してしまったのが失敗だった

「だつてねー？」

「私、織斑君とは言つたけど、柳瀬君とは言つてないよ？」

「え　あ、・・・いや、私は夜風に・・・」

「顔真っ赤にしても説得力無いよ～？　いく氣だつたんでしょ？」

「だ、だから違うと・・・！」

「ラウラつてば可愛い～！」

完全にルームメイトの女子のペースだった  
となれば、ラウラに勝ち目はなかつた  
そこからは質問攻めが待つていた

『柳瀬君の、どんなところが好きなの？』

『告白したの？』

『もうキスはした！？』

そんな質問が飛び交う

もちろん、ラウラも逃げようとした。逃げようとしたのだが

「逃がさないよ～」

気がつけばドアに先回りされ、出るに出れない状況となつていた  
そうなれば、一つ一つに答えていくしかない

「んー・・・じゃあ、かわいそつだから最後ー」  
「はあ、やつとか・・・」

質問が十個田を超えたあたりから、もつ数えるのをやめていた

「柳瀬君に好かれていると思う?」

「……どういう意味だ?」

「んとねー。ラウラの話を聞いてるとさ、柳瀬君が受け身だなっておもってね。それで、柳瀬君はどうなのかなーって」

「アイツの『』とか・・・それは、答えようがないな

「ちゃんと、『好き』っていうのもられた?」

「むう・・・そういうえば・・・」

受け入れる態度は見せたものの、ハッキリと『好き』と入つてもらえてない

「なら、今日しつかり話してくれば?」

「だが、そつはいつても、時間が・・・」

「ふふふ・・・実はこんなこともあるつかとー・・・じやじやーん!」

そういって、彼女が出したのは、銀色のかつらだった

「色似てるのを選んできたつもりだつたんだけど、大丈夫かな?」

「な、何故こんなものを・・・」

「知ってる? ラウラが柳瀬君にゾッココンってこと、噂程度だけど学年に合まってるんだよ?」

「そ、そうなのか?」

「うん。そういうこと。だから、あとは任せで、柳瀬君とゆづくり話していくといこよ。引きとめで『』めんねー」

「うむー。ありがとうー。」

そういって、ラウラは部屋を出た

『さて、枕は三つあれば足りるかな?』

『簡単にばれないようにしないとね』

『あ、録音しておけば良かつた・・・』

『そこは、みんなで寝たフリして誤魔化すしかないっしゃー。』

声がない、という事以外は完璧な『ラウラ人形』が出来あがっていた

「あ～。いい湯だつたなあ・・・」

湯からあがり、部屋に戻る

「んじや、俺は千冬姉にマッサージでもしてくるわ

「え? お前できるの?」

「素人だけどな。部屋番頼むわ

「ういーっす

そういうて、一夏は隣の部屋に移動した

「あーあ・・・俺何してよつかなあ」

『アレ試してみればいいんじゃないの?』

「お、それもそうだな・・・よし」

少し前、篠ノ之博士にもらった『ACT』を取り出す

「えーと・・・どうやってリンクさせるんだ?」

「あ、これHISのコアが内蔵されてるみたいだね。それを辿つて、ボクの方からアクセスすればいいみたい」

「アル次第なの?」さつき博士が使つた時は、呼出してたみたいだけ  
ど

「んー・・・。」アーネストワークでの通信を発展させたものみたい  
だから、呼出する」ともできるみたい

なるほどね、他には・・・

コンコン

「一夏さんはいらっしゃいますか?」

「一夏なら隣だよ

「分かりましたわ」

バタン

「他には地図機能と、HSコア探知機能。それに」

コンコン

「一夏ー? いるー?」

「一夏なら隣だよ」

「あつや。ありがとね」

バタン

「それに、電話機能。・・・」れつて、市販のケータイいじつた  
だけじゃ

コンコン

「いち・・・」

「隣だよ」

「・・・分かつた」

バタン

「 ケータイいじつただけか？ 他には 」

コンコン

「一夏くんなら隣だよ？ そこの、三人がたむろしてゐる扉の部屋」  
「だ、誰！？」  
「あー、気に入んな。ちょっと電話してんだ」  
「う、うん・・・」「めんね？」

バタン

「いきなり声出すなよな。みんな、お前の事知らないんだし・・・」  
「うん・・・ゴメンね」  
「んで、他にも機能は色々ありそうだけど・・・まあ、今はいいか  
「ママが作ったものだからねー・・・どこかにぶつ飛んだ機能があ  
るかもしれない」  
「だよなー。あの人ぶつ飛んでるもんなー」

同じころ、部屋の前では

「・・・お前たち、何してるんだ？」  
「ラ、ラウラ・・・」

「教官に用事があるのなら、それとほんわかいいだらうへ。」

なんでそんなに耳をぴつたりと……

「一夏が中にはいるのよ」

「なら、なあさら入ればいいだろ」

「それが、入るに入れない状況で……」

「？」

不思議に思った私は、ドアに耳をあてる

『どう? 千冬姉、ここ気持ちいいだろ?』

『つづつ・・・そうだな、そこは・・・』

『やつぱり、大分たまつてたらしいよ』

『お前が・・・世話を・・・焼かせるのが悪いのだ・・・ああつー』

・・・なるほどな。たしかに、入るに入れないな

四人の顔をよく見てみると青い顔をしている

むう、私も薰と・・・いや、今はそうではなくてだな・・・

『さて、次は・・・』

『いや、待て一夏』

む、扉の向こうの空気が変わったな  
何故だか退かないとまずい気がする

ガチャ、バタン

主目的であった、薰の部屋に転がり込むことに成功

ガチャ

バタン

「……ん?」

誰かが、先程の四人の来訪者と違い、ノックもなしに部屋に飛び込んできた

「……」

見れば、ラウラだった  
耳を扉につけ、じっと聞き耳を立てている

「何してるんだ?」

「……よし、廊下はもう大丈夫みたいだな」

そういうて、しありを振り返る

「すまない。緊急事態だったのだ」

「ああ、別にかまわないが……出来ればノックぐらいしようぜ」

それが、マナーつていうものじゃないか?

「でも、緊急事態だったんでしょ? なら、ノックの暇はないよね」

「それはそつだけど、『親しき仲にも礼儀あり』っていつだろ?」

「ボクそれ、初めて聞いた」

「・・・薰」

呼ばれたので振り向くと、ラウラが睨みつけてきていた

「どうした、怖い顔して?」

「そいつは誰なんだ? 隨分親しそうだが・・・」

「んー・・・いうならば もう一人の相棒』、だな」

「ほう? 私以外の相棒が、お前にいたのか?」

「おう。多分、お前も知ってるぞ」

そういうて、俺はアルに挨拶を促す

「ハロー! ・・・いや、はじめまして、かな? ラウラちゃん  
「ら、ラウラちゃん・・・ゴホン! 私は、こんな奴とあつた覚えはないのだが?」

ほんの一瞬だけ赤面したラウラだったが、咳払い一つで顔を変え、さらに言及して来た

「いや、あつたことはあるけど、喋ったことは無い・・・はず」

「だから、誰なんだそれは?」

「・・・いい加減、勿体つけないで教えてあげたら? 『マスター』

「ま、『マスター』? まさか・・・」

やつぱ、気になるよね

「分かつたよアル。コイツは、俺のHISのコア。その意識だそ  
だ」

「よろしくね～」

「エリ……信じられないな」

「でも、現実にあるからしょうがないんだ。なんなら、証拠見せようか？」

「「証拠？」」

んなの、俺も知らないぞ・・・

なんて言つた、とてもなく嫌な予感・・・

「『お、お前を、私の『嫁』にする！け、決定事項だから』」「  
『また！ ストップ！ ストップ！ 分かったから！なー？』」「  
『え？ どうして、これからいいところなのに』」

恥ずかしさで死んでしまう！

・・・・・！ 殺氣！？

「薰・・・お前といつやつは・・・」

「まつて！ 俺は言いふらしてなんかないぞ！？」

「まあ、そうだろうな。お前はそんなことしないだろうな

すっと収まる殺氣

ひょっとして、からかつたのか？心臓に悪い・・・

「私も人に言つた覚えはないから、あの場にいたことになるんだな。  
ということは、信じても良いよつだな。なら、別にいいか」

「・・・何がだよ」

「薰。私は、お前に聞きたいことがあつてきたのだ」

俺に聞きたい」と、

そういうとラウラは、俺にぐつと近づいてきた

「・・・近くないか？」

「大事な事だからな。ちゃんと伝えたいのだ」

「はあ・・・」

ちょっと、ピンとこないが余程大事なことらしい  
あ、シャンプーかな？ いい匂いがする・・・

「お前は、私が好きか？」

「お前は、私が好きか？」

「・・・は？」

薰は、何を問われたのか分からなかつたかのようだ、私を見ている  
「きょとん」という表現が適していそうだ

「だから、私が好きかと聞いていい」

「・・・」

しかし、すぐに神妙な面持ち変わる

もしかして、今までのは全て私の勝手な思い込みで  
そんな不安が、ふとよぎる

「その、黙らないでだな・・・」  
「・・・よし。覚悟完了」

「か、薰？」

「そうだな……どっちかっていうと……」

そういうと、薰は急に顔を近づけてくる

気がつけば、唇を奪われていた

「んっ！？ んんーっ！ ……い、いきなり何をする…！」

「え？ 何をするって…・・これが答えだよ？」

「むつ・・・」

頭を搔きながら、照れくさそうに笑う

「よくよく考えてみると、俺の方から、『ラウラ』やひすんと『好き』つていつたことってなかつたな」

「う、うむ・・・」

「だから、不安になつてたんだろ？ ノメンな

「い、いや・・・分かればいい」

どういたえでいいか分からず、何だか冷たい反応になつてしまつた  
むう、もう少しい方というものがあつたのでは

「ふふっ、あははっ」

「わ、笑うなっ！」

「でも、だつて・・・あははっ」

何故だか悔しい

よし、こいつなつたら……

「か、薰っ！」

「『メン』『メン』……って、うおおつーー？」

「私は、子供ではないのだぞ。 んつ」

ベッドにいた薰に飛びつき、今度は私が唇を奪いつ

部屋を出た時に感じていた不安は、もつひとつに消えてしまっていた  
これが、薰の思う《強さ》なのだろうか？  
いや、そんな小難しいことを今考えていてはいけないな

薰に触れて、声を聞いて、心を感じる。そんな時間が、何よりも大切な  
切なのだから

で、そのころの廊下

「……なるほど、押しが大事なのか」

「ラウラさんがうらやましいですわ」

「ラウラって、案外大胆ね」

「ボクも、もつと……」

「なあ、マッサージも終わつたし、部屋でゆつくりしたいんだけど・

・・

「……却下」「……」

「……はあ」

「……相変わらず、お前はバカだな」

聞いていれば分かるよう」、彼女たち（と一夏）は薰（と一夏）の

宿泊部屋に耳を当てていた

それこそ、ラウラが目撃したあの時のよつたな状況だ

教師である千冬がいるのはこわとかどつかと思つが、まあ彼女に常識は当てはまらない

「あまり、余計なこと言わない方がいいぞ」

はい、スマセン……

「千冬姉。誰と話してるの？」

「いや、ビニカでバカにされたよつたな氣がしてな」

「ふーん……」

そんなやり取りも、彼女たちは意に介さず、ドアにぴたりと耳を当てている

「……先程から、音が聞こえなじぞ?」

「変な声もしませんから、そういう口をしてもわけではなれやうですね」

そう、先程よりまったく音がしないのだ  
それこそ、誰かが不審に思つても良いぐらじに

「なにもなし、か。つまりん。私は寝かせてもらひりが  
「ほ、僕もそろそろ寝かせてもらおつかな……」

千冬とシャルロットは、中が静かな事に飽きたのか、部屋に戻つて

いつた

といふか、『つまらん』は教師としてどうかと思います。はい

とまあそんな感じで一人去り、残つたのは篠、セシリ亞、鈴、それに、部屋の主たる一夏の四人

ダンシ

「へふつ」

扉からの衝撃により、全員が吹き飛ばされる

「つう・・・な、なんだ・・・?」

頭を上げると、扉は開いており、そこには王立した薫とラウラ

「お前たち、少しは学習したらどうだ?」

「あ、あははは・・・」

「それよりも、一夏。お前はなぜ、聞き耳立てていたんだ?」

「え? お、俺! ? い、いや~そ、それはその・・・」

ラウラの気も一夏の方に逸れたため、女子三人は音も立てずに、自室へと帰つて行つた

「そうだな? ・・・どのあたりから聞いていた?」

「だれかが、嫁にするとか何とかいつてた辺りから」

ところで『ワシントンと桜の樹』の話を知つてゐるだらうか  
父親の大切にしていた桜の樹をきつてしまつた事を正直に話したら、  
かえつて褒められたという逸話だ

まあ、現実はそこまで甘くは無い

「……ほとんど、ところが全部聞いてるじゃねえか  
「はい」

「まあ、正直に話したその心意気に、俺なりの敬意を払おう。 . .  
遺言は？」

「あまり痛くないのがいいです」「却下だ」

・・・一夏が心配で、陰から様子を見ていた、篠ノ之助氏は

「仁王が見えた」

と、後日話していたとか

## ラウリと薫（後書き）

・・・なんというか、色々スマセソ

三巻だけピンポイントで紛失していた私でしたが、多分このへんで誰のどの一次創作を参考にしてたかが分かつてしまつと思います

ちなみに三巻は後日しつかり見つけました。よかったです

## 輝く銀の月

もう真夜中

俺は眠れなくて、海に浮かぶ月を見ていた

「うるさいへり睡れねえ・・・アル、俺へのいやがらせか?..」

波の音をかき消すかのように頭の中で響く音

『誰かが・・・ボクを呼んでる・・・』

「は?」

『助けて、って叫んでる! マスターには聞こえないのつー?』

『聞こえないって・・・雑音がひどくて向もー』

『・・・行かなくちゃ』

「は?」

当たりが一瞬だけ白くなる

「なつ・・・お、おこらつー?」

ISを知らぬ間に展開していた俺は窓をつき破り、海に飛び出して  
いた

見慣れない空間

・・・いや、この空間はどこか似ている

薰と二人きりで話した場所

初めて、薰を好きだと思った場所

「・・・ラウラ」

「か、薰か？」

あの太陽のように周りを照らす笑顔はなく、ただただ悲しそうな表情を浮かべている  
いつもと違うその様子に、私はなぜか焦りを覚えた

「・・・」

何も言わず、私に背を向けて去つてゆく

「つー? ま、待ってくれ! 薰! 薰つ!」

そこで、視界は白くぼやけた

「・・・嫌な夢だったな」

醒めた今でも明確に思いだせる、喪失感。世界が冷えてゆくような、  
悪寒

気がつけば汗でぐっしょり濡れてしまっている

「・・・・」

ルームメイトは全員寝息を立てている  
私は、それを起こさないように部屋を出た

もう見周りの教師も寝てしまったのだろうか  
廊下は、常夜灯の薄明かり以外、道を示すものは無い  
少し前に往来した道筋を思い出しながら、私は薫の部屋へと足を進めた

薫たちの部屋のドアは開いていた

不用心なのか、はたまた私がこうするだらうと予期していたのか  
潮風が吹きこむ寒い部屋に上ると、もう一人の住人も目を覚まして窓の方を見ていた

「・・・あのバカ」  
「なつ・・・！」

その視線を追うと、すぐに違和感に気がつく

窓が、割れている

大きな破片が見当たらない事を考へると、内側から外側に破られた

とみて間違いないだろう

大きさは人よりも少し大きい

そう、大体 I.S を展開したときぐらいい

「・・・薰」

潮風が唸りを上げて部屋に吹き込んだ

「ちょ・・・アルっ！ 止めろって・・・」

『・・・』

「うえつ！？」

不意に、急停止した I.S

慣性制御はかかってはいるものの、流石にすべてを殺しきれるわけ  
ではないようだった

『・・・』

「あの、アル・・・？ どうなつてんだ」

『・・・上方から飛来物多数！マスター避けて！』

上を見ると、流れ星のように降り注ぐ何か  
・・・いや、量で見ると流星群だらうか  
まつすべにひらに降り注ぐそれは

ドオオン！

「い、隕石？　いや、エネルギー弾か」

『それも、かなり強い。どうも・・・ボクら間にあわなかつたみた  
いだね』

「何？」

『見てみれば分かるよ』

そつとわれ再び上を向くと、今度は銀色のH.I.D.が見えた  
フルスキンで、搭乗者は分からぬ  
海と同じように月に照らされ、ぼうっと輝いている

『マスター、あの子はたぶん苦しんでる。ボクらが止めてあげない  
といけない』

「あの子・・・あのH.I.D.のことか？つーか、たぶんって？」

『あの子のH.I.D.に接続できないんだ。どうも、向こうが全部ブロック  
しちゃっているみたい』

「なんこと出来んのか？」

『出来るよ。でも、それはH.I.D.にとっては世界を捨てたことと同じ・

・』

じゃあ、よっぽどの非常事態、そういうことか

「奇襲ニヨル排除ニ失敗。戦闘体制ニ移行」

そんなマシンボイスが聞こえてくる

「・・・・どうも、向こうはやる気みたいだな」

『だね。こうなつたら・・・』

『『実力行使あるのみっ！』』

真夜中の戦闘は、銀色のI-S先制攻撃から始まった

「」a 「

あつという間に距離を引き離し、先程のよつて上方からエネルギーの雨を降らせてくる

「つ・・・」

薫は、右手に内蔵されている四つの鎖をすべて展開。高速で回転させる

鎖は大きな盾のように広がり、弾雨をすべて受け止める  
だが、このエネルギー弾、ただのエネルギー弾ではなかつた

ドオンー・ドオンー・ドオンー

着弾と同時に爆発。薫は、あつという間に爆煙につつまれた

「排除、完了」

煙が晴れ、ISがあつたとは思えないほど何もない空間を確認した  
それは、マシンボイスで呟いた

「決めんのは早いつつーの！」

「！？」

背後からの一撃に不意を突かれる  
何とか翼を切り落とされるのは回避したものの、右腕肘下を斬り飛  
ばされる

ISアルカナの、擬似单一仕様能力　『無残な魂』  
クルーテリス・アニマ

早い話が、ハイパー・センサーでも捉えられないほど高性能な光学迷  
彩。<sup>ス</sup>擬似なのは、アルが束からもらつたデータをもとに編みだした  
モノだからである

「！？　また無人機か・・・」

今の一撃は人間の反応がもつとも遅くなる、背後からの攻撃  
それに、たとえ反応できたとしても、人なら腕を斬られるぐらいな  
ら、翼を斬られる方を選ぶ  
何より、斬り飛ばした肘下からはケーブルの束のようなものがぼん  
やりと見えた

「・・・危険度C。全力ヲモツテ排除」

斬られた右腕にエネルギーが集まる  
あつという間に剣ができる

そこからは、そいつの方が早かった

先程とうつて変わり、一気に距離を詰めてくる

「つー」

斬撃を鎌で受け止め、無理矢理切り返す

薰のめちゃくちゃな動きに対し、そいつの動きは機械そのものあつという間に、薰は姿勢を崩される

「くそつ、もう一度・・・」

そこで、また光学迷彩を発動させる

あつという間にあたりの闇に溶け込み、アルカナは見えなくなつた

「・・・『銀の鐘』、起動』

それに応えるかのように、そいつは辺りに弾をまき散らす

ドォン！

しばらく続けると、すぐにあたりを見つけ、すかさず右腕の剣を構え、突進

何かが貫かれるような嫌な音の後、海面が飛沫を上げた

## 輝く銀の月（後書き）

お詫びしきだと思われますが、前回の話では甘いものが書けないからと安易に逃げた私がいました

話を進めるためでしたが、なんとかお恥ずかしい限りです

今後は自力でそういうのを書いてみたいですが  
でもうまくまとまるかどうか・・・

今回からシリアスマッショウです。そういうのは当分ないと想つてください

主人公不在

合宿一田田

この日はもう自由ではなく、一日中、朝から晩までヒロのトータ取りに使われる

「ようやく全員集まつたか。おい、遅刻者」「は、はい」

一夏は、遅刻していた

『お前は部屋に戻れ。千冬姉には俺から言つから』  
あの後、一夏にそう言われた

私としては、今すぐにでも飛んで探しに行きたかった  
だが、それを言つたら『もう遅いし、明日みんなで探そう』と言わ  
れ、仕方なく戻ったわけだ

なぜ、薰は夜の海に飛びだしたのか  
なぜ、ISを潜伏状態にしてあるのか  
なぜ

と、謎問は尽きず、眠れない夜を過ごした

私は、徹夜には慣れていたが、どうもアイツは違つたようだつた  
目の下の隈を見れば、寝付きがよくなかった事が分かる

「やうだな、EUSのコアネットワークについて説明してみる。それ  
で許してやる」

「…………」

一夏は黙つたままだつた

「……答えられないのならば、反省文を二十枚ほど書いてもらひづ  
ぞ?」

「……EUSコアは、それぞれが相互情報交換のためのデータ通信  
ネットワークを持っています。これは、元々広大な

よつやく、一夏はコアネットワークの説明を始める  
あの間は、何を考えていたのだろうか

「なんだ、しつかりと記憶しているではないか。それとも、反省文  
はそんなに嫌だつたか? もて、時間もないでの各班迅速にEUSの  
装備試験を始めろ」

女子一同がはーい、と返事をする。流石に全員に全員コアがあるわ  
けではないので、あちらはおそらく班別のローテーションで行つの  
だろう

私の手元には、シユバルツェア・レーゲンのパッケージが山のよ  
り言わないものの、結構な数が本国より届いている

私の不安など忙殺されてしまつたのに来い、だ

「ああ、そつだ篠ノア。お前はちょっとこいつに来い」

「はい」

よばれ、きょうか・・・織斑先生の元へと行く篠ノア

「お前には、専用」

「ちーちゃん……」

織斑先生が要件を言い終わる前に、何かが飛び込んでくる  
たしか、関係者以外立ち入り禁止だったと思つたが、これはお構  
いなしに飛び込んできた

「・・・束」

「やあやあー会いたかったよ、ちーちゃん…まあ、ハグハグしよう  
！愛を確かめ　ぶへつ」

織斑先生に抱きつこうとして、返り討ちをくらつている、束と呼ば  
れた女性

到底IFS学園のセキュリティを挿い潜つてきた人物には見えない  
しかし、身のこなしは軽いようだつた  
顔にめり込んでいた指を難なく抜けだし、篠ノアの前に着地した

「やあー」  
「・・・どうも」

なんというか、先程の織斑先生といい、篠ノアといい、大分反応が

薄い

でも、そんなことはお構いなしに、続いている

「えへへ、久しぶりだね。いつして食つのは何年ぶりかなあ。おつかくなつたね、篠ちやん。特におっぱいが

ガンっ！

そんなことを言つたものなり、やつぱり返り討ちを喰らつ

会話から察するに、篠ノ之の身内だらう  
篠ノ之の身内で束とくれば、EDを開発し、現在各国で指名手配中の篠ノ之束その人しかいな  
そうなれば、彼女にとって学園のセキュリティーを超えてくる」と  
など造作もないことか

しかしまあ、返り討ちをもらつたようにしか見えない篠ノ之博士は、

「これぞ篠ちやん専用機」と『紅椿』—全スペックが現行EDを上回る束さんお手製EDだよー！」

そつこつて、とんでもない爆弾を落とした

「なるほど、全スペックが現行EDを上回つてゐるとは、よく言つたもんだな」

だが、私の参考にはならなうだな  
たしかにスペックは高いが、操縦者たる篠ノ之が振り回されている

今しがたもらつた専用機がスペック的に最強のＩＳでは、振り回されるのは、当然といえば当然だろう

「たつ、た、大変です！お、おお、織斑先生っ！」

突然やつてきた山田先生

「どうした？」

「い、い、これを…」

いつも、どこか落ちつかない先生だとは思っていたが、ここまで慌てふためくのも珍しい

・・・もしかして、薫になにがあつたか分かったのだろうか？

「全員、注目！」

織斑先生の大聲とともに、尋常ならぬ雰囲気が伝わってくる

「現時刻よりＩＳ学園教員は特殊任務行動へと移る。今日のテスト稼動は中止。各班、ＩＳを片付けて旅館に戻れ。連絡があるまで各自室内待機すること。以上だ！」

「ちゅ、中止…？」

「なんで」

「とつとと戻れ！無許可で部屋を出た者は、教師側で身柄を拘束する！いいな！」

「は、はいっ…」

私語をしていた女子は、強烈な怒氣にあてられて無言で片付けを開始した

「専用機持ちは全員集合！ 織斑、オルコット、デュノア、ボーデ

ヴィツヒ、凰！ それと、篠ノ之も来い」

「はい！」

いの一番で、威勢のいい返事をした篠ノ之

場馴れどころか、今日はじめて触れた専用機持ちは駆りだすとなる

と、余程の非常事態と見える

何故が堂々とした態度の篠ノ之に不安を感じながら、私たちは旅館の一室に移動した

## 主人公不在（後書き）

とこう訳でタイトル通り、オリ主たる薫が登場しない回でした  
薫がないときは、主に第三者視点かラウラ視点になる・・・とい  
いな  
うまくラウラのことを引き出しつづける気がしません

ところで最近、メイプルを再びやりだしています  
キヤノンシユーターが面白すぎです。  
120までもう少しですので、ひょっとしたら筆（・・・筆？）を  
止めてそっちに打ち込むかも知れません

「では、状況を説明する」

普段は宴会用に使われているという旅館奥の座敷部屋には、専用機持ち6人と学園教師が集結、急遽作戦司令本部として使われている。薫の事も気になるが、今はそれどころではないと部屋の空気が語っている

一旦頭から追い出し、田の前に集中する

「本日未明、ハワイ沖で試験稼動にあつたアメリカ・イスラエル共同開発の第3世代型の軍用無人UAS『銀の福音』が制御下を離れて暴走。監視空域より離脱したとの連絡が、一時間前についた」  
「なぜ、暴走から連絡までにそんなに時間差があるのですか?」

まず疑問に思うのはそこだが、何となく想像はつく

「詳しく述べていいが、大方内部でカタつけようとでも思つていたのだろう。しかし、足止め程度にしかならず、いたしかたなく我々に連絡した・・・というところだろうな」

「だろうね。軍用UASなんてそれこそ機密の塊。その暴走なんて、出来るんだつたら秘密にしておきたいつてものだろうね」

呆れ交じりに織斑先生の見解に追従する教師は・・・誰だろうか？保健室の養護教諭ということは分かるのだが、私が世話になつた覚えがないから、名前を覚える機会もない

「まあ、養護教諭の世話になんてならないのが一番なんだけどね。ナタリー・マッケイだよ。覚えといてね」

「・・・自己紹介をしている場合ではないのだが？」

「ああ。やうだつた。ゴメンゴメン。・・・んんつ！」

マッケイ教諭は、咳払いをして話を続ける

「衛星による追跡の結果、50分後にここより2km先の空域を通過することが判明している」

「学園上層部の判断により、我々がこれの処理にあたることになつたという訳だ」

「はい。・・・それで、僕たちは何をすればいいのですか？」

シャルロットが問う

「さうだね・・・私たち教員は学園の訓練機を使用して空域と海域の封鎖をやる。成功の要は、キミ達専用機持ちだね」

なるほど、一国が撃墜に乗り出しても足止め程度にしかならなかつたINSに、熟練者達とはいえ学園の訓練機で挑むは無謀なら、私たちに任せよつといふ事か

当然といえば当然の判断だな

「それでは、以上の事も踏まえ作戦会議を始める。意見のあるものは挙手するよつて」

「はい」

真っ先に手を挙げたのは、セシリ亞だった

「目標I-Sの詳細なスペックデータを要求します」

「分かった。ただし、先程も説明した通り、このデータは2ヶ国の中でも最重要軍事機密だ」

「情報漏洩が判明した時点で、監視と裁判は覚悟しておいてね」

その前置きとともに、福音のスペックデータが空中投影型のディスプレイに映し出される

「……なるほど、ブルーティアーズのような、特殊射撃特化型ですか」

「全方位攻撃に加え、異常なまでに速い、ね。偵察は?」

「残念だが、この機体は現時点で最高速度2450キロという速度で飛行中だ。偵察をする暇はないだろ?」

おまけに、超高速で動き続けても問題ないほどの燃費  
・・・とんでもないI-Sが暴走したな

「ああそうだ。そういえば、連絡と一緒に交戦記録が届いているんだった」

「せ、先生。それは・・・」

「みんな、知つておくべきだと思ひますよ」

「そ、それはそうですが・・・」

「なら、別にいいよね?」

そういって、マッケイ教諭は紙を一枚取り出した

「交戦記録の隠匿もひどくてね、たったこれ一枚だけ。・・・で、これによると、監視空域のギリギリで他のI-Sとの交戦を確認したとのこと」

ISとの交戦・・・

嫌な汗が、背中をつたう

「相手は所属不明。で、特徴は黒い布を纏っていた・・・これ、たぶん柳瀬君だと思うんだ」

「布を纏つたISなぞ、世界中であいつのしかないだろうな」

淡々と告げる一人の教師

「つ！？ なんで柳瀬が！？」

「昨晩、脱走者が出てね。早い話、それが柳瀬君だったってこと

「・・・それで、薰はどうなったのですか？」

あの日の夢が、頭の中によみがえる  
嫌な予感に、心が壊れそうだった

「相手の右腕を斬り飛ばしたけど、撃墜された。戦闘から8時間以上たつてている事を考えると、今頃は広い太平洋のどこかを漂つている・・・と考えるのが妥当かな」

「そんなんっ・・・救助は！？ 救助にはいかないのでですか！？」

「落ちつけ、ボー・デヴィッヒ。現場教師数人で捜索している。だが、肝心の柳瀬がステルスマード。海流で流された可能性を考えると、何処にいるか見当もつかないのが現状だ」

なんで、ステルスマードなんかに・・・

「あの、バカ者がつ・・・」

「・・・とにかく、底の見えないエネルギーを持つ相手に対しても、1回のアプローチしかできない、ってことですわね」

逸れた話を、セシリ亞が戻す。本来であれば正しい  
だが、私はなんといえどもいか分からぬ、憤りを感じた

「・・・」

黙つて席を立つ

本来の作戦会議であれば言語道断だが、今の私には到底無理だった  
「ボーデヴィッヒ、何処にいく?」  
「少し、頭を冷やしてきます。・・・作戦が決まつたら、教えてく  
ださい」

織斑先生は、呆れたよつに溜息を吐いた

「はあ。・・・10分やる。それまでに田を覚ましてこい」  
「・・・了解」

バタン

私は、作戦室をあとにした

「あの、ラウラさんは大丈夫なのでしょうか?」  
「気にするな。あいつは公私のメリハリのつけられない奴ではない。  
そうでなければ、ドイツで少佐になんかなりえないさ  
「それもそうよね。・・・とにかく、一回のアプローチしかできな  
い以上、その一回でコイツ落とせる性能持つたISが必要」

全員が全員、一夏を向いた

「・・・・・・・・」

薄暗い部屋の中で、誰かが声も上げずに泣いている

「薰つ・・・」

世界が歪む

ゆがんでゆく視界の中で、ラウラは気持ちを切り替えようと必死になっていた

しかしそこには、『ドイツの冷水』と呼ばれた戦士の姿は無かつた

## 作戦会議（後書き）

薰不在につけ込み（？）、わらわと新オリキャラ登場です  
そしてわらわと戻れてゆくでしょう

実はこのキャラの登場は一回目だつたりします

約束の10分がたつたので指令室に戻ると、そこには少し前にとんでもない爆弾を落とした人物がいた

その人は、その爆弾をいじっている。大方作戦に使うのだろう

「そ、それではどうしてスローモーションになるかといいますと「ハイパーセンサー」が操縦者に対して必要な情報を送るために、感覚を鋭敏化させるんだよ。だから、逆に世界が遅くなつたように感じじるつて仕組みね。でも最初だけだよ。すぐ慣れるから」

ああ、高機動戦闘の話か

「シャルロットさん？私の説明の途中で」

「・・・それよりも、一夏<sup>イケニッショングースト</sup>が気にするべきなのはブースとの残量の方だろう。おまえは、瞬時加速<sup>イグニッショングースト</sup>を多用する癖があるからな。一層気を配らないと、あつという間にエネルギーが無くなるぞ」

「ラ、ラウラさん？あの、私の説明の途中で

「ラウラ！？ アンタもういいの？！」

割つて入るよ<sup>う</sup>に、鈴が声を張り上げる

「もう、いいですわ・・・」

・・・なんというか、すまないセシリ亞

「元々、10分だけという約束だつたからな。充分だつた

「充分だつたつて、あんた・・・」

「それより、作戦はどうなつたのだ?」

追及の手をかわすため、作戦の方に話を移す

「・・・作戦自体は至つてシンプル。篠さんが紅椿で一夏さんを運搬。牽制に回りつつ、白式の零落白天で一気に落とす。という感じでしてよ」

「なるほどな。たしかにシンプルだが、篠ノ之は大丈夫なのか?」

たしかに紅椿はスペックでは私たちのI-Sを凌駕しているだろうしかし、今日の午前中にもらつたばかりの機体では、実戦投入するには経験が無さ過ぎる

「大丈夫・・・なワケは無いと思うんだけど、本人もやる気だし、何より篠ノ之博士のもの凄い推しがあったのよ

「篠ノ之博士が?」

なにか、おかしくないか?

普通、訓練経験すら十分でない兵を進んで戦場に向かわせようとするか?

しかも、それが実妹であるにもかかわらず・・・

「ら、ラウラさん?」

「ん?なんだ?」

「どうしたの? 憂い怖い顔してたけど・・・」

「・・・いや、なんでもない。なら、私たちは今回外されていると

「いっことか?」

「そういうことに、なりますね」

なるほど。・・・ならば

「織斑先生。ひとつお願ひしたい事があります」

「・・・言ってみろ」

「柳瀬薰捜索の許可をください」

今回の作戦、ハッキリ言って不可解な点が多いしかし、私たちに任務がないのであれば、それを最大限有効に活用するべきだ

「却下だ」

「何故ですか？」

「海は広い。それこそ、ステルスマードのIJAを探すのは無謀なほどにな」

「しかし、仲間の救出も大切な作戦の一つだと思いますが?」

「交戦からかなり時間が経つていて、スクランブル捜索範囲も拡大している。・・・見つかるアテのないものに労力を割くのであれば、緊急出動に備えて温存しておけ」

やはり織斑先生も感づいているのだろう  
しかし、だからと言って引き下がるわけもない

「ならば、私一人で行います。それならば、人員も割きません」

しばらく織斑先生は考え込む

「いーんじゃないの? 織斑先生も、頑固になり過ぎだつて  
「・・・養護教諭の出る幕ではありませんよ」

織斑先生は鋭い目で睨みつける

「おつと、こわいこわい。・・・でも、ボーデヴィッヒさんの言つ事にも一理ありますし、何より、生徒を見殺しにするのは教師としてどうなのですか？」

「つー？ それは・・・」

「たしかに、福音の暴走を止められなければあちこちに被害が及びます。だから海域封鎖のため、捜索にあてられる教師にも限りがあり、不確定要素が多くすぎるため予備戦力も多くいるに越したことは無い。といつ訳ですね？」

「・・・」

「黙認ですか。・・・たしかに『戦略』として、大のため小を切り捨てるのは正しいのでしょうか。けどここは学園。教師としての『倫理』の方が優先される場のはずでしょ？」

「今は、学園としてではなく、ひとつの中隊として動いているはずだ」「たしかにそうですね。ですが、彼女のお願いは『対福音隊』としての動きとは違い、『学園の者として当然のこと』を嘆願している。人手がほしい現状、選り好みをしている場合ではないのではないか？」

私は、理詰めで追い詰められている織斑先生を初めてみた気がする

「・・・分かりました。そこまで言われるなら、柳瀬捜索の許可を出しましょう。ただし福音がどれほどエネルギーを残しているか、どのような動きをするか等、不明な点があまりにも多い。主力を必要以上に割くのは得策ではないと判断する。よって、柳瀬捜索はボーデヴィッヒのみ許可する」

「ありがとうござります！」

「よかつたね～」

ただし！

声を張り上げ、織斑先生は続ける

「ただし、教師陣も夜明けからずっと探しているが、柳瀬は未だ発見されていない。I-Sの操縦者防御機能があるが、いつまで持つか分からぬ。最悪の事態も覚悟しておけ」

「分かっています。薫がどうなつていようと、受け止めるつもりです」

「そうか。・・・なら、行動開始！」

「ハツ！」

最近やつていなかつた敬礼を、織斑先生に向けて行い、部屋をあとにした

「がんばってね～」

のんきな教諭の声だけが、部屋の中からは聞こえた

「ふう・・・」  
「若いって、いいわねー。行動力にあふれている」  
「あ、あの・・・マッケイ先生？」  
「んー？ 何かなオルコットさん？」

驚愕の一文字を顔に張りつけたセシリ亞が、尋ねる

「あなたは、何者なのですか？」  
「どういう意味かな？」

「俺、千冬ね……織斑先生が言い負かされるところ、初めてみた」「ぼ、僕も」

「あー・・・なるほどね。それで信じられないもの見たような顔をしているのか」「

そういうて、いかにも『保健室の先生』らしい笑顔を浮かべながら「私は、ただの養護教諭だよ？ 本当は政治家かＩＳの国家代表になりたかったんだけどね」

そんなわけのわからない答えを返すだけだった

「んー！準備完了！ちーちゃん、紅椿はいつでも行けるよー。」<sup>チューーン</sup>

「よし、ならば15分後に福音迎撃作戦を開始する。織斑、篠ノ之の両名は出撃準備に入れ」

「「はい！」」

「むう・・・しかし、どうしたものか」

搜索の許可をもらい、威勢よく出た私だが、早速困った事態になっていた

「薰の居場所、見当もつかないぞ」

そう、よくよく考えてみれば私は薰の居場所が分かるようなものは持ち合わせていない

ＩＳ間の座標認識も、あいつのはなぜかステルスマード

「かといって、闇雲に探すのでは・・・」

それこそ、南太平洋だと思つていたら北太平洋だった。なんて事態になれば、一生かかつても見つからない

何か、なんでもいいから薰の位置を知らせてくれるものそれを求めて思考をめぐらせるが、特に思い当たるものは

『お、お前を、私の『嫁』にする!け、決定事項だから』

あつた。

廊下を猛然と突き進み、目的の部屋へと入る

(よし、間違いないな・・・)

薰と一夏の宿泊部屋

窓には新しいガラスが来るまでの凌ぎなのだろう。段ボールのが取り付けられていた

この部屋の中にアレが無ければ、もう望みは無い

整理されていた薰の荷物をひっかきまわし、田畠での物を探す  
ない、ない、ない

(昨日使ってそれつきりか?・・・なら)

私は、まだたまれていなかつた布団をひっくり返す  
目的のものは、そこにあつた

(頼む、つながってくれ……)

新式の携帯電話のような外観をもつ、その機械  
リダイヤル機能をつかい、そいつにかける

『・・・・・ザザツ・・・ザーツ』

ノイズの混じつた映像とともに、それはつながつた

「薰か！？　いま、何処にいるんだ！？」

『ザーツ・・・ザーツ』

音声は聞こえない。だが、ノイズの向こうの景色が見える

真上には太陽

目の前にはただ広がる海

周囲には砂と、打ち上げられたともと思われる「みの山

どうやらどこかの孤島らしい

しかも、太陽を見るにここからそう遠くない

(そうすると、南太平洋の島々か・・・？　いや、それなら住宅の  
一つや二つ見えてもいいだろ？)  
（

近隣に住宅地も見えないとなると、無人島か  
とすれば、そう遠くは無いようだな

・・・よし、ここまで分かればなんとかなる  
あとは、景色に合致するポイントを探すだけだ  
すべにて私は飛び出した

## それぞれの（前書き）

・・・アニメの20話を早く観たいです  
私の地域は4話近く遅れて放送されているので、私にとつては20  
話が最新話です

さて、のつからどうでもいい話をしました  
といつて、本編の方をどうぞ

それぞれの

「うう・・・あ

まぶしきような、やうでないような光で俺は目を覚ました

「・・・」は?

薄いピンク色の壁。薄い青色をしたベッド

白い洋タンスに黒いテーブル

オレンジ色のやわらかな光を放つ、赤いスタンダードライトの隣には大きなクマのぬいぐるみがある

随分大事にされているのか、ぐたぐたになっているのに綻び一つない

「田はさめたか?」

「あ、ああ・・・」

声を聞き、振り向くとそこにはいたのは、『ラウラ』だった

旅館から一キロ離れた空域

少し離れたところに小島が見えるそこではHS同士の実戦が行われていた

「一夏！ 私が動きを止める！」

「分かった！」

篝は一刀流を駆使し、突撃と斬撃を交互に繰り出す福音もそれに対抗し、存在しない右腕に刃を生み出す一刀流の攻撃をそれで凌ぐが、紅椿の装甲が開くそしてそこからまたエネルギー刃が発射され、福音を狙う

どっちの機体も化け物だな・・・

篝は、展開装甲の自在な方向転換、急加速を使い、福音から離れない二つの刃を防いでいた福音だったが、流石に三つの刃は防げないらしい

次第に押されだし、防御の姿勢を取るようになつた

「はあああっ！」

ザシユツッ！！

福音の左腕が斬り飛ばされる

そこからは、ケーブルの束が見えた

いける！

そう思つて刀を握り締める

だが、そこには福音の全面反撃が待ち構えていた

「」

甲高いマシンボイスとともに、翼と一緒にしている砲門が開いた  
おまけに、左腕も刃と化していた

36の砲門が、数えきれない程の光弾を放つ

「くうっ・・・やるなつ！」

器用にかわす筹だったが、一刀流の追撃もあり、押されだす  
筹も装甲を開け、攻撃支援ビットをつくりだす

「！」

出力を上げ、紅椿は福音に迫る  
そのまま、一刀流同士の鎧迫り合いとなる

隙が、出来た

「…」

「一夏つ！」

しかし、俺は福音とは間逆の方向に飛び

「間にあええつ！」

瞬時加速を使い、一つの光弾に追いつき、零落白夜でそれをかき消す

「い、一夏！？」

「船がいるんだ！海域は封鎖したはずなのに・・・ああくそつ！密

獵船か！』

シユウウウン

そこで雪片はエネルギー切れ  
せつなくなる音を立てながら、展開装甲を閉じた

「くそつ！ どこだつ！？」

候補として上がっている場所をいくら探しても見つからない  
元々、この辺は似たような島が多いのも原因か  
とにかく、景色だけではどうしようもなかった

「他に、他に手掛かりは無いのか！？」

苛立ち混じりに、先程の端末の画面を開く  
ISの技術が使われているらしく、センサーリングができたのだ  
相変わらず、ノイズが邪魔で、先程の風景以外見えるものは

あつた

ぶつかりあつ、紅と白の光

降り注ぐ光弾

「これは・・・福音と交戦中か? ならば」

一夏も、近くにいるはず

白式の位置データをもとに、おおよその戦闘空域を割り出す

そつ遠くは無いな・・・よし

私は、すぐにそっちの方に飛んだ

「一夏。そんな奴らは放つておけば」

「算!」

「つ!」

「そんな、そんなさびしい事を言つなよ。力を持つた途端、弱い奴らの事が見えなくなるなんて・・・。うしくない、全然らしくないぞ」

「わ、私は・・・」

動搖を隠せず、両手に持った刀を落とす

刀は、力なく落ちてゆき そして消えた

(具現維持限界！？) リミットダウン (拙いっ！？)

ISはエネルギー切れを起こすとそれはただの重たい枷でしかない  
そして、ものすごく脆くなる  
そして そしてこれは実戦だ

「筈いいいつ！…！」

刀を投げ捨て、俺は最後の瞬時加速を使う

(間にあえ——間にあつてくれつ————)

一斉砲撃の姿勢に入つた福音と、箒の間に割り込む刹那、福音はあの甲高い産声をあげた

L a

それぞれの（後書き）

・・・エリの八巻が早く読みたいです  
そろそろ、出てきてもいいんじやないかと

ところ訳で、本編でした

「あらべれいと

「薰。お前は私の事が好きか?」

「そりや、好きだつて。昨日訴つたばかりだら?」

いきなり何を聞いてくるんだ?

「じゃあ・・・『嘘してこな』か?」

「はあ?」

おやじく、今の俺は田を白黒させへんといひだらつ  
何を聞きたいのかが分からない

「愛してこるのであれば・・・ソレの証を立てへれ  
「・・・またぐ、話が見えて」ないんだけど」

ゆっくりと近づいてきたラウカ  
そのまま、俺の上に つて

「ちよ、向してんだラウカー?..」

「こやか?」

「嫌かつて・・・はあ」

田の前にある、ラウカの双眸をじっと睨つめる  
相変わらず綺麗な紅色をしていた

「・・・」  
「・・・じつした?」

紅の、『双眸』？

バンッ！

「うわっ！？な、何をする薫！？」

俺の上に乗っていたラウラをどつき、ベッドから落とすそのまま覆いかぶさり、逃げ場をなくす

「・・・テメは、誰だ？」

「わ、私は、ラウラ・ボーデヴィッシュだが？」

「ラウラの眼帯の下は金色の瞳だぞ。両目が赤なはずがない」

「つ！」

しまった、心の中で思つてゐるのだからつ  
顔に出でている

「お前は誰だ！」

「・・・ふふつ。あははははっ！？」

そいつは、愉快そうに笑つた

「・・・」

旅館の一室。壁の時計は、もう四時を示そうとしている  
私は、いつまでたつても起きようとしない男のそばにいた

福音との交戦ポイント周辺の孤島に、薰はうちあげられていた  
絵にかいたようなボロボロぶりだつたが、マントがどうも耐熱・耐  
衝撃性に優れたものだつたようで、薰へのダメージは主要な骨以外  
の骨折で済んでいた

このマントがなければ、今頃は一夏のように重度の火傷をあちこち  
につくっていたか、衝撃で脊髄が切れてたんじやないか。と、マッ  
ケイ教諭は言つていた

問題は、そこではない  
篠ノ之の報告によると、福音は斬り飛ばされた腕より刃を生み出し  
たらしい

そして、右腕は交戦前より斬られていた

薰に出来た胸の傷と篠ノ之の報告を考えると、薰は刺された事になる

本来ならばEISの絶対防御が最も優先させるべき、心臓を  
それを貫くほどのエネルギーだったのか、EISがすでにエネルギー  
切れを起こしていたのか

それは分からないが、心臓を一突きにされ、海に落ちたとのだろう  
と推測される

『心臓動いてないけど生きてる。IISが人工心肺の役に回っているみたいだね。それと海水の冷却による低体温状態、傷口は焼かれていたから出血もなかつた。ある意味運がいいね、彼は』

と、教諭は言つていた

それと、IISをもつてしてもダメか、仮に復活したとしても障害を残す可能性があるらしい

「でも、彼の運の良さならピンポンしてそうだよね」

「・・・そういう気休めはいりません」

「それもそうか。・・・それで、どうするつもりなの?..」

教諭は、私に聞いてくる

「・・・決まっています。福音を止める」

それが元々の作戦

それが、今の私に出来ることだ

「なるほどね~。場所とかつて分かるの?..」

「私に考えがあります。だから先生。薫をよろしくお願ひします」

立ちあがり、教諭に頭を下げる

「・・・一夏くんの方もみにいかなくちゃいけないから、つきつき  
りは出来ないけどね。出来るだけ山田先生と交代で、誰かが隣にいる  
ようにするよ」

「ありがとうございます」

一礼して、部屋を出た

そのまま、私はある人物に一報入れる

「クラリッサ、私だ。ラウラ・ボーデヴィッシュ少佐だ」

『クラリッサ・ハルフォーフ大尉です。・・・隊長、何か問題が?』

「ああ、とても大きな問題が発生している」

『・・・なんですか?私たちに出来る事なら、全力でサポートさせていただきます』

「うむ。やはり頼もしいな。それで、頼みたい」というのはまだな

「

こちらは、また別の旅館の一室

もう三時間も目をさまさまない一夏の傍らには、篠ノ之箒がいた  
ISの絶対防衛を貫通した熱波に焼かれ至る所に包帯を巻いている

一夏

見た目的に酷い傷を負っているが、命に別条はないらしい

(私のせいだ・・・私が、しつかりしていいから、一夏がこんな  
目に遭ったんだ)

『作戦は失敗だ。以降状況に変化があれば招集する。それまで、各  
自待機だ』

ラウラに連れられ、何とか旅館へと帰還した筈に待っていたのはそ

の言葉だった

織斑千冬は、一夏の治療の指示をした後すぐに作戦室へと戻つていった

責められない事が、より一層辛い

(私は・・・もう一回・・・)

「バン！」とこう大きな音とともに、扉が開いた

「あー、あー、わかりやすいわねえ」

そうやって入ってきたのは、鈴だった

「あのそあ

「・・・・

「一夏がこうなったのは、アンタのせいなんでしょう？」

鶴は答えない

黙認ととらえた鈴は、そのまま続ける

「で、落ち込んでますってポーズ？ もうけんじやなこわよー。」

烈火の「」とく怒りだした鈴は、鶴の胸ぐらをつかんで無理矢理立たせる

「やるべき事があるのでしょうが！ 今、戦わなくて済むするのー。」

「私は・・・もう、エリには乗らない・・・」

「つー。」

バシッ！

頬をうたれ、支えを失つた簫は床に倒れる  
そしてそれをまた無理矢理立たせ、鈴は続けた

「いい！？」専用機持ちつていつのは、そんな甘つたれた我儘が許  
されるような立場じやないのよーそれともアンタは「

鈴の瞳が、簫の瞳をじっと見据える

映るのは、燃えるような闘志。怒りのような、赤い感情

「戦う時に戦えない、臆病者か」

「っ！私だつて、戦えるなら戦いたい！だが、もうビコヒーいるかも分かりはしない！ビービーとこうんだ！」

そうして簫は、自分の意思で立ち上がる

「やつと、やる気になつたわね。あーあめんどくさかつた」

「な、なにつ！？」

「場所なら、今ラウラが」

そこに、ラウラが入る

いつもの制服ではなく、黒い軍服を着ていた

「出たぞ。ここから約30km離れた沖合上空だ。目標はステルスマードではあつたが、光学迷彩は搭載されていないらしい。衛星の目視で確認した」

「さすが、ドイツ軍特殊部隊。やるわね」

ブック型端末を片手に持つたラウラに、鈴はにやりとした顔で答える

「お前も、準備は出来ていいのだ！」

「当然よー。」

「シャルロットもセシリアも準備は出来てこらそりだ。・・・お前は、どうあるんだ？」

リカは厳しげ田をして簫に問つ

「リカ・・・柳瀬はいいのか？」

「私が診ていれば、薫が必ず良くなるのか？ わりじゃないだ！」  
だからこそ私は、私のすべきことをやつとげ、あいつが起きるのを待つ。・・・それだけだ」

「それに、やり残してる事があるのにアイツが起きても嬉しさ半分。つてト！」

「ふ・・・わいことだ」

いやいやお鈴に、すました笑みを返すリカ

簫は、堂々としているリカがついやましかった

「アンタも、そんなシケたリカして一夏にあつたら、あいつが悲しむわよ？」

「うー。」

握つじふしを固く締める

「ならば・・・ならば私も戦うー。そして、今度こそ勝つー。」

その皿は、ぬれぬれない覚悟と、真つ赤な感情が宿っていた

さあ・・・。さああん・・・

波の音に誘われるまま、俺は砂の上を歩く  
その度に、足元はさくさくと音を立てる

さくさく  
さくさくと

焼けつゝ砂の熱を足の裏に受けながら、ゆっくつと足を進める

(ここは、夏なのか・・・?)

さささんと輝く太陽に田を細める

ここがどこで、いまがいつなのかも分からぬ  
でも、そんなことはどうでもいいのかも知れない

『』

不意に、歌声が聞こえてくる  
誘われるよつに、俺は足を向ける

さくさく  
さくさく

「ラーララ ハララ」

波打ち際に、少女はいた

爪先をちよつとだけぬらしながら、踊るよつて歌い、謡つよつて謡の

その度に揺れる白い髪

輝き、眩いほどの白

時折、同じ色のワンピースがふわりとやわらかく舞う

(ふむ・・・)

俺は、声をかけようとは思わず、近くの流木に腰をかける  
随分前から流れ着いていたのか、その木は樹皮が剥げ落ちて真っ白  
だった

ざあざあと音を立てる波

時折吹く、涼しい風

じりじりと照りつける太陽

何もかもが心地よくて、俺は、ただぼんやりと田の前の光景を眺めていた

「あははははははー！やつぱりマスターだ！あはははははー！」

そういうて、ラウラの偽物は光に包まれ、別の人間を形成したフリルいっぽいの、ゴスロリつだつけ？ あんな感じの衣装に身を包んだ、小さな女の子が現れた

「・・・アルか？」

「うんー。もうだよー。やつと直接話ができるねー。」

そういうえばそつか

今まで、姿を見たことはあつても、いつやって触れあつては無かつたもんなあ

「とにかくで、ここどこなんだ？」

「ここ？ここはね、ボクの中の、ボクだけの世界なんだ！」

「へえー。じゃあ、アルの望んだことはなんでもできちやうのか」

「うんー。」

それで、ラウラに変身して俺をからかったのか  
決定的な間違いを残しておくあたり、迂闊だなー

あはは

「ちょっと話がある  
「ぼ、ボクはちょっとマスターと遊びたかっただけなんだよー？  
「まだ何も言つてないだろうが」

「顔が怒ってるもん！」

おや、出来る限りの紳士スマイルのつもりだったが。ビリヤリ般若のよつた顔になつてたらしき

「まあ、あまり気分のよくなる『冗談』ではなかつたがな」「『』、『めんなさい』……」

「まあいいや。……で、何があつた？」

ビクッ…と、大きくふるえるアル

「……もうだよね。マスターだから、知つてなくちゃいけないもんね」

何かを諦めたようになつて、アルは話しだした

「まず、マスターの聞きたいことは何？ ボクのこたえられる範囲でだつたら、なんでも答えるよ」

「そうだなあ……」

俺は少し考える

「まず聞きたいのは、なんで俺の意思とは無関係にE.S.が展開されたのか。それと、どうして勝手に進んだのか。それと……」

「ああ待つて待つて！ 一つ一つね……E.S.の展開についてはマスターの意思じゃなくて、ボクの意思がないと始まらないんだ。マスターの呼び掛けに応じて、ボクが呼び出す。って感じなんだ。だから、ボク一人でも展開することは出来るんだ」

へえ……

「じゃあ、勝手に移動したことは？」

「ママのデータの中にあった、自動操縦システムを使ったんだ。ＩＳの直進とか簡単な操作なら、ＩＳコアの任意で行えるようになるオートパイロット

みたいなんだ」

「ふーん・・・

「もう一つ。声つてなんだったんだ？」

「あの子・・・『銀の福音』からのＳＯＳ。マスターには聞こえて無かったと思うナビ・・・」

「そうだな。雑音がひどくて、特に何も・・・」

「雑音？「ーん？・・・とにかく、叫ぶようなＳＯＳの後、急にコアネットワークが遮断されたんだ」

コアネットワークの遮断っていうと・・・

「たしか、ＩＳひとつでは世界を捨てたも同然なんだよな」

「そう。それで、ママがくれたデータとかフルに使ってＳＯＳのあつたポイントにいこうとしたんだ」

「で、道中で目的のエラーバッタリはち合せた・・・ってわけか

「そうこうして」

なるほど、あの夜で気になつた点はこれくらいだが・・・

「俺が海に落ちた後は？」

明らかに、アルの空気が変わる

「・・・海に落ちたマスターは・・・そのまま波にさらわれて、あ

る孤島に漂着したんだ」

「・・・なるばく」

「そのあと、ラウラちゃんがやつてきて……今、マスターは旅館

で  
・  
・  
・  
」

急に俯いて、喋らなくなるアル

「旅館で、どうなったんだ？」

• • •

「うつああああああああ」

「うわああつ！？」

卷之三

吃驚したじゃないか！？

「うう・・・ごめんなさい、ボクが・・・マスターを、無理矢理連れ出さなきゃ・・・ひぐつ」

ああ、もう二つとか

「ボクのせいで、マスターが・・・ひぐつ・・・うわああああん

「うんうん……分かつた

溜めこんでいたものを全部吐き出すかのように、アルは俺の胸の中

でわんわん泣いた

普段から子供っぽいって思つてたナビ、やつぱり子供なんだぞ、今  
のコイツをみて思う

ईの深層意識だらうと、兵器の中核だらうと、子供は子供。いく  
ら強がつてませたつて、一人で重いものを背負いこめやしない

なら・・・いや、だからこそ俺はコイツと向き合へきだ  
親にはなれないけど、背負いこんでるものを持へしてやれる、ホン  
トの『相棒』にはなれるか  
り

「・・・・・」

海上2000m

銀の福音は、胎児のような格好でうずくまつてゐる  
おそらく、連戦と移動で消耗したエネルギーを補充しているのだろう  
膝を抱くよつに丸めた身体を、護るように頭部にある翼が覆つ

?

ドゴォンー

それは、一瞬だった

超音速で飛来した砲弾が、福音の頭部に直撃する

轟音をあげ、噴煙をまき散らした

「初弾命中。続けて砲撃を行つ!」

福音の5キロ先には、簡潔な状況報告を済ませ、再び目標めがけて砲撃を行つラウラ

反撃姿勢を取る前に、一発目、三発目と命中してゆく

纏うエジ、『シュバルツェア・レーベン』は通常仕様よりその姿を大きく変えている

80口径特殊仕様レールカノン『レーヴェ』を搭載  
そこから来る反動の抑制と、対砲撃・狙撃兵用追加装甲を装備し、  
全体的にごつくなっている

これが、特殊砲戦型パッケージ『パンツァーツヴィーアイ』を装備した、  
シュバルツェアレー根であつた

(敵機接近まで、40000 30000 くそつ! 予想よりず  
つと速いぞ!)

あつという間に、福音に距離を詰められる

砲弾をずっと撃ち続けてはいるものの、大半は翼からの光弾に撃ち落とされている

「La」

あの甲高いマシンボイスとともに、光弾の雨がラウラに降り注ぐ

「ちいっ！」

確認した直後、ラウラは砲身を下に向け、砲撃と同時に後方に加速する瞬時加速に勝るとも劣らない速度で、福音の光弾の群れをかわすしかし、機動力に特化している福音にとっては、それはただの時間稼ぎでしかないあつという間に距離を詰め、ラウラに対して存在しない右腕を伸ばす

「セシリアアッ！！」

その腕は機体だと、突然上空から飛来した機体に弾かれる

それはビットを封印し、代わりにスラスターとした強襲用高機動パックージ『ストライクガンナー』を装備したセシリアだったいつものライフルよりも威力割増な大型BTライフル『スター・ダストショーター』が、夕陽の空に煌めきを放つ

『敵機Bヲ認識。排除行動一移ル』

撃たれた福音はセシリアを敵と認識した。無機質なマシンボイスで呴いた

「遅いね」

そういうて、セシリアとラウラの攻撃をかわす福音に不意の一撃を加えたのは、先程の強襲の時、セシリアの背中に乗っていたシャルロットだった

背後からショットガンによる近距離射撃をくらった福音は、たまら

ずよろける

が、それも一瞬ですぐに体勢を立て直し、第三の敵に対しても反撃を行おうと、翼を広げる

「させるかあああつ！」

海面が爆ぜ、簫に運ばれた鈴が飛び出す  
そして、その勢いで急襲をかける

「ピンチは最大のチャンスってねつ！」

三方からの援護とともに、反撃のため回避できない福音の懷に飛び込む鈴と簫

福音は反撃よりも、脅威と感じた一人の排除を優先する  
援護攻撃を受けつつも対象を急変更。鈴と簫に向かい、銀の鐘を鳴らす

「簫！鈴！僕の後ろに回つて！」

紅椿は前回の反省も踏まえ、機能限定状態にある  
防御時に自動展開しないよう、設定し直したのだ

対するシャルロットは、防御強化パッケージ『ガーデン・カーテン』  
装備している

物理シールドとエネルギー・シールドを一枚ずつ装備したこのパッケージならば、福音の弾雨にも耐えられる  
多人数で作戦を行うが故の役割分担だったのだが

(ここで逃げたら、カツコつかないわよね)

(やうだな。それに、ここに引いてしまつては )

「第一 鈴！」

叫ぶようなシャルロットの声を無視し、二人は

(（なんのための力だ！））

空烈によるエネルギー波と機能増幅パッケージ『崩山』により強化された衝撃砲で強引に突破する

捌ききれない光弾を受けつつも、両腕の剣に装甲を斬られつつも二人は翼を切り裂いた

唯一の飛行手段を失い、福音は音も立てずに海上へと落ちてゆく

「はあ・・・はあ・・・」

「ど・・・どうよつ」

翼を折つた二人は、肩で息をしている

紅椿の方はまだまだいけそうだったが、甲龍の損傷はひどかつた

「・・・一人とも、無茶するんだから」

「このくらい、無茶でもなんでもないわよ」

「それより、福音は？」

「私たちの

『私たちの勝ちだ』

その言葉が、最後まで告げられることは無かつた

「海上に高エネルギー体を確認！まだ気を抜くな！」

「「「「つー?」「」「」

ラウラの警告とともに、全員が福音のほうをむく  
その瞬間、強烈な光により海面が吹き飛んだ

子供（後書き）

なんて言つた・・・よつやへりまでもじつけた感じです  
男子陣の戦線復帰は次々話あたりになりそつです。めつちや伸びて  
ます

「もういいか?」

「うん・・・もう大丈夫」

ようやく落ちついたようだ  
抱きしめた腕を解き、自由にしてやる

「・・・」めんね、マスター」

泣きはらした目で、真っ直ぐに俺を見る

「ん? 何がだ」

だが、顔は曇りきっている

なんというか、年不相応（見た目）な真剣さだった

「ボクが、あんなことしなければ・・・」

「まだ言つてんのか? 思いつきり泣いて、スッキリしたろ?」

「うん。でも、スッキリすればいいってわけじゃないと思うから」

「そりゃそうだな。悪い事をしたと思ったら、自分から謝るべきだ  
な」

そういうとますます曇つてゆくアルの顔  
そして、しおれた花のように俯いてしまった

「・・・だから」

「でも、お前何か悪いことしたか?」

「えつ？」

真っ赤な髪が揺れた

黄金の瞳がこちらをじっと見つめる

「お前は、助けを求める声に手を差し伸べようとしただけだろ？人として正しいことをした。それに」

「それに？」

服の袖をまくり、アルの細い腕をあらわにさせた

「それに、こんなになつてまで俺を守つてくれてた奴を、怒る気にはなれないわ」

その腕は、火傷によつて所々赤くはれ上がり、ひつかき傷でボロボロになつている

腕がこうなら、全身そんな感じなのだろう

「ま、マスターあ・・・

そういうと、また震えだす

「う、ごめんなさい、なんか、嬉しくなつちやつて  
嬉しいなら、泣くなよなあ？」

これじゃ俺、ただの女泣かせじゃないか

「う、うん。そうだよね。・・・あのね、マスター」

「なんだい？」

「ボクね、マスターがマスターで本当によかつたつて想うんだ

「奇遇だな。俺も、俺のエジがアルでよかつたつて思つてる」

「ホントに？」

「ホントだとも」

聞き返してくるアルに、腕を組んで大真面目にかえす

「・・・あははは。あははははは！」

「泣いたり笑つたり、いそがしい奴だなあ」

「そうだよ。ボクは見た目以上にいそがしいんだよ。マスターのサポートとかでね！」

「ひつでえ」

でも、あながち嘘ではない気がする

「だからね、マスターのサポートができるのはボクしかいないと思うんだ。だからね、これからもういろいろ迷惑かけちゃうかもしれなければ、一人でがんばろ！マスター！」

そういつて、満面の笑みを見せながら手を差し伸べてくる

「・・・ああー！」

俺は、コイツとならブリュンヒルデ超えられる  
不思議と、そんな気になつた

「じゃあいこ？シコバ兄とか、皆が呼んでるし」

「しょ、シコバにい？・・・まあいいや。呼ばれたら、いくしかないよなあ」

「な、なんですかー！？」

球状に抉れた海面は、時が止まつたかのようにへこんだまま  
中心には自らを抱くように福音がいた。辺りには、青い稻妻がほと  
ばしる

「強引な第一形態移行・・・」

「なんですかー！？」

その声に呼応するかのように、福音は鈴の方を向く

「それって、じゃあ、アレは」

鈴が、その言葉を最後まで言い切ることは出来なかつた

「ああああー！」

圧倒的なまでの加速

ボールのように蹴られ、斬られ、撃たれ、いたぶられる鈴  
しかし崩れた姿勢の中でも、致命傷となる部位への攻撃は防いでいた

「鈴！？ くそつ・・・セシリ亞！ 援護！」

「分かっていますわー！」

ラウラとセシリ亞はそれぞの獲物を構える

「くそつ・・・速すぎるとー！」

止まることなく鈴をいたぶり続ける福音

下手に撃てば鈴にあたる。かといって正確に狙い撃つには速すぎる

撃つても牽制にすらならないのではないか

そう思い始めたラウラには、恐慌状態の新兵が見えた気がした  
不意に、福音が動きを止める

そして、動かない鈴を翼で包み

「させませんわー」「させるものかあつー」

そこに、ラウラとセシリアの攻撃が入る  
が、福音はそれをものともせず、鈴を抱く

抱かれた鈴は、零距離での弾雨をモロに食らい、海へと落ちてゆく

「鈴つー」

シャルロットが、鈴を助けに行く

福音は、とどめを刺した敵に興味は無いらしい

『キアアアアアツ・・・』

勝利の咆哮のような音の後、今度はラウラへと向かう

「ラウラさんつー！」

叫ぶようなセシリアの声が聞こえる  
だが、ラウラは構わずに砲撃を行う

### 特殊仕様レールカノン『レー・ヴ』

どのあたりが特殊かというと、それは反動制御にある  
通常、砲の反動は真後ろにしか発生しないため、相殺するために足  
を止める必要がある

しかし、それを進行方向と同じ方向に発生させることができたらどうだろうか？

機動力を損なうことなく、砲撃が可能となる  
その発想を実現化。試験搭載してあるのだ

ラウラは、福音に砲撃しつつ後退。加速する

「レーヴ」とはしたくは無いが、どうも仕方ないらしい…」

加速、加速、加速

砲戦仕様とは思えない、自らが一つの砲弾になつたかのような速度  
を出し、福音めがけて突撃する

対する福音は、光の弾幕によりその突撃を防ぐとする  
そして、足が止まった

ラウラは笑う

福音は、体勢に入ったものの何もしない

否、何もあることができない

そして、音速を超えた黒い砲弾は、背筋の凍つた福音に直撃した

ざあん。ざあん・・・

波の音を聞きながら、俺はその少女を飽きもせずにみていた  
その歌は、その踊りは、俺をひどく懐かしい気持ちにさせる

(・・・あれ?)

気がつけば、少女の歌は終わっていた  
踊りもやめ、ただ空を見つめていた  
不思議に思った俺は、少女の隣にゆき、声をかける

「どうかしたのか?」

それに反応して、とこつよつせ、ただ独り言のようこの少女はつぶやく

「みんなが呼んでる・・・行かなねや」

「え?」

彼女の視線を追つてみると、そこにはただただ青い空と、まぶしこ  
太陽があるだけだった

「・・・あれ?」

視線を彼女に戻そうと思ったが、それはかなわなかつた  
気がつけば、少女はいなくなっていたからだ

「力を欲しますか？」

「へ？」

さつきから間の抜けた声しか出していない気がするが、とにかく、  
声のした方を向くと、白い甲冑を着た女性が、海の中に立っていた  
膝下まで海に沈めた彼女の顔はガードに隠れていて、下半分しか見  
ることができない

「力を欲しますか？・・・なんのために？」

「んー・・・難しい事を訊くなあ・・・」

暫く考えてみた結果、やつぱり「れしかないとと思つ

「・・・そうだな。友達を いや、仲間を守るためかな？」

「仲間を・・・」

「仲間をな。世の中って、結構いろいろなものと戦わないといけな  
いだろ？単純な腕力だけじゃなくて、もつといろいろな事でさ」

漠然とした思いしかなかつたのに、妙にくつきり、はつきりした輪  
郭となつて俺の中に湧きあがつてくる

ガードの隙間の、およそ田と思しき所をじっと見ながら、俺は話す  
のを止めない

「ほら、道理のない、不条理な暴力つて結構多いだろ？そういうの  
から、出来るだけ助けたいと思つ。この世界で戦う 仲間を」

「そう・・・」

女性は静かに答えた

「だったら、いかなきゃね  
「え？」

突然後ろから声が聞こえる

振り向くと、そこにはさつきの女の子がいた

「ね？」

手を取られる。照れ臭い気持ちになりながら、俺はそれに答えた

空が、海が、世界が。眩いほどに輝きを放ち始めた

ところまで、全体を通して52話『覚醒』でした

いやあ、アイマスの20話に泣いていたら、気がついたら5  
2話まで進んでるっていう・・・

前の俺なら20話ぐらいで投げてたね（・・・）

でもそんな俺もクリスマスはボッチ・・・onz

「ぐつ・・・やはり、音速タックルなどやるものではないな」

痛みに歯を食いしばりながら、ひしゃげてしまい使い物にならなくなつた追加装甲をバージせる

#### AICによる標的の固定

確実な命中と、タックルの運動エネルギーを余すことなくぶつけられること

この一つが同時に実現されるのだが、音速で敵にぶつかるのだからやる側もそれなりのダメージに入る  
腕の骨とアバラが何本か持つてかれたようだった

そんな、ラウラの捨て身の攻撃  
確実に入つたダメージ。しかし

『キアアアアツ・・・』

「なん、だと・・・」

福音の腹部は破損し中の機械仕掛けが見えているが、それ以外に問題は無いようだつた

咆哮をあげ、先程の鈴のようにラウラを抱く  
退避するには、遅かつた

「ラウラが死つ。」

「ラウラが死つ。」

今度は、ラウラが海に落ちてゆく

「よくも、私の仲間をつ！」

「籌つ！」

「筹さん！？」

ラウラに変わり、籌が飛び出す  
急加速によつて飛び出した紅椿は、そのままの勢いで刀を振るつ  
展開装甲を駆使したアクロバットで攻撃を回避、不安定な姿勢から  
の斬撃を、ブーストで威力をあげる

攻撃と同時に加速。回避と同時に加速  
徐々に出力をあげてゆく紅椿に、ダメージもあつてか福音が押され  
だす

(これなら、いけるつ。)

剣刃による打突を放つ。が

キュウウン・・・

「なつーーーんなどきこつーーー！」

無情にもエネルギーが切れる

「今度こそつ！」

「させませんわつ！」

そう言い、シャルロットもセシリ亞も突撃をかける  
しかし、福音は余程紅椿にとどめを刺したいのだろう

今までの倍以上の弾幕を貼り、セシリ亞とシャルロットを止める

凶刃が、幕を襲う

(届かなかつた……か)

離れてゆく空を見ながら、彼女は思つ

(最後の最後で、私といつものば……)

次第に消えてゆく装甲の感触

彼女は目を閉じる

(薰……)

自分に光をくれた存在に  
初めて、人の温かさを教えてくれた存在に

(もう一度、会いたかった)

雲が、こぼれた

「俺も、会いたかった」

そんな声が聞こえたかと思うと、不意に落ちてゆく感覚が止まる

「お疲れ様。・・・後は、俺らに任せといてくれ」

目を開けると、そこには暖かな輝きを放つそいつがいた

「・・・」

たしかなぬくもりを感じながら、彼女はもう一度目を閉じた

### 簫を襲う凶刃

しかし、白い輝きに阻まれる

「い、一夏つ！？一夏なのだなつ！身体は、傷は・・・」

簫と福音の間に割って入ったのは、由武第一形態・雪羅を纏つた一  
夏だった

声を詰まらせながらも、あれもこれもと聞いてくる簫に、彼は答える

「おうつ、待たせたな」

「よかつ・・・よかつた・・・本当に・・・」

「なんだ？泣いてるのか？」

「な、泣いてなどいないっ！」

ぐじぐしと囃をこすり強がる簞を一夏はそつと撫でる

『キアアアアツ・・・』

攻撃対象と邪魔者が見せた隙を、福音は逃そつとしなかつたしかし、それは一筋の光条により遮られる

「あんまり、空気の読めなこととするなよなつー」

もう一人の邪魔者を見つけ、福音はそちらに向かう

「どうも、心配掛けたみたいだな  
「し、心配してなどつ・・・」

なおも強がりを言つ簞

いつもの髪型じゃないのがビリも氣になる

「ちよづど良かつたかもしれないな

「え?」

彼は、自分が持つて来たものを渡す

「り、リボン・・・?」

「誕生日、おめでとう」

「あつ・・・」

彼が、シャルロットを連れて買いに行つたものそれは、簞へのプレゼントだった

「それ、せつかぐだし使つてくれよ

「あ、ああ・・・」

「じゃあ、まだ終わつてないから、俺は行くぞ

そうこうで、一夏は福音を向く

「・・・一夏つー・」

「なんだ?」

「その・・・勝てよつー・」

彼は親指を立てて答え、福音の方へと向かう

「もういいのか?」

「ああ。コイツ片付けないとスッキリしないからな

「俺一人でも、充分だけどなつ!」

ばら撒かれた光弾を、自らが持つマシンガンで迎撃する  
光弾は、全て霧散していた

「つれない事、言つなよなつー・」

薰に斬りこんできた福音に、一夏が割つて入る  
零落白夜により、右腕の剣はかき消される

「それもそつか。なら・」

一人はじつと福音を見据えながら、会話を続ける

「お前の相手は、俺たちだ!」「

一夏が福音に斬りかかる

福音はひらりとそれをかわすが、それを左手の武器で追撃する

第一形態の白式に発現した装備『雪羅』といつそうだ。そう白式が言っている

展開装甲によつて形を変え、クローが福音の装甲を削る

即座に、マシンガンだった『ロキ』を剣に変え、福音へとさりげなく追撃をかける

圧倒的な速度と、圧倒的な自由度

ようやく第一形態へと以降したアルカナを表すには、それで充分だつた

初めて剣という獲物を持ったが、どう戦えばいいか、どう対処すればいいか

それが手に取るように分かる。

いや、『知っている』

さつと辺りを見る

凰とラウラを担ぎ、勝負の行方を案じているシャルロット  
一夏の帰還を喜び、共に戦いたがっているのは篠ノ之か  
セシリアは唇を噛みながら、流れ弾の迎撃をしている

それに、緊張の糸が切れて眠りてしまつてこるラウカ

全てが手に取るよつに分かる  
まるで、俺自身がエリになつたかのよつな。そんな感覚にやせなつ  
てしまつ

真下にいる『銀の福音』に注目する

ふるえながら、必死に怖いものを遠ざけよつと、鎧の中でもがいて  
いる  
しかし、もがけばもがくほど、鎖は彼女を縛りあげてゆく

「うあああつ！」

フロートコニットも駆使し、福音に隙を作らせる  
その隙につけ込み、一夏が零落白夜で翼を切り裂く  
だが一撃田をかわされ、斬つた翼も再構築されてしまう

白式のエネルギーは残り20%。3分ももたない  
次の一撃をかわされれば、もう一ひじり後は無い  
どうすればいいか  
問い合わせを発した瞬間に答えが返つてくる

『かわされるなら、動かなくすりやいい』

そんな答えと一緒に、あるデータが送られてきた

(くそつ！ このままじゃ……)

リミッター無しの軍用I-Jがどれだけのエネルギーを持つか見当もつかない

対して俺は、早くもエネルギーが尽きようとしている

それは焦燥にかわり、俺の心を焼く

それを知つてか知らずか、目の前をうなりをあげながら白が駆け抜ける

速度を下げる事なく弾幕をかわしきり、福音に肉薄する  
本当に薫が乗つているのかすら疑わしいほどに、迷いのない動きだ  
った

だが、決定的な一撃が決まらない

(どうする……どうすればっ )

「一夏つ！」

「篝つ！？ お前、ダメージは……」

「大丈夫だ！ それより、これを使え！」

篝が俺に触れる

電気が流れたような衝撃と、炎のような熱が奔る

「エネルギーが・・・回復！？ 篠、これは

「今は考えるな！それよりはやく！」

「あ、ああっ！」

俺は、最大出力の零落白夜を握り締め、福音へと向ける

薰に気を取られ、こちらへの注意が散漫になつてゐるようだ  
絶好のチャンス

「今度は逃がさねえっ！」

動きまわる福音だったが、こちらに気がつくとすぐに対撃体制へと  
移る

光がばら撒かれる・・・」とは無かつた

「一夏あつ！ いけええっ！」

「おおおおおおおっ！ ！」

たしかな手ごたえを、感じた

血を輝き（後書き）

なつやく福音戦終了です

なんといいますか、やけに長いクセに塗りものになってしまった気がします

感想・ご指摘等ありましたら、よろしくお願ひします

## 戦士の生還（前書き）

・・・そんなカードが遊戯王にあつた気がします

モンスターを特攻させてはそれで回収して、また特攻させていました  
魔法、トラップ？

そんな物、攻撃の前には無意味だつて、信じて疑わなかつたあの頃  
のいい思い出です

まあ、本編の内容にはイチ？も関係しません

## 戦士の生還

次第に翼を失つてゆく福音

それだけが、一夏の 僕達の勝利を語つていた

「・・・終わった、よな？」

「多分、終わったと思うぞ」

咳きだつたつもりが、聞こえていたらしい  
篠ノ之は、どこか残念そうな顔をしながら答えた  
やつと倒せたのに、なんでそんな顔すんだよ・・・

「まさか、A I C までモノしちまうのかよ・・・」

一夏の最後の一撃、福音の反撃を止めていたのは、ショーカーズ・アイ切り札の瞳マ  
あ、早い話 A I C だつた

『シユバ兄が教えてくれたんだ。でも、シユバ兄のと比べるとずつ  
とよわっちいけどね』

『シユバ兄つて、シユバルツェア・レーゲンのことだつたのか。・  
・つと』

アルと話をしながら、俺は落ちていく福音を抱きとめる  
火の中に突っ込んだような痛みが腕を襲うが、別どうつてことない

「や、柳瀬つ！？」 「か、薰！？」

篠ノ之と一夏が同時に声をあげる

・・・お前ら仲いいな

「・・・これ、さっきまで動いてた方が奇跡なんじゃないか?」

『駆動系も限界を超えてたんだろうね。スラスターが焼きついてる

ぱつと見た感じ、壊れていらない場所を見つける方が困難  
装甲はひび割れ、切れた腕からはバチバチと音がなっている

腹部は砕けていて、中の機械仕掛けが見えている

『この傷ができた時、もう限界だつたんだよ』

「じゃあ、なんで動いてたんだ?」

『そんなの、ボクにも分んないよ。直接聞きくしかないけど、気絶  
してるみたいだし』

「ふーん・・・」

システム的には限界。でも動いてた  
ISにも根性論があるのか?

「まあ、いろいろ聞きたい」とはあるが、旅館に帰つてからでもい

いか  
「薰」

呼ばれたので振り返ると、シャルロットがいた  
凰と、ラウラを担いでいる

「お疲れシャルロット。大丈夫か?」

「うん。僕は大丈夫。それよりも」

「さて、福音は無事回収。柳瀬も見つかり、作戦は無事成功。だが、お前たちは獨自行動という重大な違反を犯した」

『・・・はい』

「特に柳瀬には長時間の独断専行もある。・・・窓ガラスの請求書だけで終わると思つなよ」

「はい・・・」

旅館に帰つてきた俺たちを待つていたのは、氷よりも冷たいお説教だつた

大広間で全員正座しながらそれを聞いている

もう30分経つている

セシリ亞が信号機よろしく顔色を赤から青に変えている  
イギリスには、正座なんて文化無いもんな

「あ、あの・・・織斑先生。けが人もいるよつですし、そろそろ・・・

・  
「ふん・・・」

セシリ亞の様子を見かねたのか、織斑先生の怒氣が恐ろしいのか、山田先生はいつも以上におろおろしている

養護教諭の先生（さつき聞いたらマッケイつていつてた）は、気にすることなく救急箱で手当てをしている  
時々しみたり痛かつたりするが、声をあげれば出席簿のよつな掌が襲つてくるので、我慢するしかない

「・」

なんでそんなに上機嫌なんですか  
といふか、さつきからすゞしみるんですけどワザとやつしません?  
あいだだだだつ！しみるしみるつ！

「じゃ、じゃあ、一度休憩してから診断しましょうか。ちゃんと服  
脱いで全身診せてくださいね」  
「もちろん、男女別だよ織斑君」  
「・・・分かつてますつて」  
「んじゃ、男子は隣の部屋に移動。一人とも重傷だったから、女の  
子たちよりは時間かかるわよ」  
「了解つす」  
「ああそうだ。水分補給忘れないでね。夏は急にくるから」

そういうが早いが、マッケイ先生はきびきびとスポーツドリンクを  
配る

「うげつ・・・口切つてる」  
「ワサビ玉は控えとけよ。地獄見るから」  
「口切つてなくても、充分地獄だつつの」

あー・・・頭いてえ

「ね〜ね〜ヤナツキ。何があったの〜?教えてほし〜な〜」  
「機密らしいから、喋るわけにはいかんのだよ」  
「む〜つ・・・」  
「・・・」

食事中

布仏がべつとりとひきつけてくる

俺からなら何があったか聞けると思ったのだろうが

「・・・ダメ?」

「上田づかいでお願いしても、ダメなものばダメ」

「ちえ～っ・・・」

「・・・」

「どうも、どうも、喋ると一生監視がつくらじこな。飯食つても寝てる時も。お前にも、俺にも」

それを聞いて、布仏は珍しく顔をひきつらせた

「や、それはあんまり嬉しくないね~」

「だろ?」

「じゃあ、もう聞くかな~よ~。じ~ね~」

そうについて、布仏は席にもどった

「・・・」

「ひ、ラウラ、なんなんだ?」

れつかから、時々こちらを見ているラウラは、腕で包帯を巻いてこの

聞けば、『ひょっとな。一週間もしないうちに『お前』といつてた

食わせてやる』とかと思つたが、別にいいそうだ

「・・・いや、なんでもない」

そういうて、またもぐもぐと食べ始める

・・・ 気のせいだらうか。昨日に比べて素つ氣ない

「・・・じゃあな」

「あ、ああ・・・」

食べ終わり、やつと部屋に戻つてしまつ

一人で食べたじがうは、あまりまくは無かつた

ぞあん・・・ぞあん・・・

「ふう・・・」

潮騒の音を聞きながら、俺は、昨日は見れなかつた夜の海を、たゞ  
ぼつと眺めていた

残念なことに満月ではなかつたが、それのおかげか星も見える

俺が昨日壊した窓は、もうすっかり張り替えられている  
一夏の奴は、『泳ぎにいく』とか言つてでていつてしまつた。元気  
なやつめ

『「ウラナ、薰のいない間だいぶ無理していたみたいなんだ。だから、そばにいてあげて』

どうでもいいことがぐるぐる頭の中を巡つてこると、シャルロット  
に言われたことがよみがえってきた

「・・・」

俺は、部屋を出た

人気のない廊下

頼りない常夜灯が足元を照らしているだけで、他に光は無い

『そういうマスター。 部屋分かるの?』  
当たり前だろ。 その角曲がつてすぐだ

「あ・・・」

そこには、浴衣を着たラウラがいた

## ミルキーウェイ

「 . . .  
「 . . .  
「 . . .

どうも、考へてこることは同じだつたらしこ  
ばつたり出へわした俺らは、とりあえず俺の宿泊部屋に來ていた

ラウラの部屋にはルームメイトがいる  
海のどこかには一夏がいる。そして浴衣じゃ多分肌寒い  
結局、一番落ち着けるのはここだつたという訳だ

「 . . . なあ  
「 . . . なんだ?  
「 いひいう時つて、何を話せばいいんだりうな  
「 さあな」

とつあえず、他愛のない世間話ではないだろつ

「そつか。じゃあ . . . 。ラウラ」  
「うん?」  
「その . . . ただいま」  
「 . . . 」

ラウラは答えない

何だか居心地が悪くなり、俺は窓の外に視線を移す  
群れをなした星が、辺りを照らしている

「・・・ばかものっ」

「え？」

振り向いた瞬間 抱きしめられた

「おかいり」

「・・・ただいま」

俺はラウラを、大切なものを壊してしまわないよう、そつと抱きしめる

直接伝わってくる温もり、輝く銀色  
時々耳にかかる息がこそばゆい

すべてが、俺に生きている実感をくれる  
帰つてこれた喜びを、教えてくれる

「薰。約束してほしいことがある」

「・・・なんだ？」

「もつ・・・どこにも消えないでくれ」

そう言つたラウラの声は、心なしか曇つて聞こえた  
身体も、震えている

「・・・俺は、もつどこにもいかないよ  
だからそんな顔するな  
だから笑つてほしい

それが、俺のいちばんの宝物だから

「んー・・・紅椿の稼働率は絢爛舞踏含めても42%かあ。まあ、初めてつてこと考えると、こんなとこうかな?」

各種パラメーターが記された空中ディスプレイを見ながら、その天才は無邪気に笑う

「いやあ、アーチャンの第一形態は凄いなあ。ショッパンから単一仕様能力無しでの稼働率100%なんて。かーくんとの相性も抜群みたいだね~。やっぱり、束さんは完璧だねえ!」

どこまでも子供のその笑いは、どんな明かりに照らされていようが変わらない

いつもどこか退屈そうにしている、篠ノ之束その人だつた

「お前は、いつも退屈そうで、いつも楽しそうだな」

音もなく千冬が姿を現す

「やあ、ちーちゃん」

「おひ~」

向きあつたりはしない

顔を見なくとも、相手がどんな表情をしているか分かる

そんな確信が、二人の中にはあるのだ

「ところで、お前に聞いてみたかったことがある」  
「はいはいなにかな? 束さん今ならなんでも答えちゃうよ?」

「あの『IS』『アルカナ』の『PA』についてだ」

「ありやそつち？『白騎士』はどこに行つたかじゃなくて？」

「それは、白式をそのまま『しろしき』と読めば、それが答えだろ？」

「『ひんぽんひんぽん。じゃあ本題に入らつか』

「おう」

「あの子はね、束さんが新しい方向性で作つてみた、いわば『第一世代PA』なんだよ」

「第一世代？」

「そうそう、第一世代。既存の『IS PA』と基礎的な理論は変化しないんだけど、大きな違いは二つ」

「意識が顕在化していることと、『モノマネ』か」

「『複写』つていつてほしいな。束さん結構頑張ったんだよ？」

「そうか。それは悪かつたな」

「まあ、その二つで当たりだよ。で、この能力のおかげで第一世代のPA以上に自己進化するスピードが速い。赤ちゃんが親のマネっこでいろいろ覚えるみたいにね」

「なるほどな。それで、意識の顕在化の方はどうなんだ？」

「ここで第一も〜ん。ISの強さを決めるものはなんでしょう？」

「そうだな。ISスペック、操縦者の技量、効果的な戦術、・・・まあ、数え上げたらきりがないな」

「まあ、そりやそうだよね。で、束さんそこに新しいアプローチを加えてみたんだ」

「ほう？ なんだ？」

「ISの能力を引き出すには、稼働時間も加味される。じゃあ、ISと操縦者との『完全な意識の同調』ができたら、どうなつちやうのかなって」

千冬が息をのむ

「操縦者を介してあらゆるものを見て、感じて、議論して。そういうくうちに、ヒトと操縦者はより適した関係に、自然となれちゃうってワケ！」

「・・・」

「ふふふ・・・ちーちゃん、驚いて声も出ないかい？」

「束・・・」

「なんだいちーちゃん？」

「お前、変わったな」

「そうかい？ 束さんは、束さんだよ？ いつもや、篠ちーちゃん。それに、ちーちゃんのことが大好きな、ね」

波の音が遠くに聞こえる

「ねえちーちゃん。今の世界は楽しい？」

「そこそこにな」

「やつなんだ」

「お前は、どうなんだ？」

「んー・・・束さんはね」

岬に吹き上げる風が、一層強くなる

「

天才はそう答えて、風と共に去った

「・・・ふう」

天の川の大河の下、千冬は溜息をもらしていた

## ミルキーウェイ（後書き）

これが・・・限界でした

この物語の束さんは原作よりも閉鎖的な人ではなく、他の人も興味対象になっている。

という事で、どうでしょうか？

次で、Chapter 3もファニーチュです

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8193v/>

---

IS～インフィニットストラトス～ 不思議な翼

2011年12月19日20時59分発行